
理想のヒモ生活

ワタナベ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想のヒモ生活

【Nコード】

N3406U

【作者名】

ワタナベ

【あらすじ】

月平均残業時間150時間オーバーの半ブラック企業に勤める山井善治郎は、気がつくとも異世界に召喚されていた。善治郎を召喚したのは、善治郎の好みストライクど真ん中な、褐色の爆乳美女。「ようこそ、婿殿」と、いきなり結婚を申し込む、異世界の女王様に善治郎の出した結論は……。

プロローグ1【半年ぶりの二連休は異世界で】

「ようこそ、婿殿。まずは断りもなく貴方をこの世界、我が宮殿に招いた無礼を謝罪したい。どうか許されよ」

赤い髪と小麦色の肌を持つ迫力のある美女が、こちらに向かってそう艶然と笑いかける。

「……………は？」

美女に微笑みかけられた男 やまいぜんじろう 山井善治郎は、全く状況がわからないまま、間の抜けた声を上げた。

いったい何がどうなっているのだ？

善治郎の記憶が確かならば、今日は半年ぶりの休日出勤がない土曜日のはずである。

社会人になってから滅多に味わっていない二連休を満喫するため、わざわざ平日と同じ時間に目を醒ました善治郎は、朝食を取るため近くのコンビニまで自転車を飛ばした。そこまでは、しっかりと記憶がある。

事実、今も善治郎の尻は自転車のサドルの上に乗っているし、善治郎の両手は自転車のハンドルをしっかりと握っている。

前のカゴには、コンビニで暖めて貰った『鳥唐揚げ弁当』と、500?のお茶のペットボトルが収まっている。

「……………」

善治郎は、自分の正気を確かめるべく、自転車に跨ったまま、右

手でカゴの中の弁当とお茶を触ってみた。

弁当は暖かく、お茶は冷たい。このリアルな感触は、どうも夢ではなさそうな気がする。ついでに言えば、弁当は冷めておらず、お茶もぬるくなっていない。知らないうちに気を失わされて、どこか遠くに運び込まれたというわけでもなさそうだ。

だがそうだとすると、なぜ、ついさっきまで日本の関東圏で、自転車を漕いでいたはずの自分が、このような薄暗い石作りの密室で、ど迫力の美女に微笑みかけられなければならないのだろうか？

善治郎は思わずマジマジと、目の前に立つ美女を凝視する。

年の頃は二十代の中盤くらいだろうか？ 二十代中盤にしては、異常なくらいの迫力と落ち着きを醸し出しているのも、もしかするともう少し上かも知れない。少なくとも二十四歳の善治郎より年下ということにはなさそうだ。

胸元がV字に開いた扇情的な赤いドレスを身に纏っているが、そのスタイルは決してその派手なドレスに負けていない。

V字から覗かせる胸の谷間は、巨乳を通り越して爆乳と呼ぶに相応しい大きさを誇っており、それとは反比例するようにウエストは細い。腰から下のラインはロングスカートに覆われているため分からないが、この分ならば十分に期待が持てそうだ。

肩幅が広く、若干いかり肩のその体型は、好みによっては否という男もいるだろうが、少なくとも善治郎には、十分に女らしく魅力的に見える。

実際、現状が夢であるという確信さえもてれば「生まれたときから愛してました！」と、飛びつきたくなくなるくらい、善治郎のストライクゾーンど真ん中の美女である。

「陛下、あまり時間がありません。『召喚』に成功した以上、早めに説明を始めた方がよろしいかと」

善治郎が赤髪の美女に目を奪われていると、美女の右隣に立つ革鎧を着た若い男が、抑揚のない声で、美女にそう進言した。

その発言で、善治郎は初めて、この石作りの密室に、自分と美女以外の人間がいることに気づいた。

慌てて善治郎が周囲を見渡すと、今発言をした男と同じ、革鎧を着て槍を持った男が合計四名、自転車に乗る善治郎を取り囲むようにして前後左右を固めているのが見える。

さらに、美女の左隣には、紫色のローブを纏った年老いた男が、長い杖を突いて立っている。

これだけ周りに人間がいて、今の今までその存在に気づかなかつたのは、善治郎がとりわけ鈍いというわけではない。

それだけ、正面に立つ赤髪の美女の存在感が大きいのだ。よく見れば、周囲を固める武装した男達は中々の体格をしているし、顔立ちもそれなりに整っているのだが、美女と並べばどうひいき目に見ても、『女王様とオマケ一同』にしか見えない。

「分かっている。さて、婿殿。恐らく婿殿は、何故今自分がこの様なところにいるのか、何も分かかっておらぬであろう？ 一連の状況について、私に説明と弁明をさせてもらえぬだろうか？」

「え？ あ、は、はい」

善治郎は、言葉の意味を理解したというより、美女の迫力ある笑みに押されるようにして首を縦に振った。

善治郎の素直な答えに、美女は笑みを深める。

「よかった。では、婿殿。このような薄暗い場所で長話も何であろう。場所を変えたいので、ついてきて戴きたい」

美女はそう言うと、大きく波打った赤い髪を翻し、歩き出す。

「その乗り物はこちらでお預かりします」

「あ、う、うん。お願いします」

何かなにやら分からぬまま、自転車を降りた善治郎は、半ば無意識のうちに、自転車のスタンドをたて、ズボンのポケットから取り出した鍵を掛けると、入り口でこちらを振り返る美女の背中を、早足で追いかけていった。

プロローグ2【いきなり、結婚の申し込み】

壁も床も石作りの長い廊下を通り、善治郎が案内されたのは、明るい日差しの差し込む、広い部屋だった。大きな革張りのソファが二つ、長い石作りのテーブルをはさむ形で、向かい合わせに設置されている。

善治郎は美女に勧められるまま、そのソファに腰を下ろす。

善治郎が座つたのを確認した後、善治郎の正面に座つた美女はおもむろに口を開く。

「まずは自己紹介から入ろうか。私は、アウラ・カープアという。貴方にはアウラと呼んでもらいたい」

「あ、はい、アウラさんですか。俺、いや、私は、山井・善治郎といます。山井が名字で、善治郎が名前です」

「ふむ。では、ゼンジロウ殿とお呼びしてもよろしいか？」

「はい」

首肯する善治郎を見て、美女　アウラは、嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう、ゼンジロウ殿。では、これから私が、ゼンジロウ殿になにをやったのか。一連の行いを簡単にご説明させていただきます。おそらく、ゼンジロウ殿にとっては腹に据えかねる暴挙に聞こえるであろうが、現状は決して取り返しの付かない状況ではない。

ゼンジロウ殿の意にそぐわぬというのであれば、全てを元通りに戻すこと、これだけは私の名誉にかけてお約束する。だから、まずは、黙って私の話に耳を貸してもらえぬだろうか？」

打って変わって真剣な面持ちで、随分と物騒な前置きをするアウラに、少し嫌な予感を覚えた善治郎であったが、少し考えた後、結局は首を縦に振った。

どのみち、善治郎は今自分がどのような状況に置かれているのかも全く理解できていないのだ。アウラの言うとおり、怒りをあらわにするにもまずは、状況を理解しないことには、怒りのぶつけようもない。

取引先にクレームをつけるのは、まず相手側の言い分を全て聞いた後だ。

「分かりました。では、お話を聞かせてください」

善治郎に答えに、ホッと安堵の息をついたアウラは、一度大きく息を吸うと、話し始める。

「まずは、最初にここがどこであるかから、説明させていただきます。ここは、ランドリオン大陸西方に位置する、カーピア王国。その王都カーピアの中心に存在する王宮の一室だ。恐らくこれらの名は、ゼンジロウ殿にとって全く聞き覚えのないものであろう。

それも当然。ここは、ゼンジロウ殿が生まれ育った世界とは、界を別とする世界。言うならば『異世界』なのだ」

「い、いせ、かい……？」

まだ状況が理解できず、首を傾げる善治郎を尻目に、アウラはとうとうと説明を続けた。

アウラによる説明は、長時間に亘って続けられた。正確なところはよく分からないが、途中で一度善治郎が腕時計の時刻を見た時には、七時三十分過ぎを示していたのに、全ての話が終わった今、時計の針は八時を回っている。

最低で三十分、おそらくは一時間に渡るアウラの説明をどうにか頭の中で纏めた善治郎は、呆然とした口調で言う。

「ええと、つまり、ここは異世界にあるカープア王国という国で、アウラ様はそのカープア王国の女王陛下なのですね？　そして、この世界には魔法が存在し、その中でもカープア王家の者にしか使えない『時空魔法』で、陛下は私を元の世界からこの世界へと召喚した、と」

「うむ、その認識で間違いない。やっと理解していただけだようだ。ああ、後、様はいらぬ。私の事はアウラ、と呼び捨てでよい。

確かに私はこの国の女王という立場にあるが、ゼンジロウ殿は我が国の臣民ではない。むしろ、私は貴方を断りもなくこの世界に引き込んだ、ただの加害者だ。ゼンジロウ殿が私に礼を尽くさねばならない理由はどこにもない」

アウラはそう言って、すまなそうに小さく頭を下げた。

「は、はあ。分かりました。アウラ……さん」

善治郎は、頭を下げた拍子に奥を覗かせるアウラの胸元から、露骨に目を逸らす。

たったこれだけの説明に、小一時間もかかったのは、善治郎が中々アウラの言葉を理解しようとしなかったからだ。まあ、無理もあ

るまい。『異世界に召喚される』などという珍事を、現代を生きる一般的な日本人が、現実のこととして受け止められるはずもない。なかなかここが異世界であると信じようとしないう善治郎に、アウラはかんしゃくを起こすこともなく、粘り強く説明を続けた。その結果、やっと善治郎は自分が今異世界にいるという事実を認めるに至ったのである。

決め手となつたのは、アウラの命を受けて窓の外へやってきた、『騎士』が駆る『走竜』だった。

その馬を二回りほど大きくしたくらいの馬鹿でかいトカゲが、中庭からニユルリと長い首を窓に差し込み、善治郎の頬を舐めたのだ。その生暖かいリアルな触感が、善治郎にこれが夢である可能性も、大がかりなイタズラである可能性も消し去らせた。

善治郎は、まだ『走竜』の草臭い唾液で湿っている頬を、Ｔシャツの袖で拭いながら疑問を口にする。

「分からないのは、何で私なんかを召喚したのか、ということなのですが」

善治郎はこれといった特技もない、ごく一般的な日本人男性である。少なくとも、わざわざ異世界の女王様が魔法を駆使して招くほどの価値が自分にあるとは思えない。

「私に何をやれと言うのでしょうか？ 自慢ではないですが、私は剣も振るえなければ魔法も使えないのですが」

そう言う善治郎の言葉に、アウラはにっこりと笑い、首を横に振る。

「いや、ゼンジロウ殿にそのような危険なまねをして戴くつもりは毛頭無い。確かに、ここランドリオン大陸西部は、長らく戦乱の世

が続いていたが、今は比較的落ち着いている。

私が、ゼンジロウ殿にお願いしたいことは、ただ一つ。ゼンジロウ殿に私の婿になって戴きたいのだ」

「むこ?」

とっさに、アウラの言った意味理解できなかった善治郎は、首を傾げてオウム返しに言葉を返す。

「そう、婿だ。夫と言っても良い。私と結婚して戴きたいということだ」

婿、夫、結婚。ここまで言われれば、頭のろくに働いていない今の善治郎にも理解できる。

「うええええ!?! け、け、け、結婚って、なんで!?!」

アウラの申し出を理解した善治郎は、ソファアーの上で跳び上がった。

プロローグ3「発覚した事実、俺は異世界人？」

善治郎のその反応をある程度予測していたのか、アウラは小さく笑うと、落ち着いた声で説明を続ける。

「話せば長くなるが、まずは聞いて戴きたい。先ほども言ったとおり、我が国は長らく戦乱の世を生き抜いてきた。幸いにして、どうか我が国はその戦乱における勝者の一人となることができたのだが、代償は大きかった。

国民は減少し、国土は荒れ、直系の王族は私を除き、皆死に絶えたのだ。

幸い国土と国民は、その後の国を挙げた努力によってどうか回復の目処が立ったのだが、問題は王家だ。王族が私一人では、いっ血が絶えてもおかしくはない。

私の結婚は絶対的な義務と言える。

しかし、我が『カープア』王家は、『時空魔法』という特殊魔法をその血に宿す血筋。結婚相手は誰でも良いわけではない。魔法を次代に残すため、同じカープア王家の血を引く者が伴侶であることが望ましい」

「はあ、なるほど……」

善治郎は、今一理解していないまま、反射的に相づちを打った。王家の血筋を純血に保つため、可能な限り近い血筋から伴侶を取るといふ風習は、地球でも昔はよく聞かれた話である。

まして、この世界には血筋によって継承される『特殊魔法』といふ、目に見える恩恵があるのだ。純血が尊ばれるのも、当然の話である。

「でも、だったら尚更、なぜ私なんでしょう？ 私は、魔法の魔の字も知らない地球人ですが」

善治郎のその疑問に、アウラは意味ありげに笑い、答える。

「その理由は至極簡単。ゼンジロウ殿が、我が『カープア』王家の血を色濃く受け継いでいるからだよ」

「……はあ？ いやいや、なんですか、それ！？ ないない、絶対無いですよ！」

突拍子もないアウラの答えに、驚いた善治郎が顔の前でしきりに手を振るが、アウラはそれに取り合うことなく話を続ける。

「ことは、私の五代前、約百五十年前まで遡る。王家の文献からも抹消されている話なので、はっきりとは分からないが、当時の第一王子が本来結ばれるはずのない女と恋に陥ったのだそうだ。

相手の女は、ただの平民だったとも、敵国の王族だったとも聞くとにかく、次期国王として絶対に結ばれることが許されない人間を愛してしまったその王子は、両親である王や王妃の説得にも耳をかさなかった。

そして、『この世界』では結ばれることを許されない恋人同士が出した結論が、二人で『異世界』へ行き、そこで結ばれるという、なんともロマンチックなモノだったのだそうだ」

ここまで言われれば、善治郎にもアウラの言いたいことが理解できる。

「まさか……その子孫が私だと言いたいのですか？」

「その通り」

呆然と問い返す善治郎に、アウラは笑みを崩さずに首肯する。

「私は無造作に今回の召喚魔法を使ったわけではない。一定より濃く、カープア王家の血を引く男を召喚するように、設定した。その結果、現れたのはゼンジロウ殿、貴方だ。」

よって、ゼンジロウ殿がその二人の子孫であることはまず間違いない
あるまい」

「そんなまさか。いや、もしそれが本当だとしても、五代前ですよ！？ 五代前って事は、私のええと……ひいひいひいじいさんとかでしょ？ 私が引いている血なんて、ほんの僅かなのでは？」

「ああ、正直私もそれは覚悟していた。しかし、意外な事に、ゼンジロウ殿はかなり色濃く王家の血を引いている。直系とまでは行かないものの、分家筆頭クラスだ」

「わ、わかるのですか？」

真面目な顔で断言するアウラに、善治郎はたじろぐように座り位置を後ろにずらしながら、尋ねる。

「分かる。『王家』の血を引いているかどうかは分からないが、訓練した魔術師ならば、人が潜在的に内包している魔力量は視認できる。ゼンジロウ殿の魔力量は明らかに、準王家クラスだ。」

私の召喚魔法に反応したということは、ゼンジロウ殿が『カープア王家』の血筋であることは間違いなく、その魔力量から判断するに血の濃さも相当なモノであると推測される。こう言うのを嬉しい誤算、と言うのだからうな。

まるで、そちらの世界に渡った人間が、意図的に近親婚を繰り返して血筋を保っていたかのようだ」

アウラのその言葉に、善治郎はふとある事実を思いたる。

「あ、そうか！ そう考えれば、つじつまは合う、のか？」

「ゼンジロウ殿？ なにか、思い当たることがあるのだろうか？」

小首を傾げて問いかけるアウラに、善治郎は少し考えながら答える。

「あ。はい。実は私の実家は、かなり歴史のある閉鎖的な農村なんです。昔から、外からの嫁入り、婿入りは一世代に一人か二人といった具合の」

そんな閉鎖的で代わり映えのしない田舎に嫌気がさした善治郎は、関東圏の大学に進学し、そのまま就職を決めて、都会での生活をスタートさせたのだ。

言われてみれば、少し前に死んだ両親をはじめ、あの村の人間には、日本人にしてはやけに肌の色が濃く、髪の色が赤みがかっている人間が多かった気がする。

善治郎の言葉に、アウラは口元に手を当て、得心がいった言わんばかりに頷く。

「なるほど、その村の閉鎖性が結果として、異世界に流れた王家の血の拡散を押しとどめたと言うことか」

「はい、そう考えれば、つじつまは合いますね」

（マジ？ 実は俺、純粋な日本人じゃなくて、大半は異世界人？
聞いたことねえぞ、そんな話！？）

そう、つじつまはあう。あつてしまふ。善治郎は表面上は引きつ
った笑みを浮かべながら、内心では頭を抱えたくなるくらいのパニ
ックに襲われていた。

プロローグ4【あまりにうますぎる話】

思わぬご先祖様の秘密を知り、顔を引きつらせる善治郎に、アウラはニコニコとさも嬉しそうに笑いながら、詰め寄る。

「やはり、ゼンジロウ殿こそ、私の求める伴侶ということであるな。どうだろうか、ゼンジロウ殿。急な話で混乱しているだろうが、私と婚姻を結び、この世界で生きるという選択肢を、真剣に考えてはもらえないだろうか？」

一転、真面目な表情でそう切り出してくるアウラに、善治郎は少し冷静になった頭で考える。

目の前の美女と結婚をする。それ自体は、決して悪い話ではない。先にも行ったとおり、アウラの外見は、善治郎のストライクゾーンど真ん中だし、こうして話をしている感じでは、その人間性も悪くなさそうだ。

もっとも、女王などという腹芸を求められる職をこなしているのだから、これまでの態度だけでその人間性を推し量るのは危険だが、だが、それ以上に問題なのは、これはアウラの嫁入りではなく、善治郎の婿入りの要請であるということだ。

この提案に首を縦に振った瞬間、善治郎は地球とおさらばすることになる。いかに目の前の美女が好みのタイプだとは言っても、仕事や友人、地球でしか楽しめない娯楽や食文化とうった全ての引き替えに出来るかという点、流石にそこまでは踏ん切りが付かない。

まだ、頭の片隅で「これは夢じゃないのか？」とと思っている善治郎の働かない脳みそも、即答は出来かねる問題だ。

そこまで考えたところで、善治郎はふと一番大事な問題に触れていないことに気がついた。

「あ、あの。そもそも私はこうして、もうこの世界に来てしまっているのですが、もし、もしですよ。あくまで仮定の話ですけど、アウラさんとの結婚を拒んだら……どうなるのでしょうか？」

恐る恐る、尋ねてくる善治郎に、アウラは安心させるように努めて笑顔で答えた。

「その場合は無論、責任を持って私が『送還魔法』で善治郎殿を元に世界にお返しします。最初に申したであろう？ 『ゼンジロウ殿の意にすぐわぬというのであれば、全てを元通りに戻す』、と。

ただでさえ、こちらはゼンジロウ殿を断り無く、この世界に引きずり込んだ身。断られた場合、全てを白紙に戻す程度の分別はある。ゼンジロウ殿は安心して、己の心のおもむくまま、返答して下さればよい」

「あ、そ、そうなんですか……」

アウラの答えに、善治郎は拍子抜けしたように、安堵の溜息をついた。

漫画や小説での『異世界召喚』というのは、召喚は出来ても送還は出来ないケースが多く、呼ばれた人間は本人の意思に関係なく異世界で生きることを強いられるもののだが、善治郎を襲った現実には、そこまで滅茶苦茶ではないようだ。

何はともあれ、返してもらえるとというのは、幸いである。その言葉に、頭の中が沸騰寸前の善治郎も、少し冷静さを取り戻した。

「逆に、この話を受けて頂けた場合も、一度は元の世界へとお返しするつもりだ。元の世界と決別するのであれば、ゼンジロウ殿にも別れを告げたい人もおられよう。召喚・送還の魔法は、星の並びに

左右される故、いつでも自由に使えるモノではないが、幸い今回の星の並びは明日の夜まで続く。

さらに、一月後にはもう一度、召喚に適した星の並びになる。

つまり、この話を断るといっているのであれば、明日お帰りいただきそれで終わり。受けていただけなのであれば、明日一時帰国し、一月後もう一度改めて、お呼びするという形になる」

「へー、召喚魔法ってそんなに頻繁に出来るんですか」

暢気な感想を述べる善治郎に、アウラは苦笑して首を横に振った。

「いや、これは今が特別星の並び恵まれていると言うだけだ。げんに、一月後を逃せば、次のチャンスは三十年後までない。無駄に怖れる必要はないが、あまり楽観的に構えていられる話でもない」

「げっ、三十年後かよ」

アウラの答えに、善治郎は思わず敬語を忘れ、素の声を上げた。

流石に三十年は長すぎる。やはり、この結婚話を受け入れてしまつたら、地球とおさらばすることになるのは間違いないようだ。

だが、結婚を断れば、明日にでも元の世界に返してもらえらと分かった善治郎の精神状態は、さっきまでとは、比較にならないほど改善している。

人間の心理とは不思議なモノで、「絶対に帰れない」と言われれば、「何としてでも帰りたい」と思うのに、「その気になれば帰れる」と言われれば、「別に帰らなくても良いのではないか？」という思いもわいてくる。

（実際、アウラさんが言っていることが全部本当だとしてたら、かなり美味しい話だよな。元々俺、親もいないし、恋人もいないし。

仕事は……まあ、それなりにやってるけど、月平均百五十時間の残業の職場に未練はないしなあ)

思えば今日は、半年ぶりに土曜が休みの日だった。

平日の帰宅時間は深夜零時を越えるのが当たり前、土曜は原則出勤日。日曜月に三回は出勤。残業手当は、ごまかさずに働いた分だけ出してくれるのがせめてもの救いだ、その金を使う暇もない日々。

家に帰っても自炊をするだけの気力もなく、平日の夕飯は決まってコンビニ弁当か外食。考えてみれば、仕事と買い物以外で女の人と会話を交わしたのは、半年ぶりではないだろうか？

(か、考えて見たら、マジで未練ないなあ、あっちの世界の生活……)

向こうの世界。恋人もいない、仕事仕事の毎日。

こっちの世界。爆乳美女と結婚。

改めて比べてみると、この提案はひょっとして善治郎にとっても「渡りに船」というヤツなのではないだろうか？

一瞬そんなことを考えた善治郎であったが、元来の臆病さが暴走しかける善治郎の心理にブレーキを掛ける。

(いやいや、まてまて。もし、これまでの話が全て本当だとしても、まだ聞いていない部分があるだろう。アウラさんは女王様だぞ？女王と結婚して、何の仕事もしないですむはずがないねえ)

王族というのは、生まれついで政治家だ。よく、放蕩者の王子様が漫画や小説に出てくるが、それはごく一部の例外であり、王族としての義務を真面目に果たしているものは、同情したくなるくらいに忙しい日々を過ごしていると聞いたことがある。

そんな生活をするくらいなら、元の世界でブラックサラリーマンをやっていた方がいい。

善治郎は、気づかれぬように細く何度も深呼吸をして、結論を急ぐ己の心を落ち着かせた。

プロローグ5【結婚しましょう！】

「ええと、じゃあ、逆にもし、そのお話を私が受けしたとして、私にはこの世界でどのような義務が生じるのでしょうか？ 女王の婿も王族の一種ですよね？」

善治郎の質問に、前向きな意図を感じ取ったのか、アウラは嬉しげに笑い、答える。

「特に規定はない。なにせ、私は我が国における三十二代目の国王だが、カープア国の歴史上、女王は私でまだ四人目なのだ。」

しかも、前任の三人は生涯独身を通し、後継者には血の濃い分家から養子を取ったり、即位当時はまだ乳飲み子であった、年離れた弟に王位を譲ったりしている。

つまり、カープア王国の女王の婿となるのは、ゼンジロウ殿。そなたが初めてとなる。」

なにげに、善治郎を「婿」と断定した形で言うアウラであったが、善治郎はそれに気づかず、もっと別な点で慌てた声を上げる。

「ちよ、ちよっと待って下さい！ それじゃ、この国には王配の権利や義務って全く明文化されていないって事ですか？」

王配とは、女王の伴侶のことだ。今まで結婚した女王がいなかったこの国には、存在しなかった言葉なのかも知れない。

「うむ。書面上は、そうなる。しかし、安心めされよ、ゼンジロウ殿。我が国は、三十二人中女王が四人という歴史からも分かれるとおり、男性優位の社会だ。特に職場はともかく、家においては家長は

常に男で、妻は夫を立てるのが美德とされている。

どのような形であれ、婚姻を結べば私は可能な限り、貴方の希望に添うよう努力をしよう」

「は、はあ……」

予想を遙かに上回るうまい話が帰ってきた善治郎は、惚けたような声を出した。

アウラの言葉を全面的に信じて良いのだとすれば、アウラと結婚しても善治郎にはこれといって果たすべき義務はない上に、アウラは善治郎を立てて可能な限り便宜を図ってくれるのだと言う。

……あまりに、話がうますぎる。

(駄目だ、よく考える。どう考えても裏がある話だろ、これ)

厳しく律していなければ、思わず飛びつきたくなくなるくらいに好条件のお話である。

善治郎は、必死に頭の中で考えを巡らす。

(そもそも、この結婚が成立したとして、アウラさん側のメリットはなんだ？ 王家の血筋の存続？ それだけか？)

アウラ以外の王族が死滅しているのだとすれば、王家の血を色濃く引く善治郎の存在は、非常に魅力的であることは確かである。

しかし、そのために、あそこまで美味しい条件を並べるものだろうか？ 子作り以外何もしない亭主。世間ではそう言う男を『ヒモ』という。

(わざわざ旦那をヒモ野郎にするだなんて、アウラさんてすげえハイレベルのダメンズウォーカー？ いや、そんなわけねえよなあ…

…)

そうではないのだとすれば、どこかにもっと大きなアウラ側のメリットがあるはずだ。そうでなければ、例えば血筋的にどれだけ善治郎が婿に相応しいとは言っても、最初からあそこまで「美味しい条件」を並べるはずがない。

(駄目だ。情報が少なすぎるな)

『少ない情報で無理矢理商談を纏めようとすれば、必ず足下をすくわれる』。会社で先輩に口酸っぱく言われてきた言葉を思い出した善治郎は、立て続けてにアウラに質問を投げかける。

「すみません。また話が元に戻りますが、もし私がこのお話をお断りしたら、アウラさんはいったいどうなさるのですか？ ご結婚されないというわけには行かないのでしょうか？」

「ああ。その場合は、恐らく国内の比較的王家の血が濃い貴族を婿に迎えることになるだろう。もっとも濃いと言っても、たかが知れているが」

だからこそ、ご迷惑を掛けることを承知の上で、ゼンジロウ殿をお呼びしたのだ。と、アウラは自嘲気味に笑った。

(なるほど。一応国内にも婿候補はいるんだな。まあ、当たり前か。……ん？ まてよ？ ちょっとカマを掛けてみるか)

「その婿候補の方と言うのは、やはり曾祖父や曾祖母に王族を持つような方なのですか？」

善治郎のカマ駆けに気づかないアウラは、苦笑して首を横に振る。

「まさか、そんな血の濃い人間はもう残っておらぬよ。精々、曾祖父の祖父が王族とか、良くて曾祖父の母親が王族といった程度の間だ」

(やっぱり、ビンゴだ！)

アウラの返答に、善治郎は内心の驚きを隠し、どうにかポーカーフェイスを保つ。

会社の上司曰く。『営業にとって表情筋は、理性で動かすものであって、感情にまかせるものではない』。そんな上司の教えが、こんな異世界で生きている。

今のアウラの返答は明らかにおかしい。曾祖父の祖父というのは数で表せば五代前、曾祖父の母とは四代前に王族の血が入っていたということになる。

一方、地球に転移してきた善治郎のご先祖様というのは、五代前の人間だ。アウラの言うとおり、四代前の人間が生き残っているのだとすれば、そもそも五代前の血しか引いていない善四郎を召喚する理由がない。

善治郎が生まれ育った村が閉鎖的であったため、結果として善治郎が極めて濃い王家の血を持っていたが、そのことは召喚するまでアウラも知らなかったはず。現に彼女は「嬉しい誤算」と言っていた。

つまり、王家の血が濃い人間と次代の子をなすため、異世界から婿候補を召喚した、という説明自体が嘘と言うことになる。

(じゃあ、なんで俺を召喚した？ ひよっとして俺を婿にしたいって言う話自体が嘘なのか？ いや、駄目だ。そこから疑いだしたら、きりがない)

そもそも、善治郎には自力で元の世界に戻る手段は無いのだ。そう考えれば、アウラが上手いことを言って善治郎をだまくらかす必要はない。ただ、「元の世界に返す手段は無い」と嘘をつけば良いだけのだから。

恐らく、アウラは可能な限り、善治郎と誠実な交渉をしようとしている。

（だから、俺を婿にしたいって話も、異様なくらいの好条件も事実だと考えてもいいはずだ。そのほうが話のつじつまはあう。だとすれば、なぜだ？ なぜ、アウラさんはあえて、あんな好条件を示してまで、国内貴族より『血の薄い』異世界に逃げた王族の子孫を召喚した？）

「ゼンジロウ殿？ いかがされた？」

「あ、いえ。すみません、ちょっと考え事を。それで、もし私が、アウラさんと結婚することになれば、アウラさんとしては私がどうするのが理想ですか？ いえ、法律上どうしなればならないとかじゃなく、あくまでアウラさんのご希望として」

善治郎の問いに、アウラは小さく肩をすくめると、気持ちよいくらいはつきりと答える。

「特にない。この話を受けて下さるのということは、ゼンジロウ殿は私のために、故郷もご家族もそれまでの生活も、全て投げ打って下さると言うこと。そのような方に、さらに要望を突きつけるほど私は厚顔無恥な人間ではない。

ただ、王家存続のため、子をなすのにご協力頂ければ、それで結構」

「どうやら本当に、生じる義務は、目の前の爆乳美女との子作りだけのようだ。少なくとも、善治郎の目には、アウラは本気でそういつているように見える。」

「そう、ですか……」

アウラの返答は相変わらず、男を駄目にするくらいに甘い代物だった。だが、今回は善治郎も半ばその返答予測していた。

（これは、ひょっとしてマジで俺が立てた仮説が当たってるか？ さっきの条件は、『俺にとって』おいしい条件じゃない。最初からその条件が『アウラさんにとって』一番望ましい条件なのか？）

善治郎は頭の中で、これまで得た情報を整理する。

・国内には、異世界に逃げた王族の子孫よりは、血の濃い貴族がいる。

・それなのに、アウラはあえてかつて異世界に逃げた王族の子孫（善治郎）を、婿として召喚した。

・結果、善治郎はかなり濃い王家の血を持っているが、それはあくまで「嬉しい誤算」。

・善治郎に、アウラは「子作りさえしてくれれば、他は何もしなくていい」といった。

・この国は、原則男性優位社会で、女王という存在はまれ。

・この国の文化では、家の家長は絶対に夫。妻は夫を立てるのが美德。

・これまでの女王は全て生涯独身で、『王配』が存在するのは、この国の歴史上今回が初めて。

これまでの受け答えや、その全身から発する圧倒的なカリスマ性だけを見ても、アウラという女は王としての素質を十分に持っているように見える。

自分の仮説が正しいのか、それを立証するため善治郎は質問を続ける。

「後もう二つ質問させて下さい。私がこの国に留まったとしたら、どこで生活することになるのですか？」

「それは、恐らく後宮だ。元々我が国は、一人の王が王妃や側室といった複数の妻を娶るのが一般的だったからな。少々変則的だが、私達夫婦の生活空間は、後宮ということになる」

やはりだ。もう、ほぼ間違いない。

善治郎はゴクリと唾を飲み込むと、最後に決定的な質問を投げかける。

「では、最後の質問です。

もし私が、アウラさんと結婚した後、後宮に引き籠もり、可能限り外部との接触を断ち、アウラさん以外の王宮関係者とは一切関わ

りを持たず、ただひたすらダラダラと遊びほうける日々を過ごしたとしたら、アウラさんはどう思われますか？」

善治郎の仮定の話に、アウラは堪えきれなかったかのように、今日一番の笑顔で反射的に答える。

「大歓迎だとも！」

その一言で、善治郎は、自分の仮説が全面的に当たっていたことを確信した。

（オツケー、謎は全て解けた。間違いないわ。この人、「何もしくない」という条件を餌としてあげている訳じゃない。正真正銘「何もしないでいてくれる婿」が欲しいんだ）

文字通り、ヒモ男を第一希望として歓迎しているのだ。

ちょっと考えて見れば、実はそう不自然な話でもない。

半ブラック企業で、仕事に追われる日々を過ごしている善治郎の価値観で物事を計ろうとしたのが、そもそもまちがいのなのだ。

仕事に疲れている善治郎は、働かずに衣食住＋美人の嫁さんが与えられる生活というのに、魅力を感じているが、それはこの世界での一般的な価値観ではない。

『王配』となった人間が働くということは、権力を行使することに他ならない。

大きな権力を行使することに、魅力を感じない男というのはむしろ少数派だろう。

例え、この国では明文化された権限はなくとも、『王配』は歴とした権力者だ。

なにせ、王国の文化自体が男社会を中心に形成されているのだし、『家庭』の長である家長は、例えば入り婿でも男がなると決まってい

るのだから。

そして、妻となった女は、可能な限り夫となった男を立てるのが美德であるとされているのならば、極端な話、『王配』は『家庭』を通して『女王』に『命令』することすら可能であるかも知れない。少なくとも、『王配』が公式な場でなにか意見を言えば、『女王』はそれを無視することは出来まい。

(そうだよな。貴族出身の婿さんなら大抵権力欲はあるだろうし、そんなヤツを『王配』に添えたりしたら、最悪アウラさんの権力が丸ごとそっくり横取りされる可能性もあるのか。まあ、そこまではいなくても、自分の実家に利益誘導するくらいは、まず絶対にやるだろうなあ)

女王と王配の二重権力構造。最悪の場合は、国を二つに割る内乱に発展してもおかしくはない。

(なるほどねー。そう考えれば、わざわざ異世界から婿さん候補呼びたくなるのも分かるわ。異世界の婿さんが、政治的野心を持っていない保証はないけれど、最低でも実家の紐付きにはならないもん。婿さんの実家が外戚として権力を振るったりしないだけでも、十分に意味あるよなあ)

古今東西の歴史をひもとけば、王の配偶者の親族 『外戚』が国を乱す原因となるケースは非常に多い。

色々と考えて、立て続けてに質問をしてくる善治郎を、興味深げに見守っていたアウラは、善治郎が落ち着いたのを見計らい、問う。

「この様な一生を左右する選択を即答しろというのが、無茶であることは承知している。しかし、先にも述べたとおり、召喚魔法は星

の並びに左右される故、時間があまりないのだ。

今すぐ答えを出してくれなくても良いが、最低でも明日の朝までには心を決めて戴きたい。

なにぶん全てはこちらの一方的な都合から生じた話だ。例え、断られたとしてもゼンジロウ殿には一切の危害は加えぬし、もし引き受けて頂けるのであれば、そなたの妻として可能な限り誠意を持って接することも約束しよう。

どうであろうか、ゼンジロウ殿」

アウラは、柔らかい笑みに真剣な眼差しを寄せ、そう善治郎に説いた。

「はい、そうですね……」

善治郎は、軽く目を瞑り、考える。

善治郎が今立てた仮説が正しいのだとすれば、これはとても美味しい話だ。

しかし、何度も言うとおり、その代償として払うのは、今日まで過ごしてきた地球での生活丸ごとすべてなのである。

曲がりなりにも山井善治郎という男は、今日まで、一人の人間として自らを支え、自らを律し、自らを養って生きてきた。

確かに、仕事はきつかったし、職場ではいつも辞めることばかり考えていたが、自立した生活を営んでいたという、誇りが善治郎にはある。

それは、一人の男としての『矜持』とも言うべきものだ。

アウラの要請を受け入れるということは、その『矜持』を捨て去り、女に飼われる生活を受け入れることを意味する。

果たしてそれで良いのか？ 山井善治郎という男の『矜持』は、そんな簡単に捨て去ることが出来るほど軽い『へ』のようなものか？ というのか？

(少し、冷静に考えてみれば、悩むことなんか何もない問題だよな)

うだうだと、明日の朝まで返答を引き延ばすような代物ではない。既に、結論はとっくに出ているのだから。

己の心が定まった善治郎は目を開くと、アウラの赤茶色の双眼を正面から見据え、テーブルの上に身を乗り出すようにして、きつぱりと言う。

「結婚しましょう！ アウラさん！」

山井善治郎の、男としての『矜持』は、まさしく『へ』のようなものであった。

幕間1【女王サイド】

山井善治郎が地球から召喚されたその日の夜、カープア王国女王アウラー世は、私室に腹心の部下数名を集め、非公式の会合を開いていた。

テーブルの上に添えられた燭台の炎が、広い室内を薄暗く照らし出す。

アウラは、南国らしい蔓を編んで作られた椅子の上で足を組み、集まった腹心の部下達を見据える。

「で、婿殿のご様子は？」

最初に話を振られたのは、一番端に控えていた、長い金髪の若い侍女だった。

「はい。先ほどやっと眠られたようです」

「そうか、良かった。しかし、婿殿は随分と夜にお強いようだ。今後は後宮の照明代を別途用意しておいた方が良くもしれんな」

アウラは考え込むように組んだ腕の上に顎をのせ、そう呟いた。

善治郎が聞けば、不本意に感じる評価だろう。現在の時刻は、精々夜の十時前後。平日の帰宅は深夜零時、一時が当たり前だった善治郎の感覚でいえば、恐ろしく早い就寝である。

善治郎としては、自分が寝るまで仕事から解放されないメイドさん達に気を遣い、たいして眠くもないのにあえて火を消してベッドに潜り込んだのだ。

それを、「遅い」「夜に強い」などといわれては、立つ瀬がない。

しかし、それも無理はない。その気になれば電気で二十四時間、いつでも十分な灯りが取れる現代日本人と、灯りといえば原則、松明、蝋燭、ランプといった『炎』その物しか存在しないこの世界とでは、夜という時間帯に対する認識が根本的に違う。

この世界では、夜開いている店舗というのはごく一部の職種に限られている。非常に忙しい王宮の中枢部でも『夜は寝るもの』という認識が、強く染みついているのである。

アウラの言葉を受け、正面に立っていた文官らしき細面の中年男が、発言する。

「なにはともあれ、ご婚約成立、おめでとうございます、陛下。して、陛下はゼンジロウ様の人となりを、どのように見られましたか？」

中年の男　ファビオ・デウバジエは、アウラの秘書官である。

秘書官とは、本来それほど高い権限を持つ役職ではないのだが、現在カープア王国は、女王であるアウラが宰相も元帥も置かず、政府と軍を直接指揮しているという関係もあり、『女王の右腕』と称される彼の権限は、その役職からは想像もつかないくらいに大きい。

女王は、信頼する腹心の言葉に、小さく肩をすくめると、

「予想していたより遙かに頭が切れる御仁だ。冷静な判断力もあるし、度胸もそれなりに据わっている。これは『悪い誤算』だな」

そう、言った。

褒め言葉にしか聞こえない評価を、『悪い誤算』と言い切るのは、女王が夫に有能さを求めている証拠である。

アウラにとって理想の夫とは、ふってわいた贅沢におぼれ、金や

女、美食といったもので満足し、政治権力には一切興味を示さない男である。

「特にあの、最後の質問。ゼンジロウ殿は、恐らく私の意図の気づいていた。その上で、此度の婚姻を受け入れてくれたのであるうよ」

アウラは、昼間のやり取り思いだし、クツクツと笑う。なにせ、わざわざ「もし私が、結婚した後、後宮に引き籠もり、可能な限り外部との接触を断ち、ただひたすらダラダラと遊びほうける日々を過ごしたとしたら、どう思うか？」などと、ダイレクトに聞いてくるくらいだ。

こちらが夫に何をして欲しいのか、より正確に言えば「何をして欲しくないのか」、十全に理解していると考えた方が良い。

「最初は平民の生まれ育ちだと思ったのが、あの聡明さからすると、婿殿は異世界の貴族階級なのかもしれん」

「確かに、ありえますね」

「立ち振る舞いやマナーなどには少々疑問が残りますが、無学な一般庶民としては少々不自然なことは、事実です」

アウラのかんりの外的予想に、その場が集まった腹心達は首を縦に振り同意を示した。

この辺りは、アウラ達もつい異世界を自分たちの世界の常識に当てはめて考えてしまっている。この世界では、教育を受けるというのは、王族、貴族、一部の金持ちだけに許された特権である。

アウラ達に取って、大多数の平民は、良くも悪くも無学で無教養な存在に過ぎない。一応、世界全体を見渡せば、平民にも門戸を開

いている教育機関というものが全く存在していないわけではないのだが、現代日本のように、国民全員に九年間の義務教育を施している国は、完全にアウラ達の想像の外にある。

「しかし、そうなるとゼンジロウ様がこたびのご結婚を受けいれたのにも、なんぞ裏があってもおかしくはないぞい。ゼンジロウ様との婚約を破棄されるのであれば、一ヶ月後再召喚の儀は取りやめにしますぞよ」

そう言ってきたのは、善治郎がこの世界に来た時にアウラの左隣に立っていた、紫のローブを纏った初老の男である。カープア王国 宮廷魔術師団・筆頭魔術師・エスピリディオンの言葉に、アウラはフンと鼻を鳴らすと、ヒラヒラ手を振り答える。

「冗談を言うな、爺。そして、代わりに、ギジエン家の餓狼や、マルケス家の操り人形を私の婿にしると言うのか？ そんなことをしたら、せつかく戦乱を生き延びた、カープア王国が内憂で滅ぶぞ」

にべもない女王の言葉に、苦笑を浮かべた老魔術師は、長い灰色の髭をしごく、女王に酷評された国内の婿候補をフォローする。

「陛下、それはあまりなお言葉ですじゃ。ギジエン家のプジヨル卿は名将と呼ぶに相応しい武人じゃし、マルケス家のラファエロ卿も、極めて有能な文官じゃぞ」

「爺に言われずとも、分かっている。あいつ等を今の地位に就けたのは私だぞ。しかし、どれほど有能であっても、過ぎた野心家や、親の意向に一切歯向かえない坊やは、私の夫には向かない。そう言っているのだ」

アウラの人物評価は、辛辣ではあっても決して的外しているものではなかったため、老魔術師はそれ以上何も言わなかった。

「では、やはり、ご結婚はゼンジロウ様と？」

話を元に戻す、細面の中年男　ファビオの言葉に、アウラは簡単に頷き返す。

「ああ。予想より知恵が回るところなど、少々気になる点はあるが、人格的にも及第点だ。少なくとも、『餓狼』や『実家の操り人形』とは、比べものにならない。王家の血も十分に濃い。あれならば、貴族達からも表だった反対意見は出ないだろうよ。」

カープア王家の血統魔法である「時空魔法」を自体に正しく継承させる。それは、この国では十分に大きな大義名分になる。

善治郎の王家の血が、国内貴族の誰よりも濃いことが一目瞭然である以上、表だってアウラと善治郎の結婚に反対できるものはいない。

「しかし、身分違いどころか、世界違いのお相手じゃぞ。結婚をしたとしても果たしてその後、上手く家庭を築くところ出来るかどうか、問題は多いと思うがのう。」

先のことを心配する老魔術師に、アウラは意味ありげに笑い返す。

「まあ、それは、大なり小なり誰と結婚しても出てくる問題だ。後は、私の誠意と努力の問題だろうよ。昼間、婿殿にも言ったとおり、全てはこちらの都合で結ばれる婚姻なのだ。国政に影響を出すような無茶を言わない限り、婿殿の要望は受け入れるさ。」

昼間、アウラが善治郎に見せた誠意ある対応は、決して表面だけのものではない。

アウラ自身、心理的にも一方的に巻き込んでしまった善治郎に負い目はあるし、理性的に考えても、夫となる人間に誠意ある対応をとるのは、理にかなっている。

夫は部下ではなく、家族である。順調にいけば今後何度も肌を重ね、生を全うするまでの何十年という時間を、寄り添って生きるのだ。

いがみ合っていては、疲れるだけである。

「分かりました。そこは『家』の問題ですので、陛下にお任せします。しかし、王家が子をなすか否かは、王国の問題です。万が一、『夜の営み』に不具合があるようでしたら、率直にご報告お願いします。」

幸い、ゼンジロウ様は、『時空魔法』の習得も不可能ではないくらいに、『王家』の血が濃いお方。プジョル卿や、ラファエロ卿と同程度に王家の血を引いている『女』は、幾人かおります故」

率直に、普通であれば無礼極まりないことを言っただけなのは、ファビオ秘書官だった。

確かに、善治郎という濃い王家の血を持つ男の存在が明らかになった今、状況は当初とは変わっている。

これまでは、『時空魔法』を発動可能な人間がアウラしかいなかったため、アウラが子をなすことが至上命題であったのだが、それよりは多少劣るものの、今は善治郎という潜在的には『時空魔法』が使えてもおかしくないレベルの、王家の血を引く男が現れたのだ。

極端な話、これまでの前例に立ち戻り、アウラには生涯独身のまま女王を務めて貰い、王家の後継者は善治郎と王家の血を引く貴族の娘の間に生まれた子、という選択肢も存在する。

元々、女王の結婚は、「王権の絶対性」と「家の家長は男」という、法と文化の矛盾を発生させてしまう行為なのだ。

善治郎の存在を知れば、王家の血を引く娘を持つ貴族達は、その辺りの問題を盾に取り、女王の結婚破棄と、自分の娘と善治郎の婚姻を迫ってくることは、十分に考えられる。

ある意味、山井善治郎の存在は、奇貨であると同時に、大きな爆弾でもあるのだ。

だが、女王アウラは、腹心の無礼な言葉に怒るそぶりも見せず、椅子の上で足を組み直すと、意味ありげに答えるのだった。

「ああ。その辺りは、後日の問題だが、ある程度は対応も考えている。だが、恐らくお前のその懸念は、無用だよ。婿殿との子作りは上手くいくさ」

「ほう？ その自信の根拠をお聞きしてもよろしいですかのう？」

興味深げに問いかける、老魔術師にアウラは艶然と笑い返し、答えた。

「なに、簡単なことだ。今日の夜、婿殿と向かい会って夕食を取ったのだが、婿殿の視線は痛いくらいに私の胸元に注がれていた。本人は、隠していたつもりのようなが、あれは間違いなく劣情の視線だ。」

「どうやら私の肢体は、婿殿の情欲を刺激するに十分なものであるようだ」

そう言ってアウラは、その特大の乳房を誇るように、胸を張る。

男のチラ見は、女にとってはガン見。
どつやら、善治郎の邪な思いは、完璧に女王様にはばれていたよう
であった。

第一章1【一夜を過(こ)して】

翌朝、善治郎は、王宮の客室で目を醒ました。

目覚めたばかりの善治郎の視界に飛び込んでくるのは、豪華なベツドの天幕である。

見覚えのない光景に、一瞬身体をビクリと震わせる善治郎であったが、しばらくして自分が昨晚どこで就寝したかを思い出し、肩の力を抜く。

「……ああ、そうか。ここは異世界、なんだよな」

善治郎は、自分が住んでいる六畳間より広そうなベッドから足を下ろした。

足元に用意されたスリッパの様な履き物をつつかえ、広いゲストルームを歩きく善治郎は、自分が無意識のうちに右手で脇腹を掻いている事に気づく。

「うわ、痒つ。あつちこつち、虫に食われているな、こりゃ。昨日は半分勢いで、結婚を承諾しちゃったけど、ちよつと早まったかもしれんなあ……」

今更ながら、善治郎はそう呟く。

昨日一日、生活をしただけで、善治郎はこの世界が現代日本と比べ、どれだけ不自由を強いられる世界であるか、実感させられていた。

昼食と夕食に出された食事自体は中々に美味しい物であったが、一緒に出された水や酒は異様にぬるかった。

善治郎は、ビールと発泡酒の違いも分からない程度の貧しい舌の

持ち主であるが、日本人らしく「発泡酒はギンギンに冷やしたものがジャスティス」、と断言している人間である。

そんな善治郎にとって、夕食に出された果実酒は、味以前の問題として、そのぬるさがたまらなく気持ち悪かった。

ぬるいと言えば、気温自体も問題だ。昨日アウラから聞いたところによると、ここカープア王国は日本の関東圏と比べてもかなり暑い地方のようだ。

一番寒い季節でも、街を歩く者が長袖を着ることはほぼ無く、もっとも暑い季節には、気温が体温よりも高くなるため、人々は出来るだけ狭い空間に身を寄せ合い、互いの体温で『涼を取る』のだという。

そういえば、インドの夏の逸話として、似たような話を聞いたことがあるなあ、と善治郎は半ば顔を引きつらせながら、思いだしたものである。

この世界には、温度計というものが存在しないので、はっきりとは分からないが、恐らく冬の最低気温で二十度弱、夏の最高気温は四十度から四十五度くらいを覚悟しておいた方が良さそうだ。

しかも、当然ながらこの世界には、エアコンなどという代物は無い。エアコンのある日本の夏しか知らない善治郎には、この暑さはかなりの強敵となるだろう。

実際、昨晩も暑く寝苦しかった。今はまだ夏真っ盛りではないというが、それでも善治郎は寝付くまで、最低でも一時間以上、キングサイズのベッドの上でゴロゴロを寝返りを繰り返した。

もっとも、寝苦しかったのは暑さのせいだけではない。快眠を邪魔するもう一つの要員が、虫だ。

どうやら、この世界には窓ガラスという代物が存在していないよなのである。そのため、窓は全て木戸になっており、昼間は光を取り入れるため、全て解放している。当然、虫は入りたい放題だ。

一応ベッドの天幕が、蚊帳の役割を果たしてくれるようなのだが、そんなもので全ての虫をシャットアウト出来るはずもない。

結果、朝起きたときには、善治郎は身体のおちこちを虫に食われまくっていた。

だが、それらの不具合を全て合わせたより善治郎を閉口させたのが、夜の不自由さだ。

正直、電気のない夜というのが、こんなに不便なものだとは思っても寄らなかった。

アウラと夕食を取った食堂だけは、大量の蝋燭を使った大きなシヤンデリアでそれなりに明るく照らし出されていたが、廊下を歩くときは、先導するメイドさんが持つランタンだけが頼り。

部屋についても、灯りは机の上にランプが一つ備え付けられただけである。

その灯りで本を読もうとすれば、確実に目を悪くすることだろう。

「昔の人は早寝早起きだったって言うけど、分かるなあ。だって、どう考えても夜は寝る以外なにもできねーもん」

つい、ブチブチ文句を漏らしながら、着替えを済ませる。

王宮やお屋敷ものでは定番の、メイドさんによる「着替えの手伝い」は昨晚のうちに断つてある。

現在の善治郎の服装は、腰を紐で縛るゆつたりとしたズボンと、膝丈くらいあるネグリジエのようなブカブカの上着である。

これが、王侯貴族が使うもっとも一般的な夜着だという話だったが、実際使ってみた善治郎の感想としては、これならばTシャツとトランクスだけで寝た方が、ずっと寝やすい。元々寝相の良い方ではない善治郎は、何度も寝返りを打っているうちに、自分が着ているネグリジエに肩固めをかけられてしまった。

仮にもここは王宮で、善治郎は非公式ながら女王の王配というスペシャルゲストだ。衣食住、全てにおいて、最高のものを用意されたのだろうが、それでもなお、現代日本では一般庶民でしかない善治郎を満足させうる代物ではなかった。

時代の違い、文明レベルの違いとは大したものだ。

借り物の夜着から、着慣れた自分の服へと着替え終えた善治郎は、ベッドの端に腰を下ろし、メイドさんが朝食に呼びに来るのを待つ。

「改めて考えると、日本って恵まれてたんだなあ。大体の家に、冷蔵庫もエアコンもあるし。それに比べてこっちには、電気その物がないのか。でもなあ、こっちなら働かなくていいんだよな。それに、アウラさん、めっちゃ綺麗だったし」

ぬるい酒、寝苦しい部屋、暗い夜を経験した善治郎をなお、引きつけてやまないのが、昨日略式ながら、婚約を結んだ、アウラ・カープアの魅力である。

夕食時、大胆にスリットの入った赤いイブニングドレス姿で、善治郎の前に現れたアウラは、改めてその魅力的な微笑と、官能的な肢体で異世界人の婚約者を魅了してくれた。

女王陛下の大胆な艶姿にすっかり魅入られた善治郎は、不自然ではない程度に（と、善治郎自身は思っている）、その視線をアウラの豊かに実った胸の谷間や、スリット間から除く太股に向け続けた。今思い出しても、あの尻、乳、太股には、現代日本の生活を投げ打つだけの価値は十分にあるように思える。

「そうだよな。考え見れば、俺、今回こっちの世界に自転車を持ち込んでるじゃないか。ってことは、一ヶ月後に来るときもある程度の物は持ってこられるってことだろ？ よし、帰ったら俺の婿入り道具のリストアップだ！」

そう言つて善治郎がパチンと両手を鳴らし合わせたちよつどその時、カランカランと入り口のベルが鳴らされる。

「はいっ！」

「失礼します。朝食の用意が調いました」

ドアの外から聞こえてくる聞き覚えのある若い女の声に、善治郎は大きな声で答える。

「はい、今行きます！」

ベッドから立ち上がった善治郎は、足早に入り口のドアへと駆け寄つていった。

第一章2【朝食の風景】

山井善治郎が、カープア王国にとってスペシャルなゲストである事は事実だが、現時点ではその存在は、女王アウラとその腹心しか知らない極秘の存在でもある。

そのため、昨日の昼・夜に続く、異世界で三度目の食事となる今朝の朝食も、善治郎と同じ食卓座るのは、婚約者であるアウラ唯一人であった。

善治郎の貧しい語彙で現せば、カープア王国の文化は、『典型的な中世ヨーロッパ風ファンタジーと未開の南国風文化を足して二で割ったような感じ』となる。

その気なれば、三十人くらいが同時に食事を取れそうなその長いテーブルは、驚いたことに一本の丸太を二つに割り、その表面をピカピカに磨き上げた代物だ。

一体樹齡何年の木なのか、善治郎には想像もつかない。ここまでの大木を一本まんま使うとなると、そのコストは大理石作りのモノより遙かに高くつくだろう。

その大きな木製のテーブルには、銀食器に盛られたスープや、丸パンを乗せた籠が並べられている。善治郎はアウラと楽しく談笑しながら、異国情緒あふれる朝食を取っていた。

「すでに、送還の準備は出来ている。星の並びも今日の午前中いっぱいには問題ないゆえ、いつ送還するかはゼンジロウ殿次第だ。そちらの都合の良いときに声を掛けてくれ」

スープ皿の底を拭った丸パンの欠片を上品に口に入れ、ゆっくりと咀嚼、嚥下し終えたアウラは、相変わらず落ち着いた声で、そう善治郎に現状を報告する。

一方、異世界のテーブルマナーなど知るはずもない善治郎は、アウラがどのように食事を摂っていたかを思い出しながら左手でスプ皿を傾け、銀のスプーンでその琥珀色の液体をすくい、恐る恐る口に運ぶ。

「ありがとうございます、アウラさん。そうですね、帰る時間はいつでもいいです。ただ、一つお聞きしたいのですが、召喚や送還の時、私はどれくらいの荷物を持って世界を行き来出来るのでしょうか？」

アウラはこの様なプライベートの食事で、うるさくマナーを守らせる人間ではないのだが、今後女王の伴侶として、善治郎が公式の場で食事をする機会は必ずある。

今から、食卓マナーを覚えようとしている善治郎の様子に好感を覚えたアウラは、あえて「マナーなど気にせず楽にされてはいいかか？」と言う言葉を飲み込み、微笑み返した。

「うむ？ 召喚魔法とは人を召喚するものだからな。基本的には人が無理なく身につけられるモノしか、持ち運ぶことは出来ないはずだ。ゼンジロウ殿が偶然持ち込んだ、あの不思議な乗り物ぐらいが限界だろう」

期待を大きく外すアウラの返答に、善治郎は思わず眉をしかめる。

「うわっ、本当ですか？ 困ったな……。それじゃ、大したものを持ち込めないか……」

「ゼンジロウ殿？ なにか、我が王宮で気に入られたモノでも？」

「あ、いや。今回の事じゃなくて、次の、一ヶ月後にこっちに来る

ときのことです。出来れば、あっちの世界の道具とかを、色々持ち込もうと思っていたのですが……」

「ああ、なるほど」

善治郎の返答に、アウラは得心がいった。

考えてみれば善治郎にだって、向こうの世界に生活拠点もあれば、財産も所有しているだろう。昨晚、腹心達と予想したとおり、善治郎が向こうの世界の貴族や富貴層なのだとすれば、手放したくない財産が、両手で抱えきれないほどあっても、おかしくはない。

「それは確かに、ゼンジロウ殿の立場で考えれば、何とかしたい問題であるな。さて……」

もとより婿殿の要望には可能な限り答えるつもりでいる女王は、何か手はないか、思案した。

「……………ああ、そうだ。もしかすると、あれが使えるかも知れぬ」

頭の中であらゆる可能性を検索したアウラは、一つ使えそうな手段に思いいたり、ポンと手を合わせる。

「アウラさん、なにか方法が？」

喜色を浮かべ、椅子から腰を浮かせかける善治郎に、アウラは一つ頷くと、

「うむ。時空魔法の基礎である結界の魔方陣が描かれた、絨毯がある。

今回の帰還のさい、ゼンジロウ殿が絨毯を向こうの世界に持ち込

み、一月後、ゼンジロウ殿を再びこの世界に召喚するとき、ゼンジロウ殿が結界を発動させておれば、恐らく結界の内部のモノとひとまとめにしてこちらに引き込むことができるはずだ。

所詮は絨毯一枚分、ゼンジロウ殿の全財産を持ち込むことは不可能であるのが、身一つで運べる量と比べれば、格段に増えるであろう?。」

「へえ、それなら結構持ち込めそうですね! あ、でも私は潜在的にはともかく、現状は魔法も魔の字も使えないのですが……」

喜色の後落胆と、一喜一憂する善治郎に、アウラは「心配無用」と笑って諭す。

「大丈夫。あくまで基礎の基礎ゆえ、魔方阵はただ魔力を注ぎ込むだけで発動する。最悪、それも出来ないのであれば、少量の血を絨毯にしみこませればよい。血には、高濃度の魔力が内包されておる」

「あ、それなら私でもどうにかかりますね。なにからなにまで、ありがとうございます、アウラさん」

「なに、礼には及ばぬよ。婿殿が私に差し出して下さるものと比べれば、微々たるものでしかない」

アウラはそう言って、大物然とした笑みを返した。

魔方阵絨毯の価値を知らない善治郎は、アウラの好意を素直に受け取っていたが、その物の価値を正確に知れば、アウラがそれくらい誠実に善治郎をもてなそうとしているか、少しは理解できたかも知れない。

魔方阵を描いた絨毯というのは、歴とした魔道具である。魔道具

は、『付与魔術』と呼ばれる特殊魔法で作られる。

『付与魔術』もカープア王家の『時空魔法』と同様に、とある王家の人間だけが使える秘術だ。当然、『付与魔術』の産物である魔道具は、極めて数が少なく、その値段は天井知らずとなる。

まして、その絨毯に描かれている魔方陣は、基礎の基礎とはいえず『時空魔法』の魔方陣だ。言うならば、二つの王家の秘術が架け合わさった逸品。それは、カープア王家と『付与魔術』を継承する王家との友好の証ともいえる。問答無用の国宝クラスだ。

「無論、貴重な代物であることは間違いない。向こうの世界に忘れてくるようなことがないように願いたい」

だが、アウラは善治郎に心理的な負担を掛けることを嫌ったのか、そんな内情は一切知らせず、ただ何気ないように、そう付け加えるに留まった。

「分かりました。必ずお返しします」

「うむ、お願いする。他になにか、要望はないか？　すでに貴方と私は結婚の約束を交わした身、遠慮は無用だぞ」

朝食と食べ終えたアウラと善治郎は、柑橘系の果実の汁を混ぜた水を飲みながら、話を続ける。甘めのレモンのような味がするその水は、爽やかなのど越しで善治郎の口を楽しませる。これで、氷でも浮かべて冷たくして飲めば、最高だ。

内心で相変わらず警戒なことを考えつつ、善治郎は、ふと思いついたように言う。

「そうですねえ、他にはこれと言って……って、そうだ。婚約だ。結婚するんですよ、私達。それなら、アウラさん。あなたの『左の

薬指』にピッタリの指輪はありませんか？ あれば、一つ貸して欲しいのですが」

この世界には『婚約指輪』や『結婚指輪』といった風習はないのか、善治郎の意図が分からずに、アウラは不思議そうに首を傾げる。

「それは、探せばすぐに見つかるであろうが、何に使うのだ？」

「それは、まあ、その……一ヶ月後のお楽しみ、ということだ」

例え『結婚指輪』という風習は知らずとも、「サイズの合う指輪を貸してくれ」という言葉と「一ヶ月後のお楽しみ」という言葉を組み合わせれば、あちらの世界に戻る婚約者が自分に指輪をプレゼントしようとしていることくらい、簡単に推測できる。

アウラは艶を多分に含んでいるのに、媚を感じさせない不思議な笑みを浮かべ、善治郎と正面から視線を合わせる。

「分かった。楽しみにさせてもらう。『左薬指の指輪』が、婿殿の世界ではどのような意味を持つのか、一月後には教えてもらえると考えて良いだろうか？」

「あ……はい。その時には、必ず」

すでに八分方、こちらの意図が読まれていることに気づいた善治郎は、苦笑と共に、その言葉を返すのだった。

第一章3【電力確保のために】

一度目の転移は気づかないうちに終わったが、二度目の転移は善治郎に軽い酩酊感のような物を残した。

「おおっと」

一步横にタタラを踏んだ善治郎は、頭を振って視界が歪む感覚を振り払い、周囲に目を配る。

アスファルトで固められた道。そこを走る無数の自動車。道の両わきに立ち並ぶのは、コンクリート造りの雑居ビル。

見慣れた風景と、排気ガス臭い空気の臭いに、善治郎は『帰ってきた』という実感を覚える。

あまりに変わらない風景に、「ひよっとして、あの異世界での経験は、ただの白昼夢だったのでは？」という疑念すら覚えるが、そうではない証拠に出かけたときは自転車に乗っていた善治郎が、今は徒歩で代わりに筒状に纏めた大きな絨毯を両手で持っている。

そして、左の小指にはアウラから預かった金の指輪。

それらの物的証拠が、昨日の一日が夢ではなかったと、善治郎に確信させてくれる。

「っっていうか、なんか連続しているふうに見えるけど、実際には丸一日が過ぎてるんだよな。……過ぎてるんだよな？」

独り言を呟いた善治郎は、途中で自分の感覚に自信が持てなくなった。異世界で一日を過ごしてきた善治郎は、単純に今日が日曜日だと思っっているが、地球でもその分の時間が同等に流れたという、その保証はない。

もしかすると、まだ土曜日なのかも知れないし、最悪、こちらの

世界では何日も時間がたっている可能性もある。

まあ、周囲の景色に大きな変化はないし、気温や太陽の角度もほとんど変わっていないので、まず大丈夫だとは思うが。

「やばい、まずは現状確認だ」

悪い方向に想像を働かせた善治郎は、ブルツと身体を震わせると両手でしっかり撒いた絨毯を担いだまま、早足で自宅へと向かうのだった。

「よかった。時間のズレはほとんどないみたいだ」

六畳一間の独身アパートに戻り、電波式の置き時計で今日の日付と時間を確認した善治郎は、ホツと安堵の溜息を漏らした。

善治郎が異世界に持ち込んだ腕時計と電波時計は、同じ時刻を示している。

どうやら、向こうとこっちの時間の流れはほとんどシンクロしているらしい。これは幸いである。なにげに軽く考えていたのだが、向こうとこっちで時間の流れに差があるとすれば、善治郎の異世界生活プランは根底から狂う。

なにせ、再召喚の約束は、あくまで「異世界基準の三十日後」の約束なのだ。もし、異世界とこちらの世界で時間の流れが異なっているのだとすれば、これから善治郎は毎日いつ召喚されるのか、ビクビクしながら生きなければならぬところだった。

そうなれば当然、異世界に婿入り道具を持ち込むのも夢のまた夢

だ。なにせ、魔方陣の絨毯を発動させるには、少量とはいえ善治郎の鮮血を垂らしておく必要があるのだ。まさか、いつ召喚されてもいいように、二十四時間体勢で、ダラダラ血を流し続けておくわけにもいくまい。

ともあれ、最大の懸念事項が杞憂に過ぎないと分かった善治郎は、一転明るい表情で部屋の隅に設置してあるパソコンの前に座り、電源を入れる。

「よし、時間はあるようでないんだ。検索、検索」

善治郎は、パチンと両手で両頬を張ると、気合いを入れ直して、声を上げる。

一ヶ月という時間は、長いように見えて短い。

取引先とアポを取って、時間を調節して、プレゼン用の資料を作っているうちに、気がつけば過ぎ去っている程度の時間でしかない。善治郎は、思いつく限りの検索ワードを片っ端から入力していた。

「……がああ！ やっぱ無理か、これは」

数十分後。善治郎は、検索サイトを開いたパソコンの前で、頭をかきむしっていた。

異世界生活で、切実に欲しいと思ったものの大半は、電気機器だ。エアコン、冷蔵庫、照明など。どれ一つとっても、安定した電気の供給無しで使える物は存在しない。

よって、善治郎が最初に目を着けたのが、家庭用の小型発電機だったのだが、当然といえば当然だが、異世界に持ち込んで、年単位で電気を供給し続けてくれるような代物は、そう簡単には存在していない。

「一番簡単なのは、ディーゼルやガソリン式の発電機なんだけどなあ。燃料がなあ……」

キャンプ用品として売られているこの手の発電機は、設置の手間もなく、簡単に電気を供給できるが、当然ガソリンや軽油といった、特殊な燃料を必要とする。

以前、バイオディーゼル燃料を、自作している人の話を聞いたことがあったので調べてみたが、異世界で善治郎のような素人が、再現できる代物には見えなかった。

大ざっぱに言えば、バイオディーゼル燃料の材料は、『植物油』と『メタノール（メチルアルコール）』と『苛性ソーダ』の三つだ。このうち、異世界で入手可能なものは植物油のみ。メタノールと苛性ソーダは善治郎が自作するしかない。メタノールは炭焼きの時に生じる木酸液を蒸留すれば作れるらしいし、苛性ソーダはイオン交換膜で繋がった二連水槽と電源があれば、作れるという情報を得たが、どう考えてもどちらも善治郎の手には余る。

無論、薬局でエタノールや苛性ソーダを大量に買い込み、向こうに持ち込むという手はあるが、そんなことをするくらいなら、最初からガソリンスタンドに行つて予備の軽油をポリタンクに詰め込み、持つて行った方が早い。だいたい、そもそもそんな絨毯一枚分しか持ち込めない量の燃料では、電気の供給は一ヶ月も持たないだろう。

「火力は駄目、と。となると、後は風力か、ソーラーか？」

風力は比較的現実的だ。異世界でも風は吹いている。しかし、気になるのはその発電量の気まぐれさだ。文字通り『風任せ』なのだから、万が一風の熱帯夜などにならなくては堪らない。

ソーラーに至っては論外だ。善治郎が一番切実に必要としているのは、『夜の照明』の電力なのだ。

昼間しか使えない電気など、魅力が半減どころの話ではない。一応、夜に対応するように、大型バッテリーを搭載したタイプというものもあるのだが、バッテリーというのは非常に寿命の短い『消耗品』なのである。

「後は、最近はやりの風力とソーラーのハイブリッド発電か。これは悪くはないよな、うん」

善治郎は、コップに注いだペットボトルのお茶をすすり、またマウスに手を戻す。

冷静に考えれば、このハイブリッド発電機が一番無難だろう。メーカーの売り文句では「説明書通りに組み立てれば、どなた様でも即日使用可能」と書いてある。

その売り文句を信じて良いのならば、善治郎一人でも異世界で設置可能であるはずだ。

しかし、そこまで結論が出かけた善治郎を悩ませているのは、偶然見つけた、もう一つの発電装置の存在だった。

「家庭用水力発電機か、こんな物もあつたんだな……」

善治郎はその魅力に取り憑かれたように、呟いた。

風力、ソーラーと違い、場所を選ばずいであまり一般的には広まっていないが、今や家庭用小型発電機の波は、水力にまで押し寄せられている。

水力発電の魅力は、いうまでもなくその二十四時間の持続性と、他とは一線を画する圧倒的な発電量だ。

風力やソーラーでは、一般家庭の発電量を賄いきるのは、理想通りの風・太陽光があっても難しいが、水力は違う。メーカーのカタログスペック通りの性能を期待して良いのだとすれば、その発電量は小型の物でも一般家庭の総消費電力を上回る。

だが、そんな魅力的な水力発電にも問題はあある。

「あの王宮の近くに川とか水路とかあるのかな？」

滞在中、王宮から一步も外に出ていない善治郎である。王宮の周囲に、水力発電機を動かせるだけの水源があるかどうか分からないという、根源的な問題があった。

王宮では何百人という人間が生活しているのだから、水源がないはずはないと思うのだが、なにせ相手は魔法のある異世界である。

「はい、水はそれ専用の魔術師が、毎朝魔法で作っています」

などと言われる可能性もゼロではない。

ならば、水力発電機とハイブリッド発電機の両方を購入すれば、とも一瞬考えたのだが、そこには予算という問題が立ちはだかる。

残業代だけのごまかさな半ブラック企業に、数年務めている善治郎の貯金総額は、300万円強。

20代前半の若造の預貯金としては、なかなかの金額ではあるが、目的を考えれば潤沢な資金とは言えない。

善治郎が目を着けているハイブリッド発電機の値段が約50万円。水力発電機に至っては実に150万円もする。

発電機以外にも、大型エアコンや冷蔵庫、照明器具や新しいパソコンなど、予算を回したいものはいくらでもある。さらには下着や歯ブラシ、石けん、タオル、バスタオル、鼻かみ用のガーゼのティッシュなどもまとめ買いをすれば、馬鹿にならない金額になるだろう。

そこにアウラに送るペアの『結婚指輪』もプラスされると、発電装置だけに全体の3分の2もつぎ込む訳にはいかない。

しかし、発電装置の目処が立たない限り、持って行く電化製品が決まらない。

「あー、結局はどっちかを選ぶしかないのか。無難な小電力か、使えない危険のある大電力か。うーん……」

即決するのは難しい問題だが、あまり時間を掛けるわけにもいかない。そこらへんのスーパーで、肉や野菜を買ってくるのとは訳が違うのだ。注文すれば、次の日に届くような代物ではないし、その設置方法、運用方法を覚えるには、ある程度の時間が必要だろう。

設置のやり方は、マニュアルさえあれば、向こうの世界で直接試すことも出来るが、こちらで一度練習しておけば、分からないことを電話なりメールなりで、販売会社に問い合わせることができる。

だから、決断は早い方が良い。それは善治郎もわかっている。

「わかってる。わかってるんだけどなー。あー……どっちにしよう」

それでも善治郎は即座に結論を出せずにいた。

第一章4【思い通りにいくことは少ない】

翌日の月曜日、出社をはたした山井善治郎は、提出した『辞表』を前にして、難しい顔で腕を組む上司の言葉を待っていた。

「辞めるってか……」

「はい、すみません」

元々、仕事条件の厳しい会社である。辞めていく人間はそう珍しくないのだが、善治郎の場合数年間仕事についてきて、最近やっと『戦力』となる目処が付いてきた矢先での辞表提出である。

上司としても、入社半年の新人のように「辞めたけりゃ、勝手にしろ」とは言えない。

「実家に帰って、家を継ぐ、か。お前、そういう生活が嫌で、この仕事を選んだんじゃないのか？」

辞表の理由の欄に書いた、善治郎の嘘言いつに目を通して、上司は口元を不快げに歪めたまま、首を傾げる。

「ええ、まあ。何というか、ちょっと、心境の変化がありました……」

まさか、異世界の女王様と結婚してヒモになります。とは、書けないため、ここは嘘で塗り固めるしかない。内心冷や汗を流しながら、善治郎は、神妙な顔をしている。

「ふーん……まあ、辞めるって言うのを、無理に押しとどめても、

碌な仕事はできねえわな。分かった」

長らくこちら睨んでいた上司が、そう言葉を漏らした瞬間、善治郎は思わずホッと安堵の溜息を漏らした。

だが、そんな善治郎の喜びに水を差すように、上司は大きな声を張り上げる。

「ただし！ 今お前が担当している期日の近い仕事は、ちゃんと終わらせる。それ以外の、お前が抱えている仕事も別の人間に引き継ぎさせるんだぞ。それが終わったら、今年の新入社員の教育係だ。

今のお前くらいまでとは言わんが、せめて仕事のイロハのイぐらいは叩き込んでいけ、いいな？」

いいか悪かと聞かれれば、よくはない。正直今は異世界召喚の準備で、時間は惜しいのだ。

しかし、そんなことを言って跡を濁すのも気持ちの良いものではないし、下手に刃向かって根掘り葉掘り聞かれて、万が一にも嘘がばれたりしたら、そのほうが遙かに厄介だ。

「分かりました。失礼します」

結局、善治郎は退社の瞬間まで、無難にハードワークをこなすことを選択したのだった。

仕事の引き継ぎや、後輩の指導まで任されるとなると、思った以上に残された時間は少ない。

これは、一分一秒も無駄に出来ないと悟った善治郎は、牛井屋で昼食を済ませると、その足で真つ直ぐ近くの宝飾店へと向かった。

「そうですね。この指輪ですと、14号から14.5号くらいになるのではないでしょうか。お客様ご自身のサイズは17号ですね」

善治郎が持ち込んだ指輪と、善治郎自身の左の薬指を計り終えた中年の女店員は、業務用の笑顔を崩すことなくそう言った。

そもそも宝飾店に足を踏み入れること自体初めての善治郎は、そう言われてもアウラや自分の指が、太いのか細かいのかもよく分からない。

「はあ、そうなんですか」

善治郎の様子から、すぐにこの客がまったく不慣れであると察した店員は、さりげなく説明を交えながら、話を続ける。

「お相手の方は女性としては、少々大きめのサイズになりますね。このサイズとなりますと、すぐに用意できるものは、若干数が限られるのですが」

「ええ、まあ。身長からして、私より一回り高い人ですから」

「あら、まあ。お客様だつて低い方ではないのに。それだけ、背の高い方ですと、ある程度幅の太いしつかりとした物の方が、映えるでしょうね。少々お待ち下さい」

店員はサンプルを取り出しに、奥へと引っ込む。

「あ、はい」

残された善治郎は、自然にアウラの容姿を思い出していた。

大柄で官能的な肢体。激しい容姿の映える、目鼻立ちのはっきりとした容姿。その性格を現しているような、火のように赤い長髪。日焼けとは根本的に違う、生まれついでの小麦色の肌。

彼女の指に映える指輪とは、どのようなものだろうか。確かに店員の言うとおり、控えめな作りの、細い指輪はあまり似合わない気がする。

もつとも、善治郎自身一つ勘違いをしている。アウラの身長が、善治郎より高いということはない。

むしろ、善治郎の方が指一本分程度だが、高い。正確に言えば、善治郎が172センチ。アウラは、170ちょうどくらいだ。

善治郎の目には、アウラが170の中盤から後半くらいに見えているが、それはその全身から滲み出る雰囲気を押された、錯覚に過ぎない。

「お待たせしました。簡単な手直しで、近日中にお渡しできる物となりますと、この辺りのものとなります」

そうしていると、後ろに下がった店員が、複数の指輪を盆のような物に乗せて、善治郎の前へ持って来る。

「へえ、結構色々あるんですね」

そう言う善治郎が真っ先に目を向けるのは、それぞれの指輪にぶら下がった正札だ。

貧乏性であることは分かっているが、指輪の善し悪しなど分からない善治郎にとって、一番気になるのは、懐から出て行く金額というのが、正直なところだ。

「迷われているのでしたら、まずは台座の金属から決めることをおすすめします。日本では、結婚指輪はプラチナが一般的ですが、お客様の肌の色ですと、むしろゴールドの方が指になじむのではないでしょうか。通常のイエローゴールドが派手すぎると感じるんですたら、こちらのようなピンクゴールドのリングもございます。

もちろん、フィアンセの方との兼ね合いが一番大事なのでしようが」

一般に、肌の薄い者はプラチナや銀、濃い者は金が無難であるとされている。

善治郎は、異世界人の血が入っているせいか、日本人としてはかなり肌色が濃い人間である。

まして、アウラは、完全無欠の異世界人。その肌の色は、天然自然の綺麗な小麦色だ。

「ああ、相手は私よりもっと肌の色が濃いですよ。小麦色って言うか……」

「まあ、それでしたら、やはりイエローゴールドをおすすめします。飾り石も、無色ダイヤよりカラーダイヤのほうがよろしいのではないのでしょうか。失礼ですがひよとして、お相手は、海外の方ですか？」

「あ、はい。そう、ですね。日本人ではないです」

「それでしたら、台座の石は、瞳の色や髪の色と合わせるといっ

び方もございます。瞳や髪の色を合わせれば、身につけていてもなじみやすいですし、それだけ相手のことをよく見ているという、メッセーヂにもなりますから」

「は、はあ。なるほど」

日頃、こういった場に離れていない善治郎は、店員の販売攻勢に押され、ただ店員の言うことに頷くばかりになっていた。

第一章5【緊張の一瞬、運命の日】

数日後、期日の近かった仕事を一通り終わらせた善治郎は、新人研修の時以来となる定時帰宅を果たした自宅のパソコンの前で、苦悩のうなり声を上げていた。

「グオオ……、三年、たった三年の為に百五十万か……」

善治郎をうならせているのは、ハイブリッド発電機、家庭用水力発電機それぞれの販売会社からの返答メールである。

善治郎が問い合わせた内容は、大ざっぱに言って「そちらで販売している発電機は、自分で設置できる物なのか?」、「そのメンテナンスは、自分で可能なのか?」、「可能だとすれば、自己メンテナンスで稼働保証期間はどの程度か?」という三つであった。

それに対する二社の返答はほぼ同じ物であり、「お客様ご自身の手で設置は可能であるが、不安があるようならば、設置も弊社に任せて欲しい」、「購入時の資料に目を通せば、表面的な自己メンテナンスは可能だが、保証は出来かねる。出来れば、修理もこちらに一任して欲しい」、「稼働保証期間は三年」という善治郎の希望を打ち砕く、無情なものであった。

「三年、たった三年か……」

善治郎は、うつろな目で呟く。

元からある程度覚悟はしていた。そもそも、万が一メンテナンスフリーで善治郎が死ぬまで稼働してくれる夢の発電機があったとしても、肝心の家電 エアコンや冷蔵庫自体にも寿命はあるのだ。

エアコンや冷蔵庫のメーカー保証期間は、おおよそ十年弱。

どのみち、それくらい時間がたてば、文明の利器から切り離された異世界生活に突入することは決まっている。

だから、持ち込む電化製品は、異文明になじむまでのいわば『補助輪』のようなものと、善治郎は考えていた。

「十年あればあっちの気候にも多少は身体が慣れるだろうし、場合によってはアウラさんに無理を言って、昔のマハラジャの宮殿みたいな、壁から水が流れる部屋とかも作ってもらえるかも知れないしな」

善治郎は、マウスから手を話すと、両手を天井に突き上げるようにして、伸びをした。

こちらにも、ネットで調べた知識なのだが、かつてエアコンなどという上等な物がなかった時代、莫大な財力を有するインドのマハラジャの中には、壁一面から水が流し、床の溝を伝わって外に排水されるという、大がかりで原始的な仕組みによって、涼を取っていた者もいたという。

原理的には、昔の日本で行われていた『打ち水』などと一緒だ。水が蒸発する際に発生する吸熱現象を利用して、室温を下げるのである。

これならば、異世界の技術でも製造は可能そうであるが、いかんせん素人の善治郎が見ても、建築コストがバカみたいに掛かることは、予想できる。

向こうの国は、長い戦乱の世を勝ち抜いて、今まさに復興の真っ最中だとアウラは言っていた。

そんなときに、女王の伴侶と言う名の種馬ごときが、そこまで財力と労働力を浪費することを、アウラが許すだろうか？

少なくとも、三年後ではまず無理だ。だが、十年後ならば、順調に国力が回復していれば、ある程度の贅沢も許されるのではないか。

そう考えていたのだが。

「三年じゃ無理だよなー、どう考えても。やっぱりネットクはバッテリーカー」

善治郎は、パソコンに向かい会い、考える。

ハイブリッド発電機には、色々と精密が部品も使われているが、水力発電機に限れば問題は、ベアリング（プロペラ回転部分の軸受け）と、バッテリーに限られた。

考えて見れば当たり前のことであるが、どのような発電機でも、バッテリーは必ずと言って良いほど組み込まれているのである。

そのバッテリーの寿命が約三年。幸い、元々消耗品であるため、バッテリーの交換は説明書を見れば素人でも十分に可能な仕組みになっているのだが、だからといって「予備のバッテリーを大量に買っていけばOK」と言うことにはならない。

メーカーがばら売りをしてくれない、と言うことではない。元々水力発電機は、日本の法律上と都心部の河川には設置できないため、購入者の大半は、安易にメーカーに修理を頼めないような所に住んでいる者が多い。

そのため、不慮の事故などに対応するため、発電機の購入者が予備バッテリーも合わせて購入すること自体は、さほど不自然ではないのだが、問題は、予備は所詮予備だということだ。

確かに、使用していないバッテリーは、二十四時間三百六十五日使い続けているバッテリーと比べれば遙かに劣化していないが、それでも三年もたてば、素人の保管状態では劣化はする。

少々乱暴な例えだが、買いためておいた電池が、五年後、十年後、メーカーの保証通りの性能を発揮するか？ と考えて見ると、少し理解しやすいのではないだろうか。

「けどまあ、予備のバッテリーを三つくらい持って行けば、ある程度は持つかなー？ 何とか十年は持たせたいな。ヘアリングの方は十年保証だし、取り替えも難しそうだから要らないか？ あ、でもどのみち十年後なら家電の大半は寿命なんだから、ダメ元で自己修理に賭ける価値はあるか」

最初の数年を楽しむためだけで終わっただとしても、電力の持ち込みは諦めたくない。

学生の頃は、よくテレビやレンタルDVDを見ていた善治郎であったが、社会人になってからは取り溜めするばかりで、見る時間がなく、ハードディスクから落としたDVDばかりがドンドンと溜まっていった。

サッカーのアフリカワールドカップもテレビのニュースで結果を見ただけだし、ヨーロッパチャンピオンシップサッカーも、取るだけ取って一度も見ていない。

ネットで評判の良かったドラマのたぐいは、年に二、三本は録画していたし、善治郎が中学生の頃からずっと見続けていた、某アイドルグループがやっている日曜夜七時の一時間番組も、社会人になってからはまだ一度も見ていないのだ。

仕事もせず、衣食住が満たされ、ただダラダラ取り溜めたテレビ番組を見る時間。

恐ろしく、非生産的な時間の過ごし方であるが、仕事に疲れた今の善治郎には、その生活がこの上なく魅力的なものに思えてならない。

たとえば、頭の片隅で「そのうち、そういう生活に飽きてきて、身の置き所がなくなったりしないかなあ？」とう疑問がわいていても、今は抗えないくらいに魅力的だ。

「所詮持つて行けるものは、絨毯一枚分しかないんだし、日本円は

持っていてもしょうがないもんな。いっちょぱーつと使ってやるか！」

開き直った善治郎は、持つて行く家電製品の情報を調べ始める。

「ええと、エアコンも頑張れば自分で設置できるよな。あれ？でも、室外機の配管はどこを通せばいいんだ？あの宮殿の外壁、確かめっちゃ分厚い大理石作りだったよな？そもそも、あの滅茶苦茶広くて天井の高い部屋を普通のエアコンで、冷却できるのか？二十畳用でたりる、か……？」

冷静になれば、異世界での家電生活には数多くの壁が立ちほだかっているようだ。

それでも、よりよい未来を一秒でも長く継続させるため、善治郎はさして性能の良くない頭をフル回転させるのだった。

一ヶ月という準備期間は、アツという間に過ぎ去る。

この一ヶ月で出来る限りの準備を整えた善治郎は、床が抜けそうなくらいにぎっしりと物が詰まった六畳間の真ん中で、バクバクなる心臓を抑え、深呼吸を繰り返していた。

「そろそろか？ いや、まだか……ちよつとして、あれは全部夢だったんじゃない？ いやいや、そんなことねーだろ。現に絨毯も指輪もあるし。……けど、何らかの不測の事態が起きて、俺の再召喚が破算になるってことはあるよな？」

右手に持つカッターナイフで、定期的に左の小指の傷をほじくり、絨毯に血を垂らし続ける善治郎は、この期に及んで最大級の不安にかられていた。

すでに、異世界に渡るための準備は整えてしまっている。

会社はどうか後腐れなく辞めてきたし、ガス、電気、水道、電話、携帯電話など、ライフラインの契約も全て解除してある。アパートの管理人にも今月いっぱいこの家を出ると伝えてある。

銀行や郵便局の口座はそのままにしてあるので、来月の十日には最後の給料が入金されることだろうが、善治郎がその糧の自分の手で掴むことはないだろう。ないはずだ。あつては困る。

ここまで準備を整えて、万が一にも召喚されなかつたりすれば、善治郎は使い道のない家庭用水力発電機や、バカみたいに長い延長コードなどを手に、ひたすら路頭迷うはめになる。

「やばい、頭がクラクラしてきた。血、出し過ぎたか？」

目の前が暗くなってきた錯覚に襲われた善治郎がそう呟くが、そんなはずはない。先ほどから、流している血の量など、病院で年一度受けている血液検査で抜かれる量の十分の一にも満たない。

そのめまいや視界が狭まる感覚は、全て精神的な物に起因している。

「忘れ物はないよな？ 台車の上に発電機はあるし、延長コードもある。エアコン、冷蔵庫、パソコンにお土産の酒類。各種グラスや

皿とか食器も持ったし、指輪はポケット中、と」

現在善治郎は、持っている中で一番値の張るスーツを着ている。仮にも、結婚を申し込みに行くのだ。たとえ、異文化、異世界の嫁の元とはいえ、こちらにもそれなりの格好がある。

最初は、披露宴で新郎が着るような白スーツを用意しようかとも思ったのだが、その馬鹿げた高値に即刻それは諦めた。あれは、庶民が一度しか着ない衣類に、かけてよい金額を大幅に踏み越えている。

「結局、アウラさんに買っていくものは、指輪以外には酒だけになっちゃったけど、大丈夫だよな？ アウラさん、酒好きみたいだったし」

絨毯の片隅には、ブランデーやらウイスキーやら、はてには日本酒やワインのボトルが纏めて陳列されている。

日頃、酒と言えば発泡酒、極まれに一本千五百円程度のウイスキーを飲む程度の善治郎にとっては、一本一万円とか二万円とか値の付いた酒など、正気の沙汰には思えないのだが、仮にも女王の土産には、そのくらい張り込む必要があるだろう。

そう言えば、向こうで出された酒は、度数の薄い果実酒しかなかったことを思い出した善治郎は、急きよ家庭用の蒸留器を購入したのだが、果たしてこれで蒸留酒がちゃんと造れるのか、まだ試したことはない。

まあ、成功すれば設け物、ぐらいの気持ちである。

善治郎は、ふと冷静になって、肩に食い込んだリュックサックのヒモが、一張羅のスーツにシワを作っていることに気づく。

「うわっ、やばい。向こうで、スーツのしわ伸ばしなんて出来るのかな？ だからといって、これを置く勇氣はないからな。仕方ないと割り切るべきかー」

背中に背負っているリュックの中身は、着替え一式と予備の靴。契約を解除した携帯電話とソーラー充電器。他には、乾パン、チョコレート、水のペットボトル、ダース買いたライターとツールナイフ、手回し式のLEDライトと熱材製の毛布など、俗に言う『非常用袋』の中身に近い物がぎっしりと詰まっている。

もし、万が一、召喚される場所が狂ったら。召喚される時間が狂ったら。絨毯の魔方陣が上手く働かず、身につけている物しか持ち込めなかったとしたら。そんな不測の事態を考えると、多少服にシワをつけても、リュックを絨毯に下ろす気にはなれない。

もちろん、ある意味一番大事な代物であるアウラに送るペアリングは、箱ごとしっかりスーツの内ポケットにしまっている。

善治郎は不意に、ポケットにしまった指輪を再度確認したい衝動にかられたが、生憎右手にはカッターナイフを持ったままだし、左手は小指の先からポタポタと血を流している最中だ。

一度カッターナイフを絨毯の下ろして、内ポケットを探ってみようか。善治郎がそう考えた、ちょうどその時だった。

「ぐっ……！？」

身に覚えのある軽い酩酊感が、絨毯の上にしゃがみ込んだ体勢の善治郎を襲う。

とつさにカッターナイフを投げ捨て、両手を絨毯の上に付いた善治郎が、右隅のほうから『ガチャン』という音を聞いた次の瞬間、頭上から一ヶ月ぶりに聞く、迫力のある女の声が降り注ぐ。

「ようこそ、婿殿。二度目の召喚もうまくいったようで何よりだ。今度こそ、真の意味で貴方にこう言うことが出来る。この世界、我が国にようこそ。歓迎しよう、我が生涯の伴侶殿」

「アウラさん……」

見事、絨毯丸ごと転移を果たした善治郎は、立ち上がることも忘れて、両手を広げて歓迎の意を示す女王を、惚けたように見上げるのだった。

第二章 1【婿入り道具の危険物チェック】

無事異世界に転移を果たした数十分後。

善治郎は、スーツ姿のまま、一ヶ月前と同じゲストルームに通された。

善治郎が持ち込んだ、荷物一式は、城の兵士達が「責任を持って、後宮に運び込む」のだそうだ。

魔方阵の絨毯に乗せていた物はもちろん、善治郎が背負っていたリュックサックまで丸ごとである。

あまりに意図が見え透いた対応であるが、向こうの立場に立ってみれば極当たり前の要求であることは理解できたため、善治郎は特に逆らうこともなく、兵士達に荷物一式を預けたのだった。

無論、台車に乗せた水力発電機を初め、冷蔵庫、エアコン、フロアスタンドライトなど、電化製品を一つずつ指さし「これらは壊れ物ですので、取り扱いには十分に注意して下さい」と何度も念を押すことは忘れなかったが。

「そうだよな。王宮にいきなりあれだけ、怪しげな物体大量に持ち込んだら、まずは危険物がないかチェックされるのが当たり前か」

最悪、持ち込んだ電化製品などを危険物として処理される可能性もあるにはあるが、善治郎はその辺りやある程度楽観視している。曲がりなりにもあれらの物資は、女王であるアウラの許可を得て持ち込んだ代物だ。

もし、まかり間違って持ち込んだ道具のうちどれかが危険物だと見なされたとしても、善治郎に直接弁明する機会ぐらいはくれるはずだ。

「危険物や、変な野心があるように勘違いされるような物は、意識

的に排除してきたつもりだけど、まあ、異世界だからあ……」

なんだかんだいっても、不安は残るのか、善治郎は溜息をつきつ、スーツの上を脱ぐと椅子の背もたれにかける。

ついで、ネクタイの結び目に人差し指を引っかけると、ゲイゲイ引っ張って喉元を緩め、ワイシャツの第一ボタンも外す。

「……ふう」

これで少しは楽になった。右手でパタパタと喉元に新鮮な空気を送り込んだ善治郎は、待ち時間を持って余すように、広いベッドの上に仰向けに倒れ込むのだった。

善治郎が広いゲストルームで暇を持て余している頃、カープア王国女王アウラー一世は、善治郎が持ち込んだ大量の『婿入り道具』を、部下達に一つずつチェックさせていた。

「全て開いて吟味しろ。ただし、開け方が分からないものは、無理をせず、印だけつけておけ。後で私の方からゼンジロウ殿に直接問いただす。危険な物、不審な物があったら、自己完結せずに全て私

の所に持ってまいれ」

「はっ、了解しました！」

「承知いたしました」

白い革鎧に身を包んだ近衛兵と、南国らしい半袖ミニスカートのエプロンドレスを着た侍女達が、女王陛下の命に従い、善治郎の荷物を丁寧に開いていく。

スリッドア冷蔵庫を上から順に開き、中に首を突っ込んで確認している者。エアコンの中を確認しようと、首を傾げている者。半透明の衣装ケースを開き、善治郎がしこたま買い込んだTシャツやトランクスパッツを一枚一枚丁寧に開いては、たたみ直している者。

突如王宮に持ち込まれた大量の『不審物』である。チエツクを怠るわけにはいかないが、持ち込んだ相手は、女王の夫となるやんごとなきお方だ。

万が一にも品物を破損させたり、汚したりするわけにはいかない。そのため、十数人がかりだというのに、確認作業は中々はかどらなかつた。

それでも、そうしているうちに、気になる物を発見した人間が、アウラの所に報告をあげる。

「陛下、こちらの透明な容器の中身は、酒のようです。特殊な封がされている模様で、開け方は分かりませんが、割れた器の中身から、酒の匂いがしています」

善治郎がアウラへの土産として持ち込んだ酒類。転移の衝撃で倒れてしまったのだろう。比較的薄い瓶に入っていた日本酒とワインが一本ずつ割れてその中身を絨毯にしみこませていた。

言われるまでもなく、その匂いから善治郎の荷物に酒が混ざって

いたことを知っていたアウラは、小さく一つ頷くと、

「残っている酒は纏めて酒蔵に安置せよ。割れた酒の器はこちらに持ってまいれ。あ、持ち運びには十分気を配れ。どうやら、その器は木樽などとは比べものにならぬほど割れやすいようだ」

そう、兵士と侍女に命令する。

「はっ、承知しました」

「はい、こちらです」

兵士がそつと両手に一本ずつ酒瓶を持ち、部屋から出て行くと同時に、侍女は割れた日本酒とワインの瓶を手に取り、アウラに差し出す。

わざと曇りガラスにした白い日本酒の瓶と、濃い赤紫色の透き通った赤ワインの瓶。その二つの破片を手に取ったアウラは、窓から差し込む陽光に透かして見て、驚きの声を上げた。

「すごいな。まるで水晶を加工したかのようだ。婿殿の世界では、この様な器が一般的なのか？」

この世界全体を見渡せばどうか分からないが、少なくともここカールプア王国には、ガラスの製造技術が存在しない。

現代の地球で作られた酒瓶のたぐいは、この世界の人間にはただの器というより、一種の芸術品に映る。デザインにも凝っている、ブランドーやウィスキーの瓶は特にそうだ。

「陛下、こちらはどうやら食器のようです。グラスも皿も、木や銀ではなく、その酒瓶と同じような透明な材質か、光沢のある石の様

な物で出来ています。こちらも、転移の衝撃で数枚破損しているものがありました」

善治郎が持ち込んだ食器は、日本ではごく一般的な陶器製のものであり、ついでに持ってきたワイングラスや、ウイスキーグラスは全てガラス製である。

善治郎が、わざわざこんな壊れ物を持ち込んだのは、前回食事を摂ったとき、この世界の食器が全て木製か金属製であることに気づいたからだ。

わざわざそれを指摘するほど、気になることではなかったが、陶器やガラスの食器に慣れてきた善治郎には若干の違和感があった。本人も気づいていないが、特に善治郎が違和感を覚えたのは、酒や水のグラスである。

銀は、他の金属と比べれば味移りのしない金属であるが、それでもやはり全く味がしないわけではない。

フォークやスプーンは日本でもステンレス製が一般的なため、善治郎も違和感は覚えなかったのだろうが、グラスのたぐいは違う。言うならば同じメーカーのお茶でも、ペットボトルで飲むのと、缶で飲むのと、ガラスのコップに空けて飲むのでは、味が違うように感じるのと同種の話だ。

アウラは、無色透明のワイングラスを手にとると、チンと指で弾く。

「これも見事だな。美術品の収集癖がある貴族ならば、これ一つでずいぶんな譲歩を引き出せそうだ」

無論これは、善治郎の財産であり、いかに妻であってもアウラに好きにする権利はない。しかし、あの物わかりが良くて、人の良い

婿殿の事だ。頼めば一つくらい融通してくれるのではないだろうか。いつの間にか、籠絡すべき貴族の顔を思い浮かべ始めたアウラは頭を振り、現状に思考を向ける。

「他にはなにか、あったか？」

「はっ、陛下。こちらをご覧下さい。これは、ひよっとして『武器』のたぐいなのではないでしょうか？」

そう言つて、兵士が持ってきたのは蒼い長方形の箱に収められた金属の棒と、小さなねじくれた釘が沢山詰まった小袋、そして小さな刃が正面から向き合った形の不思議な刃物だった。

「見せてみる。うむ……いや、武器ではないな。恐らくなにかの道具だろう。武器として使うにはあまりに非効率的すぎる」

手渡された『ドライバーセット』『ネジ釘』『パイプカッター』を見たアウラは答えた。

それらは全て、エアコンを取り付けるための道具である。他にも『ハンマードリル』や『真空ポンプ』や『真空計』など、異世界人には意味不明の道具がつらつらと並んでおり、それら一式があればエアコンの取り付けは可能である。

ただし、経験者に限る、と但し書きが付くが。

ネットで一通り調べた結果、素人が紙の上の知識だけでエアコンの取り付けに成功する可能性はかなり低いと知った善治郎であったが、そのときにはすでにエアコンは購入した後であった。

エアコンの取り付け方を説明しているインターネットのホームページを片っ端からプリントアウトして持ってきている辺り、『エアコンのある異世界生活』を諦める気はないようだが、速攻で『扇風

機』と『冷凍室に入る大きさの金だら』を購入してきたという事実を鑑みると、現実がまるで見えていないわけでもなさそうだ。

続いて別の兵士も、なにに使うのかわからない装置を持ってアウラの前に進み出る。

「陛下、これは兵器ではないのでしょうか？ ご覧下さい。一見ただの箱に見えますが、中には複数の刃が設置されており、この横の棒を回すとこの通り、中の刃が高速で回転する仕組みになっている模様です」

「ほう、これは興味深いな。面白いカラクリだ。しかし、凶器ではないだろう。これで一体どうやって、攻撃を加えるつもりだ？」

「敵の手を掴み、この箱の中に突っ込み棒を回す……とか？」

言ってる途中で自分でも説得力の無さに気づいたのか、言葉が尻すぼみになる兵士に、アウラは苦笑を浮かべて突っ込みを入れる。

「それでは兵器ではなく、拷問道具だ。まあ、使いようによっては危険かも知れぬが、恐らく攻撃的な意図で作られた道具ではないだろう。元の場所に戻しておけ」

「はっ」

兵器やら拷問道具やら、色々不名誉な役割を押しつけられそうになった、善治郎の『かき氷機』は、無事に元あった場所へ戻された。

その後も、大量に買いだめた石鹸やら、歯ブラシやら、蚊取り線香やら、異世界人にはさっぱり用途の分からないものがゾクゾクと

発見される。

同じものを複数購入した、LEDフロアスタンドライトは、見た目だけならば、この世界にある大型の燭台に近い形をしているので、漠然と用途が想像できるようだが、蝋燭を立てる場所も、皿に相当する部分もないため、結局はこれも謎の物体のままだ。

そうしていううちに、絨毯の上に入った荷物ではなく、善治郎が直接背負っていたリュックサックの中身を確認していた侍女が、口の開いたままのリュックを片手に、アウラの前にやってきた。

「へ、陛下ッ。こちらの中身は水、食料、毛布や着替えが大半でした」

侍女の報告にアウラはしばし考え後、得心がいったように頷いた。

「ああ、なるほど。何らかの非常事態に備えていたということか。そうだな、嬪殿には私の召喚魔法が失敗したあかつきには、どのような結果が出るか説明していなかったからな」

召喚魔法が失敗した場合には、魔法自体が発動しない。そのため、善治郎の用心は全く無駄だったのだが、この場合失態を犯したのはどちらかと言うことアウラの方だ。

「しまったな。嬪殿に余計気を遣わせてしまった。後でわびねばならぬ。……ん？ どうした？ まだ、何かあるのか？」

リュックを持った侍女の顔色が悪いことに気づいたアウラは、なぜか顔色を失っている侍女にそう問いかける。

侍女は、青ざめた顔のまま「は、はい」とか細い声で答えると、

「じ、こちらをご覧下さい」

と行って、リュックの横のポケットから、なにやら小さな巾着袋の有名モノを二つ取り出し、アウラへと差し出す。

「む、これは……!？」

無造作に、巾着袋を開き、中を見たアウラはその赤茶色の目を見開き、絶句する。

アウラが開いた二つの巾着袋。一つには、小指の先くらい大きさの、カラフルな色を封じ込めた透明な宝玉がぎっしりと入っており、もう一つにはやはりキラキラとカラフルに光る、砂粒大の真ん中に穴の開いた小さな粒が、無数に詰め込まれていた。

平たく言えば『ビー玉』と『ビーズ』である。

これも、善治郎の『ハプニング対策』の一つだ。

万が一、王宮以外の異世界に漂流してしまった場合のことを考えた善治郎は、異世界の街で換金できそうなので、それでいてあまりかさばらないモノは何かと考えた結果、『ビー玉』と『ビーズ』を選択したのである。

王宮で、窓や食器に一切ガラスが使われていなかったことを思い出したため選択した代物であるが、内心善治郎は、異世界の人間を『未開地の原住民』扱いしている気がして、あまり良い気分はしていなかった。

しかし、背に腹は代えられない。ビー玉一つで一泊の宿が取れたり、ビーズ数粒で食事一食分の代金になれば御の字。それくらいに考えていた善治郎であったが、その価値観は大幅にずれていると言わざるを得ない。

目で見える気泡もほとんどなく、完全な真球をしたガラス玉の世界での価値は、現代日本のような『おもちゃ』でも、善治郎が想像しているような『ちょっとした通貨の変わり』でもない。

そのままズバリ、『宝玉』として扱われる。

実際、地球でもトンボ玉と呼ばれるガラス玉の一種は、その歴史的価値も付加されているとはいえ、一個百万円を超える金額で取引されるモノもそう珍しくはない。

善治郎が持ち込んだビー玉やビーズはそこまで大したものではないが、ガラスの製法自体が伝わっていないこの世界では、その価値は善治郎の想像を遙かに超えるモノとなる。

「嚴重にしまして、元に戻しておけ」

「は、はいっ……！」

命令を受けた侍女は、女王の手から二つの巾着袋を受け取ると、爆発物でも扱うような慎重な手つきで、それをリュックのポケットへと戻していった。

長かった善治郎の荷物チェックも、終盤に差し掛かり、すでに自分の担当を終えて、作業中の仲間達の邪魔にならないよう壁際に引っ込んだ兵士や侍女達が目立ち始めた頃、アウラは全体に声を掛ける。

「もう、なにか報告することはないか？」

すでに大部分の品については、一通り報告を受けている。

半ばもう報告はないと決めつけていたアウラであったが、ふと衣装ケースを開いている兵士の方に視線を向けると、その男はあから

さまにビクツと身体を震わせ、なにやら素早く手に持っていた物をケースの中に戻そうとする。

「待て！ 貴様、今何を隠した！？ 動くなっ、ゆっくりとその右手をケースから出せ！」

見咎めたアウラは、鋭い声を上げる。

（今の動きはなんだ？ 婿殿の持ち物に毒か何かを忍ばせたのか！？）

厳選に厳選を重ねて、この場に集めたはずの近衛兵士の中に、裏切り者がいたのか？

アウラは厳しい、苛烈な視線で、不審な兵士を射貫く。

「へ、陛下！ 私は決してやましいことは……！」

「言い訳はきかん！ 黙って右手を出せと言っている」

驚いた様子で弁明を始める兵士に、アウラは鋭く叱責の声を飛ばした。

「はっ」

その様子に、これは逆らっても無駄であると観念したのか。兵士は、ゆっくりと衣装ケースの中から右手を引き出す。

兵士の右手には、アウラが見咎めた通り、なにやら目にも鮮やかな赤い布地が握られていた。

「それはなんだ？ こちらを向いて、両手でその布を広げて見せる」

「へ、陛下」

「広げる」

なおも、抵抗しようとする兵士に、アウラは迫力のある声でそう命じる。

周囲では、事の成り行きを見守る他の兵士達が、万が一の事態に備えて、壁に立てかけてあった斧槍や剣を取りだし、詰問を受ける兵士を遠巻きにしている。

侍女達もいったん作業を中止し、兵士達の背中に隠れるように壁際へと避難している。

「……………」

緊迫する空気。痛いほどの沈黙。誰かがゴクリと、緊張で唾を飲む音が聞こえる。

そんな中、なにか大切なモノを諦めたように、その兵士は一つ大きな溜息をつくくと、右手に持っていたその布を、女王の前で大きく広げて見せた。

それは、薄手の赤い「ネグリジエ」だった。無論、女物である。

「……………」

アウラは、その赤い布地越しに、横を向く兵士の顔をマジマジと見た。『布地越し』である。布地を顔の前に掲げる兵士の表情が、アウラの側から透けて見えるのだ。

身体を他者の視線から護るといふ機能は、全く期待できない服である。

アウラは無言のまま、その赤いスケスケネグリジエを凝視し続けた後、兵士に問いかけた。

「その服は、婿殿の衣装ケースに入っていたのか？」

忠誠を誓った女王陛下に嘘をつくわけにいかない近衛兵士は、ごく短く素直に答える。

「……はい」

「……」

弛緩する空気。痛々しい沈黙。誰かがゴクリと、性的興奮で唾を飲む音が聞こえる。

そんな中、最初は俯いてずっと何かを堪えていたアウラが、ついに我慢の限界を超え、沈黙の空間に笑い声を響かせる。

「クツクツク……。そうか、そうであったか。いや、すまぬ。これは私の邪推であった」

兵士を疑った女王は、そう自らの非を認め、兵士に謝罪のことを述べた。

「いえ、これも責務です」

兵士としてはその言葉を返すしかない。冷静に考えてみれば、つつさに女王の目から何かを隠そうとしたのだ。疑われるのも無理はない。

とんだ災難である。

女王の伴侶の荷物の中から、明らかに女物としか思えない、やたらとエッチな服を見つけてしまったのだ。

その服の持ち主は誰で、その持ち主はその服を誰に送って、どうしてもらいたいのか。考えるまでもなく、はつきりと分かってしまふ。

「疑われるような言動を取った軽率な振る舞い。誠に申し訳ありません」

エッチなネグリジエを右手に持ったまま、神妙に頭を下げる兵士の様子に、アウラの笑いのツボは刺激されっぱなしだ。

「よい、気にするな。先にも言ったとおり、これは私の邪推だ。忘れてくれ。しかし、それにしても、そうか。婿殿の荷物に、そのような代物が、なあ。……クククッ」

肩を震わせてなおも笑い続けるアウラは、笑いすぎで目尻に溜まった涙を指で拭い、呟く。

「それにしても、婿殿も『男』よのう」と。

『スケスケネグリジエ』。それは、善治郎が一世一代の大勝負のつもりで送る『結婚指輪』も霞む、そんな恐れのある素晴らしいプレゼントであった。

第二章 2【婚姻の義、そして初夜】

山井善治郎が異世界に二度目の転移を果たしてから、十五日後。カープア王国では、女王アウラ・カープアと、百五十年前異世界に逃げた王族の子孫、ゼンジロウ・ヤマイトの『婚姻の儀』が執り行われる手はずとなっていた。

これは、異常なくらいに早い日程である。

準備自体は、善治郎が一ヶ月前にYESの返答をした時点から、整えていたのだろうが、それにしても一ヶ月と十五日、わずか四十五日だ。

現役国王の『婚姻の儀』の準備期間としては、異例の短さと言えるだろう。通常であれば、一年くらい時間を掛けて、国内外の王族貴族に通達を出し、国威を示すためにも最大級の贅をこらした式とするものだ。

それをこのような短時間で結婚までこぎ着けようとした理由は、「下手な横やりを入れられたくない」というアウラサイドの思惑にある。

なにせ、カープア王国では初めてとなる、現役女王の結婚である。前例がないぶん、いちゃもんをつける気になれば、いくらでもつけられる。

女王の結婚が権力構造を複雑にするのは間違いない事実だし、悪い事に善治郎は「アウラ以外の女」と子をなしても、次の世代に『時空魔法』を継承可能なほどに濃い王族の血を保有している。

そのため、アウラは善治郎の具体的な血の濃さが、対外的に広まる前に、強引に結婚まで話を持っていく必要性を感じていたのだ。た。

カープア王国で、王族もしくは、それに準ずる高位貴族の『婚姻の儀』の時だけ使用される『竜王の間』。

その広く荘厳な広間に、多くの高位貴族が集い、神妙な表情で式の進行を見守っていた。

『婚姻の儀』の主役は二人。

新婦であるアウラは、ノースリーブの白いドレスを纏っている。スカートはフレア状にはなっても裾を引きずるほど長くなかったり、レース飾りがない代わりに摘んだばかりの白い生花が縫い込まれていたりと、細かな違いはあるものの、そのドレスは地球でも「ウェディングドレス」として通用しそうな作りである。

(そういえば、日本の白無垢も、西洋のウェディングドレスも、色が白这件事情では共通しているよな)

花嫁衣装に白が尊ばれるというのは、国境どころか世界すら超える共通認識なのだろうか？ 左右から突き刺さる好奇の視線を少しでも忘れようと、そんなことを考える善治郎の左腕に、ドレス姿のアウラがそつと右手を添える。

新郎である善治郎の服装は、転移してきたときに着ていた一張羅のスーツだ。

贅をこらしたウェディングドレスを着て、王権を示す王冠を被ったアウラの隣に立つと、少々見窄らしく見える格好だが、これには致し方ない理由がある。

『家庭の長は男』という常識が骨の随までしみこんでいるこの国で、現役女王の結婚という前例のない式を執り行うのだ。

夫となる善治郎の服装、式場での振る舞いについては、文字通り諸説紛々飛び交い、はっきり言えば決まりようがなかった。

カープア王国の風趣に会わせれば、新郎である善治郎は、新婦であるアウラよりも威厳を示す服装が求められる。しかし、新婦であるアウラは現役女王であるため、王冠を被って王権を示した形で『婚姻の儀』を迎える必要がある。

いかに夫とはいえ、女王より威厳のある格好をすれば、王権の絶対性を揺るがし兼ねない。かといって新郎が新婦より、威厳のない服装で出席すれば、「王族が国の伝統をないがしろにした」と、非難する者が出てくる。

結局、アウラは善治郎が異世界の生まれであることを利用して、「新郎の服装は新郎の世界の常識に合わせる」という「夫を立てる」理由で、この問題をうやむやにしているのである。

善治郎が着ているスーツは、若者であれば冠婚葬祭に出席しても問題の無いものではあるが、間違っても『新郎』が着る代物ではない。もつとも、そんな事は善治郎本人しか分からないのだから、ここは善治郎が口を噤んでいれば、四方丸く収まる話である。

出席した国内外の貴族達が、主に視線を向けるのは、やはり見慣れたアウラ女王ではなく、初めてお目にかかるその夫となる男だ。

(ほう、あれが)

(確かに、なかなかの魔力をまっておりますな)

(どうやら、王家の血筋の継承には、十分そうですな)

(問題は、そのお人柄ですが)

(なんでも、後宮に引きこもりっぱかりで、ほとんど姿を現さないのだとか)

(つまり、アウラ様にとって都合の良い、伴侶である?)

(さあ、それは、どうでしょう)

(せめて、嗜好の一端だけでも知ることができれば、お近づきになるきっかけとなるのですが)

(これは噂ですが、新郎殿の好みは赤いスケスケの……)

善治郎は、周りから突き刺さる視線を無視するように、必死に意識を左腕に感じるアウラの体温だけに集中し、ガチガチに固まった足取りで前へ進む。

(まずい、緊張で足の感覚がない……!)

自分が今、足の長い絨毯の上を歩いているのか、大理石作りの床の上を歩いているのか、その区別すら付かない状態だ。

ただ、真っ直ぐ歩くという行為が、これほど難しいとは思わなかった。

(やばい、転ぶ。絶対に転ぶツ!)

顔を引きつらせ、冷や汗を流す善治郎であったが、その危機は隣に立つ妻となる女が回避してくれた。

(あっ!?)

バランスを崩しかけている善治郎の様子に気づいたアウラは、善治郎の左腕に右手で掴まっている振りをして、逆にガッチリと善治郎の腕を下から押さえ、転ばないようにバランスを取ってくれる。

(た、助かった……)

アウラは、生まれたときから直系の王族として、衆目に曝されて生きていた現役の女王。一方自分は、この年まで平々凡々に生きてきた、一介のサラリーマン。

このような場に、アウラが慣れていて、自分が慣れていないのは当然のことなのだが、流石に真っ直ぐ歩くという行為まで、嫁さんに助けて貰っては、ちょっと情けない気分になる。

だが、そうやって思考が内側に向いたのが功を奏したようだ。考え事をしている間に、一時的に周囲の視線を忘れた善治郎は、どうにか必要最低限のバランス感覚と歩行能力を取り戻す。

やがて、初老の神官が待つ壇上へと上がった善治郎とアウラは、足を止めると神官から誓いと祝福の言葉を授かる。

「数多の精霊の祝福が、二人の未来にあらんことを。たとえ、その未来に七難八苦があろうとも、祖霊の声に耳を傾け、夫はその背に妻を護り、妻はその背に手を添え支え……」

神官からのありがたい言葉が、延々と続く。

この手の『祝福の言葉』というのも、異世界でもそう変わらないものようだ。

魔法が存在する世界なのだから、ひよっとして『祝福の言葉』にも本当に力があるのではないか、と聞いてみたが、どうやらそんなことはないらしい。

緊張でろくに神官の言葉も聞き取れない善治郎を置き去りに、『婚姻の儀』は恙なく進行していった。

その日の夜。

「ふう、どうにか終わった……」

「フフ、流石に疲れたようだな、婿殿。まあ、私も同様だが」

後宮の一室で、善治郎とアウラはテーブルを挟んで向かい合うソファーに腰掛け、互いの労苦を労い合っていた。

三時間に及ぶ『婚姻の儀』の後、さらに善治郎とアウラは二時間を超える『お披露目の儀』と呼ばれる、式に主役として参加してきたのだ。

この手の儀式になれていない善治郎はもちろん、善治郎のフォロ

ーにまで気を配っていたアウラも、十分に疲労困憊している。すでに、入浴を済ませている二人は非常にラフな服装に着替えている。

アウラは、腰まで届くような深いスリットの入った赤いドレス姿で、善治郎に至っては、向こうの世界から持ってきた、白地にブルーストライプのパジャマ姿だ。

まあ、すでに婚姻を済ませ、この後初夜を迎えるのだから、そのような格好を晒しあうことに問題はないのだが。

正面座るアウラが、スリットから除く足を組み直すたび、善治郎はこの後ベッドで行う行為について想像せずにはいられない。

今夜、ついに、善治郎は、今日の前に座っているグラマラスで妖艶な美女を、その両腕に納めるのだ。

(やばい。興奮しすぎて、自分でも興奮してるんだか、緊張してるんだか、分からなくなってきた)

「あ、暑いですね。アウラさんも何か飲みますか？」

善治郎は緊張を隠すようにそう言って、席を立つ。

「ああ、せっかくだから、頂こうか」

「はい。それじゃ、ワインを空けましょう。赤は持ってきたときに割れちゃいましたけど、白とロゼは無事でしたからね」

善治郎は、部屋の隅で低いうなり声を上げている冷蔵庫からワインを一本取り出すと、グラス二つを探しだし、結婚したばかりの妻が待つ、ソファアールへと戻ってくる。

(まずいなあ、自慢じゃないけど、彼女なんて大学二年の時以来だからなあ。どうやって雰囲気盛り上げればいいか、わかんねえや)

正確には、善治郎の女性歴は「大学二年から三年にかけての一年ちょっと間、一人の女と付き合ったことがある」だけである。おかげで、童貞でも彼女いない歴イコール年齢でもないが、実感としては、自分の女関係の経験値は、童貞の頃と大差ないと思っている。

「はい、どうぞ」

善治郎は、二つのワイングラスに白ワインを注ぐと、グラスの一つをアウラの前へをおく。

そして、テーブル向かいのソファアへと戻ろうとしたのだが、そこにアウラが声を掛ける。

「ゼンジロウ殿。よかったら、そっちではなく、ここに座らぬか」

そう言ってアウラは、自分が座っているソファアの隣をポンポンと叩いた。

意表を突かれた善治郎は、自分のワイングラスを手に持ったまま、しどろもどろに答える。

「え？ いや、ですが、それは……」

「良いではないか。今日より私と貴方は、真の夫婦となったのだ。身を寄せ合うことに、誰憚ることがあるう」

そうまで言われると尻込みするのも、なにやら間違っている気がする。

善治郎は頷くと、

「分かりました。では、失礼します」

と断り、アウラの隣に腰を下ろした。

善治郎の太股と、アウラの太股が隣り合う形でぴったりとくつき合う。

「……………」

「……………」

(しまった。いくら何でも近すぎた)

大の大人が三人そろって座ってもまだ余裕のある長いすに、足と足をくつつけるように腰を下ろしたのだ。ちょっと気まずいが、ここからあえて離れるのも、変に意識しているようで、逆に気が引ける。

先ほど、アウラも言ったとおり、善治郎とアウラは、すでに夫婦なのだ。二人だけの空間で、身体を重ねる事を忌避する理由はない。

(どうしよう、なんか言わねえと……………！)

焦る善治郎が、冷たい白ワインをすすりながら、話題を探している間に、アウラのほうからいつも通りの落ち着いた声で話しかけてくる。

「それにしても、婿殿の持ち込んだ「電気製品」というのは、本当に見事なものだな。この明かり、この冷却力。まるで、シャロワ・ジリベール双王国にいるような気分になってくる」

そうやってアウラは、室内を明るく照らす、LEDフロアスタンドライトに目を向ける。

LEDフロアスタンドライトとは、電球部分にLEDライトを使用した、人の背丈ほどある大型の電気スタンドの事である。

善治郎は、一台に付き、三つのLED電球を使うフロアスタンドライトを、合わせて八つこの世界に持ち込んでいた。

三×八で、最大二十四のLED電球を同時に灯すことができるのだ。

全開で明かりを灯せば、後宮のこの広い室内も、現代日本の夜くらいには明るく照らすことが出来るだろう。無論、真上から照らす訳ではないないし、光源も複数に渡る分、光のムラが乗じるのは否めないが。

今明かりを灯しているのは、雰囲気重視して、ソファー近くの一台だけだ。

善治郎は、先に話題を振ってくれたアウラの気遣いに苦笑しながら、

「ええ、頑張りましたから。こっちに來てから最初の十日間は、ほとんど発電機の設置に掛かりきりでしたね」

そういつて、少し胸を張る。

事実、この世界にやってきてから今日まで、善治郎が行った唯一の作業が、後宮中庭への水力発電機設置と、そこからこの部屋に電源コードを引く工事であったと言っても良い。

無論、発電機を実際に持ち上げたり、王宮の外を流れる水堀から木製の水橋で中庭まで水を引いたり、後宮の外壁の石をずらし、コ

ードを通す穴を空けたりしたのは、アウラが手配した兵士達である。

しかし、連日三十五度を超える（体感ではない。実際に持ち込んだ温度計が示した値だ）、日本で言えば真夏日の中、水力発電機が無事稼働するよう、設計図を引いて、作業する者達に理解をさせ、指示を出したのは、善治郎だ。

アウラがあえて自分を結婚相手に選んだ理由を考えれば、このよくな多数の人間と接触し、リーダーシップを発揮するようなまねは慎むべきだとは、わかっているが、こればかりはしょうがない。人任せで成功する作業ではないのだから。

アウラとの結婚を決意してから、地球で過ごした一月の内、もっとも多くの時間をこの、水力発電機の設置方法を身につけることに費やしたかいがあつたというものだ。

おかげでこの異世界の後宮で、冷蔵庫も、LEDライトも、パソコンも、今は無事に稼働している。

「確かに、苦勞に見合うだけの価値はあるようだ。うむ、冷たい酒のいうのも、存外悪くない」

アウラは、グラスに入った白ワインを一気に飲み干し、音も立てずグラスをテーブルに戻す。

「フフッ」

善治郎の緊張具合を知ってか知らずか、アウラは隣に座る善治郎の右腕を両手でそつと胸の谷間に抱き取ると、コテリと頭を善治郎の肩に預けた。

右腕を包み込む、柔らかな肉の谷間。右肩から首筋にかかる熱く

湿った吐息。アウラの赤い頭髮から漂う、柑橘系の良い香りは、善治郎が持ち込んだシャンプーの匂いだ。

その柔らかな感触と、甘い香りに、善治郎は頭がくらくらとしてくる。

「あ、ぐ。あ、あ、そう、そう言えば、先ほど、言っていた『双王国』というのは何なのですか？ その国には、このような仕掛けがあるのですか？」

焦って口数を増やす婿殿に、アウラはクツクツと笑いながら、あえて善治郎の思惑にのるように答える。

「ああ、シャロワ・ジリベル双王国。『付与魔術』の血統魔術を受け継ぐ王家を頂点の一つにいたく、大陸中央部の大国だ。世界で唯一『魔道具』の生産が可能なその国の王宮は、夜は『光の宝玉』で明かりを灯し、夏は『風の宝玉』で涼を取り、冬は『火の宝玉』で暖を取る。

まあ、そういった大陸の情勢は、いずれ覚えて頂くとして。ゼンジロウ殿？ 先ほどから、私は一つ不満があるのだが、な？」

アウラは急に両手で善治郎の両頬を固定すると、クツと善治郎の首を自分の方に向けさせる。

「ななな、な、何でしょうか、アウラさん？」

ろくに抵抗も出来なかった善治郎は、目の焦点が合わなくらいの至近距離にアウラの顔を見て、盛大にどもりながら返答を返す。

「それだ。その、他人行儀名しやべり方と、さん付けの呼び方。そ

るそろ、どうにかならぬだろうか？ その口調は、ゼンジロウ殿本来の物ではあるまい？ 昨日まではともかく、今日から私たちは、夫婦となったのだ。

急に態度を変えろと言うのも無茶かも知れぬが、こういったことは形から入った関係が、やがて身についてくることもあるという。どうであろうか。貴方本来の口調で話しかけてはくれぬか？」

確かに、敬語に近い口調を意識的にしていた善治郎は、少し冷静を取り戻し、答える。

「でも、それを言えばアウラ、さんだって」

「私は常にこの口調だ。特に、畏まっているわけではない。だが、そうだな。確かに、夫を呼ぶときにいちいち『ゼンジロウ殿』と呼ぶのは、少々他人行儀ではあるな。

私も、貴方のことをゼンジロウと呼び捨てにしても良いだろうか？」

ふわり笑い、アウラはそうねだるように問いかける。

「あ、うん、それは、いいよ」

「有り難う、ゼンジロウ」

早速アウラは、善治郎の名前を呼ぶ。

「ささ、貴方も私の名前を呼んでくれまいか、ゼンジロウ」

まだ、了承もしていないはずなのに、交換条件のようにそう強引に自分の意思を押し通す辺り、流石に交渉になれている女王様といったところか。

善治郎は、その勢いに押されるようにして答える。

「あ、アウラ……」と。

「ゼンジロウ」

「アウラ」

息が掛かるほどの至近距離で、顔と顔を寄せ合い互いの名を呼び合う男女。

「……………」

「……………」

元々、今夜結ばれる覚悟を決めていた男と女だ。

相手の唇に、己の唇を近づけていったのは、どちらが先立っただろうか？

「……………」

「……………」

どちらかともなく、まるでそうすることが自然であると最初から理解していたかのように、二人の唇が重なり合う。同時に、善治郎の両腕は、アウラの背中を強く抱きしめ、アウラの両腕は甘えるよ

うに善治郎の首に絡みつく。

「ん、ん、ンンン……」

「アア……ムウ……ンン」

愛おしげに抱き合い、狂おしげに唇を会わせる。

「……プハア」

「……フウ」

長く、情熱的な口づけをやめたのも、二人ほぼ同時だった。

唇を離れたアウラは、善治郎の肩に顎を乗せ、より一層強く抱きつくくと、善治郎の耳を擦るように小声で囁く。

「先に寝室に行く。女には準備がある故、ゆっくり百を数えた後、寝室に来てくれ」

「え？ あ……」

そう言い残し、アウラは善治郎の腕の中から抜け出すと、ソファに立つ。

「あ、アウラ」

反射的に手を伸ばす善治郎に、アウラは、首だけこちらに向けと妖艶な笑みを浮かべ、

「焦らずとも、逃げはせぬ。百を数えて、それからだ。な？」

そう言い残し、隣の寝室へと姿をくまますのだった。

「……………ふう」

人足先に寝室へ入ったアウラは、後ろ手でドアを閉めると、まず一つ大きく深呼吸をした。それから、真っ直ぐベッドの横に向かうと、そこに立ててある寝室用のLEDフロアスタンドのスイッチを入れる。善治郎から使いからは習っていたが、本当に感嘆だ。パチンと音がなった次の瞬間には、真っ暗な寝室に白い光が満ちている。明るくなつた寝室で、アウラは今更ながら、先ほどまでの自分の言動を思い返し、頬を紅潮させ、恥じらいでその豊満な身体をくねらせた。

「こ、これは中々くるものがあるな。世の夫婦は、毎夜毎夜、あの様な嬉し恥ずかしい行為を行っているのか？」

アウラは、赤いナイトドレスを着た自分の身体を、自らの両腕で抱きしめる。

心臓がバクバクわれ鐘のようになり、全身の肌という肌が、熱病にでもかかったかのように熱くなっている。

「よ、よもや、ゼンジロウ殿に気づかれたのではあるまいない、いや、ああして肌を合わせたのだ。気づかれぬはずはあるまい。…ど、どうすればよいのだ？」

初夜を期待して、心臓を高鳴らせたり、肌を熱くしたり。はしたない女だと思われたらどうか？

自分から言い出しておいて、今「ゼンジロウ殿」とまた敬称をつけている事に気づかないほど、アウラは動転していた。

まあ、それも無理はあるまい。生きてきた年数と、命の掛かった修羅場を潜った数は善治郎に勝るアウラであるが、肝心の異性との経験は「経験人数一人」の善治郎より格下なのである。すなわち、「経験人数ゼロ人」。正真正銘の生娘だ。

より多くの種をまくことが時には求められる男の王族と違い、確実によりよい血筋の種を腹に受けることを求められる女の王族は、原則、貞操観念がかなりしっかりしている。

そのため、未婚の女王族は、イコール未経験者であると考えて、だいたい間違いない。

カープア王国の文化では、男女の仲は男がエスコートするのが一般的とされている。素直にその身を善治郎に委ねても全く問題はなはずなのだが、この期に及んでも余裕があるふりをしたがるのは、アウラの女王としての矜持か、はたまた年上としての自負心か。

ともあれ、赤いナイトドレスを脱ぎ去り、シヨーツ一枚になったアウラは、キングサイズのベッドに潜り込み、静かにその時を待つ。

やがて、聞こえてくるドアをノックする音。

「ッ！」

『ねえ、もう入っても良いかな？』

ドア越しに聞こえてくる夫の声に、アウラはもう一度深呼吸をすると、いつも通りの平静を装った声で返事をかえす。

「うむ。よいぞ、入ってきてくれ。歓迎しよう、ゼンジロウ」

「お、おじゃまします。ッ！」

そう言っただけで恐る恐る入ってきた善治郎は、スタンドライトに照らし出されるアウラの姿を目の当たりにして、思わず息を呑む。

足を組んでベッドの上に横たえた下半身は薄い上掛けで覆われているが、そのボディラインが透けてみる。

大きな枕を背にして起こした上半身は、頭から垂れ下がる赤い頭髪でかろうじて先端部分を隠しているだけで、その小麦色をした柔らかな双乳は、ほとんど隠れず、あらわになっている。

「おや、いつまでそこで惚けているつもりだ、ゼンジロウ。遠慮は要らぬ。ほら、私の横に来てくれ。熱い一夜をともに過ごそうぞ」

そう妖艶な笑みで、善治郎を誘うアウラの様子からは、先ほどまでの可愛らしい動揺の影は欠片も見受けられなかった。

第二章3【女王夫婦の朝の風景】

枕元においたある携帯電話が、無機質な電子音を奏でる。

「ん……ンン？」

半ば夢うつつのまま、善治郎は右手を伸ばし、手探りで探し当てた携帯電話のモーニングコールを止めると、そのまま顔の前に持ってきて時計部分を見る。

5 : 30 AM

現代日本に生きるサラリーマンの起床時間と比較すれば随分早い時間帯だが、この世界の基準ではこれでも遅い部類に入る。

照明が、自然の火以外にほぼ存在していない文明では、太陽の出ている時間帯は貴重だ。

一般人は、日の出の時刻である四時過ぎには起き出すのが一般的であり、こんな時刻までゆっくりと寝ているのは、それだけでずいぶんと贅沢な時間の使い方と言える。

しかし、善治郎に限って言えば、本来こんな時間にわざわざ目覚ましをセットしてまで目を醒ます必要はない。

善治郎には、LEDスタンドライトという夜を明るく照らす手段があるうえ、昼に急いでやらなければならない仕事もない身なのだ。

そんな善治郎があえてサラリーマン時代から愛用している携帯電話の目覚まし機能を使ってまで、早起きした理由はただ一つ。

昨夜、無事初夜を迎えた妻　アウラとすれ違いにならないためである。

一緒に床に入り、目が醒めた時にはすでに嫁さんは仕事にいった後だった。というのは、流石にちょっと寂しいものがある。

携帯電話を元あつた場所に戻した善治郎が、ベッドに寝そべつたまま身体を左に向けると、そこには無防備な寝顔を晒し、スースーと心地よい寝息を立てるアウラの姿があつた。

昨夜は行為に及んだ後、濡らしたタオルで身体を拭いただけでそのまま寝たため、善治郎もアウラも一糸まとわぬ裸である。

一応、薄手の毛布のような掛け布団を二人仲良く被っているが、その薄手の掛け布団すら鬱陶しく思えるほど、カープア王国の夜は蒸し暑い。

「……………」

善治郎は半ば無意識のまま、隣で寝る妻の背中に手を回す。

横向きに寝たまま、抱き寄せるようにアウラの背中に右手を回した善治郎は、そのままあやすようにアウラの背中をトントンと手の平で軽く叩いた。

胸元に掛かるアウラの寝息と、手の平に感じる肌触りが、善治郎に昨夜の行為を思い起こさせる。

「アウラ……………」

確かに自分は、昨晚この女と肌を合わせたのだ。

その実感が、急速にアウラへの愛情を育てる。アウラの裸の乳房

が、自分の胸板にくっつきように抱き寄せ、善治郎は何度も何度も愛おしげに、アウラの背中や赤い頭髮に撫でる。

そんな事をすれば、アウラが目目を醒ますのも必然である。

「ん……アア……？ ゼンジロウ、か」

目を醒ましたアウラは、抱き寄せる善治郎の腕に身を任せ、素直に裸身を善治郎に密着させると、甘える猫のように、善治郎の首の辺りに顔を擦りつけ、喉を鳴らす。

（あー、なんだか、猫っていうより、雌ライオンとか雌虎とか、そういう猫科の大型肉食獣を手なずけた気分だなあ）

首元を感じるくすぐったくて心地よい感触に眼を細めた善治郎は、そんな事を考えつつ、アウラを抱きしめる力を強める。

ちまたではよく女を猫に例えることがあるが、アウラの迫力はそんな可愛らしい生き物には、収まらない。雌豹という例えでもまだ足りない。獅子や虎、そういった食物連鎖の頂点に君臨するような、覇者の秀囲気を漂わせている。

しばしの間、互いの体温を実感し合うように、裸のまま抱き合っていた二人であったが、やがてアウラは善治郎の腕の中からスルリと抜け出すと、そのままベッドの外に降りた。

実るべきところは豊かに実り、締まるべきところは締まっている魅惑的な裸身を惜しげなくさらしながら、アウラはベッドの脇に用意してある水桶にタオルを浸し、身体を拭う。

「ふう……」

一応、行為を済ませた後、寝る前に身体を拭いたとはいっても、この熱帯夜で男女が寄り添って一夜を過ごせば、気持ち悪くなるくらいには汗も掻く。

「ああ、終わったら貸してくれ。俺も身体を拭きたい」

アウラと比べると随分と色白な善治郎も、そう言って裸のままベツドから降りると、身体を拭いている妻に近づく。

「ああ、良いとも。なんだったら、私が拭いて差し上げようか？
旦那様」

そうイタズラっぽく笑い返す新妻の誘惑に、一瞬負けそうになった善治郎であったが、頭を振って答える。

「それは凄く魅力的だけど、魅力的すぎて中途半端で済ませられなくなりそうだ。朝から最後まで付き合ってくれるんなら、もう飛びつくんだけど」

「それは残念だ。生憎仕事を立て込んでいて、そこまで時間の余裕がない。すまないが、今夜までまってくれ」

手早く身体を拭き終えたアウラは、水桶にタオルを浸しきつく絞ると、その絞ったタオルを善治郎にほうり投げる。

「了解、滅茶苦茶楽しみにしてる。そう言えば、今日はこの後どうなるのかな？ 食事とかは」

絞ったタオルで身体を拭きながら、善治郎はふと思い出したように、服を着込んでいているアウラにそう尋ねる。

アウラは、

「ああ、朝食と昼食に後宮まで足を伸ばす余裕はなさそうだ。夕食時には、うまくすれば後宮に来られるかもしれない。一緒に食事を摂りたいと言うのであれば、ゼンジロウが王宮の方に来れば、一応可能だが」

と言って、少し探るような視線で善治郎の方を見る。

（王宮で食事って、アウラ以外の貴族達と鉢合わせになる可能性が結構ありそうだな。何も知らない今の俺がへたにそういう奴等と会話を交わしたら、予想もしない方向からアウラの足を引っ張りかねないよな）

あまりにも堂々としたその振る舞いから、つい忘れがちだが、男系社会のこの国では、女王であるアウラの権力は、決して不動のものではないのだ。万が一にも夫である善治郎の口から、アウラへの不満や批判と捉えられるような言葉が発せられたら、それだけでアウラには十分なダメージとなりうる。

（考え過ぎかも知れないけど、用心に越したことはないか）

「いや、王宮までわざわざ足を伸ばすのも面倒くさいし、ここでダラダラ適当に過ごしてるわ。あ、でも、近いうちにこの国の常識とかマナーとか、恥を搔かない程度に覚えたいな。外に出る機会が全くないとも限らないし」

それは、善治郎からの「アウラの足を引っ張るような行動は可能な限り差し控える」という宣言であった。

善治郎の言わんとしていることを的確に読みとったアウラは、愛おしげに笑い返すと、

「そうか。それならば、何としても夕食までには職務をおえて見せよう。夜まで、一人で寂しいだろうが、我慢してくれ。常識やマナーについては、私が直接教えてやればいいのだが、そこまで時間はないな……分かった。適当な人間を見繕っておく」

そう、軽く請けおった。

「悪いな、世話をかける」

「気にするな。不便を強いているのはこちらの方だ」

やがて、服を着終えたアウラと善治郎は、どちらともなく歩み寄る。

「それじゃあ、行ってくる」

「ああ、行ってらっしゃい」

これじゃホントに男女が逆だ。そう思いつつも善治郎は、アウラと軽く口づけをかわし、女王としての仕事に向かう妻を、笑顔で見送ったのだった。

「さて、それでは今日は何をするか」

仕事に向かうアウラを見送った善治郎は、元の世界から持ち込んだTシャツとトランクスの上から、この世界の民族衣装らしき白いタックのない太めのズボンを履いた格好で、茶の間のソファアーに身体を横たえ、寛いでいた。

昨日までは発電機の設置やら、結婚式の準備やらで、なんだかんだと忙しい日々をおくっていた。

本格的な「何もしないダラダラ生活」は、今日のこの時から始まる。

いずれは暇を持て余すようになるのかも知れないが、今のところはやりたいことが山ほどある。

サラリーマン時代に、取るだけ取って、全く見る事が出来なかったDVD。買うだけ買って、封も開けていないゲームソフト。

大学時代からひいきにしていたバンドや歌手の曲も、ネットのダウンロード販売で半ば惰性で買い続けていたが、聞くのは通勤時の電車の中だけ。

買うだけ買って、まだ一度も聞いていない曲も多数ある。

「やっぱり最初は、取り溜めたテレビ番組かな。あ、でも今見始めたら途中で朝食の時間になるか」

朝食の時間になれば、後宮に配属されている侍女が声を掛けてくれることになっている。

一応、善治郎はこの後宮の主であるため、その気になればその日の気分で食事の時間をずらすことも可能ではあるのだが、それはもう気安く言い出せることではない。

なにせ、この世界には電子レンジはおるか、ガスコンロや水道すらないのだ。食事の時間を早めると言うことは、その分下働きの間が短い時間で水くみを終えなければならぬということだし、食事の時間を遅くすということは、その時間に合わせてもう一度作り直させることを意味する。

現代日本のように、できあがった料理を取っておいて、レンジでチンするような簡単な物ではない。

「所詮は、入り婿の分際だからなあ。下働きの人達の不評を買うのは危険すぎるわ。ええと、持ち込んだ食料はどれくらい残ってるかな？」

何となく小腹が空いた気がする善治郎は、冷蔵庫を開けて中をのぞき込む。

冷蔵庫の中には、この世界の果物や酒と一緒に、善治郎が日本から持ち込んだ酒や食料品も入っている。

もつとも、善治郎が持ち込んだ食料品は、リュックに詰め込んでいた、チョコ、乾パン、ビスケットの類と、後は学生の頃から愛用している粒タイプのキシリトールガムくらいだ。

「チョコは、ちょっと勿体ないかなあ。アウラに聞いた感じじゃ、カカオ自体知らないみたいだもんなあ。こっちで入手できる可能性はゼロに近い。幸い砂糖は豊富にあるみたいだけど、かなり雑な黒砂糖なんだよなあ」

恐らく、サトウキビかそれに相当する糖分の多い植物のエキスを絞って越したただけの代物なのだろう。この世界の砂糖は、日本の上

白糖と比べると、独特の風味がある。

一応、持ち込んだパソコンには、ケーキやクッキー、プリンなどの作り方を写真入りで説明しているネットのホームページをオフライン閲覧できるようにしてあるのだが、この世界の砂糖や小麦粉で果たして、まともな物が出来るのか、少々疑問である。

そもそも、ハンドミキサーも電子レンジも善治郎はこっちに持ち込んでいないのだから、現代日本のような手軽さでお菓子作りは出来ないだろう。

善治郎としては、一ヶ月の準備期間で可能な限り、必要な物を揃えたつもりでいたのだが、いざこうして異世界生活をスタートさせてみると、「なぜ、俺はあれを持ってこなかったんだ！」と後悔する物が、多数出てきている。

その最たる物が、「窓ガラス」だ。

善治郎が木戸を開け放ち、外気が容赦なく吹き込む窓と、その下にひとまとめにしてあるエアコンとその取り付けセットに視線を向けて、うつろな声を上げた。

「完璧、盲点だったよなあ。日本じゃ、建物の中は密閉された空間で当たり前だから、考えてもみなかったや……」

窓ガラスがないこの部屋に、もしエアコンを取り付けたとしても、善治郎が臨むような快適な室温は保たれないだろう。窓を全開にした状態では、エアコンの恩恵も半減などというものではない。

かといって、真昼間から木戸を閉め切って日光を遮り、LEDス

タンドライトで生活するというのは、流石に少々不健康すぎる。

「まあ、どのみちエアコンは設置に失敗する可能性の方がずっと高い訳だから、最初から無かったものとして諦めるかな」

少なくとも、窓ガラスの変わりになるような、光を通して熱気を遮断する何かを入手するまでは、エアコンの設置に力を注ぐ気にはなれない。

「はあ」

溜息をついた善治郎は、当面の間、エアコンと窓ガラスの問題については考えるのは辞めることにする。幸い、扇風機の前に氷の塊を置けば、局地的には思った以上に涼が取れることが分かっている。

「まあ、いいや。不景気なことばっかり考えててもしょうがないし、不便なら不便なりに楽しむことを考えよ」

善治郎は、そう割り切ったことを言うと、DVDを大量に納めてある収納バッグを開けて、今日見る番組を模索し始める。

「ええと、あの番組はどこまで見てたっけ？ ソーラーカーは、牛相撲やつてる島まで行ってたよな？ VS百人刑事鬼ごっこの第三回を見たのが最後か？」

善治郎は、食事を終えたらすぐにDVD鑑賞会に入れるよう、先に見るDVDの用意を済ませるのだった。

第二章4【野心家の元婚約者候補】

善治郎が扇風機で涼を取りながら、一人でDVD鑑賞会を楽しんでいる頃、その妻であるアウラは執務室で女王としての責務を果たしていた。

国のトップであるアウラの職務とは、その大半が会議と面談だ。今のカープア王国には政治のトップである宰相と、軍のトップである元帥がいないため、アウラは極めて多忙な日々を過ごしている。

会議や面談の間に生じる隙間時間は、提出されたる報告書に目を通すだけで過ぎ去っていく。

竜皮紙（走竜の革をなめして作った獣皮紙）の束を乱雑にめくり、目を通していたアウラに、傍らに立っていたファビオ秘書官が声を掛ける。

「陛下、そろそろ時間です」

細面の中年男に声を掛けられ、アウラは竜皮紙に落としていた目を上げる。

「ああ、もうか。次は誰だ？」

現代日本のように正確な時計がないぶん時間にはルーズなこの世界であるが、それでも王宮内では最小で一時間の四分の一 十五分刻みで時間を計るくらいには、時間に対して精度を持っている。

業務の大半が昼間の日が昇っている時間帯に済ませなければならぬ分、日中の女王は現代日本の政治家なみに忙しい。

「はい、次の面会予定者は、騎士団のプジョル・ギジェン將軍です」
秘書官の告げた名前に、アウラはあからさまに顔をしかめた。
それは、善治郎が召喚されるまで、アウラの婿としてももつとも有力視されていた二人のうちの一人名前である。

先の大戦では、若くして数々の武功を上げた有能な軍人であることは間違いないのだが、いかんせん野心が強すぎるため、女王の婿としては不的確な人物だとアウラは見ている。

手が届くところにあつた『女王の夫』という立場を、ギリギリで訳の分からない異世界人に奪われた野心家が、果たして何を言いに来たのか？

想像しただけでアウラは思わず溜息が漏れる。

「陛下、將軍級の軍人と、大臣級の文官は、国王に直言を申し出る権利を有しています。プジョル卿は自らが持つ正当な権利を行使しているに過ぎません」

冷静すぎる秘書官の言葉に、アウラは一層苛立ちを募らせる。それでも、理性ではファビオ秘書官の言葉が正論であることは理解している。

「分かっている。もう良いぞ、入れてくれ」

苛立ちを吐き出すように深呼吸した後、アウラはいつも通りの威厳のある表情と声でそう命ずる。

「はっ」

中年の秘書官は、アウラに一礼すると、待合室に続くドアへと向かい、正確な歩調でカツカツと歩いていった。

「アウラ陛下。まずは、改めて、お祝い申し上げます。ご結婚おめでとございます」

「ありがとう、プジヨル卿。お前にそう言ってもらえると、少し心が軽くなる。私とお前の間には、男女の縁はなかったようだが、主従の縁は今後も大事にしていきたいものだ」

「……はっ、勿体ないお言葉です」

王の執務室で、向かい会って座るアウラとプジヨルの会話は、白々しいまでの社交辞令から始まった。

プジヨル・ギジエンという男を簡単に言い表すのならば、それは『典型的な武人』という言葉になる。

女としては大柄なアウラと比べても頭一つ大きい体躯。掘りが深く、精悍な顔立ち。半袖の裾から覗く両腕には複数の傷痕が刻まれており、そのグローブのように大きな両手の平には、固く大きな剣ダコが見える。

善治郎とプジヨル。見た目の上ではどちらが、アウラの伴侶に相応しいかと聞けば、恐らく百人中百人がプジヨルと答えるだろう。

赤髪に小麦色の肌のアウラと、黒髪に褐色の肌のプジョルが並べば、視覚的には収まりがよい。身長も女としては長身のアウラと、男としても長身のプジョルでちょうど均整が取れている。

優れた武人であり、有能な將軍であり、先の大戦では若くして多くの武勲を上げた英雄。

女王の伴侶になり損なった英雄は、忠誠の対象である女王に向かい、単刀直入に言うのだった。

「して、陛下。ご存じかと思いますが、私には十歳年下の妹がいます。私と同程度の薄いものではありませんが、王家の血も引いており、魔力も高く、人格・教養も人前に出して恥ずかしくはない程度には整っております。

いかがでしょうか。王家の血を増やす意味でも、妹をゼンジロウ様の側室に加えて頂けないでしょうか」

「……………」

唐突で単刀直入な野心家の申し出に、アウラはキリキリと痛む頭を抱え込みたい衝動を、必死に堪えた。

これだ。このあからさますぎる野心があるから、この男はどれだけ武人として有能であっても、女王の伴侶としては極めて不適切だったのだ。

アウラ自身、夫の傀儡に甘んじる性格ではないため、もしアウラとプジョルが婚姻を結べば、カープア王国はかなり高い確率で、女王派と王配派に分かれ、内部分裂を起こしていたことだろう。

それにしても、結婚式を済ませたばかりの新妻に、いきなり側室の話を持ちかけるとは、配慮もへったくれもあつた話ではない。

アウラは、悠然とした表情を崩さず、問い返す。

「ふむ、興味深い話ではあるな。して、当人である妹自身は何と言っているのだ？」

「？ ギジエン家の家長は私ですが？」

アウラの問いに、プジヨルは心底不思議そうに首を傾げた。

女の婚姻先を決めるのは、家長の仕事。プジヨルはこの国の伝統に従った常識的な判断を下しているだけである。

むしろ、典型的な女王気質を保つたまま今の年まで生きてきたアウラが、カープア王国の常識から外れている。

とはいっても、大多数の男は、ある程度娘や妹の意思も考慮して嫁ぎ先を決めるもののだが、このプジヨルは、全面的に自分の都合だけで妹の嫁ぎ先を決める気であるようだ。そして、そうすることを自分の正当な権利であると、信じて疑っていない。

話の持つて行き方を間違えたことに気づいたアウラは、余裕のある微笑を浮かべたまま、話を次に続ける。

「そうか。だが、婿殿はこの世界に転移してきたばかりで、まだ心身に余裕がない。今のところ、私の相手だけで手一杯と仰せだ」

きっぱりとしたアウラの拒絶に、プジヨルはその鋭い目元をスッと細ませる。

「……それは、誠にゼンジロウ様ご自身のお言葉でしょうか？」

不敬とも取られかねない、女王の言を疑う配下の問いに、アウラは必要以上に胸を張って答える。

「無論だとも。まさか、疑っているのか？」

「いいえ。失礼しました。しかし、私も一人の王国貴族として、新たに主君となったゼンジロウ様にご挨拶に窺いたいというのは、率直な本音です。

私がそう言っていたと、ゼンジロウ様に『間違いなく』、伝えて頂けないでしょうか」

「……分かった。『一言一句違えることなく』、必ず婿殿の耳に入れるとしよう」

「お願いします」

最後にプジヨルは、右拳を左肩にそえる騎士風の礼をして、女王の執務室を後にした。

ドアの向こうに野心家の将軍が去ったことを確認して、アウラは大きく溜息をつく。

「まったく、自分の婚姻が失敗したら、次は妹を送りこむとはな。相変わらずの、剥きだしの野心。いっそ清々しいわ」

その言葉とは裏腹に、忌々しげに吐き捨てる女王に、それまで彫像のように立ち尽くしていたファビオ秘書官が、平坦な声で答える。

「しかし、プジョル將軍は率直である分、貴族全体の動きを予見するのにも、非常に役に立ちます。恐らく、同様の申し出が近日中に殺到することでしょう。それをさきほどのようなお言葉で断り続けければ、『陛下が、妻の身でありながら、自らの権力を守りたいが故に夫の自由をないがしろにしている』という噂が立つことは必然です」

相も変わらぬ単刀直入で耳に痛い秘書官の言に、アウラは顔をしかめて、反論する。

「後宮に閉じこもって出てこないのは、他ではない、嬪殿の意思だぞ。私は何も言っていない」

「はい。私は、存じております。あの方は、聡明で、今のところは善良で、表面上は陛下に極めて協力的ですから。しかし、そのような陛下とゼンジロウ様の関係すら、後宮に引きこもったままでは、王宮貴族には伝わらないのです」

いちいちもつともな秘書官の言葉に、アウラは溜息をつくしかない。

「となるとやはり、ある程度は嬪殿にも王宮に出て来て頂いて、直接嬪殿の口から、私との夫婦関係がうまくいっているとアピールして貰うしかない、か。」

「なんだか、嬪殿には迷惑ばかり掛けている気がするな」

あれだけ誠実に愛情を向けてくれる伴侶に、予定外の苦勞を押しつけるのは、少々気が引ける。

「なんだか本当に、自分が権力のため、夫の自由を束縛する悪女になった気分になる。」

だが、そんな女王の憂鬱など気にもとめない秘書官は、細面の鉄面皮をピクリとも動かさず、話し続ける。

「仕方がありません。実際、プジヨル將軍が仰った、『ゼンジロウ様が側室を持つ』という案は、王家の血の存続を考えれば、極めて妥当な提案ですから」

「まあ、それは確かに、な」

その言葉の正当性は、アウラとしても認めざるを得ない。

アウラと善治郎、一夫一妻のままでは、どれだけ熱烈に愛し合っても、生まれてくる子供の数には限りがある。まして、アウラは女王という激務の身。そうちよくちよく出産の為に、引きこもるわけにもいかない。

「実際、お前はどうか考えてる？ やはり、プジヨル將軍の申し出は受け入れるべきだと思うか？」

アウラは、ふと思いついたように、そう秘書官に問いかけた。

この中年の秘書官の冷徹なまでに効率だけを重視した意見は、全体の指針としては非常に参考になる。

アウラの問いに、ファビオ秘書官は珍しく少し肩をすくめると、

「私なりの意見はございますが、それは聞きようによっては王家への侮辱と取られかねないものです。陛下のお耳に入れてよいものなのか、判断が付きかねます」

そう、頭を下げた。

だが、アウラは取り合わず、ヒラヒラと手の平を振ると、続ける

ように促す。

「かまわん。元々、慇懃無礼が貴様の取り柄であろうが。怒ることはあっても、罰することはないから、気にせず話せ」

女王の許可を得た秘書官は、「かしこまりました」と一礼すると、話し始めた。

「まず、結論から申し上げますと、私はゼンジロウ様の側室にプジョル將軍の妹姫を入れる事には反対です」

「ほう？」

予想外の結論から入った秘書官の言葉に、アウラは興味を引かれたように身を乗り出す。

「ゼンジロウ様の側室に、貴重な王家の血を継ぐ貴族を入れる。そうすれば一見、次代の王族が増えて王家の未来が安泰になるように見えますが、実際には、次々代の事を考えれば袋小路です。」

なにせ、王家の血を色濃く引くものが全員、ゼンジロウ様の異母兄弟姉妹となるのですから」

「ああ、なるほど」

アウラは得心がいったように頷いた。確かにそうだ。いかに王家の血を引く者の人数を増やしても、その全員が一人の父を持つ異母兄弟姉妹では、次々代の婚姻政策が極めて困難になってしまう。

カープア王国では、異母兄妹、異父姉弟など婚姻は、禁止こそさ

れていないものの、あまり推奨もされてない。

「ですから、単純に王家の血の存続だけを考えるのでしたら、プジヨル將軍の妹姫は、陛下のもう一人の夫候補であった、マルケス家のラファエロ卿辺りに嫁いでいただくのが最善でしょう。」

また、同時にゼンジロウ様には、魔力に恵まれた女魔術師か、適当な貴族の娘を側室に迎え、血の薄い王家の分家を作って頂けたのなら、言うことはありません。ああ、無論、陛下とゼンジロウ様との間に、本流となる御子が生まれることが大前提です」

淡々と語るファビオ秘書官の言葉に、アウラは口元を引きつらせたような笑みを浮かべた。

「貴様に掛ければ、王家と貴族の婚姻政策も、まるで『走竜』の交配並の話になってしまつた」

女王の皮肉にも、細面の秘書官は全く動じない。

「ですから、最初に無礼を申し上げるとお断りしました。そもそもこれは『時空魔法』の継承者を存続させるという方向からだけ見た話です。婚姻には人心というものが絡みますし、下手にギジエン家とマルケス家のような有力貴族同士が婚姻で結ばされれば、王家にとって有力すぎる国内貴族が誕生するという弊害も生まれます」

「分かっている。それらの状況を見て、最終的に判断を下すのは私だ。……だが、いずれにせよ、婿殿を多少は貴族共の矢面に立てなければ、私への不審は増すばかり、か。」

ファビオ、婿殿が後宮に引きこもったまま、どれくらいの期間で

あれば、貴族達の不審を抑えていられる？」

アウラの唐突な問いに、秘書官は淀みなく答える。

「そうですね、最短で一月、最長で一月半といったところでしょうか。それより長くなるようでしたら、その後例えゼンジロウ様が何と言おうと、『陛下が言わせている』という風評がぬぐい去れなくなるでしょう」

「一ヶ月、まあ、そんなところか。よし、分かった。幸い、婿殿の方から、『この世界の礼儀や常識を学びたい』と申し出てくれていい。婿殿に家庭教師を設けよう」

「家庭教師、ですか。後宮は男子禁制ですが……？」

探るような秘書官の言葉に、アウラは意味ありげに微笑み答える。

「無論、家庭教師候補は女に限る。ついでに魔術の基礎も教えてやって欲しいから、魔術師である方が望ましいな」

魔力の高い女の家庭教師。それだけを聞けば、アウラ公認の側室候補にしか聞こえない。しかし、アウラは釘を刺すように付け加える。

「もし、『適切な候補』がないようであれば、お婆様にご足労願う。軽率な行動に出る奴がいないことを祈るばかりだ」

お婆様とは、アウラが信頼する筆頭魔術師エスピリディオンの妻にあたる、パスクアラの事である。すでに七十歳を超える老女である彼女が『家庭教師候補』だと聞いてもまだ、家庭教師候補として、

妙齡の未婚の女を推薦する者がいれば、それはアウラの意図も読めないばんくらか、女王の要請より己の権力拡大を優先する野心家のどちらかだ。

中年の秘書官は、困ったように小さく肩をすくめて、女王に忠告した。

「陛下。臣下をあまり露骨に試しすぎると、人心が離れていきます。くれぐれもご注意を」

「分かっている。しかし、お前が言うとおり、将来のことを考えれば、婿殿には側室を迎えて分家をつくる可能性も無視するわけにはいかないのだ。ならば、早いうちに『危険な側室候補』をつまはじきしておく必要がある」

実際、今のところ新妻として特殊な新婚生活を円滑に回しているアウラとしても、少々不本意な話ではあるのだ。

政略結婚は王族の義務とはいっても、王族にだって恋愛感情も独占欲もある。

「まったく、少しは水入らずの新婚生活を楽しませてくれても罰は当たるまいに」

アウラはそう言って、面白くなさそうに肩をすくめるのだった。

第二章5【予期せぬ出来事】

その日の夜。共に夕食を済ませたアウラと善治郎は、一つのソファの上でピツタリと寄り添うようにして腰を掛け、くつろぎの時間を過ごしていた。

「ふむ。夜更かしの危険性があるとはいえ、こうして十分な明かりがあると、夜の過ごし方が有意義になるな」

「はは、そうだね。俺の場合は、こういう夜の過ごし方に慣れきっちゃってるから、あんまりありがたみは感じないんだけど」

室内を照らす六つのLEDスタンドライトを見渡し、感心したように声を上げるアウラに、善治郎は小さく笑いながら、返事を返す。昼間は、王として激務をこなしているアウラであるが、日が落ちた後は比較的自由な時間が取れるようになっていく。無論、週に一度や二度は、出席が臨まれる舞踏会のような催しもあり、夜イコール自由時間と決まっているわけではないが、深夜残業が当たり前であった善治郎のサラリーマン時代と比べれば、就業時間は十分『早い』部類に入るだろう。

おかげで、こうして善治郎はアウラと、夫婦水入らずの時間を過ごすことが出来る。

だが、女王とその伴侶ともなると、例え夜のくつろぎの時間といえども、その会話に政治的な色が滲むのは避けられない。

「それで、俺にマナーや常識を教えてくれる家庭教師の人を、今公募してるんだ？」

「うむ。決定まではしばらく時間が掛かる。その間は、暇を見て私が直接教えよう。本当ならば、私が全部教えてやればよいのだが、時間の余裕がない。すまぬな」

「いいよ、いいよ。アウラが忙しいのは、俺でも分かるから。あ、でも、その家庭教師の人は大丈夫だよな？ 変なこと言ったりしないか不安なんだけど」

マナーと常識を覚えてくれる人物に対して、無礼な口を利かないか心配するというのも本末転倒な気はするが、善治郎の心配ももっともである。

女王の伴侶の家庭教師に選ばれる人物となると、ある程度は地位や身分の人間のはず。

だが、善治郎の心配にアウラは笑顔で首を横に振ると、

「まあ、そなたの日頃の言動からすると、まず大丈夫だとは思う。それに、最低限のマナーと常識は、家庭教師が決まるまでに、私から教えるから安心してくれ」

そう言った。

「あはは、お手柔らかに」

善治郎が苦笑を浮かべて双言葉を返したその時、コンコンとドアがノックされる。

「あ、はい？」

『失礼します。入浴の準備が出来ました』

反射的に声を上げる善治郎に、ドアの向こうから侍女がよく通る声でそう報告を入れてきた。

そういえば、もうそんな時間か。

ソファーから立ち上がった善治郎は、棚の上からLEDランタンを手に取る。

一度目の転移の際、夜の浴室の暗さに閉口した善治郎が、わざわざ近くのキャンプ用品店で買い求めた代物だ。

本来であれば、単一電池を四本使用するのだが、善治郎は充電式の単三電池と、単三電池を単一電池として使用可能な電池スぺーサーを使っている。

流石に、素人が水浸しになる浴室まで延長コードを引っ張るのは危険極まりないので、浴室の明かりはこのLEDランタンだけが頼りだ。

まあ、それでも豆電球サイズのLEDを十二個使用しているこのランタンは、善治郎の感覚でも『薄暗いけど我慢できないほどではない』くらいには、明るく浴室を照らしてくれる。

ちなみに、アウラや侍女達の感覚で言えば『あり得ないくらいに明るい』という表現になる。

「よし、大丈夫。まだ、しばらくは充電の必要もなさそうだな」

一度スイッチを入れて、問題なく明かりが点ることを確認した善治郎は、ランタンを片手に提げドアへ向かう。

「では、参ろうか、ゼンジロウ」

アウラは、そんなゼンジロウの開いている方の腕に、ごく自然な動作で自分の腕を絡ませ、スツと胸元に抱き寄せる。

「ええと、それは、その、一緒に入るってことかな……？」

そう言えば、すでに床は共にしているが、入浴を共にしたことはなかった。

大胆な誘いにドキマキする善治郎に、アウラは妖艶に微笑み返す。

「お前が嫌でないのならば、な」

「嫌がるはずがないだろう」

限界まで鼻の下を伸ばした善治郎は、アウラと仲良く腕を組んだまま、空が飛べそうなくらいに軽い足取りで、浴室へと向かうのだった。

仲良く二人での入浴を済ませた善治郎とアウラは、湯上がりの火照った身体を氷扇風機で冷やしつつ、それぞれ好みの酒をつぎ、グラスを傾けていた。

善治郎は箱買いした缶の発泡酒、アウラは昨日開けた白ワインの残りである。

どちらもよく冷蔵庫でよく冷やされており、湯上がりの渴いた喉の乾きを心地よく癒してくれる。

「ふう、これはやみつきになるな」

薄い夜着姿のアウラは、氷越しに送られている扇風機の冷風と、ガラス製のワイングラスに入った冷たい白ワインに眼を細め、感嘆の声を上げる。

この熱帯夜が続くカープア王国で、湯上がりに冷たい扇風機の風を浴びながら、冷たいワインを飲む。

通常は、王侯貴族でも絶対に味わうことが出来ない贅沢である。

いかにアウラがこの国の気候になれているとはいっても、熱帯夜を不快に感じない訳ではない。

「まずいな。意思を強く持つておかなければ、私も後宮に入り浸りになりそうだ」

「大歓迎、と言いたいところだけど、女王様がそれじゃ拙いんだよな。まあ、暇を見つけて出来るだけ来てくれ。いつ来てくれても、俺は歓迎するから」

「分かった。今後は昼食も、可能な限りこっちで取るから、そのつもりでいてくれ」

「了解。昼時間に合わせて、氷を用意しておくよ」

善治郎は笑ってそう、取り合った。いかに大型冷蔵庫があるとは

いっても、扇風機の前に置く氷は二十四時間態勢で用意できるわけではない。タイミングを合わせて、ある程度氷を節約しないと、せっかくアウラが涼みに来たのに、肝心の氷がないという事態になりかねない。

夜はともかく、昼はすでに三十七度を超える気温を記録するようになってきているのだ。気温が体温より高くなつては、扇風機だけ回しても熱風を吹き付けるだけで、涼は取れない。

まあ、氷がなくても扇風機の前に水を張った桶を置いておけば、多少はマシだが、やはり氷ほど劇的な冷風にはならない。

つくづく、エアコンが欲しい。

やがて、湯上がりの火照りや喉の渇きも癒えてきたアウラは、少し表情を引き締めて善治郎に言う。

「そういうわけで、『何もなくていい』と言った手前、少々心苦しいが、早速講義を始めようか。最初は、王族の一般的な受け答えからだ」

「え、ええ？ もう、今晚から始めるのか？」

驚く善治郎にアウラはニンマリと笑い返すと、

「もちろんだ。これだけ立派な灯りがあるのなら、夜の時間は有効に活用しなくてはな」

そう言って、隣に座る善治郎の瞳をのぞき込む。

善治郎は渋い顔で、天を仰ぐ。

「うわー、せっかくのアウラと過ごせる貴重な時間が勉強に潰され

るのかー」

善治郎の率直で飾らない感想に、アウラは一瞬素の照れた表情を見せる。しかし、善治郎の視線が天井からこちらに戻るより早く、いつもの悠然とした表情を取り繕い、答える。

「そ、そう言ってもらえるのは嬉しいが、時間は有限だからな。なに、大丈夫だ。閨を共にする時間まで食い込ませるようなマネはない」

「まあ、それなら仕方がないか。どうせなら、アウラのいない昼間を勉強の時間に充てられるといいんだけどな。ん？ ちょっと待てよ」

矛盾したことを言った後、善治郎はふと思い出したように、ソファーから立ち上がる。そして、持ち込んだ物資をひとまとめにしてある部屋の隅へ向かう。

「確か、持ってきてるはずだよな。小さいものだし、ついでに絨毯に乗つけたはずだ……」

「ゼンジロウ？」

「よし、あつたあつた、これだ」

やがて、目当ての物を探し当てた善治郎は、なにやら四角い銀色の箱を持って、アウラが座るソファーへと戻ってくる。

「ゼンジロウ、なんだそれは？」

少し不審そうな顔で問いかけるアウラに善治郎は、

「これは、『デジカメ』、『デジタルカメラ』って言って、本来は写真、静止画を取る機械なんだけど、一応動画も音声付きで取れる筈なんだ」

そう言ってデジタルカメラを掲げて見せた。

しかし、アウラは意味が分からないと言った様子で首を傾げる。

「シャシン？ 静止画？ 動画？ 音声付き？ なんだそれは？」

その答えに、善治郎は少し考えたが、的確な説明の言葉が思いつかない。この手の道具を知らない者に口で説明するのは意外と難しい。

「ああ、何て言うかな。一瞬で凄く精密な絵が取れたり、声や動く絵も録音、録画できたり」

「ロクガ？ ロクオン？」

さらに首を傾げるアウラに、これ以上自分の拙い説明を続けても無駄だと感じた善治郎は、論より証拠とばかりにデジカメの電源をオンにする。

「まあ、とにかく使ってみせるから。アウラ、さっき言ってたマナーとか常識の説明を始めてくれないか？」

そう言って、デジカメを構える善治郎に、アウラは少し不審そうな視線を向けたが、結局は善治郎を信用することにしたのか。言われたとおりソファから立ち上がり、話し始める。

「……よく分からないが、良いだろう。では、受け答えの基本から説明を始めるぞ。」

通常、王族が公的な場で、自分より目上の者と相対することは少ない。だから、最初に覚えて欲しいのは、目下の者への対応と、同格の者への対応だ。

基本、声を掛けるのは目下の者からだ。一般的には、目下の者は……」

実演を交えながら、マナー付いて説明を続けるアウラを、善治郎はデジカメの動画モードでとり続ける。

社会人一年の時に買った代物で、それなりに使い込んではあるのだが、動画は最初の内に何度か興味本位で取っただけだ。

果たしてちゃんと撮れているのか、この距離で音声はしっかりと入っているのか。

不安要素は多々あるが、そう深刻に考える必要もあるまい。失敗したら失敗したときだ。別段動画が上手く撮れないと、にっちもさっちもいなくなるわけでもない。

「……というわけだ。まずはこれくらいで良いか。ちゃんと聞いていたか、ゼンジロウ？」

アウラが説明を一度切った所で、善治郎もデジカメの動画モード停止させる。

「よし、有り難う、アウラ。後は、これがちゃんと映っているかな。ごめん、ちょっと口で説明するのは難しいんだ。悪いけど、ち

よつと待って」

善治郎はそう断ると、デジカメを持ったまま部屋の隅にあるパソコンの前へと移動する。そして、パソコンを起動させると、デジカメからSDメモリーカードを取り出し、パソコンに差し込む。

「ふむ。よく分からぬが、それもお前の世界の道具なのか」

パソコンを弄っている善治郎の背後に、アウラも近づいてきて、善治郎の背中越しにパソコンの画面を見ている。

「うん、そう。ええと、ハードに落とす前に、まずはちゃんと撮れているか見てみるか」

そう言って善治郎は、SDメモリーカードの動画ファイルを直接起動させる。

マウスを操作して、カチリとファイルとクリックする。すると次の瞬間、パソコンのディスプレイに、見覚えのある部屋の本真ん中で身振り手振りを着けながら、しゃべり続ける赤髪と小麦色の肌をした迫力美女の姿が映し出された。

「ほう、驚いた！ これは、私の姿か。言っている言葉も、先ほど私が喋っていた内容その物ではないか。一体どのような原理になっているのだ？ 双王国の魔道具でも、この様な物は見たことがないぞ！」

「……………！？」

感嘆の声を上げるアウラが、善治郎にそう問いかけるが、善治郎

はそれに答えを返す余裕はなかった。

善治郎は、生まれて初めて動画を見るアウラよりも、さらに大きな衝撃を受けてたからだ。

「Es normalmente raro que las posiciones familiares imperiales se opuesten a la persona que es superior a sí mismo. Un lugar público. Por consiguiente lo aprendo primero y lo quiero Es... la correspondencia a la persona que es igual a la correspondencia a la persona actual...」

「.....なに、これ？」

善治郎の耳には、画面の向こうで話すアウラの言葉は、何一つ理解できない未知の言語にしか聞こえなかった。

幕間2【言葉と文字と言霊】

録画したアウラの言葉が理解できない。驚きの事実を告白した善治郎に、アウラが首を傾げ、不思議そうに問い返す。

「それはつまり、この道具は音は取れても『言霊』は取れないということなのではないか？ 実際、この道具からは魔力が感じられないからな」

「は……？ 『言霊』？」

全く聞き覚えのない言葉を、平然と言ってよこすアウラに、善治郎は理解が追いつかない惚けた表情で、オウムのように言葉を返す。善治郎の表情を、しばらく不思議そうに見ていたアウラであったが、どうやらこれは、根本的な所で話を通していないようだと思う。

「まで、ゼンジロウ。最初から順番に話していこう。まず、そなたは何をそんなに驚いているのだ？」

アウラの問いに善治郎は、戸惑いを隠せない声で言葉を返す。

「それは、普段は普通に聞こえているアウラの言葉が、デジカメを通したら全く理解できなくなったから……って、考えてみれば、そもそもここが異世界なのに、日本語が普通に通じているのがおかしかつたんだなあ」

最初の転移から一月半、こっちに棲みついてからすでに半月近くがたっているというのに、不覚にも善治郎はその事実を、今の今ま

で全く疑問にも思っていなかった。

「よし、そこだ。根本的に話が食い違っているのはそこだな。ゼンジロウ。ひよっとして、そっちの世界では、異なる言語を使用する者同士は会話が成立しないのか？」

あまりに当たり前の事を言ってくるアウラに、善治郎は一瞬「当たり前だ」と返しそうになるのをグツと堪える。

「うん、それはごく当たり前のことなんだと思ってたけど、その言い方だと、ひよっとしてこっちの世界は違うのかな？」

「うむ。この世界でも、国が異なれば言語も異なる。大陸だけに限っても北部と南部、東部と西部、それぞれが全く異なる言語体系を持っているが、会話を交わすことにはなんら支障は無い。なぜならば、複数の人間が同じ認識を持つ音には、『言霊』が宿るからだ。

これは、この世界では、ほとんどの人間が意識すらしていない常識中の常識なせいで、今まで説明する必要性すら感じていなかったが、まずは聞いてくれ」

そう言うと、アウラはこの世界では一般常識にも等しい存在、『言霊』について説明を始めるのだった。

一通り、アウラの説明を受けた善治郎は、頭の中で今聞いた言葉を整理するように言葉にする。

「ええと、つまりこの世界では、言葉には等しく『言霊』というのが宿っていて、例え異なる言葉を使っている人間同士でも、意思の疎通には不自由はないってこと？」

「そうだ。だから、この世界では、『言葉が通じない』という現象は原則あり得ない」

頷くアウラに、善治郎は、解消されない疑問点を矢継ぎ早にぶつける。

「ええと、そんな便利なものがあつたら、言葉を覚えるのに支障があるんじゃないの？ ほら、適当に『あー』とか『うー』とか言ってるだけで意味が通じちゃうんじゃない？」

「いや、それはない。言霊は、あくまで『万人が共通の認識を持つ正しい音』に宿るのだ。例えば生まれたての乳飲み子が『オッパイ』と言う意味を『あー』と言う音に込めたとしても、その赤子だけがそう思っていただけでは、言霊は働かない。最低でも数千単位の人間が『あー』という音に『オッパイ』という意味を認識していなければならぬ」

「へー、意外とよくできてるんだな。それなら、例えば悪い大人が、小さな子供に『椅子』の事を『机』、『机』の事を『椅子』って教えたとして、その子が別な言葉を話す人に机のつもりで『椅子』って言うっても、相手の人には『椅子』としか聞こえないってこと？」

「そうだ。言霊が宿るのはあくまで『共通の認識を持つ正しい音』だ。本人の意思には、関係はない」

「なるほど……。ん？ でも、それじゃなんで、今録画化した画像の音は理解できなかったのかな？ 音は正しく再生されているよね？」

善治郎の当然の疑問に、アウラは小さく頷き、答える。

「それはその道具に魔力がないからだろう。私達も日頃使っているときには全く意識していないが、『言霊』による意思疎通にも微弱な魔力を使用しているのだ。魔力の宿らない音は、例え『正しい音』を再現できても、『言霊』は働かない」

「なるほど、なるほど。それじゃ、この世界では、複数の言語を使用できる人間ってほとんどいないんじゃないの？ どれか一つでも言葉を覚えていれば、事が足りるだろうし、勝手に翻訳されちゃうんだったら、二つめの言語を覚えるのも難しいよね」

例えば、アメリカ人が「アップル」と言っても日本人の耳には自動的に「りんご」と聞こえてしまうわけだ。これでは、日本人が後天的に英語を学ぶのは不可能に近い。

それは、事実その通りだったようで、アウラは深く頷いた。

「そうだ。だから、複数の言語を覚えている人間というのはごく一部の魔術師に限られる。熟練した魔術師は、意識的に魔力の放出を抑えられるからな。この様に」

と言って、アウラは意識的に魔力を遮断すると、

「Amo Zenjirō」

と、短く言葉を発する。その言葉は、さきほどパソコンで再生し

たデジカメの動画同様、善治郎には未知の言語にしか聞こえない。

「こうやって、魔力制御の出来る異国の魔術師に、教えて貰うのだ。逆に、自分が魔力制御できれば、自分の魔力を遮断するだけでも、言霊は働かなくなる。言霊の発動には、話し手と聞き手、双方が魔力を有していることが条件だからな。また、場所によっては魔力の発動を根本的に遮断するような特殊空間も存在するらしい。そういうところでは、言霊も働かないだろう」

アウラの言っていることが正しいのだとすれば、地球は丸ごと魔力の発動が遮断される特殊空間であるか、地球人の九十九パーセントが魔力を全く持たない人種であるかのどちらかだ。

どちらにしても、百五十年前、地球に駆け落ちしてきた善治郎のご先祖様は、さぞかし苦労したに違いない。なにせ、『言葉が通じない』という概念すらない人間が、誰とも言葉通じない世界に放り出されたのだから。

無事生き延びて、子孫を残したことが奇跡にすら思えてくる。

「へー。この世界で複数の言語を覚えるのって、大変なばかりでメリットはほとんどないみたいだな。でも、一部の魔術師はわざわざそれだけの苦労をして、覚えてるって事だよな？　なんで、そこまでして覚えるのかな？　必要もなさそうなのに」

そういう善治郎のもっともな疑問に、アウラは小さく笑って答える。

「それは、言葉を覚えるよりも『文字』を覚えるためだ。文字とは言語の発音を書き記した代物。会話も出来ないのに、文字を覚えるというのは難しいからな。文字には言霊は宿らないゆえ、そうやって覚えないと、異国の書物は読めぬ」

「あ、そうか。そう言えば、この世界の文字ってまだ見てないな。ねえ、ちよつと書いてもらえるか？」

もののついでとばかりに善治郎は、パソコンの横に置いてある「ピー用紙とボールペンをアウラにわたす。

「ふむ。これは、随分と白くて薄い皮紙だな。こっちのペンも不思議な形をしている。インク壺はどこだ？」

「ああ、違う。それは、動物の皮じゃなくて植物から作られてて、ってまあいいや。そのペンもボールペンって言って、そのまま押しつければ普通に書けるから。インクは中に入ってるんだ」

初めて触れる現代日本の筆記用具に最初は戸惑っていたアウラであったが、元々ボールペンの扱いというのは、ツケペンと比べて特別難しいものではない。すぐに慣れて、感嘆の声を上げる。

「ほう、これは便利だな。インクに浸す手間がなくなるだけでも助かるし、何よりこんな薄い皮紙でも引っかかって破いたりしないくらいになめらかだ」

「紙はともかく、ボールペンはダース単位で買ってきてるから、よかったですらー、二本持つてく？ 色も、黒だけじゃなくて、赤とか、青もあるよ」

「ありがたく、貰っていく。ふむ、書けたぞ。我が国を中心とした大陸南西岸部で使用されている文字は、この様な三十字からなっている」

やがて、アウラはコピー用紙に見たこともない三十種類の記号を書き出し、善治郎に見せた。

「へえ、予想はしていたけどやっぱり表音文字なんだな。数が三つてことは、アルファベットに近いのかな？　ねえ、アウラ。そこに、『あ』『い』『う』『え』『お』。『あ』『か』『さ』『た』『な』って書いてみて」

「む、なんだと？　すまん、もう一度言ってくれ」

「うん、一つずつ行くよ。最初は『あ』……」

幸い意味を持たない、短音であれば、『言霊』も働きようがないらしく、善治郎の発音はそのままアウラの耳に届く。

そうして書いてもらううちに、この国の文字が、おおよそ元の世界のアルファベットと同じ作りをしていることが判明する。

言語学的に母音と子音という明確な区別があるわけではないが、複数の文字を連ねて一つの発音を作る辺りは、全く同じだ。ただし、RとLの区別がなかったり（Lに相当する文字が存在しない）、Mに相当する文字が複数存在したりと、細かな違いは多々あるが、三十文字の内大多数は、アルファベットに直接置き換えて書き記すことが出来そうだ。

他に、明確な違いを挙げるとするのならば、大文字、小文字といった差がない点だろうか。細かなニュアンスを書き記すのに不自由しそうだが、一から覚えるには数が少ない分、若干楽そうだ。

「ああ、これなら三十個の文字を覚えるだけなら簡単そうだな。そこから、文章全体を覚えるのは骨だろうけど。でも、どうせなら、

文章より先に数字を覚えたほうが役に立ちそうだな。アウラ、この世界の『数字』を覚えてくれないかな？」

アウラが発音するとおり、三十個の記号にカタカナで読み仮名を振り終えた善治郎は何の気なしにアウラにそうお願いする。

しかし、アウラの反応は、善治郎の予想を大きく覆すものだった。

「『数字』？ ようは数の文字表記のことか？ いきなり数を全て覚えるの大変だと思うが」

そう言ってアウラは、別のコピー用紙に、ツラツラと単語を書き始める。

「これが一、これが二、これが三だ。最初は十まで位にしておいた方が良いと思うぞ。商人や軍人ならばともかく、一般的な貴族でも『億』や『十億』といった単語表記は、知らない者も珍しくないからな」

「……………」

思わず無言で善治郎は、アウラの手元を見る。そこには、アウラが、『一』『二』と言う度に、複数の文字を組み合わせて、単語を書き記しているのが見える。

ちょうどアルファベットで一を『one』、二を『two』、三を『three』と印すように。

「……………ひょっとして、この国には『数字』って存在してないわけ？」

一瞬、そんな馬鹿な、と思う善治郎であったが、考えて見れば日

本もその昔、アラビア数字が入って来るまでは漢数字や、算木、ソロバンなどを用いて、結構複雑な計算をこなしていた。

鶴亀算に代表されるような初期の連立方程式や、水面から顔を出している水草を横に引つ張ってその長さの変化から、三平方の定理を用いて、水堀の深さを計算するようなマネもやってた。戦国時代の商家や大名の補給物資管理なども、残っている文献を調べると、予想以上に綿密な計算がされている例もあるらしい。

そう考えれば、数字が存在しないイコール数学が存在しないというわけではないのだろ。そもそも、これだけ立派な王宮を建てている時点で、建築学にある程度の高等数学が含まれていないはずがない。もし、万が一、経験則だけでこの王宮を建てているのだとすれば、そっちのほうがすさまじい。ほとんど、魔法の領域だ。

しかし、数字がある場合とない場合では、計算能力に対する『底辺人口』に明確な違いが出る。

凡人の筆算能力を向上させるためには、ゼロを含む十進数の数字の概念は、必須だ。

「数字。数を印すための特別な文字、ということか？ 興味深いのが、それがあると、どのような利点があるのだ？」

興味深げに問いかけるアウラに、善治郎は思わず熱心に数字の有効性について説く。

「ああ、まず何より覚えるのが、簡単だ。十進数だとすれば、ゼロも含めて十個の文字だけを覚えればすむし、後はそこに、 $+$ 、 $-$ 、 \times 、 \div の四つの記号を覚えれば大抵の人間が簡単な四則演算くらいなら二、三年で……」

「ふむふむ……」

いつの間にか善治郎は、転移する前に自分に誓った「出来るだけ目立つ成果は上げないようにしよう」という自戒も忘れて、熱心に数字の有効性について説明するのだった。

第三章 1 【避暑の昼休み】

善治郎がアウラから、『言霊』の存在を教えられてから、数日後。カープア王国の気温は日増しに上昇を続け、ついに一年でもっとも暑い季節が始まるうとしていた。

正確な気温は分からない。持ち込んだ温度計は、四十度越えを記録した日以降、精神衛生上の理由から、見えないように裏返しにしてある。

体感的には、四十度越えの日よりもさらに気温は上昇しているように感じられるが、吊してある時計をひっくり返して確認するだけの勇気が、善治郎にはもてなかった。

ここ数日は、流石に「不健康」などとも言ってられず、善治郎は後宮の木戸を全て閉め切り、真っ昼間からLEDスタンドライトを灯して一日を過ごしている。

だが、そんな溶けるような暑さも、善治郎にとっては悪い事ばかりではない。

まともに活動しては、死人が出かねない気温が続くこの時期、王宮では正午から約三時間にわたり、休憩時間を設けているのだ。

おかげでここ数日、善治郎は夜だけでなく、昼も妻であるアウラと後宮で二人の時間を過ごす事ができていたのだった。

「ふう、暑かった。執務室と比べれば、ここは天国だな」

木戸を閉め切った後宮の一室に入ってきたアウラは、まず真っ先に迷うことなく冷蔵庫へと向かった。

「あ、アウラ。お疲れ様」

冷蔵庫をあさるアウラに、善治郎はソファアの上に寝っ転がって携帯ゲームをピコピコやりながら、声を掛ける。

「おう」

アウラは善治郎に背中を向けたまま短く返事を返し、手慣れた様子で製氷室からザラザラと氷を取りだし、冷蔵庫横に供えてあるかき氷機に入れる。

かき氷機の取っ手をグルグルと回し、ガラスの器に山盛りのかき氷を作ると、冷蔵の中で冷やしてある赤い瓶に入ったイチゴのシロップを遠慮会釈なくドバドバとかけまくる。

ゲームをやりながらも、目の横でその様子を見ていたのだろう。善治郎が、慌てたように抗議の声を上げる。

「ちょっと、アウラ！ それ、かけすぎ！」

しかし、アウラは全く動じず、

「けちけちするな、減るものでもあるまいし」

そう言って、キャップを閉めた苺シロップの瓶を冷蔵庫に戻し、かき氷を入れたガラスの器を片手に、善治郎が寝そべるソファアへ

と歩いていくる。

「減るよ！ これ以上ないくらい明確に減るよ！」

抗議の声を上げつつ、善治郎はパタンと携帯ゲーム機を閉じて、寝そべっていた体勢からソファーに座り直し、アウラが座るスペースを空ける。

向かいにもう一つ大きなソファーがあるというのに、わざわざ座り直してまで同じソファーに座るあたり、なんだかんだ言っても夫婦仲はうまくいっているようだ。

アウラは、苺シロップで真っ赤になったかき氷を長い銀のスプーンですくい口元に運ぶ。

「大丈夫だ。今、城の料理人達に果実の絞り汁と黒砂糖を使い、似たようなものを作らせている」

自信を持ってそう答えるアウラに、善治郎は興味を引かれた口調で、

「へー、それって美味しいの？」

そう、問いかける。

「……だから、このイチゴシロップは私がもらう。お前は、城の料理人達が丹精込めて作った特製果実砂糖汁を使うがよい」

「ねー、それって美味しいの？」

「……おう、頭がキーンとなった。このキーンがたまらぬ」

「なあ、結局今のところうまくいってないんだろ……」

婿殿のジト目に少し罪悪感を覚えたのか、女王は目を逸らしながら、白状した。

「うむ……向こうの世界の食文化というのは、実に優れているな。まったく同じものを再現するのは、難しそうだ」

素直に白状した女王の言葉に、善治郎はため息をつく。どのみちあまり期待はしていなかったが、ちょっとがっかりだ。

「はあ……だったら、大事に使おうよ。イチゴ、メロン、ブルーハワイ、それぞれ一本ずつしか持ってきてないんだから」

「うむ、イチゴは任せろ」

「いや、俺もイチゴが一番好きなんだけど、って、まあいいや」

衣食住の全てを嫁に養って貰っているヒモ旦那の身としては、それくらいは嫁に譲るのが夫婦円満のコツというものだ。

善治郎は、携帯ゲーム機をテーブルに置くと、ソファアールから立ち上がり冷蔵庫へと向かう。

そして、冷蔵庫の中で大量に冷やしてある絞った濡れタオルを一つ取り出すと、ちょうどかき氷を食べ終えたアウラへ放る。

「アウラ、汗」

「おう、すまぬ」

水分を取って全身から汗が噴き出ていたアウラは、素直に冷夕オ
ルを受け取ると、それで顔や身体の汗を拭う。

「……………」

「……………」

真つ昼間ではあるが、現在この部屋は外の熱気と陽光を遮断する
ため、木戸を閉め切ってかわりにLEDスタンドライトを灯してい
る。

まるで夜のような雰囲気の中、服を着たままとはいえ、タオルで身
体の汗を拭く愛妻の姿に、善治郎は自然と視線を奪われる。

そんな善治郎のあからさまな視線に気づいたアウラは、艶やかに
笑いながら、もったいをつけるように少し善治郎に背を向けように
身体の向きをずらし、話しかける。

「しかし、私はゼンジロウが持ち込んだものの恩恵に授かるばかり
で、礼を返せていない気がするな。何もしなくてよい、などと言っ
ておきながら、礼儀、常識、魔術と学ぶことを強要しているような
ものであるし」

アウラの言葉は事実である。毎日、口にする冷えた飲み物。氷塊
と扇風機を使った涼を取る仕組み。常夏で知られるカープア王国で
ももつとも暑いこの時期を、これほど快適に過ごした記憶は、アウ
ラにはない。

強いて比較するとすれば、まだ幼子だった頃、水辺の高山に築か
れた王家専門の避暑地で過ごした夏くらいのものだろうか。

「いいよ、その辺は気にしなくて。持ち込んだものはどれも俺が自
分で使いたくて持ってきた物だし、仮にも生まれ育った国とは違う

ところに根を生やすのなら、最低限その国の文化風習を覚える必要があることぐらいは、最初から覚悟してから」

一方、そう答える善治郎の言葉にも、嘘偽りはない。いかにアウラが「なにもしなくていい」と約束してくれていたとは言っても、食べて遊んで寝るだけの座敷犬のような生活が出来る可能性は、そう高くないと最初から踏んでいた。

地球の歴史を見れば、王の側室のような日陰者でも、公的な行事には駆り出されるのが常だ。そう考えれば、最低限、王室に恥をかかせないくらいに、常識や国の歴史を学ばされることは必然と言える。

それに、就業時間が日没に左右されるこの世界での『仕事』など、日付が変わる前に帰宅できれば「今日は早く帰れた」と感じる善治郎のサラリーマン生活と比べれば、どうということもない。

そんな事情を察することは出来ないアウラは、汗を拭き終えたタオルをテーブルの上に置き、念を押すように尋ねる。

「のう、ゼンジロウ。なにか、不自由しているものはないか？ 私の立場を正しく理解してくれているお前が、意識的に他者との接触を断っているのは分かっている。そうすることで私が助かっているのは事実なのだが、こつもお前の自由を束縛したままで、なにも返せないのは心苦しい」

善治郎が婿入りしてからそろそろ一月弱。我が儘も言わなければ、迷惑も掛けてこない婿の言動が、自分と自分の妻の置かれている立場を十全に理解した上で、あえて迷惑を掛けないよう自制していることに、アウラもいい加減気づいている。

ついでに言えば、侍女や専属料理人など、後宮に務める使用人達の善治郎に対する評判も今のところはすこぶるよい。

手間が掛からず、我が儘を言わず、威圧的な言動も取らない主人だ。使われる身としては、これほど楽な相手はいないだろう。

聞き取り調査を終えた後、アウラは思わず厨房の責任者と侍女頭にわざわざ「現状が当たり前だと思わないように」と警告をしたほどだ。

人間とはなれる生き物である。手間の掛からない主人になれきた使用人が、主人の唐突な我が儘に対応できなくなると言うのは、意外とよくある話である。

どうもアウラの基準では、この異世界から連れてきた婿殿は、必要以上に周りのことを気にしすぎて、自分の欲求を押し殺すくせがあるように見える。

しかし、そうは言われても善治郎としては、これと言った要求はない。

確かにそろそろ後宮の外に出てみたいという欲求はあるが、そうすることで生じる面倒な事態を考えてもなお、押し通したいほどの我が儘ではないし、暑さや食べ物に対する不満は、いかにアウラが女王でもどうにか出来るものもあるまい。

そうして、自己完結してしまう『物わかりの良さ』が、アウラからするともしかしいのであるが、元々も生まれも育ちも庶民に過ぎない善治郎には、思うがままの我が儘を口にするを『見苦しい』と捉える価値観があるため、話は簡単には進まない。

「まあ、今のところは満足してるよ、うん。不満があったらちゃんと言っから」

「不満を言うのではなく、希望を言って欲しいのだがな。まあ、いい。とにかく、遠慮は無用だぞ。私はお前の献身に少しでも報いたいのだ」

優しげに笑い、そう言うアウラの笑顔に、善治郎は愛おしいと思う気持ちと同時に、ちよつとしたイタズラ心を覚える。

チラツと横目で現在時刻を確認し、昼休みがまだ十分に残っていることを確認した善治郎は、ソファアーに座っているアウラに近づくと、冗談めいた声を上げてアウラに飛びついた。

「よし、わかった。そこまで言うなら……身体で払え！」

「冗談めかしてぶつかつてくる夫の意図を瞬時に察した女王は、両手を広げて夫の行為を受け入れた。

抱きついてくる夫をしっかりと受け止め、ガツチリとその身体を抱きとめる。

「分かった。……ンン」

そして、両腕をしっかりと善治郎の背中に回し、情熱的に唇をあわせる。

「……………」

しかし、夫の反応は予想外のものだった。毎夜であれば、こうして抱き合えば、積極的に口を合わせ、こちらの肢体に手を這わせてくる筈の夫が、なぜか人形のように身動きもせず、身体を硬くしている。

「……どうしたのだ？ ゼンジロウ？」

「……………」

善治郎は無言のままアウラから離れると、部屋の隅に移動し、しやがみ込む。

「ど、どうしたのだ、ゼンジロウ？ なぜ、そんな部屋の隅っこで絨毯を指で突きながら、暗い顔をしている？」

情熱的な抱擁をしてきたかと思うと、一転して落ち込む旦那の急変ぶりについて行けないアウラは、戸惑いの声を上げる。

その声に、善治郎は部屋の端っこで小さくなり、のの字を書いたまま、嗚咽混じりに声で答えるのだった。

「……いや、確かに俺も全力じゃなかったよ？ 本気でぶつかつた訳じゃないよ？ でもさあ、嫁さんソファーに押し倒そうとしたのに、ガツチリ正面から受け止められて、あまつさえ押し倒そうとした事実にも気づかれなかつたって……………」

別段善治郎は、肉体的頑強さをプライドのよりどころとする『マツチヨ』な精神構造をしているわけではない。しかし、それでもやはり、一人の男として、嫁に自分の体当たりを受け止められてしまふというのは、ちょっと悲しいものがある。

「あ……………」

ゼンジロウの物言いに、アウラはあからさまに顔を引きつらせた。

（しまった。やけに情熱的に抱きついてくると思ったら、あれは私

を押し倒すつもりだったのか)

王宮騎士ほどではないが、長年実戦も経験しているアウラの身体は、戦士として十分に鍛えられている。自分より少し大柄とはいえ、善治郎のような素人の突撃ぐらいいは、笑って受け止められるくらいの体力はある。

しかし、こちらの世界は現代日本以上に、男社会であり、また肉体的頑強さを美德とする価値観がある。嫁を押し倒そうとして受け止められてしまった夫の悲哀は、善治郎本人より、アウラのほうが理解できる。

どうすればいいのだろうか？ 意図せずに、夫に恥をかかせてしまった女王はしばし考え込む。そして、

「き、きゃあ」

困り果てたアウラは、わざとらしい声を上げて、自らソファアに倒れ込んだのだった。

「遅いよ！ 俺そんな時間差で効果現れる特殊なタツクルした覚えがないよ！？」

「……きゃあ」

善治郎の突っ込みにもめげず、アウラはソファアに倒れたまま、わざとらしい悲鳴を上げ続ける。

「いや、だから……」

「……きゃあ」

「……………」

悲鳴を上げるアウラが、ソファアの上で身をくねらせると、その拍子に深いスリット入ったスカートがめくれ、小麦色のその足が太股の半ばまであらわになる。

毎晩見慣れている光景ではあるが、これはよいものだ。

「……………うりゃあ！」

「キヤッ!?!」

結局善治郎は、時間差タックルが成功したことにして、ソファアに倒れるアウラに覆い被さっていったのであった。

それから約一時間後、ソファアの上で、共にいい汗をかいた善治郎とアウラは、再び冷蔵庫から取り出した冷タオルで身体の汗を拭いただけの半裸姿で、勉強会へと突入していた。

善治郎がパソコンに向かって座り、アウラはその斜め後ろに立っている体勢だ。

善治郎が座るパソコンの横には、アウラが持ち込んだ竜皮紙の束が置いてある。

竜皮紙に書かれている内容は、去年の国内の地方別納税状況である。納税関係の書類というのは、基本的に『地名』と『個人名』と『数字』だけで構成されているため、この世界の文字と発音を覚えるのに最適だというのが、アウラの主張だ。

その意見を鵜呑みにしたわけではないが、善治郎は素直に毎日、アウラが書かれている単語を一つずつ指さし、読み上げる様をデジカメの動画で撮影し、その画像を頼りにパソコンの表計算ソフトに竜皮紙に書かれている内容を、打ち込んでいった。

総数三十からなるこの国の文字も、すでに数日前に全て、マウスでドット絵を描く要領で『外字登録』をすませ、キーボードの各文字に割り振っている。

一文字打つ度に変換しなければならないので非常に非効率的だが、こうすることで一応パソコンでもこの世界の文字を打ち込むことが出来る。

そうやって善治郎は、アウラから受け取った税収書を、この世界の文字表記と、カタカナ及びアラビア数字表記を並列して打ち込み文字の読み方を一人で勉強するための資料を作成したのだ。

わざわざ昨年の税収書類を用いる辺り、アウラには他の思惑があるようにしか思えないのだが、表向きの理由はそうになっている。

「それで、ゼンジロウ。書類は完成したのだな？」

「おう。昨日のうちに打ち終わったよ。今、プリントアウトする」

善治郎は、ここ数日の努力の結晶である表計算ソフトに打ち込んだデータを、プリンターで印刷する。このプリンタは捨てるのももつたいないので持ってきた代物だ。コピー用紙はともかく、インク

の換えが各色予備が三つずつしかない貴重品なのだが、どのみち使わなければ目詰まりを起こして、駄目になるだけだ。

プリンターに関しては特にけちるつもりもない善治郎は、景気よく昨晚打ち込んだデータをプリントアウトしていった。

機械が自動的に紙を吐き出す様子を興味深げに見ていたアウラであったが、やがて用紙の排出は終わったのを確認し、その紙の束を手に取り、ザツと目を通した。

「よし、それじゃ読みが正しいか確かめてみるか。ゼンジロウ、一枚目から読み上げていってくれ」

「分かった、始めるよ、最初は、アウベニス伯爵領、税収は竜皮が一千枚。麦が二千袋。木材が……」

プリントアウトされた用紙をアウラが見ている横で、善治郎はパソコンのディスプレイを直接見て、読み上げていく。

いちいち頷き、相づちを入れながら聞いているアウラは、途中発音や数字がおかしいところを指摘する。

「あ、そこは『ボニージャ子爵』ではなく、『ボニーヤ子爵』だ」

「オツケー、ジャじゃなくてヤね」

確かに地名、家名の類は固有名詞のため『言霊』が働かず、誰が口にしてもちゃんと正しい音が耳の届くので、文字に慣れ親しむのは良いかも知れない。しかも、王家の税収書に名が乗るような名門貴族の存在を、善治郎が優先的に覚えられるという副産物まで付く。

そう考えればこの、『税収書』で文字の基本的な読み方を覚える

というのも、あながち間違っただけではないのかも知れない。

単語を百も二百も覚えれば、例えば知らない単語でも、何となく文字の読み方は分かってくるものだ。

どのみちこの世界には、現代日本の小学一年生用『国語の教科書』のような、初心者が文字を覚えるために最適化した書物は存在していない。

やがて、税込書を使った文字の読み方講座が無事に終わったところで、最後にアウラがふと疑問に思っていることを口にする。

「なあ、ゼンジロウ。所々数字が『赤文字』で印されていたり『青文字』で印されていたりするところがあるのだが、これは一体何なのだ？」

アウラの問いに、善治郎は珍しく含みのある笑みを持って答えた。

「ああ、それは実際に書かれている数値と、表計算ソフトが計算した数値が異なっているところを色別にして分かりやすくしてあるんだ。赤文字は少なく間違っているところ、青文字は多く間違っているところだよ」

「ほう……」

善治郎の答えに、アウラは表情の消えた顔で、小さく声を上げる。

一般的に、王家に提出される税込書とはいえ、その数値が間違えていないか、王宮サイドで全て再計算しているわけではない。

なにせ、数が数だ。とてもではないが、全て再計算などしては、竜皮紙も人件費も馬鹿のようにかさねてしまう。

通常は、ザツと目を通し、一目で分かるくらいに数字がおかしい

のを洗い出した後は、抜き打ちでランダムに数枚取り出し、再計算するだけで済ませている。

その抜き打ちのランダム抜き出しも、「なぜか」国内の大貴族や調査官と懇意にしている貴族の領地はほとんど対象にならないという有様だ。

しかし、表計算ソフトを駆使する善治郎ならば、この程度の計算は、一人でも全く問題にならないレベルである。なにせ、やることは基本となるフォーマットを作って、そこに数値を間違えずに突っ込んでいくだけなのだから、ある程度会社で事務仕事をこなしたことのある人間ならば、誰でも出来る。

「ゼンジロウ、これを少し借りてもよいか？」

アウラのその言葉を、十分に予想していた善治郎は出来るだけ邪気のない笑顔を取り繕い、答えるのだった。

「うん、いいよ。手加減は忘れずにね。って、これは俺ごときが言うことじゃないか」

「分かっておる」

頭を掻く婿の言葉に、女王は苦笑を持って答えたのだった。

第三章 2 【女王の思惑】

その日の午後、自分とファビオ秘書官の二人しかいない執務室で、アウラは昼休みに善治郎から譲り受けたコピー用紙の束を取りだした。

ファビオ秘書官は鉄面皮を保ったまま、ピクリと片眉だけ跳ね上げる。

「陛下、これは？」

「昨年の主立った貴族の税収書だ。婿殿の国政に対する理解を知る指針とするため、『文字を覚える資料』という名目で目を通して頂いたのだが、数日ではほぼ完璧に再計算を済ませ、数値の不備を漏れなく指摘してくれた」

「……ほう」

アウラの言葉に、細面の秘書官の目に、警戒の色が滲む。相変わらず、善四郎に対する警戒を解かないファビオ秘書官に、アウラは苦笑を隠さず言う。

「相変わらず、お前は婿殿に対する警戒を解かないのだな。婿殿には、お前が警戒するような野心はないと思うぞ」

アウラ言葉に秘書官は素直に同意を示しつつ、それでもかたくなに答える。

「はい、その意見には私も同意します。この一月のゼンジロウ様の

言動から判断しますに、あの方が政治的野心を持っている可能性は低いでしょう。しかし、それはあくまで低いのであって、無いと言いきれる根拠はありません。

なにより、あの方の知性・教養を知れば、その野心の無さがあまりにアンバランスです。この一月の態度がよくできた擬態である可能性は無視できません」

ファビオの目には、善治郎は極めて不自然な存在に見える。

平民であれば、自分の置かれている立場を理解できるはずがない。貴族であれば、能力と立場に応じた野心を持たないはずがない。

女王の伴侶という立場が、自分と周りにどのような影響を与えるのか。大枠で理解した上でなおかつ、女王の政治権力に傷をつけないうような都合のよい存在がこの世に存在するだろうか？

まあ、異世界の人間がこちらの常識に当てはまらないのはある意味当然と言えるので、もしかすると向こうの世界には普通に存在しているのかも知れない。

だが、無害で協力的な振りをして、こっそり爪を研いでいる可能性がゼロではない以上、最低でも誰か一人は警戒し続ける人間が必要だ。

「陛下は、下手に警戒されない方がよろしいでしょう。寝食を共にしている人間に内心を隠し続けるというのは極めて困難ですから。その分、私がゼンジロウ様の言動に気を配っておきます故」

「わかった。苦勞をかける、ファビオ」

「はい、陛下の側近となって以来、苦勞の日々です」

女王のねぎらいの言葉を、中年の秘書官は全面的に肯定して返した。

「……普通こういふときは、形だけでも「いえいえ、とんでもございません」とか、「陛下の為とあらばこの程度、苦勞の内に入りません」とか、答えるのではないか？」

口元に苦笑を浮かべるアウラに、ファビオは無表情のまま小さく肩をすくめ、

「事実をそのまま申し上げることが、私の役割であると自認しております」

そう、堂々と言つてのけるのだった。

事実、ファビオの耳の痛い直言には、これまで何度も助けられてきたアウラに反論の言葉はない。

アウラは一つ息を吐くと、話を元に戻す。

「しかし、この数日婿殿世界で使われている『数字』という文字を見せてもらったが、これは便利だな。何らかの形で取り入れることが出来れば、有益ではないかと考えるのだが」

善治郎がこの世界の文字を覚えると平行して、アウラも善治郎からアラビア数字の読み方と使い方について教わっている。

当然ながら、文字と言語を丸ごと覚えなければならぬ善治郎と比べ、0から9までの十の数字とその使い方を覚えるだけでよいアウラは、ずっと早くアラビア数字の使い方をマスターしつつある。

アラビア数字で筆算を行うのはまだ無理だが、アラビア数字で書かれている数を見て、そこに書かれている数字を理解できるくらいには、すでにその知識を自分の物にしている。

善治郎から借りてきたこの納税書を見れば、アラビア数字の簡単さは一目瞭然だ。

一つのたとえとして、同じ数を、アラビア数字と英語で書き比べてみれば、その違いがよく分かるだろう。

アラビア数字で表せば「2932」とこれだけですむ数を、アラビア文字で表記すると「two thousand nine hundred and thirty-two」と、実にこれだけの長文になってしまう。

納税書には、このような数字が何百と記されているのだ。その一つ一つを書き記したり、目を通すのに費やされる時間は誤差の範囲だとしても、それが何百何千と集まれば、そこに生まれる時間の差は膨大なものとなる。読むにしても書くにしても、数字を導入すれば作業は遙かに効率的になるだろうし、善治郎が言っていたとおり、無学な一般庶民にも、「文字は読めないが、数字だけは辛うじて読める」という層が生まれる可能性もある。

もともと一般庶民に数勘定ができる層が増えたとして、そのことが国や王家にとってメリットとデメリット、どちらが大きくなるかは、分からない。

希望的な意見を述べるアウラに、ファビオ秘書官は少し考えた後、答える。

「そうですね。数字が有益な存在であることは同意しますが、いきなり全面的な導入には反対です。現場に大きな混乱を招きますし、

いかにアラビア数字というのが簡単に覚えられるものであると言っても、知らないものを一から習得するというのは、それなりの負担です。

強制的に学ばせようとするれば、程度の大小は分かりませんが、反発は必至でしょう」「

「む、そうか。そうだな……」

ファビオの現実的な意見に、アウラはしばし顎に手をやり考え込んだ。

「ふむ、それならば、まずは数勘定を主としている部署に数字の読み方一覧表を配布し、今後王家が提出する資料は全て、既存の文字表記と数字表記を併記するようにするか。そうして、しばらく様子を見るといっうのはどうだ?」

「そうするには、最低でも王室付きの事務官達には、強制的に数字を学ばせる必要がありますが?」

アウラの提案に、ファビオはあくまで冷静に疑問を投げかける。

「駄目か?」

問い返されたファビオ秘書官はしばし黙考した後、首を縦に振る。

「いえ、それくらいでしたら大丈夫でしょう。早速手配しておきます」

「うむ、よろしく頼む」

アウラは、満足そうに頷いた。

一気に導入できないのはもどかしいが、この手のダイナミックな改革は、急ぎすぎると大概失敗するものだ。最悪、今後採用する新人達の初期教育にアラビア数字の習得を混ぜて、「数字を操れる人材は次世代から」と割り切った方が良いかも知れない。

当面、数字の導入による効率化は、目に見える形にはならないと思っただ方が良いだろう。

即効性のある利益を求めるのならば、数字その物よりも、数字を使って善治郎が計算してくれた、この『納税書』の内容こそが力を発揮する。

「ベルビデス辺境伯に、コルンガ男爵。ダビーノ領主騎士に、ガメス領主騎士。納税額の差異が特に目に余るのはこの辺りか」

名前を読み上げながら、アウラはペロリと赤い舌で唇を舐める。

肉食獣の笑みを浮かべる女王に、中年の秘書官は諭すように冷静な声で助言する。

「陛下。例え不正であっても、これまでは見逃されてきた慣例がございます。急激に締め付けを強めては、暴発を招きかねません」

「分かっている。いきなり、罪状を突き付けて強攻策にでるような愚行はせんよ。これはあくまで、臭わせて向こうの譲歩を引き出すための材料だ」

アウラはそう言って、少し苛立たしげに鼻の周りに皺を寄せた。

人間は面白いもので、例え明文化されている違法行為でも、何十

年という長い間、その行為が正当の取り締まられずに放置されていると、自分の違法行為が正当なものであると錯覚することがある。

そう言う認識の人間を、ある日突然、厳正に法に基づいて処罰しようとする、「これまでずっと何も言わなかったのに、何でいきなり！」と憤慨するものだ。

それは感情的な意見であるが、多数意見である場合、配慮を怠ると王といえども手痛い反撃を喰らう事になる。カープア王国における王と王家の力は、圧倒的な物ではあるが、結託する貴族の力を無視できるほどではない。

「さらに申し上げれば、陛下が今名前を挙げられた方々は、皆先の大戦で武功のある方ばかりです」

「……そうだな。彼等のあげた戦功が、我が国が戦勝国となった理由の一端を担っているのも、事実だ」

付け加えるファビオ秘書官の言葉を素直に認め、アウラは首を縦に振った。

現在残っている貴族の大半は、先の大戦を生き延びた面々である。単純に私腹を肥やすために、領民に重税を課したり、王国に払う税をごまかしたりするような無能は、ほとんどいない。そのような無能な王国に寄生するだけの貴族は、戦乱の世で家を守りきれず、たいがい没落している。

だからこそ、残った貴族達はやっかいなのだ。

先にアウラが名前を挙げた貴族達は、そうしてごまかした税を自

領の軍備にあてたのだ。その兵力が、先の大戦では、国土防衛の一翼を担ったのだから、払わなかった税も回り回って王国のために使われたと言えなくもない。

しかし、その税が正当に納められていれば、その分もつと円滑に王国軍が編成され、国軍を強化できたのも事実だ。

軍の効率化のため、国税による王軍の強化をうたう王家と、王軍ではフットワークが重く、自領防衛の役には立たないと、自領軍強化の手を緩めない地方領主。

どちらも間違っていない分、王家と地方領主の間に摩擦が生じるのは必然とさえ言える。

そうした脱税行為が黙認され、地方領主の兵力強化が進めば、国内のパワーバランスに大きな支障を来すのは、火を見るより明らかだ。

最悪でも、地方領主が連合軍を築いて王家に反乱を企てても、王国軍がそれを問題なく鎮圧できる力関係は保っておきたい。

現状、主立った地方貴族達に、無駄に王家に刃向かうような現実の見てない人間はいないが、次代、次々代の後継者達も全員有能で目端の利いた人物である保証はない。

「だが、違法行為は違法行為だ。加減はするし、彼等のメンツや名誉を傷つけないよう配慮もするが、それなりの代償は払って貰う」

きっぱりと言いきるアウラに、ファビオはしばし黙考し、

「それでは、これまでの書類の不備が発覚したと内々に通達し、今後そのような事がないように、彼等の『自主的な協力を要請する』」

という形で話を持っていくのはいかがでしょう」

そう、妥協案を提案した。

「まあ、その辺りが妥当な線か。分かった、細かい調整は任せる」

「はっ、了解しました」

話が一段落したところで、アウラはふと別な話題を振る。

「そういえば、婿殿の家庭教師はどうなった？ そろそろ、主だったところは出そろった頃だろう？」

急なアウラの問いに、ファビオ秘書官は慌てず、肯定の返事を返す。

「はい。自薦三、他薦三十一。その大多数は、高い魔力を持つ、妙齢の未婚女性です」

魔力の高い、結婚適齢期の未婚女性。あからさまな側室狙いの人選に、アウラは失笑を禁じ得ない。

「やれやれ、こちらの意図に気づかずに行っているのならばタダの無能ですむが、気づいてやっているのならばちよつと厄介だな。私はそこまで舐められているのか？」

女王の真意を無視して、女王の伴侶に側室候補を送りこむ。血統維持という大義名分があるにせよ、ある意味主君に喧嘩を売っているに等しい。

「舐められていると言うより、それだけゼンジロウ様の側室に息の掛かった者を送りこむことに、リスクを上回る魅力を感じているのでしょうか」

ファビオの言葉に、アウラは不快感に鼻を鳴らす。

「フン、婿殿は側室の背後に踊らされるほど、迂闊な人間では無いと思うのだがな」

「同感ですが、それはゼンジロウ様の実態を知っている我々だからこそ言える感想です」

「まあ、そうだな。となると、やはり、婿殿の家庭教師は、パスクアラお婆様にご足労願うしかないか」

そう言っアウラは、身体の凝りをほぐすように、椅子に座ったまま伸びをする。

そんなアウラに、ファビオ秘書官は珍しく少し口ごもりながら、口を開いた。

「いえ、それなのですが、一人こちらとしても無視できない人物が推薦されております。マルケス伯爵が、ご自身の細君であるオクタビア様を推薦されているのです。

「ご存じでしょうが、オクタビア夫人は貴族女性のかみとも呼ばれるお方。知識、教養、魔法技術、あらゆる点から見てもケチのつけようがありません。その上、既婚者ですので一応陛下の意思をくんだ形にもなっております」

「あ、あのヒヒ爺い……」

予想外の展開に、アウラは喉の奥から絞り出すような声を上げた。

知識と教養があり、魔法にも長けた、既婚女性。一見すると、アウラの意図をすべてくんだ人選である。もつとも、オクタビア夫人という人物が、マルケス伯爵の妻とは言っても後妻であり、現在まだ二十代の前半という若さで、その美しさと控えめで男を立てる人格から、ほんの数年前までは『宮廷の名花』として名をはせた人物であるという事実を無視すれば、の話であるが。

ちなみに、アウラの元婚約者候補であり、マルケス伯爵の息子であるラファエロ・マルケスは、義理の母に当たるオクタビアよりも一回り年上である。

「まさか、あのヒヒ爺、自分の妻に不倫をけしかけるつもりか？」

アウラの予想に、ファビオ秘書官は首を横に振る。

「いいえ、これはあくまで私の私見ですが、マルケス伯爵もそこまでは考えていないと思います。ただ、ご存じの通り、オクタビア夫人はこの国の常識に乗っ取った、『理想的な貴族女性』です。ごく自然に男を立て、男の自尊心を擽り、動的な自信を植え付けることに長けている方。」

そういう人物とゼンジロウ様を長時間接触させることで、ゼンジロウ様の積極性を引き出し、陛下とゼンジロウ様の間に亀裂を生じさせようとしているのでは」

控えめな美人に、褒められ、尊敬の視線を向けられ、おだてられれば、大概の男はいい気になる。「俺だってやればできる」という気分になる。そうして、善治郎の精神状態を誘導し、政治への積極

性をわき上がらせることが出来れば、貴族達にとって善治郎は使い勝手のよい、王権に直結するパイプとなる。

少々、乱暴に例えれば、善治郎を「女王の尻の下から、引きずり出す」ことが目的というわけだ。

この場合厄介なのは、背後で操るマルケス伯爵の腹は真つ黒でも、矢面に立つオクタビア夫人自身には、一欠片の悪意もないと言う点だ。

アウラがこれまで聞き及んできたオクタビア夫人の人物像が正しければ、夫人は何の悪意もなく、純粹に『家庭教師』という職務に全力を尽くすはずだ。

表面上は、善治郎の家庭教師として、最適の人選と言える。

「いかがされますか、陛下？ 適当に理由をつけてお断りすることもできますが」

こちらの真意を探るような、秘書官の不躰な視線に少し不快感を覚えつつも、アウラは首を横に振り、答えるのだった。

「いや、そこまでして伯爵の不評を買うのも得策ではないだろう。どのみち、いずれは婿殿も最低限表に出ることになるのだ。

あれも駄目、これも駄目という訳にもいくまい。背後に控えるマルケス伯ともかく、オクタビア夫人自体の人格に問題が無いのであれば、むしろ婿殿にとっても益の多い人選と言える。受け入れる」

「はっ、承知しました。では、そのように手配します」

アウラの言葉に、ファビオ秘書官は、慇懃な動作で一礼して答え

るのだった。

第三章3【家庭教師は美貌の貴婦人】

その日、後宮はちょっとした緊張感に包まれていた。

これまでは善治郎と女王アウラの他には後宮で働く使用人しか存在しなかったその閉鎖空間に、今日初めて部外者が足を踏み入れるのだ。

善治郎は、後宮の一室でソファーに深く腰を掛け、何度目になるか分からない深呼吸をする。

(しかし、家庭教師ね。この年で今更、勉強し直すとは思わなかったな。いや、社会人になってからも勉強はあつたけどさ)

社会人時代、それなりに外回りも経験している善治郎は、特別初対面の人間を苦手としているわけではないが、自分が『上』の立場で対応するのは初めてである。

外部の人間に、善治郎が持ってきた電化製品を見せるわけにはいかないのです、この部屋はごく一般的な後宮の一室だ。氷扇風機の恩恵を受けられない室温の高さに、善治郎はしきりに汗を流し、先ほどから黒砂糖と塩を適量に混ぜた水で水分を補給している。

(敬語は使っちゃ駄目、向こうが名乗るまでこっちは名乗らない。でも、極端に無礼と取られる言葉遣いや態度も厳禁、と。難しいな、マジで)

善治郎が頭の中で、これまでアウラに教えられてきた基礎的な受け答えを思い出している間に、その時はやってきた。

『失礼します。オクタビア様をお連れしました』

「ッ、通せ」

一度咳払いをしてから、善治郎は日頃あまり使わない命令口調でそう言った。一瞬サラリーマン時代の癖で、入り口まで出迎えに行きそうになったが、腰を浮かせたところで間違いに気づき、ソファーから立ち上がった体勢で、待つ。

次の瞬間、ガチャリと音を立てて、入り口のドアが開き、一人の淑女が入室してきた。

「お初にお目に掛かります、ゼンジロウ様。カープア王国マルケス伯爵領領主、マヌエル・マルケス伯爵が妻、オクタビアと申します。此度はゼンジロウ様の教師という大役を仰せつかり、光栄に存じます。無学、非才の身ではありますが、全力を尽くす所存です」

淑女は耳に心地よい柔らかな声色でそう言つと、深々と頭を下げた。

(へー、無学、非才つてこの国でも『謙遜』の美德はあるんだな)

『謙遜』は地球でも国によつては通用しない地域があると何かで読んだことのある善治郎は、そんな感想を抱きながら、精一杯威厳のある声を装い、命ずる。

「面を上げよ」

「はっ」

淑女　オクタビアは頭を下げたときと同様、流れるような仕草で頭を上げた。

善治郎は、オクタビアの顔を目の当たりにする。

（なるほど、これがこの国で『貴婦人の鏡』と呼ばれる人か。確かに、そう言われるだけのことはあるな）

華奢、清楚、貞淑。オクタビアの顔を見た善治郎の頭にそんな単語が唐突に浮かぶ。

背はあまり大きくない。善治郎から見て『普通』の高さに目線があるのだから、恐らく百六十センチくらいだろう。

だが、肩幅が狭く、なで肩であるため、実際の身長以上に華奢で小柄なイメージがある。

艶やかに光る真っ直ぐな黒髪。日本人でもめつたにいないような漆黒の瞳。そして、そんな髪や目の色とは反するように、南国人にしては色素の薄い、クリーム色に近い小麦色の肌。

鼻は高いが、全体的に顔の掘りも浅く、「日に焼けた日本人」といえば、そのまま通りそうな感じだ。

もともと、現代日本でこれほどの美人にお目には掛かりたければ、モデルや芸能人の事務所にいかないとまず無理だろうが。

「ゼンジロウだ。アウラ女王陛下の夫である。今後、どれほどの付き合いになるかは分からぬが、よい関係を築きたいものだ」

「はい。私めごとときには、勿体ないお言葉です」

善治郎が、必死に頭の中で考えたセリフを読み上げると、オクタビアは殊勝に頭を下げる。

この、下手に出ていけない相手との会話というのは、予想以上に善治郎の精神を疲れさせる。

「では、マルケス夫人の指導方針から聞こうか。座れ」

思わず、善治郎は昨日のうちに頭の中で用意していた段取りをすっ飛ばし、オクタビアに着席を促した。

「？ ツ、はい、失礼します」

善治郎の言葉に、一瞬驚きの表情を浮かべたオクタビアであったが、すぐに自分が何のためにここに呼ばれたのかを思い出し、素直にソファアーに腰を下ろした。

オクタビアが腰を下ろしたのを見届けた後、善治郎もゆっくりとソファアーに尻を戻した。

テーブルを挟み、向かい会うようにしてソファアーに座る善治郎は、オクタビアから今後どのような方針・方法で常識・マナー・魔術について学ぶのか、一通り説明を受けた。

「つまり、原則お前は私に歴史や魔術について教える。その際、私の態度にマナーや常識から外れている点があれば、その都度指摘する。そう言うことか？」

頭の中で言われた内容を纏めて口にする善治郎に、オクタビアは柔らかに微笑み返す。

「はい、常識やマナーというのは、口頭で伝えてもなかなか身につ

くものではございません。ゼンジロウ様はすでに、大枠での振る舞い方はご理解されているようですので、そうするのが得策かと存じます」

「そして、今後は昼食もお前と一緒に取る？」

「はい、会食という場合は、常識、マナーが凝縮された空間です。この二つを身につけるのは、最適であると考えました」

なるほど。言っていることは確かに筋が通っている。マナーというのはいくら口頭で言い聞かされても、身には付かないものだ。やってみて、間違えて、指摘を受ける度に、磨いていく。時間は掛かるが、それが最適なのかも知れない。

ただ、今後常識とマナーの先生に見守られながら毎日昼食を取ると思うと、いささかウンザリする。

少なくとも、ここ数日アウラと過ごしていたような、心弾む楽しい一時にはならないだろう。

「わかった。お前がそれが最善だというのならば、こちらとしても否はない。そのように取りはからえ」

善治郎の言葉に、オクタビアは柔らかく笑い、頭を下げた。

「ありがとうございます。では、早速ですが、先ほどゼンジロウ様は、私が入室したとき、ソファアールから立って私を迎えてくださいましたね？」

「あっ」

早速の駄目出しに、善治郎は思わず素の声を上げる。

オクタビアは、非難がましい口調にならないよう、細心の注意を払い言う。

「私ごときに丁寧な対応を取って頂き、非常に恐縮なのですが、ゼンジロウ様のお立場であのような行動を取りますと、『軽く見られない』恐れがあります。原則、ゼンジロウ様が立って迎えなければならぬのは、国内ではアウラ陛下ただお一人です。

国外の王族でも、王その人が第一位王位継承者以外には、あそこまで丁寧な対応をされる必要はありません。

また、ゼンジロウ様は自分が立つたまま、私に席を進めて下さいましたが、これも身に余るご厚意です。常識やマナーは時と状況で変化しますので、決めつけるのは禁物ですが、もう少し腰を落着けた対応が、王族には望まれます」

「分かった。以後気をつけよう」

表面を取り繕い、頷く善治郎であったが、内心は冷や汗をダクダク垂らしていた。

（やばい、気をつけていたつもりなのに、まだサラリーマン時代の癖が出てたか）

サラリーマンであれば、商談に招いた客が席に着くまで自分は腰を下ろさないのが、常識だ。一度身につけてしまった、癖を矯正するのは、思った以上に難しそうだ。

善治郎の内心を見抜いたのか、オクタビアは慰めるようににつこ

りと笑うと、落ち着いた声で次の話へ移行する。

「それでは、今日はまず、魔術の基礎についてご説明させて頂きます。不明な点、疑問な点がございましたら、なんでも仰って下さい。私の知識で分かる範囲で、お答えします」

「うむ、よろしく頼む」

「……ゼンジロウ様。その、頼むというのは」

「そ、そうだな。ええと……発言を許す、説明を初めよ」

早速やらかした善治郎は、ごまかすように咳払いをすると、言い直す。

今度は、合格だったらしく、オクタビアは小さく頭を下げると、耳の心地よい声で、丁寧に説明を始めた。

「では、最初に魔術の基礎からご説明させて頂きます。魔術とは、大きく二種類に大別できます。一つは、大小はあれども万人が操ることの出来る、『四大魔術』。もう一つは、特殊な血筋の方々のみが見られる『血統魔術』です」

「四大というのは、地水火風で、血統というのは『時空魔法』とかのことか？」

途中で口を挟む善治郎の態度に、オクタビアは気を悪くするそぶりも見せず、笑顔でこっくりと頷き返す。

「はい、その通りです。ただし、『血統魔術』は特定の血筋の方以

外には使えないという点を除けば、その基礎となる部分は四大魔術となんら変わりません。

魔術の発動に必要な条件は三つ。『正しい発音』と『正しい認識』、そして『正しい魔力量』です」

「発音と、認識と、魔力量？」

ちよつと聞きには、よくゲームや本で出てくる魔法その物にも聞こえるが、具体的には分からない。

善治郎の様子から、正しく理解できていないことを悟った美貌の家庭教師は、具体例を挙げて説明を始める。

「まず、魔術にはそれ専用の言語がございます。世間では安直に『魔術語』と呼ばれる言語なのですが、この言語を使用しなければ、魔術は発動しません。ご覧下さい」

そう言つて、オクタビアはピンと右手の人差し指を立てる。そして、

『中空に散らばる見えざる水は、この指先に集い、球形を取れ。その代償として我は、水霊に魔力十八を捧げる』

そう善治郎の耳には聞こえた次の瞬間、オクタビアの指先に、丸い透明な水滴が浮かんだ。

「ツツ！？」

その現象に驚く暇もなく、善治郎は頭を押させる。

（なんだ今のは？ オクタビアさんがちょっと口を開いたら、滅茶苦茶長い言葉がこっちの耳に届いたぞ？）

誓っても良いが、今オクタビアは、あんな長文を読み上げるほど、長く口を開けてはいなかった。

なにが起きたのか分からないでいる善治郎に、オクタビアは指先に作った水滴を先ほど飲み干したお茶のカップに入れると、深々と頭を下げる。

「申し訳ありません、ゼンジロウ様。今のは私が浅慮でした。魔術語は、僅かな音の強弱、アクセント、音節の切り方で、意味が変化する非常に難しい言語なのですが、その代わりに短い音に非常に多くの意味を込めることが出来るのです。」

そのため、初めて魔術語を耳にした方は、短音に含まれる多くの情報量に不快感を覚えることがあることを、失念しておりました。重ねてお詫び申し上げます。申し訳ありませんでした」

オクタビアは、そう言って白いうなじが見えるほど、深々と頭を下げた。

善治郎は、軽く頭を振って応える。

「今の話が本当であれば、どのみち魔術を習う際には、避けられない事態だったのだろう。最初の説明がなかったのは、確かにお前の落ち度だが、それは謝罪すればすむ程度の問題だ。

説明を続けよ」

謝罪を受け入れた善治郎に、オクタビアは恐縮したように応える。

「寛大なお言葉、ありがとうございます。以後、このようなことがないように、細心の注意を払います」

「うむ」

善治郎は、大げさに礼を言う貴婦人に戸惑いを覚えたが、どうにか表情には出さず、鷹揚な答えを返す。

確かにこれは、オクタビアが軽率といえば軽率だが、少々彼女が気の毒な面もある。

元々、言霊の存在が一般的であるこの世界では、音の量と耳の届く情報量が異なっていることに違和感を覚える人間は少ない。まして、頭に衝撃を覚えるほど鋭敏な感覚を持っている者は本当に希だ。そう言う意味では、オクタビアも善治郎も運が悪かった、と言える。

「では、説明を続けます。今私は、『正しい発音』を『正しい認識』で持って唱え、『正しい魔力量』を注いだ結果、『水球作製』の魔術が発動したのです。では、これから、今上げた三つを意図的に間違えて見せます」

オクタビアはそう言うと、また右手の人差し指をピンと建て、呪文を唱える。

『ウルムグオ』

善治郎の耳に、全く意味の分からない短い呪文が聞こえる。しかし、呪文は発動しない。

「今、私はわざとほんの少しだけ発音を間違えました。それだけで

意味が成立せず、呪文は発動しません。では、今度は正しい発音で、間違った認識の呪文を唱えています」

そう言つてオクタビアは、先ほど同様、ほんの少しだけ口を開き、短く言葉を口にします。

『中空に散らばる見えざる水は、この指先に集い、球形をとれ。その代償として我は、水霊に魔力十八を捧げる』

すると、今度は最初に呪文が成功したときと同様、善治郎の耳は意味のある長文が聞こえてきたが、オクタビアの指先に水滴は現れない。

「今、私は正しく呪文を唱えながら、心の中では別な呪文が発動する様を想像していました。結果はごらんのとおりです。では最後に、今度は、発音と認識を正しく行い、込める魔力量を意図的に間違えてみます」

『中空に散らばる見えざる水は、この指先に集い、球形を取れ。その代償として我は、水霊に魔力十八を捧げる』

本日四度目になる『水球作製』の呪文は、正しく善治郎の耳にその意味を伝える。だが、やはり、効果は現れない。

オクタビアは不思議そうにこちらを見る善治郎に、小さく笑つて説明する。

「今私は、『十八』の魔力を捧げる、と魔術語で言いながら、あえて『十九』の魔力を込めました。結果呪文の発動は失敗です」

その言葉に、それまでは一応納得して聞いていた善治郎が、驚き

の声を上げる。

「ちょっと待って、多すぎても駄目なの、か？」

とつさに、口調を取り繕うのを忘れかけた善治郎の問いに、オクタビアは頷き答える。

「はい。多すぎても、少なすぎても、魔法発動しません。これが、魔力消費量の多い大魔術の場合、多少の違いは誤差として見逃されるのですが、細やかな魔術ほど込める魔力の最適量は厳密です。

そのため、大魔力を持つ魔術師は、多くの場合、私が今唱えたような細やかな魔術を苦手としています。もともと、筆頭宮廷魔術師のエスピリディオン様のように、例外はいくらでもいますが」

説明を受ければ納得のいく話ではある。二百？のペットボトルを傾けて、コップにすり切れ一杯まで水を満たすのと、十リットルのポリタンクを傾けて、コップにすり切れ一杯まで水を満たすのでは、どちらが簡単かは考えるまでもない。

頭の冷静な部分でオクタビアの言葉を理解しながら、善治郎は半ば呆然と説明を聞き流していた。

善治郎としては、魔術が使えると言うことにはかなりドキドキワクワクしていたのだ。

しかし、自分のような大魔力を持つ人間は、細やかな魔術には向かないのだとすると、基本的に後宮から出ることない自分は、まともにも魔術を使う機会はほとんどないのではないだろうか？

「それは、下手に大魔力を持つと、一般的な魔術の習得にはかえって向かない、ということか」

「はい。事実、アウラ陛下は、時空魔法以外は、火系統の戦場用広域殲滅魔法しか使えないと聞いております。」

もつとも、そう言った大魔術は、込める魔力が多いだけでなく、呪文も極端に長いので、正確に発音出来るようになるまで、一つ習得するのに半年以上も時間をかけたという例も珍しくないようです」

聞けば聞くほど、善治郎が魔法を使えるようになる日は遠そうだ。

「では、率直に聞くが、今日から学び初めて、私が魔法を発動できるようになるまで、どれくらい掛かる？」

いつの間にか、教養やマナーの勉強が主題であることを忘れ、善治郎はオクタビアにそう問う。

オクタビアは、善治郎が何を望んでいるのか鋭敏に察したが、教師役を引き受けた身として、嘘をつくわけにもいかず、華奢な身を縮こませ、首をすくめて応える。

「それは、その……正確に魔力を込めるには、まず己の魔力を自覚して、それを自在に操作できるようになる必要があります。通常、魔力を自覚できるようになるまで二年、その操作に一年が相場とされております」

「……三年」

呻くように言葉を漏らす善治郎に、オクタビアは慌ててフオーロ―する。

「あ、でも、そこを過ぎれば、あとは比較的簡単です。正しい発音

を覚えて、正しい効果を鮮明に脳裏に描いて、正確に魔力を込めるだけです。簡単な呪文なら一日で使えるようになります」

その簡単な呪文が、大魔力を持つ善治郎には不向きだと先ほど言ったばかりであることを思いだしたのか、途中で言葉に勢いをなくしたオクタビアは、申し訳なさそうに上目遣いで善治郎を見る。

その視線が、善治郎の頭を冷やしてくれた。

考えて見れば、そもそも自分が魔術を覚える必要はないのだ。ただ、大魔力を持つ王族のたしなみとして『覚えておいた方が良い』というだけなのだから、習得に三年、五年と時間が掛かっても問題はない。

（どのみち、魔法を覚えても、俺の生活に役立つことはなさそうだしな）

この時点では、自分の血統に流れる特殊魔法『時空魔法』の可能性を知らされていない善治郎は、安易にそう魔法の可能性を切っ捨て捨てる。

「分かった。では、ゆっくり焦らずにやっつけていこう。よく、指導してくれ、オクタビア」

「はい、お任せ下さい、ゼンジロウ様」

どうしたのか分からないが、短い時間で立ち直った女王の伴侶に、美貌の女家庭教師は、誠意を籠もった言葉と、柔らかな笑みで応えるのだった。

第三章4【妻の追求、夫の告白】

オクタビアを家庭教師に迎え、最初の講義を無事終えた日の夜。数時間に及ぶ緊張の時間から解放された善治郎は、妻であるアウラと二人、後宮の一室でくつろぎの時間を過ごしていた。

湯上がりの善治郎は、いつも通り缶の発泡酒。一方、アウラは、ブランデーを注いだグラスを顔の前に持ってきて、その芳醇な香りを楽しんでいる。

数日掛けて白ワインを一瓶飲み終えたアウラが、次に選んだのがこの箱入りのブランデーだ。どうやら、この世界では蒸留酒の類は一般的ではないらしく、最初はブランデーのアルコール度数にむせていたアウラであったが、飲み方が覚えた後は、ワインよりも美味そうに飲んでいる。

善治郎がうる覚えの知識で「確かブランデーは、常温ストレートが常道だったはず」と教えた通り、何も入れずストレートで飲んでいる。

LEDライトの明かりにブランデーグラスを透かし、琥珀色の影を目で楽しみながら、アウラはその中身を少しずつ喉へ流し込む。

「なあ、それって美味しいの？」

善治郎の問いに、アウラは満足げに首を縦に振り、答える。

「うむ。驚くほど香りが高く、味が濃い。飲み慣れると、やみつきになるな」

「へー、そう言うもんかね」

正直に白状すれば、ブランデーとウィスキーの違いもろくに分からない善治郎には、アウラの感想が理解できない。だが今アウラが飲んでいるブランデーは、ヘネシーのXOとか言う名前前で、一本一万円以上した代物である。分かる人には分かるのだろう。分からない人である善治郎は、冷たい発泡酒で満足だ。

アウラは、飲み干したブランデーグラスをいったんテーブルの上にも戻し、隣に座る夫に話しかける。

「それで、どうであつた？ 感想を聞かせて貰おうか」

唐突にそう話を切り出すアウラに、善治郎は少し意表を突かれたが、発泡酒の缶を口から離して素直に答える。

「ああ、そうだな。一言で言うと「覚悟していた以上に疲れた」ってところかな。礼儀やマナーがなつてない点を何度も注意されたよ。特に昼食は、ほとんど何を食べたのか覚えていない」

「苦勞を掛けるな」

「いいって、必要なことなんでしょ？ それに、魔法の講義は面白かったし。まあ、使えるようになるまで三年以上かかるって聞いたときは流石にちょっとへこんだけど」

善治郎はそう言つて、アウラに向かい、缶を持っていない方の手をヒラヒラと振った。

実際、魔法を目の当たりにして興奮したのは事実だ。

この世界を行き来したのも歴とした魔法なのだが、いかんせんあ

れは当事者であったため、魔法が発動するところを見ていたわけではない。それに比べて今回オクタビアが見せてくれたのは、指先に水を球状に止めるという、非常に分かりやすい魔法だ。

魔法としての説得力は、こちらの方が何倍も勝っている。

「まあ、魔術に近道はないからな。身につけたいのであれば、地道に努力するしかない。逆を言えば、時間さえ掛ければ誰でも習得できる技術でもある。最後までやりきる覚悟さえあれば、決して無駄な努力にはならんぞ」

アウラはそう言うと、励ますように隣に座る夫の腕をその深い胸の谷間に抱きとる。

「アウラ……」

そして、柔らかい感触に眉尻を下げる夫の意表を突き、女王は少し意地の悪い笑みを浮かべ耳元で囁く。

「して、オクタビア殿はどうであった？ やはり、お前の目にも魅力的に映ったか？」

妻の口から漏れた、別な女の名前。男の常か、善治郎はやましいことは何も無いはずなのに、反射的にビクリと身体を震わせる。

「んん？ どうであった？」

逃げられないよう、ガツチリと腕を抱いたまま、なおも問いかけてくるアウラに、善治郎は視線を天井に這わせながら、答える。

「あー、うん。確かに綺麗な人だし、人当たりも凄く良い感じだよ

ね。ああ、こついうタイプが、この国では人気なんだって、凄く納得した」

「……ほう」

短く返すアウラの返事は、心なしがいつもより少し低い気がする。

「それは、お前の目にも好ましい女に映ったと言うことか？」

アウラも自分に自信がない訳ではないが、オクタビアとは正反対の人間である自覚はある。思わず、探るような口調になってしまう。そんな妻の機嫌の悪化に気づかないほど、善治郎は鈍い人間では無い。

「いや、確かにストライクはストライクだけど、外角低め一杯って感じかな。下手に手を出してスイングを崩したら」ど真ん中の剛速球』を打ち返すのに支障が出そうないメージ」

しかし、慌てた頭で紡いだ言い訳は、この世界の人間には全く理解不能な代物であった。それでも、口調と全体のニュアンスから善治郎の言わんとしていることを悟ったアウラは、ニンマリと笑うと、より直接的な言葉を求め、再度問い返す。

「つまり、どういうことだ？ もう少しはっきりと言ってくれ」

はっきり言ってくれと言われても、「言えるか」というのが、善治郎の正直な感想だ。ここで「僕が愛してるのは君だけだ」とか「君の方がずっと綺麗だよ」などと言えるほど、善治郎は羞恥心を見ることができる人間ではない。

「ん？ ほら、はつきりと、な？」

楽しそうに自分の腕を抱いて揺さぶる妻に視線を向けず、善治郎は天井に目を向けたまま、己の羞恥心と妻の要望の間を取り、精一杯の答えを返す。

「ええつと、その……だから。最初に召喚されたあの日、俺を召喚したのが、アウラじゃなくてオクタビアさんだったら、俺は今頃この世界にはいなかったってということ」

言いながら善治郎は、自分の頬が紅潮していることを自覚する。この答えで、アウラは満足してくれるだろうか？ 首は上に向けたまま、視線だけを横に向けた善治郎の視界で、アウラの赤い長髪がゆらりと揺れる。

「ふ……ふふふ、そうか。そうか」

嬉しそうに笑う、アウラの声。

どうやら、善治郎の答えは、アウラの心を震わせるのに十分なものだったらしい。

「私も、召喚されたのがお前であったのは、この上ない幸運であったと思っっている」

アウラはそう言って善治郎の頬に、熱く濡れた唇を強く押しつけたのだった。

深夜。いつもの通り、夫である善治郎と仲むつまじく一つのベッドで眠りについたアウラは、真夜中過ぎに目を醒ますと、静かに寝息を立てる善治郎を起こさないよう、細心の注意を払いベッドから降りた。

寝室にもLEDスタンドライトは設置してあるが、善治郎が寝ている手前スイッチを入れるわけにはいかない。

アウラは、真っ暗な中手探りで衣類を探す。やがてアウラの手が、柔らかく薄い布地を探り当てた。

アウラはそのやけに肌触りの良い、薄い服　赤いスケスケのネグリジエを手を持ち、こみ上げてくる笑いを堪える。

床につく前、こちらの問いに嬉しい答えを返してくれた夫への感謝を込めて、この扇情的な夜着を纏って見せたのだが、その時の善治郎の反応は、『デジカメ』とやらに納めておきたいくらいに楽しいものだった。

「ウエエ!？」

と言葉にならない悲鳴の様な声を上げて、硬直した夫を前にして、アウラは失礼としりながら、笑い声を堪えることが出来なかった。

善治郎も、その『エツチな夜着』の存在がアウラにはれていないとは思っていなかったようだが（転移初日に丸ごと持ち物検査をされているのだ）、アウラの方から自主的に着て見せたのは、かなり効果的な奇襲であったようだ。

恥ずかしい衣装を身につけているのはアウラの方なのに、顔を真っ赤にして羞恥と戦っているのは善治郎という何とも奇妙な状況となった。

それでも、妻の妖艶なネグリジェ姿に善治郎は十分に刺激を受けたのだろう。

昨夜の営みは、これまで過ごしてそれと比べても少し激しく、少し長かった。

「……………」

夜の営みを思い出し、頬を緩めながら、アウラはスケスケネグリジェではなく、寝る前に着ていたワンピース型の部屋着を探り当てる。部屋着を手に持ったアウラは、善治郎を起こさないよう、足音を忍ばせて、ゆっくりと寝室から出て行った。

寝室から、善治郎が昼間主に使用しているメインルームへと移ったアウラは、LEDスタンドライトを一つだけ点灯させ、その明かりの下、素早く部屋着を着込む。

蒼い袖のないワンピースを着込んだアウラは、革張りのソファに腰を下ろすと、テーブルの上に供えてあるベルを鳴らす。

すると、しばらくして一人の若い侍女が部屋に入ってきた。手に持つ蝋燭立ての明かりを頼りに、暗い廊下を渡ってきたのだろう。薄闇になれた目にはLEDの明かりが眩しいのか、少し眼を細めている。

カープア王国の人間には珍しい、長い金髪が印象的なその侍女は、元はアウラの側仕えであり、今は善治郎の一番近いところで働いている人物である。

「失礼します、陛下」

恭しく頭を下げる侍女にアウラは一瞥をくると、ソファアの上で足を組み、言う。

「報告を聞こう」

主君の言葉を受け、忠実な侍女は今日自分が見てきたことについて、できるだけ私心が混ざらないように気をつけて、話し始める。

「はい。私が見た範囲では、オクタビア様に不審な様子は見受けられませんでした。誠実に、ゼンジロウ様の家庭教師役を務められていた模様です」

昼間、水やタオルの差し入れなどで、善治郎とオクタビアの勉強風景に何度も足を踏み入れていたその侍女は、しっかりとした口調でそう報告する。

「うむ、そうか。やはり、オクタビア殿はただの偵察要員かな？」

報告を受けたアウラは、独り言のようにそう呟いた。

元々オクタビアは、はかりごとには向かない真つ直ぐな女だ。マルケス伯爵としては、妻の目を通して、問題の『女王の夫』の人となりを知ることが主目的だったのではないだろうか。

油断は禁物だが、今から神経質になることもないだろう。

「分かった。今後は、オクタビア殿に不審な言動があった場合だけ、報告を入れよ」

「はい、畏まりました」

頭を下げる侍女に、アウラは「うむ」と頷き、話を続ける。

「では、このところ嬪殿はどのように日々を過ごしている？ 誰か、手つきになつた者はいるか？」

歴代の王の中で、後宮の侍女に手を出さなかつた者はむしろ少数派である。まして、善治郎は後宮に通う歴代の王と違い、後宮に住んでいるのだ。

若く見目麗しい侍女達に、色目を使わないほうが不自然なくらいである。

しかし、侍女は少し困惑したように、首を横に振り答えるのだった。

「それが……今のところゼンジロウ様に、手を触れられた者はおるか、女を意識させるような目を向けられた者も皆無です。そもそも、ゼンジロウ様はお部屋に私達が立ち入る事を嫌う傾向がございます。ですから、私たちは用事を仰せ使わされた時以外は、この部屋に足を踏み入れないようにしております。逆に、この部屋のお掃除をするときは、ゼンジロウ様は別なお部屋に移動されます」

侍女が部屋を掃除するから、部屋を移動する。主人と侍女の関係で考えればあり得ない話だが、この辺りはどうしても善治郎がまだ、日本での生活習慣が抜けていないのだろう。

言うならば、お母さんの掃除機に追い立てられるお父さんのような感覚である。

侍女の報告に、アウラは頷き、指示を出す。

「そうか。何度も言うようだが、婿殿はあれが欲しい、これをして欲しいという自己主張が弱い御仁だ。そうした欲求を口にすることを『悪徳』と捉えている節がある。仕える人間としては、難しい類だろうが、なんとか意をくみ、要求を満たすように努力をしてくれ」

「はい。畏まりました」

「よし、もう良いぞ。ご苦労だった」

「はい、失礼します」

報告を終えた侍女は、一礼をして部屋から出て行く。

パタンと音を立てて侍女が出て行った一室で、アウラは一つ息を吐く。

「…………喉が渴いたな。水にしておくか」

ふと、喉が渴いていることを自覚したアウラは、寝室に戻る前に水を一杯呑もうと、冷蔵庫を開け、銀の水差しを取り出す。そして、水差しから、コップに一杯水を注ぎ、水差しはまた冷蔵庫の中へと戻す。

「ふっ」

一息で冷水を飲みほしたアウラは、一つのLEDライトだけで照らされる、薄暗い部屋の中で、独り言をつぶやく。

「そうか……ゼンジロウは、オクタビア殿にも侍女達にも、目もくれぬ、か」

アウラは無意識のうちに、両腕で自らの身体を抱く。

今夜も、何度も善治郎と愛し合った身体だ。まだ、身体のうちこちに、夫の指や唇が触れた感触が残っている。善治郎と言う男が、どれだけ情熱的に女を求めるか、アウラは身体で知っている。

それなのに、そんな男が、自分以外の女には目もくれないという事実。

「ふ、ふふふっ」

知らずにアウラは、笑いがこみ上げる。この感情を何と言い表せばよいのだろうか？

異性に愛されるというのが、これほど心地よいものであるとは、思いもしなかった。

王として政務で得られる充実感とも、将として戦場で勝ち得た勝利の美酒とも違う、この身体の奥底からわき出す熱気。

いやらしい言い方をすれば、それは一種の『優越感』だ。一人の男が自分だけ女としての魅力を感じているという、喜び。自分を最高の女だと認めてくれる快感。

「まずいな。なんだか、独占欲が出てきた」

この感情におぼれてしまうと、今後善治郎が側室を迎える事態に陥ったとき、反射的に感情だけで反対してしまいそうだ。

アウラは、自分の思いのままにならない感情に戸惑いを隠せない。さらに意外なのは、その暴走する感情が、アウラにとってとても心地よいものであると言うことだ。

「まあ、いい。先の可能性について、今から心配する必要もあるまい」

アウラは頭を振ると、LEDスタンドライトを消し、手探りで寝室のドアを開く。

寝室へ戻ったアウラは部屋着を脱ぎ、ゆっくり寝息を立てている善治郎の横に、その豊かに実った褐色の裸体を滑り込ませる。

「ふふふっ」

アウラは、こちらに背を向けて寝る善治郎の背中に、裸の両乳房を押しつけるようにして、抱きつく。

「……んん」

男の背中としては、特別広い方ではない善治郎の背中に、アウラは不思議な位の安らぎを感じる。こうしていると、「帰ってきた」という穏やかな気持ちになる。

事実、そうして善治郎の背中に抱きついたアウラが、安心しきった表情で熟睡するまで、そう長い時間はかからなかった。

第三章5【一番穏やかな時間】

善治郎がオクタビアの教育を受けるようになって数日後。

一足先に公務に向かった愛妻を見送った善治郎は、オクタビアの授業までの隙間時間を、パソコンに向かい、有効利用していた。

パソコンで再生している動画は、アウラに協力してもらって作製した、善治郎用の教養・マナー講座である。

デジカメの動画機能で録画した音声には『言霊』が働かないという問題点があったのだが、ちよつと考えて見れば、その解決方法は極めて簡単であった。

アウラが説明した内容を、その場でそっくりそのまま、善治郎が日本語でオウム返しに繰り返せば良いのである。

『 Cuando se invitó al baile ; a
un compañero baila primero
uno el pedazo y último uno el
pedazo.....』

『 ええと、ダンスパーティに招かれた時は、最初と最後の一曲を踊る相手に.....』

パソコンで再生される画像からは、聞き取れない現地語で話すアウラの声に遅れて、日本語で話す自分の声が聞こえてくる。

機械で再生された自分の声を聞くとというのは、あまり気持ちの良いものではないのだが、利用価値が高いのは間違いない。

そうして善治郎が、パソコンで教養・マナーの復習をしていると、入り口のドアがノックされる。

『失礼します、ゼンジロウ様。オクタビア様がおいでになりました』

「ッ、わかった、すぐ行く」

侍女の声に、善治郎はパソコンの電源を切り立ち上がった。パソコン、腕時計、携帯電話と正確な時計を複数持っている善治郎であるが、分単位で時間を守るのが善治郎一人のため、細かな時間を気にする意味はあまりない。

「よっし、それじゃ行きますか」

善治郎がドアを開けて廊下に出る。そこには見慣れた金髪の侍女が丁寧に頭を下げていた。

最初は、かなり戸惑っていた善治郎も、今ではある程度使用人達の慇懃な態度にも慣れてきている。

「ご苦労様。それじゃ掃除よろしく」

「はい、畏まりました」

善治郎の意図をくみ、可能な限り善治郎がいる部屋には入っていない侍女達を、善治郎は『ホテルの従業員』のように捉えることで、適切な距離を計っている。

善治郎の言葉や態度は、後宮の主としては少々気安すぎるのだが、流石に『自宅』とも言つべきこの後宮まで、取り繕った態度をとり

続けるのは、無理がある。幸い、後宮の使用人達はアウラが厳選した信頼の置ける口の堅い人間達だ。ある程度、砕けた態度を取っても、問題はないだろう。

（昨日の復習は一通り済ませたから、なんとか午前中のうちに教養とマナーの講義を終わらせたいな。そうすれば、昼休み明けから夜までの時間を魔法の講義に当てることが出来るしな。ああ、昼休みは三時間以上あるんだから、アウラと合流できればそこで魔法の予習復習も済ませておくか。その方が、午後の魔法講義もはかどるだろ）

そうやって今日の予定をきっちりと効率的に立てながら、善治郎は行く。

隙間時間を復習にあて、授業の内容を前倒し。昼の休み時間に午後の魔法講義の予習も済ませて、さらに効率化を図る。

やはり、二十四年間培ってきた『勤勉』と『真面目』を美德とする価値観は、今更書き換えようがないのだろうか。

善治郎は、ヒモ志願者であった自分を一時的に忘れたかのように、与えられた責務を『可能な限り効率的に果たす』よう、計画を立てていた。

善治郎がオクタビアの講義を受けている間に、侍女達は善治郎が普段使っているメイnlームと寝室の清掃に取りかかっていた。

王宮付きの侍女として、恥ずかしくないだけの高いスキルもを持

つ彼女たちであるが、ここの掃除は他とはちょっと勝手が違う。

「分かっていますね？　ゼンジロウ様の私物は原則から拭き、水拭きは厳禁ですよ」

「はい！」

掃除担当侍女の全体責任者らしい、上品な中年女性の声に、若い侍女達は澁刺とした返事を返す。

侍女達全員に、電化製品の詳しい取り扱い方を教えるのは無理がある。そう、悟った善治郎は、あらかじめ侍女達に「掃除はから拭きだけで十分。水拭きは辞めて」と伝えていた。

実際には、水拭きが危険な部位は全体の一部なのだろうが、それをいちいち侍女達に教えるくらいならば、自分でやった方が早いというのが、善治郎の感想である。

自らも手を動かしながら全体の動きを見張っていた中年の侍女は、テキパキと掃除を続けている風に見える若い侍女達三人組をジロリと睨み、大きな声を上げる。

「その！　テーブル前だけ、何人がかりで掃除をしているのです！　？　そこは一人で十分です。すぐに終わらせない」

中年侍女の叱責に、パソコンが設置されたテーブルを丁寧に拭いていた三人は、ビクツと首をすくめる。

そこは、つい先ほどまで善治郎が座っていた場所である。つまり、稼働中の扇風機と、まだ溶けきっていない氷塊が置いてある場所だ。

冷凍室の中では、すでに金だらいで次の氷塊を作っている最中だ。善治郎が戻ってくる昼休みまでには、完成していることだろう。そのため、善治郎はこの使いかけの氷は、侍女達が好きに使っても良いと許可をしていた。

ついでに言えば、冷蔵庫の中で冷やしているタオルも、分別を守った範囲であれば、使用を許可している。

周りにいる侍女達がこまめに汗をぬぐうのは、善治郎の環境を快適に保つ上でも意味のあることである。

「いくらゼンジロウ様が、残りの氷は好きにして良いと仰っても、それは仕事をちゃんとやった上でのお話です。仕事をさぼって主の道具を使い涼を取るなど、言語道断です」

中年侍女はそう言うと、無情にも部屋の木戸を開け放つ。

途端に窓は、ムツとするような熱風が部屋の中へと吹き込んできた。

「きゃっ!?!」

「やだ、もうちょっとだけ」

「ああ、氷が、私の氷が溶けちゃっ……」

途端に掃除の振りをして、冷風を満喫していた侍女三人は、大げさなりアクションで嘆き悲しんでみせる。

午前中は比較的過ごしやすいとは言っても、それでも気温は辛うじて体温よりは低い程度だ。

悲鳴を上げる侍女三人に、中年の侍女は年を取ってまだ細いままの腰に両拳をあててプリプリと怒る。

「何時までもふざけているではありません。日の光にさらさないと、汚れている場所が見えないでしょう。スタンドの灯りを消しなさい。消し方は分かっていますね？」

有無を言わさぬ中年侍女の言葉に、若い侍女達は諦めたように仕事に戻る。

「はい」

「それじゃ、私はあっちの絨毯をぞうきんがけするわ」

「ああ、氷、私の愛しい氷……」

どうにか仕事に戻った問題児三人組を見守り、中年侍女はホッと溜息をついた。

「まったく、この子達は。ちょっと眼を離すと、たがが緩むのだから」

後宮勤めを仰せつかった当初は、彼女たちも緊張で身をガチガチに強張らせ、異世界から来たという主の不評を買わないよう細心の注意を払っていたのだ。

しかし、いざ蓋を開けてみると、女王の婿という人物は、拍子抜けするくらいに手の掛からない主だった。

我が儘は言わない。多少のミスは笑って許す。そもそも、滅多なことでは侍女を呼びつけない。おかげで、若い侍女達は一月もしないうちにこの様だ。

この三人は、中でも特に「緩い」部類だが、同様の懸念は若い侍女全体に言えることである。

「ほんと、嘆かわしい。これが、栄えある後宮勤めの侍女達だなんて」

中年侍女は、革張りのソファを手際よく雑巾でふきながら、つぶつと不満の声を漏らしていた。

メインルールの掃除が終われば、次はベッドルームである。

「うわあ……」

「昨日もか……」

「陛下達、仲良しさんだねえ」

善治郎とアウラの寝室に入った侍女達は、毎日の事ながら、ベッドから立ちこめる匂いに、微妙に引きつった笑いを浮かべていた。

ベッドのシート。横の籠に入れてある、昨夜使用した夜着や下着。そこから漂う匂いが、昨晚も女王陛下とその嬪殿が、この部屋で思い切り仲良く過ごしたことを物語っている。

「結構なことです。この様子でしたら、早ければ来年にもお世継ぎが期待できるかも知れませんか」

一方、中年の侍女は一人そう言って満足げに頷いている。

確かに、王国の一国民としては、女王と婿の仲がよいことは嬉しいのだが、己の美貌にある程度自負のある、若い侍女達にとっては少々複雑な感情もある。

南国であるカープア王国の侍女服は、北部諸国のそれと比べて随分と薄着だ。

明るいブルーのスカートは膝丈くらいまでしかないし、腕は完全なノースリーブである。流石にバストやウエストラインがはっきりするような、無駄に扇情的な作りはしていないが、若い侍女が着れば結構魅力的に見えるはずなのである。

それなのに、彼女たちの主は、今日まで彼女たちに指一本触れようとしてこない。

よほど女に淡泊な質なのだとすればまだ納得もいくのだが、女王陛下との夜の営みにはこの上なく積極的であるという『物証』が毎朝寝室に転がっている。

別段、女王の婿の『お手つき』になることを望んでいるわけではないのだが、こつも水を向けられないと、少し女としてのプライドが傷つく。

「ほら、あまり時間がありませんよ。手早く、済ませましょう。シャツを交換して。汚れた夜着を洗濯に回して、洗濯を終えたものを衣装箱に戻しなさい」

「はい」

「分かりました」

「ふー、寝室はちょっと涼しい……」

メインルームと比べれば、寝室は狭い上にもものも少ない。洗濯物やシーツの交換の時間を合わせても、寝室の手入れはメインルームのそのの半分以下だ。

侍女達は慣れた手つきで、己の職務を果たすのだった。

その日の午後。今日もオクタビア先生との味わう余裕のない昼食会を済ませた善治郎は、午前中のうちに綺麗に清掃を終えた後宮のメインルームで、アウラと安らぎの時を過ごしていた。

まだ昼と言うこともあり、二人が持つグラスに入っているのは酒類ではなく、氷を浮かべた水や果実の絞り汁だ。

善治郎は講義で、アウラは政務で疲れた頭を休めるように、二人は寄り添うようにソファアに座り、テレビを見ている。

テレビから流れてくる音声は、当然ながら日本語で、言霊も働かない以上アウラには理解不能であるはずなのだが、現在二人が見て

いる画像には、音声はあまり関係ない。

しばらく黙って画面を見ていた後、「よし、分かった!」と声を上げたのは、アウラの方だった。

「嘘、また? 言うなよ、絶対言うなよ!」

先を越された善治郎は、悔しそうに驚きの声を上げると、食い入るように画面に映る風景写真に見入る。

その写真のどこか一部が徐々に変化しているはずなのだ。それを制限時間内に当てるとというのがこのゲームの趣旨なのだが、今のところ持ち込んだ善治郎よりも、今日始めてやるアウラの方が遙かに勝率が高い。

やはり、観察力と注意力の差だろうか。

「うむ、言わぬ、言わぬ。画面右端に映っておる薄紅色の花は、今が見頃だろうなあ」

「うわああ! アウラ、お前、性格悪ッ!」

ゲームを楽しむ二人の顔には、外では見せないリラックスした表情が浮かんでいた。

その後。テレビとゲームの電源を切り、静かになったメインルームでアウラは氷水を入れたグラスを傾けながら、隣に座る善治郎に

声を掛ける。

「で、講義の進み具合はどうだ？ 昨夜の話では、そろそろ教養とマナーに関しては合格点がもらえそうだとの話であったが」

アウラの問いに、善治郎は満足げに頷き答える。

「ああ、一応午前の講義でその辺りは、合格をもらったよ。まあ、最低限外に出ても恥をかかないってレベルらしいけど」

「ほう、それは良かった。では、午後の講義は魔法のみか」

アウラは笑顔でそう答えつつ、内心想う。

相変わらず、この嬪殿は勤勉だ。本人にはその自覚がないようだが、与えられた任務に対し、己の力量が及ぶ範囲で最善の結果を出すことを、当然と考えている節がある。

アウラの部下にもこの手のタイプは何人かいるが、実はこういった人間を使いこなすのは意外と難しい。努力を惜しまないので、使い勝手はよいのだが、弱音を吐くのが下手なため、上役が上手に仕事を割り振ってやらないと、壊れるまで一人で仕事を抱え込んでしまっ悪癖があるのだ。

そんな妻の内心を知らない善治郎は、笑顔で言う。

「うん、そうなんだ。だから、今のうちにちょっと、魔法について教えてもらえるかな？ 確か、魔法の一番ネックとなるのは、効果の持続性が極端に低いつて事なんだよね？ で、その弱点を最初から克服しているのが双王国の『付与魔法』と、俺達カープア王家の

『時空魔法』だって聞いたんだけど、それってつまり、時空魔法はその名の通り、空間だけじゃなくて時間にも作用するってこと?」

早速、午後の授業の予習を始める婿殿に、アウラは苦笑を隠さずに言葉を返す。

「こらこら、講義の話は講義が始まってからにせよ。今、お前の横にいるのは、教師であるオクタビアではなく、妻である私だ」

教養とマナーに関して、最低限の合格点をもらったと言うことは、いよいよ善治郎も公務や大規模な社交界に姿を現す事になると言うことだ。今後はもっと忙しくなると言うのに、今からそんなに頑張り続けていては、長く持たない。

「あー、うん、そーだね。うん、そーだった」

右腕に押しつけられる柔らかい愛妻の肢体に、眉尻を下げた善治郎の頭の中から、昼間のうちに確認しておこうと思っていた魔法に関する疑問点が、スルリと抜けて行く。

隣り合って座るアウラは、善治郎の右肩に顔を乗せ、善治郎は背中から回した腕でアウラの肩を抱き、グッと抱き寄せる。

「スウ……」

「ふむ、寝たか……」

夫が眠りについたのを確認した女王は、小さく笑うと静かに寝息を立てる夫の腰に腕を回し、自らも目をつむる。

「クー……」

やがて、女王夫婦は身を寄せ合ったまま、睦合いで不足している夜の睡眠時間を取り戻すように、そろって寝息を立て始める。

女王の婿、ゼンジロウの社交界デビュー数日前。善治郎は、まだ穏やかな時間を過ごしていた。

幕間3【それぞれの思惑】

善治郎の社交界デビューが決まった数日後、王宮を後にしたオクタビアは、王宮にほど近いマルケス伯爵家の王都屋敷を訪れていた。

白い大理石のような石材をふんだんに使い、アーチを多用したその建造物は、素人が一見しただけで分かる、王宮と同時代の建造物である。

王宮と同時代から存在する、王宮に極めて近い位置に立つ本屋敷。その存在は、マルケス伯爵家の王国における立ち位置を端的に示していると言える。

「ここで止めてください。少し歩きます」

二頭立ての立派な竜車で屋敷の門を潜ったオクタビアは、竜車の中から御者席に座る従者達にそう声を掛ける。

「畏まりました」

護衛を兼ねている中年の御者は、そう短く答えると、慣れた手綱さばきで静かに竜車を止めた。

「足元にお気をつけ下さい、オクタビア様」

「有り難う、貴女もね」

オクタビアは、年若い侍女に手を取ってもらい、竜車から降りる。今は一年の中で一番暑い季節だ。攻撃的なまでの日差しに思わず眼を細めるオクタビアであったが、門の内側は外と比べると五度以

上気温が低い。

庭のあちこちに水を湛えた人工池を設置し、水面から屋敷向かって風が流れるように、樹木を植えている影響だ。

現代日本人ならばともかく、カープア王国生まれのカープア王国育ちであるオクタビアにとっては、不快に感じるほどの気温ではない。

オクタビアは、前後左右を腰に剣を下げた護衛と、お付きの侍女に固められていることをごく自然に受け入れた様子で、門から屋敷正面入り口までの短い道のりを、静かに歩み進む。

門から入り口までの道は、照り返し対策として赤茶色の石畳が敷きつめられており、その両脇には色鮮やかな花をつけた南国風の樹木が立ち並んでいる。ハイビスカスを思わせるような赤や黄色の大きな花だ。

カープア王国の色彩は、自然物に限らず華やかなものが多い。

オクタビアが今着ているロングドレスも、光沢のある明るい青色だ。形こそ身体のラインをあまりあらわにしない落ち着いたものが、その色合いは現代日本人の感覚で見れば『派手』と呼ばれる部類に入るだろう。少なくとも、オクタビアのような二十代中盤近くの既婚者が日常的に着る服ではない。

やがて、オクタビアが屋敷の正面入り口までやってくると、大きな両開きの扉はオクタビアが何か言う前に、ゆっくりと内側から開かれる。

扉の向こうでは、ドアを押し開けた屈強な男二人と、上品な初老の男が立っていた。

「お帰りなさいませ、オクタビア様」

いつもと変わらぬ落ち着いた声で迎えてくれた王都屋敷の老執事に、年若い伯爵夫人は笑顔で答える。

「ただいま、セルリオ。あの人は、いつもの部屋ですか？」

「はい。お館様は、二階でお待ちです」

「そうですか。では、着替えて埃を落とした後、すぐに向かうと伝えて下さい」

「はっ、畏まりました」

「よろしく、お願いします」

恭しく一礼する老執事を労うように、オクタビアはフワリと笑うと、侍女を引きつけて軽い足取りのまま、屋敷の奥へと消えていった。

それから約半時間後。オクタビアは屋敷の一室で、夫であるマヌエル・マルケス伯爵と半月ぶりの対面を果たしていた。

「お帰り、オクタビア」

年期を感じさせる木製の椅子から立ち上がったマルケス伯爵は、

両手を広げて、二回り年下の愛妻を迎える。

マルケス伯爵は、恰幅の良い中年貴族である。

年の頃は、四十代の中盤から五十代の前半くらいだろうか？ 背はあまり高い方ではない。百七十二センチの善治郎と並んでも、恐らくほとんど差がないだろう。腹回りは年齢相応に太くなっているが、短く切り揃えられた頭髪と、綺麗に整えられた口ひげが、艶やかな黒色を保っているためか、実年齢より若く見える。

「お久しぶりです、あなた」

飾らない素の笑顔を夫に見せたオクタビアは、そのまま軽く抱擁を受ける。恰幅の良い夫と、華奢で小柄な妻はしばし抱擁をした後、部屋の隅に設けられた席に向かい会う形で腰を下ろした。

窓から差し込む日差しは相変わらずの暑さだが、窓の下には流れのある水堀が設けられているため、部屋を吹き抜ける風は意外と涼を運んでくれる。

恰幅の良いマルケス伯爵は、侍女に持ってこさせた冷茶で喉を潤すと、少し真面目な表情で、話し始めた。

「ご苦労だったね、オクタビア。急な依頼ですまなかった」

「いえ、尊きお方の教育役という大任を仰せつかったのですもの。お礼を言うのは私の方ですわ」

「そうか。うん、そうだね」

相変わらず、毒気の欠片もない妻の返答に、マルケス伯爵は表情

を取り繕うことなく苦笑を漏らす。

一般に上流社会の女は、言葉と表情を取り繕うことに長けているというが、この年若い後妻は、数少ない例外だ。もし、彼女の言動が全て演技だったとすれば、マルケス伯は深刻な女性不信に陥るだろう。

「それで、ゼンジロウ様はどのような方だった？ お前の忌憚ない意見を聞かせてくれ」

「はい、とても感じの良い方でした。学習意欲も高く、人間的にも信頼の置ける方だと思います」

「ふむ、なるほど」

マルケス伯爵はいちいち頷きながら、しばらくの間、妻の口から女王の伴侶の人となりについて聞き出した。

オクタビアの人物鑑定眼は、「人が良すぎる」という欠点を除けば大方信頼が置ける。彼女が言う美点を十分の一ぐらいにさっぴき、欠点を十倍ぐらいに拡大して考えれば、おおよその人物像は想像が可能だ。

オクタビアの言を、マルケス伯爵なりに翻訳すると、どうやらゼンジロウという男は、「甘いぐらいに下の者に寛容」で、「覇気や向上心といった、男らしい美德は欠片も無く」、「自分の置かれている立場を理解できる程度の知能はある」人間ということになる。

正直、王家にちよっかいをかける足がかりとしては、あまり適当ではない人格である。

野心がなく、保守的で、そのくせ理性的な人間というのは、陰謀

に巻き込むのが難しい。

とはいえ、ゼンジロウは事実上カープア王家唯一の男だ。手出しが難しいからと言って、黙って見ているには惜しい人材である。

しばし黙考した後、マルケス伯爵は率直に意見を求めた。

「では、オクタビア。仮に、ゼンジロウ様に側室を宛がうとしたら、お前はどのような人物が良いと思う？」

オクタビアも、一応は上級貴族の生まれだ。この手の話題には慣れていないはずなのだが、意外な事にオクタビアは少し苦笑した後、首を横に振る。

「それは、しばらくはやめておいた方が良いと思います。私が直接、アウラ陛下とゼンジロウ様が並んでおられるところを拝見したのは数えるほどですが、ゼンジロウ様の日頃の言動や、後宮に務める侍女達の話からだけでも、お二人がとても中睦まじいことは感じられます。

今、後宮に側室となる方が上がられたとしても、おそらくは身の置き所がないのではないのでしょうか？」

当たり前だが、通常側室の立場というのは正妃に比べて圧倒的に低い。まして、今回のケースは『王』と『王妃』と『側室』ではなく、『女王』と『その伴侶』と『側室』だ。

通常、正妃と比べて公的な立場が弱く、生まれも低い事が多い側室が、唯一正妃に勝る可能性があるのが王の愛情だ。その愛情において、ゼンジロウと女王アウラの間に入り込む余地がないのだとすれば、確かに放り込まれた側室には、むごい未来しか待っていない。

「ふむ、それほどか……」

「はい」

オクタビアの返答に、マルケス伯爵は虚を突かれたような様子で首をひねった。

マルケス伯爵は、決して愚鈍でも、頭の固い人間でもないが、それでもあの『女王アウラ』をそこまで愛する事の出来る男がいる、というのは少々想像の外にある。

オクタビアを後妻に迎えていることでも分かるように、マルケス伯爵の女の趣味は、基本的にカープア王国の一般的貴族男性の例に漏れない。

すなわち、出しゃばらずに男を立てる、黙って後ろに付いてくるような女が、『良き女』の基準なのだ。

そんなマルケス伯爵から見ると、アウラ・カープアと言う人間は、王としては「女に生まれたことが惜しいくらいに女傑」であるが、一人の女としては、とてもではないが魅力的とは言いがたい。

念のため確認するように、マルケス伯爵は再度問う。

「ゼンジロウ様は、心底よりアウラ陛下に愛情を注いでいると？」

「はい。そもそも、あのような野心も権力欲もお持ちではない方が、生まれ育った世界を捨ててまで、この世界にやってきた理由は、陛下への愛情しかないのではないのでしょうか？」

正確に言えば、善治郎がアウラとの結婚を受け入れた理由は、アウラへの愛情が半分、半ブラック会社務めからの逃避衝動が半分と言った所なのだが、そこまで詳しい事は、善治郎本人しか知らない。

しかし、いずれにせよ、女王アウラが善治郎の好みのタイプなのだとしたら、マルケス伯爵としては少々やりづらい話である。カープア王国は大陸南西部に覇を唱える大国だが、アウラのような女はアウラしかない。少なくとも、マルケス伯爵の手駒にはいない。

「ふむ。であれば、しばらくは、両陛下の仲を取り持つ方向で立ち振る舞った方が得策か」

マルケス伯爵はそう呟く。元々、マルケス伯爵家は、現政権においても十分な権勢を誇る名家だ。一族の繁栄といっその領地拡大のため、権謀術数を張り巡らせるのは、高位貴族の半ば本能のようなものだが、リスクを承知で賭に出る必要がある立ち位置にはない。

女王と婿の仲がそれほど良いのであれば、当面の間は二人の蜜月を応援することによって、女王の心証を良くすることに終始した方が良いのかも知れない。

実際、女王が婿と子供を作るとは、婿が側室を持って王家の血を拡散させることより優先されるのは、紛れもない事実である。

「はい、私もそれがよいと思います」

夫の出した結論に、オクタビアは心底嬉しそうな笑顔で頷いた。オクタビアも、高位貴族の性として、貴族・王族の婚姻は、男女の恋愛より血の存続や、家同士のつながりが優先されることも承知

している。

しかし、そう言った現実を踏まえた上で、やはり感情的には、愛し合う男女は横やりを受けずに幸せな家庭を築いて欲しいと思う。

そんな愛妻の内心など知るよしもないマルケス伯爵は呟く。

「それにしても、ゼンジロウ様の女の趣味は分からん」

アウラの耳に入れば、不敬罪で問われかねないその呟きは、マルケス伯爵の本心からの言葉だった。

同じ頃、女王アウラは、久しぶりに王都外れの王軍演習場を訪れていた。

大陸南西部に当たるこの辺りの植物は、異常なくらいに成長が早く、手入れを怠るとすぐに畑が雑草まみれになることで有名なのだが、流石にここは千人単位の武装した人間や、何百匹もの走竜が常時走り回る演習場だ。

とくに、手入れと言うほどのことは何もしていないのに、この辺りは見渡す限り、剥きだしの赤土が広がっている。

本日、演習場を使用しているのは、王国軍の最精鋭とも言うべき、『弓騎兵団』の面々だ。

一般に、大陸南部で人を乗せる生き物は走竜と呼ばれる大きなトカゲの一種である。

走竜は、大陸北部で使用される『馬』と比べると若干速度では劣るものの、馬の倍以上の体躯を誇り、そのパワーは馬の比ではない。北方諸国で軍馬として使用される大型馬と比べても、おおよそ三倍から五倍のパワーがあるとされている。

変温動物の性として、一定より気温が下がると途端に活動が鈍るという致命的な弱点もあるいはあるのだが、ここ大陸南部ではほとんど表面化することのない弱点である。

演習場を訪れたアウラは、傍らにファビオ・プジョル將軍を従え、目の前に整列する百を超える騎兵達に視線を向ける。

アウラの服装は、軍装だ。カープア王家の象徴色でもある赤を基調としたその軍装は、襟や袖に金糸で飾り模様が縫われているものの、原則動きやすさと頑丈さを追求した代物である。

しかし、『野暮ったい』と表現しても良いその軍服も、アウラが着るとまるで別な印象を受ける。

軍服の厚めの布地でも、アウラの豊かな胸元や、大きめの尻を隠しきることは出来ない。まして、腰には剣を下げる必要性から、太いベルトでギュッとウエストを締めているのだから、尚更だ。

否が応にも、くびれたウエストが胸と尻の豊かさを強調してしま
う。

この場に善治郎がいれば、さぞかし「眼福、眼福」と喜んだこと
だろう。

もつとも、鍛えられた王国騎士達が、演習中に女王に不埒な視線を向けるはずもない。

広い演習場は、水を打ったように静まりかえっている。

「……………」

その静けさ自体が、この騎士達の練度を物語っている。人間だけならばともかく、目の前の騎士達は全員走竜に騎乗しているのだ。

百を超える走竜が一所に集まり、誰も隊列も乱さなければ、興奮して走竜を嘶かせたりもしないというのは、中々出来ることではない。

その結果に満足したのか、アウラは一つ頷くと、右手も持つ短鞭でピシリと軽く左手を叩き、命令した。

「初めよ」

「はっ。それでは、演習はじめ！」

アウラの言葉を受け、隣に立つプジヨル将軍が、その立派な体躯に見合った大声で、騎兵達に命令を飛ばす。

「……オウ！」「」

騎兵達は、怒号のような声を上げると、日頃の修練の成果を見せるべく、竜に鞭を入れるのだった。

竜騎士達は、威勢良く、女王と將軍に日頃の成果を見せつける。手に長槍を持ち、突撃をする者。ぬかるみや、倒木を並べたりして作った悪路を巧みに走竜で行く者。そして、花形とも言つべき、騎乗弓術を披露し、竜の背に跨ったまま、遠くの的を矢で射貫いている者。

アウラは、立ち上る土埃で顔や髪が汚れることも全く気にもとめず、傍らに立つブジョル將軍に話しかける。

「なかなかのものだな。よく、ここまで鍛え上げた」

女王の言葉に、野心家の將軍は神妙に頭を下げる。

「はっ、ありがとうございます。現状、騎兵の充足率はやっと八割を超えたところです。今年か、来年中には予定の数を揃えられるかと」

「五年で八割まで戻したか。よくやってくれた、將軍」

先の大戦でもっとも深刻なダメージを被ったのが、国軍の柱とも言つべき、この騎兵団であった。

騎兵の補充には、金も時間も莫大にかかる。竜を育て、竜を調教すると同時に、その竜に乗る人も育てなければならぬのだ。

六、七年で定数に戻すことが出来るといふのであれば、確かにそれは一つの功績と言えるかもしれない。もっとも、補充される騎士は実戦経験のない若い騎士ばかり。数は戻っても、質は戦中の騎士

団には、遠く及ばないだろう。

アウラのお褒めの言葉に、プジョル將軍は厳つい表情を崩さないまま、首を横に振り答える。

「その言葉は、竜厩舎の飼育員達にかけてやって下さい。彼等こそ、最大の功勞者です」

「そうだな、そうしよう」

プジョル將軍の言葉に、アウラは素直に首肯した。

人が育てる騎乗動物として、走竜が馬に大きく劣っている点を上げるとするのならば、その寿命の長さがある。

一般的な馬の寿命が二十年から三十年なのに比べ、走竜の寿命は五十年前後だ。

寿命が長いと言うことは、戦場で活躍できる期間が長いということでもあるが、同時に生まれた竜を実践に投入できるようになるまで、より長い時間が掛かるということでもある。

馬であれば、生まれて四年か五年で軍馬として一応の形が付くのに対し、走竜は最低でも十年はかかる。

つまり、この五年で新たに軍に加わった走竜達は、全て戦時中に卵からかえった竜と言うことだ。

大戦の最中、予算が大幅に削られた中で、馬よりも遙かに大きな竜の餌を確保し、死なせることなく育てた飼育員達の労苦は、並々ならぬものがあっただろう。

いずれにせよ、国防の根幹を担う、騎兵団の充実はアウラにとっ

ても大きな朗報である。

「そう言えば、来年から多少ではあるが、軍事費を上乗せできそう
だ。今のうちに、使い道を考えておけ」

アウラはふと思い出したように、プジヨル將軍にそう通達する。
上乗せできる軍事費というのは、他でもない。善治郎の再計算に
よって発覚した、地方貴族の脱税分の話である。

地方貴族達と、数日に亘る丁々発止の話し合いを設けた結果、国
庫に納められる税額をそれなりに増やすことに成功したアウラは、
その大半を軍事費に回すことにしたのである。

元々、地方貴族達はその金を地方軍の軍事費に充てていたのだ。
そういった素性の金を、軍事費以外に当てると言うことは、単純に
考えれば国内の軍事力を落とす結果になる。

今のところ、周辺各国との関係は、小康状態を保っているとはい
え、軍備縮小方針に舵を切れるほど、平和を確信できる状態ではな
い。

アウラの言葉に、プジヨル將軍は今日初めて少し口元をほころば
せる。

「ほう、そうですか。分かりました。金額を確認し次第、主立った
者から意見を集めて、軍の要望を纏めておきましょう」

「ああ、頼む」

アウラは視線を、演習中の騎兵団に向けたまま、頷き返す。

「承りました。幸い、明後日の立食会に出席するため、軍の主立った人間も大部分は王都に集まっていますからな。さほど、時間を取らせずに、報告を上げられることでしょう」

プジョル將軍の言葉に、アウラは鞭を持つ右手をピクリと振るわせる。

明後日の立食会とは言うまでもなく、善治郎の社交界デビューのことである。

分かつてはいたことだが、この野心家の將軍は、積極的に女王の婿とつながりを持つつもりようだ。

(はて、どうなる事やら)

あの野心の欠片も無い婿殿と、この野心の塊のような將軍は、一見水と油のように見えるが、そう言った人間が気の置けない親友同士になったりすることもあるのが、人間の面白いところだ。

(この野心家に、妙な影響を受けて欲しくはないのだが、男同士の交友関係にまで口を挟むのは、『妻』の領分を超えているしな)

アウラとしては、見守るしかない話だが、さほど不安に感じていないのは、それだけ善治郎を信頼し始めている証だろう。

「妹も、非常に楽しみにしております。是非、ゼンジロウ様に、妹をお目通しさせたいものです」

「そうか、私の方からも、婿殿に改めてそう伝えておこう」

相も変わらぬ剥きだしの野心を披露するプジョル將軍に、アウラ

はたほど心をゆらゆらず、落ち着いた声でその言葉を返すのだった。

第四章 1【立食会の幕開け】

王宮主催の夜間立食会パーティ。定期的に開かれるその行事は、上流貴族達の社交の場であると同時に、王国・王室の権威と権勢を国内に知らしめる絶好の機会でもある。

無粋な話ではあるが、夜間に開かれる行事というのは、それだけで恐ろしく金が掛かるものだ。

広い大広間を照らし出すのは、高い天井にぶら下がっている大小いくつものシャンデリアだが、そこで燃えている蠟燭という代物は、貴族の金銭価値で言っても決して安いものではない。

『蜜蝋』はカープア王国でも生成されているが、現代の地球のようにミツバチの養殖に成功しているわけではないため、原材料は採取頼みだし、東方諸国から輸入される『木蝋』は輸送費がかさむ分、どうしても割高になってしまう。

付け加えるのならば、シャンデリアその物もこの世界では超がつく高級品だ。なにせ、ガラス製造技術の存在しない世界である。シャンデリアは全て、銀と天然の水晶で出来ている。小さなモノ一つでも一財産だ。

さらに、広い部屋全体に敷きつめられた赤い絨毯は、専門の職人が三世代に亘って編み続けた一点物で、飲食物をのせている背の高いテーブルは、すべて一本の木を削りだして作られた贅沢な代物。

平民はもちろん、中流以下の貴族でも目がくらむような、きらびやかな空間である。

事実、中の下クラスの貴族達は、「昨晚、王宮の大広間のパーテ

イに参加してきた」という話題だけで、一日盛り上がることもあるという。

そんな夜の大広間に初めて足を踏み入れた善治郎は、シャンデリアの明かりの下、貴族達の挨拶攻勢を作り笑顔で必死に裁いていた。

「ゼンジロウ、紹介しよう。これなる男は、パント八男爵だ。先の大戦では騎士隊長として武を振るい、今日は領主として腕を振るってくれている」

善治郎の右腕に、左腕を絡めたアウラが、そう言って一人の中年男性の名前を読み上げる。

「お初にお目に掛かります、ゼンジロウ様。勿体なくも陛下より男爵を賜っております、トマス・パント八と申します」

「うむ、領主自らの挨拶、大儀である」

「ははっ」

鷹揚に頷いてみせる善治郎の前で、パント八男爵と名乗った中年の男は下げていた頭を上げた。

オレンジ色のノースリーブドレスを着ているアウラが、左胸に着いている大きな花飾りを直している間に、パント八男爵はそのまま女王夫婦の前から退去していく。

去っていく男の後ろ姿を見ながら、善治郎は周囲に気づかれないうようにそっと溜息を漏らした。

幸いにして、王族の元に息をつく間もないくらいに挨拶攻勢を掛

けるほど、この国の貴族達は礼儀知らずではない。

周りが気をつかって少し猶予を設けてくれている間に、善治郎は今挨拶をしてきた人間の容姿と印象を頭の片隅に印す。

(中肉中背の四十男、黒髪のパントハ男爵。目線があからさまに媚を売っている感じ。どちらかというと悪印象……と。あー、せめて名刺くれ、名刺ッ)

善治郎は内心、悲鳴を漏らした。

サラリーマン時代にも、取引先の顔と名前を覚える作業はやらされていく善治郎であるが、その数は多くても一度に十人弱だ。

それに比べて、今日紹介される貴族達は何十人という数である。しかも、当然ながら名刺交換のような風習は存在しない。

せめてもの慰めは、背広姿のサラリーマンと違い、社交界に出る貴族達は特徴的な服装をしている人間が多いため、多少は個体識別がしやすいということくらいだろうか。

南国らしく、女はノースリーブのロングドレス、男は半袖のシャツと大枠は決まっているが、その色合いや細かな形は、スーツとは比較にならないくらいに多種多様だ。

おかげで善治郎の脳内では「太った花柄シャツおじさん」やら、「紫のトドおばさん」などという、失礼極まりないキーワードが乱舞していた。

アウラの様子から見ると、今のところ善治郎は、大きな問題もなく対応できているようだ。元々この立食会というイベントは、舞踏会のように特定の技術を身につける必要もなければ、公的行事ほど規律にうるさい物でもない。

付け焼き刃のインスタント王族が社交界デビューをするには、悪くない選択だ。その分、一般貴族達との距離が近く、対応に追われることになるのは、許容範囲内のデメリットだろう。

善治郎がそんなことを考えていると、スッと離れたアウラが、テーブルの上から銀杯を取って善治郎の元に戻ってくる。

「ゼンジロウ」

「ああ、有り難う、アウラ」

アウラが差し出す銀杯を受け取った善治郎は、随分と喉が乾いていたことを自覚した。

杯の中身は、この国で作られた麦酒だ。度数が低く、苦みが強く、なにより生ぬるいその酒は、善治郎の口に合う代物ではなかったが、熱帯夜の空気で渴いた喉を潤す役割は、十分に果たしてくれる。

「お下げします」

「ああ、頼む」

善治郎が銀杯の中身を飲み干したを見たアウラが、近くに立っていた侍女服姿の給仕係に目をやると、その給仕は素早くこちらに近づき、善治郎の手からカラの銀杯を受け取り、下がっていく。

そのタイミングを見計らっていたのか、喉を潤した善治郎がホッと緊張から少し解き離れたところで、次の貴族がアウラ、善治郎の前に進み出る。

男女一組、二人の貴族だ。

その、女の方には善治郎も見覚えがある。この世界に来てからずっと、後宮に引きこもっていた善治郎が、見覚えのある女など、妻であるアウラと後宮の使用人達を除けば一人しかない。

マルケス伯爵夫人オクタビア。と、いうことはその横に立つ太めの中年男が、マヌエル・マルケス伯爵なのだろうか。アウラの婚約者候補、ラファエロ・マルケスの父に当たる、カープア王国有数の大貴族。

(うわー、話には聞いていたけど、本当に親子くらい年の離れた夫婦だな。美人の後妻さんって、男のロマンの一つだよなあ)

不埒なことを考えていた善治郎の右腕を、不意にアウラはギュッと強く力を込めて握りしめる。

一瞬心が読まれたのかとドキツとした善治郎であったが、すぐにそれは事前に話し合っていた合図であることを思い出す。すなわち、「可能な限り顔と名前と第一印象を覚えておいて欲しい、重要人物」の合図だ。

「ご無沙汰しております、アウラ陛下。そして、お初にお目に掛かります、ゼンジロウ様」

「本日はお招きに預かり、ありがとうございます、両陛下」

丁寧に頭を下げる年の離れた夫婦に、アウラはいつもの迫力ある笑顔で応え、善治郎に二人を紹介する。

「よく来てくれた、マルケス伯、オクタビア夫人。紹介しよう、ゼンジロウ。我が国における重鎮の一人、マルケス伯爵マヌエル卿だとなりのオクタビア夫人は紹介するまでもあるまい」

「貴公がマルケス伯か。噂は聞いている。夫人には世話になっている」

意識的に胸を張り、鷹揚に答える善治郎に、マルケス夫妻は揃ってもう一度頭を下げた。

「はっ。この者が、ゼンジロウ様のお役に立てたのであれば、幸いです」

「勿体ないお言葉です、ゼンジロウ様」

いつの間にか、周りの貴族達も興味津々な様子で、こちらの様子を伺っているのが感じられる。

一番近い者でも十メートル以上離れているので、会話が丸聞こえということはないだろうが、注目を浴びているという意識は常に持つておく必要があるだろう。

そんな場馴れしていない婿殿を矢面に立てて、恥を掻かせる気は毛頭ないアウラは、善治郎の右腕に左腕を絡めたまま、積極的に対応に回る。

「謙遜するな、伯爵。夫人の才色兼備ぶりは噂に違わぬ見事なものだ。今後も伯爵共々、その力を我が王国のために役立てて貰いたいものだ」

「はっ、過分なお褒めの言葉、ありがとうございます」

「はい、陛下。私でお役に立てるのでしたら、今後も微力を尽くす所存です」

原則、対応はアウラに任せた善治郎は、水を向けられる度に「ほう、そうか」とか「ふむ、そうだな」などと相づちを入れるだけだ。

善治郎の社交界デビューは、こうして無難に幕を開けたのだった。

しかし、無難に幕を開けた立食会も、閉幕まで平穩にすむという保証はない。

そもそも、この立食会における最大の目的は、衆目にアウラと善治郎の仲がうまくいっていることを知らしめることだ。

そうした目的を考えれば、いつまでもアウラが善治郎の腕をとり、フォローに回っているわけにはいかない。そんな状態が続けばむしろ逆効果だ。「アウラが夫の自由を束縛している」という風評に目鼻をつける結果になってしまう。

そのため、一通りの挨拶がすんだところで、アウラと善治郎がしばし別行動を取ったのは、当初から予定されたことであつた。

「ふっ」

アウラと離れた善治郎は、一人ゆっくりと大広間を歩み進む。周

りからは好奇の視線が向けられるが、王族である善治郎に話しかけてくる者はいない。

基本的に、この国の礼儀では、目下の者が目上の者に声を掛けるというのは、不敬とされているのだ。立食会のようなある程度砕けた場であれば、多少の無礼は目を瞑ってもらえるが、それを踏まえても直系王族である善治郎に、声を掛けられるものは皆無に等しい。

声を掛けても、ギリギリ無礼ではないと見なされるのは、大領の領主や軍の將軍クラスといった国の重鎮ぐらいの者だろうか。しかし、そういった重責を担っている人間は、たいがい常識や場の空気を読むことに長けているため、あえて冒険を犯して『自ら』王族に声を掛けるといふ冒険に出る者は、皆無に等しい。

そんな冒険に出る大領主や将軍がいるとすれば、その者は良くも悪くも礼儀・儀礼という物を軽視している剛の者か、それだけの高位にあってもなおどん欲に上を目指しているような、底なしの野心家だ。

(仕方がない。こっちから話しかけるしかないか)

元々、中小企業のサラリーマンとして、社内業務だけでなく、外回りや対外交渉もやらされていた善治郎は、初対面に人間に声を掛けることをさほど苦とする人間ではない。

直系王族が直接声を掛けても問題がなさそうな無難な人間を求め、善治郎がゆっくり視線を会場全体に巡らせたその時だった。

「失礼します、ゼンジロウ様。少々お時間を頂いてよろしいでしょうか」

突如横合いからスツと進み出てきた体格のよい壮年の男が、片膝を着き善治郎にそう声を掛けてくる。

(え、え、ええ？ うそ、向こうから声を掛けてきた？ 誰だよ、おい？)

善治郎が習ったマナーでは、「まずあり得ない」と言われていた状況に遭遇し、善治郎は内心パニックを起こしつつも、反射的に表情を固まらせ、ゆっくりと跪く男の方へ向き直る。

「なんだ……？」

精一杯の威厳を取り繕い、振り向いた善治郎の視界にその男が入る。

膝を付いていても、一目で「大きい」と分かるほどの、よく鍛えられた巨躯。その身体に纏うは、立食会には若干不釣り合いな、黒地に金糸の飾りをあしらった無骨な服装。それは、カープア王国陸軍騎兵団の第三正装である。

左胸の房飾りの形と数から、この巨漢が現王国でも最高位に近い軍人であることが見てとれる。

シャンデリアの灯りの下、赤い絨毯の上で膝を付くその様はまさに、『騎士』そのものだ。それも、白面の王子様然とした王宮の『騎士』様ではない。最低限の礼節を知りつつも、戦場で武勇を振るうことにこそ生き甲斐を見いだす、荒ぶる国の守護者としての『騎士』だ。

善治郎は膝を付く『騎士』を見下ろしながら、頭の中で思い返す。

善治郎に声を掛けることがギリギリ許されるのは、大領の領主か、將軍クラスの軍人。

あえて声を掛ける者がいるとすれば、その者は多少の礼儀など歯牙にも掛けない、良くも悪くも剛の者。

さもなくば、王配の不評を買うリスクを承知した上で、なお積極的に王配とのつながりを求めるほどの、よほどの野心家。

それら全ての条件を満たす男が、善治郎の前で膝を付いていた。

善治郎は、跪く男に声をかける。

「これは、プジョル卿か。なに用かな？」

その男の名前は、善治郎も事前に何度も耳にしている。かつて、マルケス家のラファエロ卿と並び、アウラの最終婚約者候補であったその男の存在を、善治郎が意識していないはずがないし、アウラからも「要注意人物」として、事前に何度も聞かされていた名前だ。

「はっ、実はゼンジロウ様にぜひ、受け取っていただきたい贈物がござります。そのため、無礼を承知で声を掛けさせて頂きました。ささやかな物ですが、受け取って頂けたのならば、望外の幸福です」

カープア王国竜騎兵团総団長、プジョル・ギエン將軍は、赤い絨毯に膝を付いたまま、自分の前に立つ女王の伴侶を真っ直ぐ見上げ、そう言っただけのだった。

第四章2【贈物のさばき方】

女王の伴侶の足元に跪き、直言申し上げる、王国きつての名将と名高い將軍。

この組み合わせが周囲の注目を集めないはずがない。いつの間にか談笑をやめた貴族達がこちらに興味深げな視線を向けていることに気づいた善治郎は、内心『厄介な事になった』と冷や汗を掻きながら、わざとらしくゴホンと咳払いをした。

（ああ、畜生。こんなケース想定してないぞ。こっから全部、アドリブかよ、おい）

サラリーマン時代の善治郎は、社内プレゼンや対外交渉におもむく前には、可能な限り準備を整え、予想される質問の一覧表を用意して対応していた人間である。

今おかれているような、オールアドリブで対処しなければならぬ「想定外の範囲外」の状況には、少々弱い。

それでも善治郎は、必死に頭の中で、付け焼き刃の知識と今自分がおかれている状況を照らし合わせ、言動を決定する。

（ええと、ここは立食会だから、ある程度の無礼は許されていてんだよな。で、俺は王族で、こいつは將軍だから……）

心の中で善治郎は、プジョル將軍を「こいつ」呼ばわりする。初対面の人間に、悪感情を抱くのは、褒められたものではないことは理解しているが、それでも善治郎は、愛妻の婚約者補であった男にニュートラルな感情で接することが出来るほど、人間が練れていな

い。

そういつた諸々の感情を表情の裏に隠し、善治郎は取り合えず無難に答える。

「將軍、この様な場で、膝礼は無用だ」

「はっ、失礼します」

善治郎の言葉を受けて、プジョル將軍はよどみのない動作で立ち上がった。

自分より、立ち上がったプジョル將軍の偉容に、善治郎は後ずさりしたくなる衝動を押し殺す。

大きい。身長百七十二センチの善治郎より、有に頭一つは大きい。だから、百九十センチは確実に超えているだろう。体重も百キロに近いのではないだろうか。無論、その中身は脂肪などではない。みっちり鍛えられた筋肉で形成された、戦うための巨体だ。

「では、用件を聞こうか。贈物があると言ったな」

頭一つ上にあるプジョルの目を正面から見据え、善治郎は頭の中で情報を整理する。

事前情報として、こういつた場で贈物攻勢を掛けてくる者が現れる可能性については、教えられていた善治郎である。モノで人の歡心を買おうとする行為は、異世界でも共通する価値観のようだ。

（確か、理由もなしに断つちゃ駄目なんだよな。問題は、受け取る

ときの態度か)

あまり喜び過ぎれば、相手はその『喜び』に見合うだけの見返りを期待するし、失望したような様子を見せれば、相手に公衆の面前で恥を搔かせることになる。

モノを受け取るとき言葉や表情だけでも、周囲の運命を動かしかねない今の自分の立場に、善治郎は改めて、重いプレッシャーを感じる。

そんな善治郎の内心などつゆ知らぬプジョル將軍は、「はい」と答え、もう一度頭を下げると、後方に控えていた部下らしき年若い騎士に目で合図を送る。

若い騎士は白い布に撒かれた細長い品を両手で抱え、小走りにプジョル將軍の側へとやってくると、その布でくるまれた細長い何かを、プジョル將軍に手渡した。

その様子に、善治郎は無表情装った表情筋を僅かに崩し、少しだけ目を見開く。

(ええ？ 目録じゃなくて、現物を直で持ってきたの?)

通常、こういう場で人に物を贈る場合は、最初に目録を渡し、現物は後日相手の屋敷に届けるのが一般的だと善治郎は聞いていた。何せ、貴族・王族の贈り物だ。物によっては、毛並みの良い『走竜』や、避暑に適した家屋敷であることも珍しくない。

無論、宝飾品や宝剣など、持ち込みが可能である大きさの物である場合は、直接手渡しすることもあり得ないわけではないらしいが、

基本的にはあまりやらない。

現物を直接持ち込んで、万が一にも受け取りを拒否されたりしたら、並の恥ではすまされないからだ。

「ご覧下さい、ゼンジロウ様」

驚く善治郎を尻目に、プジョルは慣れた動作で布をはぎ取り、中身をあらわにする。

(なんだれは？ 弓、か？)

中身を見た善治郎は、内心首を傾げる。その中身は、複雑に湾曲した、無骨な棒だった。善治郎にはそれが、特に装飾も施されていない、実用一点張りの『弓』にしか見えない。

そんな善治郎の感想を肯定すべく、プジョル將軍は胸を張って言う。

「王都でも指折りの名工の手によって作られた『竜弓』です」

その言葉に、こちらの様子を見守っていた周囲の貴族達から、「ほうー！」と驚きこの声漏れる。

どうやら、この『竜弓』と呼ばれる代物は、感嘆の声が上がるほど大した代物であるらしい。

改めて善治郎は、プジョルの手にあるその『竜弓』とやらをしてみるが、やはりそんなにありがたいものには見えない。

王宮に持ち込むための手続きとして、弦を張るために空いている

両端の穴を黄土色の粘土用な物で埋められ、その上から王宮の印で封印されているその弓は、大きさも善治郎の記憶にある弓道用の和弓の半分くらいしかなく、非常に頼りなげに見える。

反応の薄さから、善治郎が『竜弓』について無知であることを理解したのだろう。

プジョルは、低い声で蕩々と説明を始める。

「『竜弓』とは、土台となる薄い木の板に、ほぐした『走竜』の腱と、削りだした『走竜』のあばら骨を貼り合わせて作られた弓です。

見ての通り、大きさは弓兵隊が使う長弓の半分ほどしかありませんが、威力、射程共に長弓に勝ります。

小さい分取り回しも優れており、熟練者が使えば、命中精度、速射性も十分に確保できます。騎乗では最強の武器と言えるでしょう」

複数の素材を組み合わせで作られた弓、一般に合成弓と呼ばれる代物である。似たような物は、過去地球の歴史上にも存在しており、実際に戦場で猛威を振るった実績がある。

「しかし、その反面、竜弓を手に出来る騎士は極一握りに限られています。なぜならば、弓にするのに適した柔軟性のある腱や骨が取れるのは、まだ成長過程の若い『走竜』だけです。素材が極めて貴重な上、作製には多大な手間と時間を要するのです」

一般に、『竜弓』の素材となり得る走竜は、五歳から七歳までの若い走竜だけだとされている。成長が止まった走竜の骨は、固く丈夫になる反面柔軟性が失われるからだ。腱も骨ほどではないが、やはり同様の弊害が生じるとされている。

プジョル將軍の説明で、この『竜弓』がどのような物であるか気づいた善治郎は、ピクリと頬を振るわせた。

『竜弓』の存在は知らなかった善治郎だが、『走竜』が国にとってどれくらい大切な物であるかは、すでに説明を受けている。

その走竜が先の大戦で激減しており、国軍の必要数に戻すため、今もなお厩舎の飼育員達は日々多大な努力を払い続けているという事実も、だ。

その大事な『走竜』を若いうちに締め、武器の材料にする。極端な言い方をすれば、この『竜弓』という代物は、成長した『走竜』一匹に匹敵するだけの戦果を上げなければ、「割に合わない」だけのコストが掛かっていると言うことになる。

「ゼンジロウ様？」

こちらの様子が少しおかしいことに気づいたのか、探るように名前を呼ぶプジョル將軍に、善治郎は努めて平坦にした声で、問いかける。

「一つ教えてくれ、將軍。この、『竜弓』という代物は、誰にでも簡単に扱うことができる代物なのか？」

善治郎の問いの意図が分からぬまま、プジョル將軍は素直に答える。

「いいえ。なにせ、この小さな作りに、膨大な威力と射程を持たせております故、一般兵では満足に引き絞ることも出来ない者も珍しくはありません」

予想通りの答えに、善治郎は溜息が漏れるのを堪えた。

威力は折り紙付きだが、扱いが極めて難しく、素材も貴重なため数が少ない兵器。どう考えても、例え一弓だけでも、善治郎の手元で死蔵させていて良い代物には思えない。

しかし、周りの様子からみても、『竜弓』という代物は王族に進呈するのに十分な『格』を持った物であるようだ。何と言って断れば、波風を最小限に抑えられるだろうか？

必死に無い知恵を振り絞った善治郎は、ゆっくりと考えながら答える。

「そのような貴重な品を、進呈してくる將軍の心意気、嬉しく思う。しかし、歴戦の戦士である將軍ならば見て分かるだろうが、私は戦場では何の力にもなれない、非力な存在だ」

「はっ、しかし……」

なにやら言いかけるプジョル將軍の言葉を遮り、善治郎は続ける。

「よって、私はこの弓を受け取りはするが、この手には持たない。プジョル將軍、卿の配下の中にも、まだ『竜弓』を与えられていない騎士がおろう。その中で、もっとも腕が立ち、王家への忠誠が厚い騎士に、その『竜弓』を渡してやってはくれぬか。」

それが、私にとって、もっとも望ましいその弓の使い道だ」

しばし、会場は水を打ったように静まり返る。

「……………承知いたしました。ゼンジロウ様の心遣いを裏切る事なき者に、必ずやこの弓を授けましょう」

長い沈黙の後、プジヨル將軍は両手で『竜弓』を持ったまま、深く頭を下げたのだった。

一連の騒ぎを、少し離れた所で見守っていた女王アウラは、綺麗に事が収まった状況に、ホッと安堵の息を漏らしていた。

（良かった。どうにか、受け取らずに裁いてくれたか）

あそこで弓を受けていたら、非常に面倒な事になるところだった。

あれが、宝剣や飾槍のような権威付けの武器ならば、受け取ってもさほどの問題はないのだが、実用武器を受け取った場合、その品を使う心づもりがあるという風に取りられてしまう。

そうなれば、今後プジヨル將軍からの、訓練や狩猟会の誘いを断るのが極めて難しくなっていたことだろう。

自ら「弓を使うような立場に立つつもりはない」と宣言したことで、善治郎の評判が落ちる可能性があるのが気かりではあるが、にべもなく断るのではなく、『所有権を主張した上で、その弓を持つに相応しい騎士に貸し与える』という形を取ったことで、プジヨル將軍にも恥を搔かせずにすんだ。

アウラの立場で判断すれば、最善に近い結果である。

最悪、アウラは自分が乱入して、強引に事態を納める覚悟もしていたのだ。そうしていたら、「女王陛下は婿を尻に敷いている」という噂が逆に強まっていたことだろう。

「中々に見事な受け答えでしたな。陛下」

アウラの隣に立つマルケス伯爵が、にこやかに声を掛ける。

「ああ、すまぬ。会話の途中であつたな、伯爵」

左胸の大輪の花飾りの位置を手で直したアウラは横に向き直り、先ほどからずっと側を離れないマルケス伯爵に向き直る。

太めの伯爵は、楽しげに笑うと、眼を細め、

「いえいえ、ご成婚されたばかりの陛下が、つついゼンジロウ様を目で追ってしまうのは自然なことですよ。仲睦まじく、結構なところかと」

「そう言ってもらえるとありがたい」

アウラは、皮肉にも聞こえるマルケス伯爵の言葉に苦笑を漏らし、小さく鼻を鳴らした。

再び、アウラは善治郎とプジヨル將軍のほうへ戻す。『竜弓』を部下に預けたプジヨル將軍は、その後もめげずに善治郎と会話を続けているのが見える。

以後は比較的当たり障りのない話を続けているようで、善治郎も

穏やかな表情で、無難に受け答えをこなしている。

とはいえ、プジョル将軍が一度や二度の失敗で懲りて、後は無難にこなす程度の野心家ならば、『餓狼』などという異名で呼ばれてはない。

「確かに、ゼンジロウ様のお役目は、時代に血をつなげることであり、身を危険に晒す戦場に立つ必要はありませんな。」

ならば、ゼンジロウ様。アウラ陛下との間に、王家の血を継承するお方が出来た暁には、次はゼンジロウ様ご自身の家を継ぐ子を産む、『側室』が必要ではないかと思考する次第なのですが」

贈物攻勢の次は、見合い攻勢を掛けてくるプジョル将軍に、遠くで聞いていたアウラは、一瞬揃って顔を引きつらせる。

そんな、アウラの様子に気づくはずもないプジョル将軍は、堂々とした押し出しで、攻勢を強める。

「ところで、話は変わりますが、我がギジェン家は僅かながら、カープア王家の尊き血を継いでいることをゼンジロウ様はご存じでしょうか。」

私は本日ここに、妹を伴って来ているのですが、せっかくの機会です。妹をゼンジロウ様に紹介させて頂きたく存じます」

全く話は変わっていない。

女郎屋の女の売り込みだって、もう少し前口上があるだろうと、言いたくなるくらい単刀直入な売り込みだ。

その様子を離れた所で見ているアウラは、露骨に顔を引きつらせる。これは流石に介入するべきだ。

覚悟を決めて一步前に踏み出そうとするアウラに、横に立つマルケス伯爵が、意図の読めない穏やかな口調で声を掛ける。

「ああ、そう言えば私はまだ、プジョル將軍と挨拶をしておりますませんでしたな。陛下、お話の途中ですが、少々場を外してもよろしいでしょうか？」

「ッ!？」

マルケス伯爵のわざとらしい言葉に、アウラは動きを止めた。

マルケス伯爵の意図は分からないが、その言葉はアウラにとっては、絶妙な助け船だ。

ここで、アウラが「いや、そういうことならば、私も同行しよう」と答えれば、「自らの意思で強引に夫の会話に割り込んだ」と言われない形で、あの餓狼の見合い攻勢に介入することが出来る。

(なにを企んでいる、伯爵。私に恩を売るつもりか?)

マルケス伯爵の意図が読めない分、少々不気味だが、今のアウラにこれ以上、善治郎とプジョル將軍の会話を傍観するのは耐えられそうにない。

「いや、そういうことならば、私も同行しよう」

アウラは素直に、マルケス伯爵の出した助け船に乗ったのだった。

第四章3【立食会の閉幕】

王宮で開かれる社交界の場は、「剣を交えない戦場」などと呼ばれることもあるが、それは多分に誇張された表現だ。

大部分の貴族達にとって社交界とは直接顔を合わせ、ちよつとした世間話に花を咲かせるだけの息抜きの場に過ぎない。美味しい食事と、美味しい酒が舌を楽しませ、着飾った淑女、紳士が互いの目を楽しませる。

そんな貴族達の優雅な遊び場。それが、社交界本来の姿であり、「剣を交えない戦場」として活用しているのは、全体で見れば極少数派である。

しかし、そんな事実も善治郎にとっては何の慰めもならない。

現在、善治郎の前に立つのは、剛胆にも向こうから声を掛けてきたプジョル・ギジエン將軍と、將軍が紹介した妹のファティマ。

斜め前に陣を取るのは、ギジエン將軍に挨拶をしに来たついでに、会話の輪に加わったマヌエル・マルケス伯爵と、その妻オクタビア。そして、隣でそつと善治郎の腕に手を掛けている、マルケス伯爵と会話の途中だったという名目でやってきた女王アウラ。

社交界デビューを果たした善治郎の周囲に集まった人間の大多数は、社交界の場を「剣を交えない戦場」として捉えている少数派ばかりだった。

「それでは、紹介させて頂きます。これが妹のファティマにございます」

「ファティマ・ギジエンです、ゼンジロウ様。お目通りかない、恐

悦至極に存じます」

プジョル將軍の紹介を受けて、完璧に礼儀に乗っ取った態度で頭を下げたのは、黒い長髪をポニーテール状に纏めた、年若い少女だった。

肌の色はカープア王国人の平均に漏れない褐色、少しつり上がり気味の瞳も黒だ。

(まあ、美人だな)

善治郎は、頭を上げたファティマの顔を「見上げ」ながら、心の中でそう呟いた。そう、ファティマの目線は、善治郎から見て、見上げる位置にある。ファティマが壇上に上がっている、などという落ちはない。単純に、この少女は善治郎より背が高いのだ。

まあ、兄であるプジョル將軍が百九十を超える長身なのだから、同じ両親から生まれた妹のファティマが長身であることは、当たり前なのかも知れない。

百七十の中盤はあろう長身。身体の半分を占めるような、長い足。胸と尻のポリウムは乏しいが、それ以上に細いウエスト。スタイルだけなら、現代地球でもショーモデルで通用しそうな少女である。

「ふむ、そなたが將軍の妹姪か。確かに、目鼻立ちは將軍と似ているな」

「はい。皆様、そう仰います」

「兄に似ている」と言われた少女は、緊張した面持ちを崩し、嬉しそうに微笑んだ。その表情が偽りではないのだとすれば、彼女にと

って「兄に似ている」というのは嬉しい評価のようだ。

（と、いうことは兄妹仲はいいってことなのかな？ 後で、アウラに聞いてみるか）

「ゼンジロウ様。ギエン家の末姫、ファティマ姫と言えば、才色兼備の美姫として国中に知られているのですよ。そう言えば、私もちよくちよく社交界には顔を出す方なのですが、ファティマ殿と直接お会いするのは、随分と久しぶりな気がしますな。いやはや、お美しくなられた」

「ありがとうございます、マルケス伯爵。私は最近まで、ペルニア侯爵のお屋敷に行儀見習いに加ってましたから」

横から賞賛の形を取って会話に加わるマルケス伯爵を、年若いファティマは気の強そうな笑顔で正面から受け止める。

これから善治郎に売り込みを掛けたいファティマとしては、どれだけ耳に聞こえの良い言葉を重ねられても、マルケス伯爵の存在は『障害』にしか映らない。元々つり上がり気味のファティマの目元が、自然と険しくなる。

一方、妹よりは遙かに年期を重ねているプジヨル將軍は、ここで老練なマルケス伯爵を敵に回す愚をよく分かっている。

「ははっ、ファティマ。そんな風にわざと顔を崩さなくとも、伯爵はお前に色目を使うような方ではないぞ。なにせ、伯爵の隣には、お前など及びも付かない最高の淑女がおられるのだからな」

そう、笑い話にして、妹の華奢な肩をトントンと叩く。

「お、お兄様……！」

と、一瞬抗議しかけたファティマであったが、プジョル將軍に至近距離で睨まれると、次の瞬間には青菜に塩を掛けたようにシユンと元気を失った。

「そ、そうですね。やはり、オクタビア様の前に出ると、私も自信を失ってしまいそうです」

「そんな……私なんてもういい年ですから。ファティマ様の方がずっとお美しいですわ」

兄の冗談に乗り、そう言って作り笑いを浮かべるファティマに、オクタビアは頬をほんのりと赤めて俯く。

二十四歳、既婚というオクタビアの肩書きからすると、普通は「年を考える」と非難を浴びそうな反応だが、そのような仕草がいまだに様になっている辺りが、大多数の異性に人気がある理由であり、一部の同性に蛇蝎のように嫌われている理由でもあるのだろう。

一部の同性の一人であるファティマは、「けっ、この良い娘ちゃんババアが」と言う感想は胸の奥に閉じ込め、

「本当にオクタビア様は、奥ゆかしいのですね」

と、笑い返した。この天然万年美少女に皮肉は通用しない。かといってあからさまに攻撃をすれば、こちらが悪者にされるといって、社交界の場では無敵の存在である。

そうして、妹の失態を笑い話でごまかしたところで、プジョル將軍はめげずに妹の売り込みを続ける。

「まあ、確かにオクタビア殿と比べるとまだまだですが、ファティマも中々見所はあるやつです。歌や踊りに関してはちよっとしたものですし、行儀見習いの経験がありますから、侍女の真似事ぐらいは務まります」

「ほう、ギジエン家ほどの家格で行儀見習いとは珍しい。だが、感心なことだ。将来的には私の側仕えとして、召し上げることがあるかもしれない」

「……はっ、その時はどうかよろしくお願いいたします、アウラ陛下」

プジョル將軍の攻勢を横からインターセプトしたアウラに、將軍は一瞬口ごもってからそう言葉を返した。正直、妹をアウラの側近にそえても、あまりうま味がない。男女の関係に発展する可能性が高い、善治郎付きだから価値があるのだ。

流石に直接「妹を側室に入れてくれ」とまでは言わないものの、あからさまに続く売り込み攻勢に、善治郎は息苦しくなるくらいプレッシャーを感じる。背中には、熱帯夜の暑さとは別な理由の汗をかいている。

隣にアウラがいなければ、この場を納めたい一心で、言質を与えられるような言葉を吐いていたかもしれない。

「ところで、話は変わりますが、ゼンジロウ様はどのような女性がお好みですか？ いえ、当然一番は陛下でしょうが、二番三番に目

が行くことはございませんかな？」

相変わらず言葉と裏腹に、全く話を変えないで、ギジエン將軍は正面から切り込んでくる。

隣にアウラがいるというのに、堂々と女の好みを聞いてくる辺り、相当に良い度胸をしている。無論、この国の王族は一夫一妻制ではないので、日本の常識をそのまま当てはめるわけにはいかないだろうが、それにしても男女関係で生ずる嫉妬心いうものは、世界を超えた共通のものではないだろうか？

善治郎は思わずアウラの表情を確認したい衝動を辛うじて堪える。このタイミングでアウラの方を向けば、「ゼンジロウ様は、受け答えの際、アウラ陛下にお伺いを立てていた」という噂が広まってしまふ。

だが、だとすると、この場は何と答えるべきなのだろうか？ 感情のまま答えて良いのだとすれば、「いらんいらん。せつかく美人の嫁さんと仲良くやってるのに、人の家庭に異物を放り込むな」といったところになるのだが、そう素直に答えて良い立場ではないことは、自覚している。

「む、それは考えた事がなかったな」

沈黙を続けるわけに行かず、ごまかすようにそう呟いた善治郎の言葉尻を、プジョル將軍が捉えるより一瞬早く、フォローしたのはマルケス伯爵だった。

「はははっ、ゼンジロウ様と陛下の中睦まじさは妻から聞き及んでおりましたが、どうやら噂は誇張どころか過小だったようだ。今のゼンジロウ様は陛下に夢中で、他の女性は目に入らないのですな」

助かった。半ば反射的に善治郎は、そのマルケス伯爵の言葉に乗る。

「からかうな、伯爵。まあ、違つとは言わぬが」

善治郎の言葉に、マルケス伯爵はわざとらしく目を見張り、笑う。

「これはこれは、カープア王家は安泰ですな。いやはや、めでたい」

マルケス伯爵はそう答えて、わざとらしく大笑した。

ここまであからさまな態度に出られれば、プジヨル將軍にもマルケス伯爵が全面的に善治郎のフォローに回っている事に気づく。

隣に控えているアウラも、今のところは静かにしているが、あまり激しく切り込めば夫に変わって反撃をしてくるだろう。つまりこの場でプジヨル將軍は、孤立していると言つことだ。

何処をどう間違えたのか分からないが、この場でこれ以上無理をしても、リスクに見合うほどの成果は得られなさそうだ。ここで無理に押し続けて、万が一もアウラやマルケス伯爵を激昂させたりしたら事だ。「プジヨル將軍が、アウラ女王やマルケス伯爵と不和の関係にある」、などと噂を流されれば、諸外国の謀略を誘発しかない。

プジヨル將軍は、「大国」カープア王国で実権を握る事に野心を燃やしているのであって、「亡国」カープア王国を支配したい訳ではない。この辺りが、引き時だろう。

「確かに、それは何にもましてめでたい事です。アウラ陛下は素晴らしい伴侶を得られましたな」

プジョル將軍はそつと妹の背中を二度叩き「売り込み終了」の合図を送ると、自らもそう言つてマルケス伯爵が逸らした話の方向に乗る。

「ああ、最高の夫だとも。お前達のような有能な臣下に恵まれ、ゼンジロウのような立派な夫を得られて、私ほど幸運な主君は大陸南部諸国、いや、このランドリオン大陸全土を探してもいないのではないかな」

「ははは、大陸最高と申しましたか。そこまで持ち上げられると、少々こそばゆいですな」

「いや、伯爵。あまりうぬぼれない方が良い。恐らく、陛下の仰る『幸せ』の半分以上はゼンジロウ様の事をさしておられる。我々の力など微々たるもの」

「なるほど、確かに。最高の伴侶であるゼンジロウ様と比べれば、我等の忠誠も小さなモノでしかないかもしれないかもしれませぬなあ」

その後は、互いにチクリチクリと痛いところを探り合いながらも、女王も將軍も伯爵も積極的な攻防は行わず、比較的穏やかに時間が過ぎていくのだった。

「終わった……！」

その日の夜遅く、立食会から帰ってきた善治郎は、万感の思いを乗せた言葉を発し、黒革張りのソファーにどっしりと尻を落とした。

LEDライトで照らし出されるいつもの部屋。侍女達が用意しておいてくれた氷塊扇風機の風で、火照った身体を冷やす善治郎は、すっかり座りなれたソファーの上で「帰ってきた」と強く実感する。

この一ヶ月ちょっとした間に、この後宮を『我が家』と捉えられるくらいに馴染んできた、ということなのだろう。

意外と環境適応力は高いようだ。

「苦勞を掛けたな、ゼンジロウ。だが、苦勞の甲斐はあったぞ。お前が公的な場で意思表示をしたからな。私との不仲説や、私がお前の自由を不当に縛っているという噂は、ある程度沈静化するだろう。もっともこの手の噂の常で、完全に払拭は不可能だろうがな」

そう答えるアウラも、オレンジ色のドレス姿のまま、少し疲れたようにソファーに身体を預けている。

場馴れしている分、アウラの疲労はゼンジロウほどではないようだが、常時気を張り続けていたアウラも、やはり相当に疲労してい

るようだ。

「そっか。それは良かった。これではらくは引きこもってゆっくり出来るって訳だ。それにしても……まだ目が変な感じだ」

ソファアの背もたれに両腕をかけたまま、善治郎は何度も瞬きを繰り返す。先ほどからずっと目がチカチカしているのだ。

どれほど数を増やしたところで、シャンデリアの明かりはあくまで蠟燭の炎に過ぎない。炎の明かりには明るさの限界がある上に、ちよつとした空気の流れで容易く揺らぐという欠点がある。

足りない光量、揺らぐ複数の光源。目に負担を掛けるには十分すぎる悪条件だ。

特に、こちらの世界に来てからも、現代文明の利器に頼り切っている善治郎の目には、シャンデリアの明かりはきつかった。

「ああ、まだなんだか視界がぼやけてる」

そう言いつつ、善治郎はソファアに座ったまま、靴を脱ぐ。

カープア王国は、日本を超える高温多湿の気候のため、屋内では裸足が許される文化なのだが、流石に立食会や舞踏会のような場合は別だ。

内履き専用の布靴と長い、靴下を脱いだ善治郎は、ホツと開放感に包まれる。

「足が涼しい……」

考えて見れば、こちらの世界に本腰を入れて転移してきてから今日まで、スリッパ以外の履き物を履いたのは初めてだ。今更ながら、

自分が本格的に引きこもっていた事実気づく。

靴を脱ぎ、胸元のボタンを上から二つまで外せば、かなり身体も楽になる。どうせこの後風呂に入って、髪に塗られた香油を落とすのだから、と自分に言い訳をして、善治郎は結局その場でシャツとズボンも脱ぎ、トランクス一丁になる。

サラリーマン時代には、スーツ・革靴に身を包み、対外交渉の場で舌戦を演じた経験はあるのだが、身体に残る疲労感、その時の比ではない。なれない服装というのも多少は関係しているのだろうが、やはり『王族』という下っ端サラリーマンとは比較にならない、影響力の大きな立場に、プレッシャーを感じていたのだろう。

「どれ、私も楽になるとするか」

だらしなくトランクス一丁になった夫を見習うように、アウラもソファアールから立ち上がると、首の後ろに両手を回し、シュルリと衣擦れの音を立て、下着姿になる。以前は王族の常として、着替えは侍女たちに手伝わせていたのだが、善治郎と閨をともしするようになってから、部屋に他人が入るのを嫌う善治郎に会わせて、アウラも脱ぎ着に侍女の手を煩わせることは少なくなっている。

互いに半裸になった男と女。今更恥ずかしがるような間柄ではないが、意識せずにすむほど枯れた関係でもない。

「ゼンジロウ」

「ん、サンキュ」

アウラは、冷蔵庫から冷タオルを二つ取り出すと、その一つをゼ

ンジロウに放った。

ソファーに戻ったアウラは、冷蔵庫で冷やされたタオルで、身体にまとわりつく汗や香油をぬぐい取りながら、善治郎に尋ねる。

「では、疲れているところをすまないが、記憶が鮮明なうちに聞いておこうか。どうだ、ゼンジロウ。この立食会で顔を合わせた貴族の中、特に印象に残った人物はいたか？」

アウラの問いに、ゼンジロウは首筋の香油を拭く手を止めて考えた。

「印象に残った人か……うーん。途中までは結構いたんだけど、最後のギジエン兄妹に全部持ってかれた感じだな。正直、あの二人以外ろくに思い出せない」

その返答は半ば予期していたのだろう。アウラは口元に笑みを浮かべながら、善治郎が座るソファーに腰を下ろす。

「やはり、そうか。まあ、確かに印象的だったからな。では、まず兄のプジョル・ギジエン將軍から聞こうか。お前はあの男にどのような第一印象を抱いた？」

アウラの問いに善治郎は、気まずげにスツと視線を逸らす。

聞かれることを覚悟していた質問ではあったが、同時に聞かれることを怖れていた質問でもある。

善治郎は視線を逸らしたまま、歯切れの悪い言葉でまず言い訳をする。

「あー、その、なんだ。なんつーか、俺も男だから、正直、プジョ

ル・ギジエンと、ラファエロ・マルケスの二人に関しては、偏見の混ざらない意見を言うことは不可能に近いんだけど。ラファエロ・マルケスなんてまだ会ってもいないのに、すでに好感度マイナスになってるし……」

善治郎の言葉に、軽く目を見張ったアウラは、クツクツとこみ上げてくる笑いかみしめる。プジョル・ギジエンとラファエロ・マルケス。かつて、アウラの婚約者候補であった男達の名前だ。

その二人には「偏見がある」という言葉に、夫の嫉妬心を感じ取ったアウラは、胸の奥にあまり趣味の良くない類の歓喜の感情がわき上がるのを自覚する。

思わず夫の身体に腕を伸ばしたい衝動にかられるたアウラであったが、夫がことさら『香油』の匂いを嫌っている事を思い出し、直前で思いとどまった。

いつものように、しっかりとふれ合うスキンシップは、入浴後まで我慢した方が良さそうだ。こんな些細なことで、夫に悪感情を抱かれてはたまらない。

「大丈夫だ。お前の意見を鵜呑みにするほど私も迂闊ではない。だから、思うがままに申せ」

どうやら、これは答えずにやり過ごすのは無理なようだ。観念した善治郎は、隣に座るアウラの方に首を向け、少々要領を得ない口調で話し始める。

「ああ、分かった。そうだな……俺の第一印象は『敵と味方しかないさそうなタイプ』って感じ、かな」

言いたいことは何となく分かるが、少し具体性に欠ける善治郎の

言葉に、アウラはその双眼に興味深げな色を乗せ、再度問いかける。

「ふむ、それはどういう意味だ？」

「いや、だからさ、何て言うか、プジョル將軍つて滅茶苦茶迫力や威圧感があるのに、それを全く隠そうとしていないでしょ？ その上、びつくりするくらいはずけと自分の要求を口にするし。」

目的を達成するためなら、敵を作ることなんて言え
ばいいのかな」

「なるほど、な」

アウラは、小さく頷いた。少々媚殿に失礼だが、思っていた以上に当たっている人物評価だ。確かに、剥きだしの野心家であるプジョル・ギジエンは、軍部を中心に信望者も多い代わりに、嫌っている者も多い。

ただ、「敵を作ることなんて言えない」という評価は少々不当だ。軍人であると同時に名家出身の貴族でもあるプジョル將軍は、宮廷内で無闇に敵を作るほど迂闊な人物ではない。

敵に回していけない人物を前にすれば、愛想笑いをするくらいの使い分けは出来る男だ。

そう言った意味では確かに、善治郎はプジョルを『偏見』で見ているのだろう。妻の元婚約者という肩書きを持つ男に、無意識でライバル心を持ち、その男の欠点を探し、誇張して語る。

善治郎自身が言うとおり、決して褒められた態度ではない。しかし、自覚があつて、そんな自分を嫌悪出来るだけの見識があるのな

らば、特筆するほど大きな問題点ではあるまい。

度が過ぎるようならば、アウラが妻として注意すれば良いだけだ。

大体にして、思い人と関係の深い人間に、暗い感情を抱くのは、人間としてごく普通のことだ。

「では、妹のファティマ・ギジエンについては、どう思った？ 率直な感想を聞かせてくれ。ちょっと見とれているようにも見えたのは、私の目の錯覚だったか、ん？」

そう尋ねるアウラの瞳には、少し暗い感情の色が見え隠れしていた。

幕間4【兄と妹、夫と妻】

後宮で善治郎が、イタズラっぽい笑顔を浮かべるアウラに問い詰められていた頃、ギジェン家の王都屋敷では、王宮から帰還したプジョル將軍とその妹のファティマが、屋敷の一室で静かに会話を交わしていた。

「あの……お兄様、あれで良かったのでしょうか？」

立食会で見せていた気の強そうな表情は何処へ行ったのか、ファティマはオドオドとソファーの上で身体を縮こませ、上目遣いに対面に座る兄を窺う。

兄と妹と言うより、主人と犬を連想させるファティマの態度を、プジョル將軍は極当たり前のように受け止め、小さく首を縦に振る。

「ああ、上出来だろう。欲を言えばきりがないが、十分に合格点だ。良くやったぞ、ファティマ」

「はいっ！ お兄様」

兄に褒められた妹は、心の底から嬉しそうな笑みを浮かべ、ホッと安堵の溜息を漏らす。

ファティマの漏らした吐息が、テーブルの上に乗る燭台に掛かり、ユラユラと薄暗く室内を照す炎をゆらした。

この世界で、夜間照明のメインとなっているのは、植物油に芯糸を垂らした油皿だ。

固体である分、油皿より取り扱いが容易い蝋燭は利用価値が高いのだが、生産量も輸入量も限られているため、日常の照明として使用している家は、貴族の中でもごく一部の富貴層に限られる。

ギジエン家はそのごく一部の富貴層である。

もっとも、その机の上の小型の燭台と、部屋の四隅に設置されている背の高い四本の燭台、その全ての蝋燭の明かりをあわせてもその明るさは、善治郎が持ち込んだLEDランタンの半分にも満たない。

それでも、向かい会って座る兄と妹に、互いの顔を視認させるには十分な灯りである。

プジョル將軍は、嬉しそうに自分の顔を見上げる妹の目を見つめ返し、独り言を言っているような素っ気ない口調で言葉を返す。

「ともあれ、ゼンジロウ様はお前という存在を、意識するようになったはずだ。少なくとも、顔と名前は覚えてもらえただろうし、あの様子ならば第一印象もそう悪くはあるまい」

「はい」

特に、立食会という大多数の貴族達の前でアピールできたという事実は大きい。

あれであの場にいた貴族達は、プジョルのスタンスを理解したはずだ。プジョル・ギジエンが妹のファティマを善治郎の側室に入れる事を望んでいる、と。そう知った上で、今後、善治郎の元に自分の息が掛かった女を送りこもうとする人間は、どれくらいいるだろうか？

まあ、海千山千の貴族達が、一気に全員手を引くことは絶対にならざるうが、少なくとも数々の貴族がギジエン家との衝突回避の方向に舵を切る事だろう。

さらに、これまでファティマの元にはかなりの数の婚姻話が舞いこんでいたのだが、それらの攻勢にも今回の一件はいい牽制になるだろう。

ギジエン家の家長であるプジヨル・ギジエンは、妹を善治郎の側室に入れる事を望んでいる。

裏を返せばそれは、王配の側室になるのと同様か、それに準ずるくらいのうま味のある婚姻条件を提示できなければ、プジヨルは妹を他家の嫁に出さないという意味表示をしたとも取れる。

「……………」

「お兄様……………」

プジヨルは、蠟燭の明かりに照らし出される妹の顔に視線を固定したまま、考える。

(ふむ。欲目抜きで、なかなかの美人に育ったと思うのだがな。ゼンジロウ様の反応は今一分かりづらい)

贈り物の『竜弓』を「自分は引けない」とはっきりと明言する辺り、武人としての側面は全く持たない人物のようだが、あの場で「腕の立つ忠誠厚い兵士に渡せ」と切り返す辺り、頭はそう悪くなさそうだ。

(馬鹿な野心家であれば、話は簡単だったのだが、そこまで都合の

良い話はないか)

あの受け答えを聞いている限り、善治郎という男は馬鹿ではない。だが、馬鹿でないのだとすれば、なぜあの善治郎と言う男は、女王の都合の良い人形に甘んじているのだろうか？

よほどの馬鹿でない限り、女王の伴侶という立場は、少し手を伸ばすだけで大きな権力を掴むことが出来る立場であることを理解できずなのだが。

(もしかすると、冒険を嫌う質なのかも知れんな)

自分自身が野心家である事を自覚しているプジヨル將軍は、同時に世の男全員が、自分の様な野心家では無いことも理解している。

ある程度の地位、ある程度の財、ある程度の名誉。それで、満足してしまう男も世の中には確かに存在する。ひよっとすると、あの善治郎という男もその類の存在なのかも知れない。

女王の伴侶として、後宮でかしくかれ、贅をこらした生活を過ごすだけで当面の欲望を満足させてしまっている。そういう可能性はある。

(だとすると厄介だな。アウラ陛下との離間工作はまず成功すまい)

現状に満足している人間を唆すのは難しい。まず、その満足している現状を悪化させるか、満足している心に野心を植え付けて飢えを覚えさせる所から始めなければならぬからだ。そういった工作は、すでにある野心の火種を大きくするのと比べると、格段に手間が掛かる。

プジヨルは蠟燭の明かりで薄暗く照らし出される天井に視線を向

け、無言のまま考え続ける。

（現状で最善は、ゼンジロウ様の側室にファティマを入れて、その間に産まれた子が次代の王になることなのだが、その可能性は低い、と見るべきか）

ファティマを善治郎の側室に入れる事を諦めるつもりはないが、問題は時間だ。女王アウラと善治郎が閨をともしする間柄である以上、すでにアウラの腹の中には子種が宿っけていてもおかしくはない。

そこまでいつていないとしても、アウラと善治郎の関係が現状のまま一年も続けば、嫡子が生まれるのは時間の問題だ。これから側室入りを目指すファティマの第一子は、女王の第一子より年下になる、と考えるべきだろう。そして、その女王の第一子が男であったなら、それより後に生まれるファティマの子が、例え男であったとしても王位に就く可能性は低い。

（ならば、アウラ陛下とゼンジロウ様の間に子が産まれた場合にも、対応した身の振り方を考えておくべきか）

幸い、プジョルはまだ三十代の前半という若さだ。もし、近いうちに、アウラと善治郎の間に男子が産まれたとして、その子が成人するのは十五年後。その時プジョルは、まだ五十になっていない。戦士としてはともかく、將軍、宮廷貴族としてはまだまだ現役のはず。

（カープア王国で女王の即位は『場繋ぎ』と見なされるからな。一定以上の帝王学を身につけた成人した男子がいれば、王権の譲渡は時間の問題のはずだ）

アウラと善治郎の間に子が生まれ、その子が成人と認められる十五歳になったところでアウラから子に王冠が移る。この先、波乱がなければそうなる可能性は高い。

望ましい未来をたぐり寄せるために努力をするのは当然であるが、実現する可能性が高い未来の対策を取っておくことも、忘れてはならない。王国一名高い将軍と言っても、所詮はプジョルも1人の有力貴族に過ぎないのだ。一事が万事、思い通りになるはずもない。

「ふむ、やはり、多少はアウラ陛下とも足並みを揃えておくか」

プジョルは、対面に座るファティマにも聞こえないくらいの小声でそう呟くと、視線を天井から下ろした。

政治の世界は複雑だ。全面的な敵や、全面的な味方というのは皆無に等しい。

軍の最高位である『元帥』に野心を燃やしているプジョル将軍と、国軍を王家の指揮下に置いておきたいアウラの利害は、原則としてはぶつかり合っているが、視野を少し広げて、『国軍』と『地方領主軍』という別な対立構造から見ると、また立場は変わってくる。

女王であるアウラも、国軍の最高位を目指すプジョルも、国軍の軍備増強、地方領主軍の縮小という方向性に関しては、見解の一致を見ている。

一通り考えを纏めたプジョルは、真剣な表情でこちらの顔をのぞき込む妹に、その漆黒の双眼を向けて言う。

「ファティマ。私はお前を、ゼンジロウ様の側室に入れるつもりだ

が、状況は流動的だ。場合によっては、他家に嫁入りしてもらっても可能性も十分にある。心づもりはしておけ」

善治郎の側室に入れる事が、第一希望であることは間違いないが、ファティマは現在十七歳だ。今がまさに結婚適齢期。本人の容姿や能力、ギジエン家の家名を持ってすれば適齢期を過ぎてても結婚相手に困ることはないだろうが、その場合、結婚相手のランクは確実に下がる。

妹の幸せの為に、時間制限を設けて、ある程度粘っても目がないうようならば、側室入りはすっぱり諦めた方が得策だろう。

プジヨル將軍も、妹を幸せにしてやりたいとは思っているのだ。ただ、妹の幸せより、ギジエン家の繁栄や、自分の野心を満たすことの方が優先順が高く、肝心のその『妹の幸せ』というのも、プジヨルが考える『幸せな結婚』を押しつけるだけなのが少々問題なのだ、それもこの場合は、さほど大きな問題にはならない。

「はい、お兄様。私は、どのような家に嫁いでも、ギジエン家の娘として恥ずかしくないよう、勤め上げて見せますわ」

兄の言葉に、妹はうつとりとした表情で首肯する。

「うむ、期待しているぞ」

「はいッ」

兄、プジヨル・ギジエンを敬愛し、ギジエン家の娘であることに誇りを持ち、政略結婚の意義を幼少の頃から叩き込まれている少女、ファティマ・ギジエンにとって、プジヨルに言われた内容は特に忌

避するようなものではなかった。

夜更け頃、後宮の大きなベッドの上では、一糸まとわぬ裸体をさらした善治郎とアウラが、複雑に身体と身体を絡ませ合い、軽く息を弾ませたり、荒い息を吐いたりしていた。

具体的に言えば、軽く息を弾ませているのがアウラで、思い切り荒い息をついているのが善治郎である。両者の息の上がり具合の違いは、ベッド上の運動における男女の運動量の違いと、それぞれ個人の基礎体力の違いに由来する。

ちょっと前までソファアの上で、『ファティマに見とれていた』件について問い詰めていたアウラと、問い詰められていた善治郎が、こうして寢室のベッドで一戦交えるに至ったかについては、さほど長くも複雑でもない経緯がある。

楽しげにアウラが善治郎を問い詰め始めたタイミングで、ドアの向こうから侍女が『浴室の準備が調いました』と告げてきたので、とりあえずは一度会話を打ち切った善治郎とアウラは、仲良く浴室に向かい、汗と香油を流すことを優先した。

その後、湯上がりの薄着姿で部屋に戻ってきたアウラは追及を再開したのだが、元々本気で怒っていたわけではない。ただ、善治郎との会話を楽しみながら、『ファティマ』という少女の第一印象を聞き出したかっただけである。

善治郎に焦った口調で「いや、確かにストライクではあるけど、せいぜい真ん中低めだよ。間違ってもど真ん中じゃない。この後、ど真ん中のストライクが来るって分かっている以上手をだすような球じゃないよ、絶対」などと言われれば、意地の悪い表情を取り繕うのも難しい。

吹き出すアウラと、からかわれていたことに気づいて怒ってみせる善治郎。謝るアウラに、突っぱねる善治郎。謝りながら抱きつくアウラに、抱き返ししながらアウラの口を自分の口で塞ぐ善治郎……。そんなことを繰り返しているうちに、いつの間にか2人は寝室のベッドで激しく愛し合うようになっていたのである。

「……………」

善治郎は、裸の愛妻を胸元に抱き寄せ、その赤い頭髪を何度も撫でながら、顔を綻ばせる。

氷扇風機から冷風が吹き抜けるベッドの上は十分に涼しく、こうして肌と肌を合わせていても互いの体温が心地よく感じられる。

「ん……………」

善治郎は横向きに寝たまま、アウラを抱きしめる腕に力を込めた。

「ふふ……」

アウラは抵抗するそぶりも見せず、抱かれるに任せて、その汗ばんだ裸身を善治郎に押しつける。

互いの心臓の鼓動が肌を通して感じられるほどの密着感。頬に当たる吐息や、肌をくすぐる髪の毛の感触が生み出すくすぐったささえも、心地よい。

抱きしめ、髪を撫で、背中を叩く。そうしているうちに、善治郎の腕の中でアウラはスースーと寝息を立て始める。

「相変わらず、寝付きが良いなあ……」

窓から差し込む星明かりの下、照らし出される愛妻の赤い頭髪を手で梳くように何度も撫でながら、善治郎は微笑んだ。

左腕をアウラの首の下に差し込んだまま、善治郎は少し上体を起こし考える。

アウラの言葉を信じて良いのなら、今夜の立食会は、それなりに無難に乗りきることが出来たようだ。

「やたら疲れたけど、俺にとっても有意義な時間だったかもしれないな」

立食会で向けられた貴族達の視線を思い出し、善治郎はポツリと呟く。

異世界から現れた女王の婿に向けられる視線は、お世辞にも心地よいモノではなかった。大多数は、値踏みのような好奇の視線だった

が、善治郎がプジョル將軍に向かつて「戦場では何の力にもなれない、非力な存在だ」と明言したときには、あからさまに失望や侮蔑の視線を向けてきた者もいた。

それが当たり前なのだ。どれだけ後宮に引きこもっていても、どれだけアウラの足を引っ張らないように言動に気をつけていても、善治郎の事を疎ましく思う人間は絶対にいる。

「問題は、嫌われないように振る舞うことが最善ではない、ってことだよな」

善治郎はあくまでアウラの伴侶であり、アウラの味方であり、アウラと運命を共にする者である。女王の伴侶として相応しくない、と思われるほど評判を下げるのはもってのほかだが、あまり評判を上げるのも考え物だ。

元々妻が夫より前に立つことに忌避感が強いこの国で、下手に善治郎が『有能』だと勘違いされてしまうと、アウラの足場を揺らさせることになってしまう。

理想は、『人畜無害で子作り以外の能はないが、最低限公的な場に出ても国の恥をさらさないだけの知識と教養を持った人物』、と思ってもらえることだ。

なんとも、さじ加減の難しい話だが、その程度の苦労は矢面に立つて国政を切り盛りしている愛妻の苦労と比べれば、微々たるものだ。その程度の労苦を厭うようでは、アウラの伴侶として横に立つ資格はない。

もともと所詮は、二流大学を出て中小企業のサラリーマンをやっ

ていただけの自分が、『有能』と勘違いされるような成果を上げられるとは、善治郎自身は思っていないが。

「アウラ……」

善治郎は改めて、自分の腕の中で寝息を立てる愛妻の寝顔を見る。無防備と言っても良いくらいに、穏やかな表情で眠るその様子に、善治郎はアウラの自分に向ける信頼が深まってきたという実感を覚える。

最初に婚姻があり、そのすぐ後に身体を重ね、それからお互いのことを知り、愛情と信頼を高めていく。恋愛結婚になれている現代日本人の目には奇異に映る順序かも知れないが、お見合い結婚の一種と考えれば、むしろ理想的に事が進んでいると言っても良い流れだ。

もっとも、アウラに一目惚れしたのに近い善治郎にとっては、恋愛結婚と言っても間違いではない。

「アウラ……」

善治郎は、いい加減痺れてきた左腕を、アウラの首の下からそっと抜き取った。

「ん……んん……やあ……」

その拍子にアウラは、むずがるように寝息を立てたが、目を醒ますまでには至らなかつたようだ。

ホッと安堵の溜息をついた善治郎は、腕を抜いた拍子に乱れたアウラの長髪を手で丁寧にすくい上げ、枕より上にそっと押し上げる。

「……俺も寝るか」

そして、横向きに眠るアウラと顔と顔が向き合うように、身体を横たえると、眠気が来るまでじつと静かに目を瞑り続けるのだった。

第五章1【森の祝福】

善治郎が立食会で無難な社交界デビューを果たしてから、数ヶ月。

南国カープア王国でも、流石に日中温度計が四十度越えを示したり、夜でも三十五度以上ある様な日々は、何日も続かない。

ここ最近はずっと、日中の最高気温が三十度を僅かに超える程度で、夜になると軒並み二十五度を下回る過ごしやすい日々が続いている。

このくらいならば、昼間は氷なしの扇風機で十分だし、夜は特に冷房を働かせなくても寝苦しくない。

カープア王国には、日本のような分かりやすい『四季』はないが、後宮の窓から外の風景をよく見ると、色々違いがあるのが分かる。

来た頃は、赤や黄色の大輪の花が咲いていた花壇に、青や紫色の水仙のような細い花卉の花が咲き、差し込む日差しの影もほんの少し長く伸びている。数ヶ月前には、蚊取り線香を窓際に焚いて撃退していた羽虫も、最近は数が減り、夕暮れに鳴き声を響かせる鳥も種類が変わったようだ。

『四季』と呼ぶほど劇的な変化ではないが、一応「季節が変わった」と言っても良いのではないだろうか。

何はともあれ、来た当初と比べて格段に過ごしやすい季節になったのは間違いない。

しかし、肝心の善治郎は、そんな穏やかな季節を満喫できる状態ではなかった。

昼間から寝室に籠もり、ベッドの上で胎児のように身体を丸めて寝る善治郎。

「はっ、はっ、はっ……」

その呼吸は細く、呼気は熱い。頬は紅潮し、額や首筋からは、絶えず汗が噴き出している。涼しくなったとは言っても、日中は三十九度前後の気温があるはずなのに、顎まですっぽりと羽布団を被っているその身体は、先ほどから寒さに耐えかねるように、ガタガタと震えている。

やがて、布団の中からピーという、この世界には馴染まない電子音が小さく鳴り響く。

「はっ……」

辛うじてその音を聞き止めた善治郎は、布団の中でゴソゴソすると、脇の下に挟んでいた『体温計』を取りだし、顔の前にかざす。

《38.3》

デジタル式の体温計に表示された数値は、善治郎の平熱より二度以上高い値を示していた。

善治郎が熱を出して寝込んだ。

昼食の少し前にその知らせを受けたアウラが最初に取った行動は、後宮で働く職員達に後宮からでないように通達することと、自らの体調を顧みることだった。

熱を出した夫は心配だが、アウラは王である。女王が病魔に冒されないための予防は、女王の伴侶を病魔の手から救い出すことよりも優先される。

いったん業務を停止し、王宮内の私室へ下がったアウラは、すぐさま王室御用達の医者呼びつけ、自分を診断させた。

蔦を編んで作られた椅子の上で、大きく口を開けて喉の奥を見せっていたアウラは、初老の医者「はい、もう結構です」と言う言葉を受けて、口を閉じる。

「どうだ？」

「はい、大丈夫です。少なくとも、現時点では陛下に、病気の兆候は見られません」

簡潔なアウラの問いに、初老の医者は柔らかな笑みを浮かべそう答

えた。

医者 of 答えに、アウラは威圧感のある厳めしい表情を保ったまま、内心安堵の息を漏らす。

良かった。この世界の医療技術は、あまり進歩していないため、医者 of 保証も絶対の安心をもたらすものではないのだが、医者 of 口調からするとまず安心して良さそうだ。

我が身の安全が保証されれば、アウラも王としてではなく、妻としての言葉を口に乗せることができる。

「そうか。では、手数をかけるが、後宮で寝込んでいる嬪殿を頼む」

男子禁制の後宮で、数少ない例外とされるのが医療関係者だ。男社会中心のカープア王国に、女医はほとんど存在しない。そのため、医者は例外としておかなければ、後宮の住人は病魔に冒されても医者に掛かることが出来なくなってしまう。

「はい。全力を尽くしましょう」

老医師は、柔和は笑顔で承ると、女王の許しを得て退出していった。

入れ替わるようにして、アウラの秘書官を務める、ファビオ・デウバジエが部屋に入って来る。

「失礼します、陛下。ご容態はいかがでしたか？」

細面の中年秘書官に、アウラは小さく微笑むと、早速指示を飛ばす。

「ああ、私は問題なしだ。ミシエル医師には、そのまま婿殿の診察に回って貰った。病状次第では、婿殿に『治癒の宝珠』を使いたいと思っっているのだが、お前の意見を聞かせてくれ」

『治癒の宝珠』という言葉に、ファビオ秘書官はピクリと片眉を跳ね上げたが、すぐに首を縦に振り、同意を示した。

「……そうですね。ミシエル医師の診断結果を聞かなければ明言は出来かねますが、ゼンジロウ様の病が死病の類であるようならば、考えるまでもありますまい。今、ゼンジロウ様を失う訳にはまいりません」

『治癒の宝珠』とは、南大陸の中部に位置する大国、シャロワ・ジルベル双王国で作られた魔道具である。

『付与魔法』のシャロワ王家と、『治癒魔法』のジルベル法王家。両王家の魔法技術の結晶とも言うべき『治癒の宝珠』の効果は絶大だ。

流石に、欠損部位の再生や、失われた五感を取り戻すことは出来ないが、基本的に治癒の宝珠を使って命が助からなかった傷病者は、ほとんど存在していないという。

中世イスラム圏に毛が生えた程度の医療技術しかないこの世界に存在する『万能の薬』。しかも、その作り手が世界に十数人しかいないとなれば、『治癒の宝珠』一個に小国が傾く程の値がつけられるのも、当然と言っべきなのかも知れない。

カープア王国は南大陸の西部に覇を唱える指折りの大国であり、シャロワ・ジルベル双王国とはそれなりの付き合いのある友好国

だが、それでも『治癒の宝珠』は現在三つしか保有していない。

購入金額も馬鹿高いが、例えば金を詰んでも、絶対に買える保証がない貴重品。それが、『治癒の宝珠』だ。

「そうか、お前がそう言うのなら、安心だ」

ファビオ秘書官の返答に、アウラは表情に安堵の色を滲ませる。アウラ自身、善治郎が倒れたと聞いた瞬間、『治癒の宝珠』を使うことをとっさに考えたのだが、その判断が、妻としての感情によるモノか、王としての理性によるモノか、自分でも分からなくなっていた。

冷静に考えてみれば、アウラはまだ子をなしていないこの段階で、善治郎に死なれるのは王国を揺るがす一大事なのは、貴族ならば誰でも分かる。そういつた判断も下せないくらいに、アウラの思考が鈍っていたということなのだろう。

いざとなれば、『治癒の宝珠』を使用すればよい。その結論に達したおかげで日頃の冷静さを取り戻したアウラは、椅子の肘掛けに右肘を付き、頬杖をつく。

「それにしても、朝、目を醒ましたときには、婿殿もごく普通にしていたと思ったのだがな。どのような病を患ったのか」

「毎夜、閨を共にしておられる陛下が発病していないのですから、陛下が過去に患ったことのある、一度しかかからない類の病の可能性が高いかと」

ファビオ秘書官の言葉に、アウラは頬杖を突いたまま考える。

一度掛ければ、二度と発病しない病。

アウラも過去には、そういった病にかかった経験は何度かある。

「一度しか掛からない病、過去私が患った、朝にはピンピンしていたのに昼前に発病……ひよっとして、あれか？」

しかし、そこにもう一つ「朝までは何ともなかったのに、昼前に急に容態が悪化した」という条件を加えると、アウラが思いつく病名は一つに絞られる。

アウラよりよほど冷静な、ファビオ秘書官はとっくにその病名にたどり着いていたのだろう。

「おそらくは、陛下のご想像通りではないでしょうか」

秘書官は、相変わらずの鉄面皮のまま、抑揚の無い声でそう答えた。

秘書官の言葉に、アウラは脱力感を覚える。

善治郎の病気が「あれ」なのだとしたら、これまでの心配はまったくの徒労であったことになる。

アウラの予想は、それから程なくして王宮に戻ってきたミシエル医師の言葉で裏付けられた。

「ゼンジロウ様は『森の祝福』を受けておいでです」

死亡率が限りなくゼロに近い病名を告げられたアウラは、脱力感のあまり天井を仰ぎそうになるのをこらえ、厳めしい顔で、ミシエル医師に「そうか、ご苦労だった」と告げる。

その後ろでは、女王の狼狽を目ざとく見咎めた秘書官が、片頬を吊り上げて人の悪い笑みを浮かべるのだった。

「アウラ。『森の祝福』ってなに？」

熱を出して寝込んだ夫を見舞うため、業務を早めに切り上げて後宮にやってきたアウラに、善治郎はグツタリと大きなベッドに倒れ込んだまま、視線だけを向ける。

時刻としてはまだ夕暮れ時だが、外気が吹き込まないように木戸を閉め切つてあるため、外の様子はうかがい知れない。善治郎が眠りやすいよう、寝室のLEDスタンドライトも点灯させているのは一つだけだ。

そんな薄暗い寝室の中、ベッドの横に置いた椅子に腰を掛けたアウラは、冷蔵庫から持ってきた冷タオルで、甲斐甲斐しく善治郎の額や首筋の汗を拭いてやりながら、答えを返す。

「簡単に言えば、この辺りに昔から蔓延している風土病だ。毒性が

弱く、発病しても老人や乳幼児でなければ、滅多なことで死に至ることはない。さらに、一度感染すれば二度と感染することがない上に、不思議とこの病を経験した者は、他の病にかかったとき、症状が軽くてすむことが多いので『森の祝福』と呼ばれているのだ」

熱で良く回らない頭で、どうにかアウラの言葉を理解した善治郎は、思わずポツリと感想を漏らす。

「すげえ……俺、この病原菌と抗体を作った身体を地球に持って帰ったら、ノーベル賞取れそうな気がする……」

地球でも、麻疹や水疱瘡のように、一度掛ければ原則二度と発病しない類の病は存在したが、その効果が他の病原菌にも劇的に作用する抗体を作るとは、まさにファンタジーだ。

だが、それはそれとしてこの病気が「滅多なことで死に至ることはない」というのは、最高の朗報だ。異世界の病の恐怖に震えていた善治郎は、一瞬身体の節々の痛みも忘れて顔を綻ばせる。

「そっか。それなら、寝てれば治るんだな……。どれくらい？」

「そうよの。早い者で三日、長引く者で七日くらいか」

つまり回復まで、おおよそ五日前後は掛かるということか。無理をすれば立ち上がれないこともない程度ではあるが、こんな体調が五日も続くと思うと流石にウンザリする。

関節という関節が痛むせいで、寝ていても身の置き場がないし、熱が高いせいで汗を掻きっぱなしなのに、喉が腫れていて水を飲むだけでも痛い。

眠れば楽になるのだが、寝苦しさと身体の痛みが安眠を妨害してくれる。症状としては重めの風邪に似ている。

（それにしても、このしんどい状態が最長一週間も続くのに、本当に『滅多なことでは死なない』のか？ どう考えても、この世界の文明レベルでは死人続出に思えるんだけどな）

善治郎の、熱でゆだった脳裏に、ふとそんな疑問がわき上がる。

三十八度を超える高熱で数日間寝込んで、滅多なことでは死なないのは、家も布団も栄養状態も満たされた現代日本の一般家庭ならばこそだ。

栄養状態の悪い貧民層にとっては、十分致命傷となり得る病に、善治郎には感じられる。

その善治郎の感覚は間違っていない。

この病気が『森の祝福』などと、暢気な呼ばれ方をしているのは、若いうちに掛かっておくと遙かに軽い症状ですむからだ。体温でいえば、せいぜい三十七度前後だろうか。

だから、市井では、近くに『森の祝福』を発病した人間が出ると若い子供のいる親はわざわざ『祝福』をうつしてもらいに行くのだという。

無論、それでもなお、『森の祝福』に負けて命を落とす少年・少女もいるが、それは諦めるしかない。『森の祝福』にも耐えられないような子供は、どのみち成人するまで育たない。そう自分に言い聞かせて、親たちは自分の心を騙すのだ。

ともあれ、そういった貧困層の事情はこの際善治郎には、あまり

関係がない。

「そう言えば、侍女達が困っていたぞ。せめて、病気が治るまでは彼女たちの立ち入りを許可した方が良いのではないか？　そうしてくれた方が、私も安心なのだが」

ふと思い出したようにそう言うアウラの言葉に、善治郎はベッドの上で身をよじり、珍しく不快そうな表情を浮かべる。

「あー、出来ればそれは辞めて欲しい。正直、周りに人がいると、治るものも治らない気がする……」

「だが、その身体では、食事も小用も一人では足せまい？　看病する人手は必要だ」

今は、特別に時間を作ってこうしてアウラが付き添っているが、女王であるアウラは本来この様な仕事をする身分ではない。王族の世話は、家族ではなく、使用人の仕事だ。

「あー、うん……」

相当喉がやられているのか、か細い声でしか返事を返せない善治郎であったが、その割りには頑固にアウラの提案を呑みこもうとしない。

「ゼンジロウ……?」

なおも問いかけるアウラに、善治郎は痛む喉に無理をかけて、小さな声を絞り出し、白状した。

「俺さ、病気の時って、すごく神経ささくれるんだ。ちょっと油断すると、周りに当たり散らしたり、我が儘言ったり。そういうことしたくないから……周りに人について欲しくない……」

病気で寝込んだとき、常とは違う感覚になる人間というのは、珍しくない。

病気で弱った身体が、心にも影響を及ぼすのか、異常に気弱になったり、訳もなく人恋しくなったりする人間は多い。

善治郎の場合、それは攻撃性として表面化する。

呑みこむスープが熱いのも、身体を拭くタオルがぬるいのも、そもそも自分は今こんなに辛い思いをしているのに、健康にしていること他人が存在していること自体が憎らしく思えてくる。

無論、善治郎も今はいい年をした大人だ。例え病気で心身が弱っていても、そんな無駄な攻撃性を常時周囲にまき散らすほど薄弱的な精神はしていないが、そうした攻撃性を抑えるのは疲れるものだ。

ならば多少不自由でも、周りには誰もいない方が良い。今だけはアウラにも隣にいて欲しくない。いや、アウラにこそ、いて欲しくない。この良くてきた嫁に子供のような我が儘を言ったりしたら……正直、病気が治った後、精神的に立ち直ることは出来ない気がする。

「大丈夫……着替えくらいは自分で出来るし、トイレの時はベル鳴らすから……」

「むっ、しかし」

侍女や執事など、理不尽な主に怒鳴られるも仕事のうちだと思っ

のだが、この数ヶ月でアウラも善治郎の価値観をかなりの部分、理解している。

人に理不尽な迷惑を掛けることに、強い罪悪感を覚える善治郎の価値観からすると、確かにここで侍女達に当たり散らしたりしてしまえば、後のダメージは大きそうだ。

しばし考えた後、折れたのはアウラの方だった。

「……分かった。出入りは最小限にするように言っておく。もうすぐ夕飯だが、何か食べたいものはあるか？」

何気なく付け足したその言葉は、無意識のうちに出た言葉だった。その言葉に、心の弱っていた善治郎は、反射的に希望を漏らす。

「お粥……梅干しか、卵と醤油のお粥が食べたい」

「オカユ？　なんだ、それは？　ウメボシ？　卵は分かるが、シヨウユとはなんだ？」

アウラの反応は、熱で頭の鈍った善治郎にも簡単に理解できた。全く、今言った言葉は通じていない。言霊の自動翻訳も働かなかつた所を見ると、少なくともこの言語圏に『梅干し』と『醤油』に相当するものは無いということだ。

アウラの言葉に、善治郎は弱々しく笑い返す。

「んん、今は説明する元気ないから……後でね。食べるのはなんでもいいよ。何でも食べるから」

「……分かった。厨房に頼んで、とびきりの病人食を用意させる」

アウラは一瞬なにか言いたげな表情を浮かべたが、すぐにいつもの迫力のある笑顔に戻ると、しなやかな動作で椅子から立ち上がる。

「ん、楽しみにしている……」

寝室から出て行くアウラの背中に、善治郎は擦れた声でそう呟いた。

ボタンと音を立ててアウラが立ち去ると、薄暗い寝室には善治郎一人が残される。

「うっ……」

善治郎は手探りでベッドの横の台上から、湯冷ましの入った500?ペットボトルを手にとると、キャップを開けて、口に運んだ。

「ぐっ……」

生ぬるい水を嚥下するだけで、喉がピリピリと痛む。それでも汗をかいた身体に水分を補給しなければ、どれだけ危険かは分かっている善治郎は、痛みをこらえて水を飲む。

「ぶっ……」

ペットボトルの湯冷ましを半分近く飲んだ善治郎は、キャップを

閉めると再びペットボトルを台上に戻した。

このペットボトルは、一度目の転移の時、こちらの世界に忘れていった自転車の籠に入っていたお茶のペットボトルである。

日本ではただの資源ゴミに過ぎないこの小さな入れ物も、この世界では貴重品だ。

軽くて、落として割れる心配がなくて、キャップを閉めれば倒してもこぼれることもない。非常に使い勝手のよい器である。これがないければ水を飲むのにも、もっと苦労をしていた事だろう。

ひりつく痛みと引き替えに、喉の渴きを癒した善治郎は、身体から汗が噴き出すのを自覚しながら、枕に顔を突っ伏し身もだえる。

（ああ、俺、何言ってるんだ。こんな異世界で、お粥が食べたい、って俺は、聞き分けのない子供か！？）

アウラが、空気を読む、物わかりの良い人間で助かった。もし、あのままこの場にアウラが居座ったら、次は「桃缶が食べたい」などとのたまったかも知れない。

善治郎は、自分が大した男ではないことは自覚しているが、この世界に存在しないものを欲しいなどと、子供のような我が儘を抜かず馬鹿男だとは思われたくない。

（ああ、くそ。早く治さないと、精神的に死んでしまう……）

不幸中の幸いと言うべきか。自己嫌悪に苛まされる善治郎は、しばしの間発熱のけだるさも、関節の痛みも忘れて、ベッドの上で突っ伏すのだった。

第五章2【双王国からの訪問者】

『小飛竜』と呼ばれる竜がいる。その名が示すとおり、翼竜（空を飛ぶ爬虫類の総称）の中でも、特に小柄な種で、せいぜいカラスと同程度の大きさしかないこの竜は、人間が家畜化に成功した四種類の竜の中で、唯一の翼竜種である。

『走竜』は戦力。『鈍竜』は労働力。『肉竜』は食肉。では、『小飛竜』の役割は何かというと、それは伝達力だ。

ようは伝書鳩の役割を果たしていると思えば、おおよそ間違いはない。『走竜』に乗った伝令兵が直接書状を届ける伝令網と比べると、不慮の事故で書状が届かない可能性があまりに高いため、確実性には欠けるが、その速度は圧倒的だ。

走竜に乗った伝令騎兵がリレー方式でかけ続けても五日はかかる距離を、『小飛竜』ならば一日で届く。

そんな『小飛竜』が、東の国境砦から王宮に飛来したのは、その日の正午のことだった。

「東の国境から、報せだど？」

その日の午後、執務室で業務に精を出していたアウラは、ファビオ秘書官の報告を受けて、怪訝そうに首を傾げた。

「はい。先ほど、東の国境砦から『小飛竜』による報告書が届きました。こちらです」

そういつて、細面の中年秘書官は、テーブルの上に小指ほどの大きさの木の筒を三つ並べる。

中の書状は、恐らく全て同じものだ。迷子や大型飛竜に捕食される危険のある『小飛竜』通信は、同じ内容の書状を持たせた『小飛竜』を複数飛ばすのが一般的なのである。

アウラはそのうちの一つを手にとると蓋を開き、中から薄い竜皮紙を取りだし、サツと目を通した。国境砦の将軍が、わざわざ貴重な『小飛竜』を飛ばしてきた位なのだから、ある程度緊急性の高い事態が起きたのだろう。

余りよい予感がしないまま、アウラはその小さな竜皮紙に目を通し、小さく溜息をついた。

「陛下？」

「……………」

問いかける秘書官に、アウラは無言のまま手に持つ小さな竜皮紙を突き出す。元々『小飛竜』という情報伝達手段は、圧倒的な速さを持つ代わりに、敵対者に横から奪われる危険があるため、緊急性は高くても、秘匿性は低い情報に限るのが一般的だ。

アウラの腹心とも言える、ファビオ秘書官がそれに目を通すことは、さほどおかしな事ではない。

「では、失礼します」

竜皮紙を受け取ったファビオ秘書官は、その小さな紙片に目を通し、ピクリと頬肉を振るわせる。

『本日未明、東砦にシャロワ・ジルベール双王国のイザベツラ王女殿下一行が、護衛兵士三百名と共に来訪。入国許可を求めたため、条約に基づき、都市内部での武装解除を条件に入国を許可。なお、東砦からもイザベツラ殿下の護衛として、騎兵三百が同行』

そのような本文の後に、手紙をしたためた日付と、東砦の責任者である將軍のサインが書かれている。

ファビオ秘書官が一つめの竜皮紙に目を通していている間に、アウラは残り二つの筒も開き、念のため中身を確認したが、予想通りそこには一つめと全く同じ文面が記されていた。

読み漏らしが無いように、何度もその短い文章を目で追ったファビオ秘書官は口を開くと、平坦な声を上げる。

「イザベツラ殿下、ご来訪ですか。近隣諸国の王族・貴族で、殿下のお力が必要な重傷者が出たということでしょうか？」

「ああ、恐らくな。イザベツラ殿下直々となると、相当金を積んだ

はずだぞ」

イザベツラ・ジルベール。その名が示すとおり、南大陸中部の大国、シャロワ・ジルベール双王国の王家の一つ、ジルベール法王家の王女である。

王女とは言っても、現法王が六十を過ぎている関係上、彼女も四十過ぎで、すでに三人の子を持つ母なのだが、特筆すべきは彼女が法王家の中でも五指に入る『治癒魔法』の使い手だということだ。

ジルベール法王家の『治癒魔法』の恩恵にあずかるため、双王国を訪れる人間は多い。しかし、当たり前だが、怪我や病気で死ぬか生きるかの瀬戸際に立っている人間で、母国から双王国の首都まで足を運ぶことが出来る人間は極少数派だ。

では、病床から動かすことも出来ない重傷者はどうするかというと、法王家の人間を招くのである。財政担当者が青ざめるような大金を詰んで。

「殿下護衛は、三百名か。この少なさからすると、かなりの数の『魔法具』持ちがいるな」

「はい、間違いないでしょう。何処の国が分かりませんが、本格的に張り込んだようですね」

「すぐに調べる。場合によっては、近隣諸国に政変がおこる可能性もあるぞ」

「承知いたしました」

ジルベール法王家の人間が、他国に請われて患者の元に向かう場合、通常尋常ではない数の護衛を引き連れる。

精銳の騎士が千人ぐらいが最低ラインだろうか。一見すると過剰なくらいの護衛を法王家の人間が引き連れるのは、少し考えるとすぐにその理由が分かる。

法王家の人間は、世界で唯一の『治癒魔法』の使い手だ。死の淵からすくい上げて貰った王族・貴族が、その存在を「手放したくない」と考えるのは極当たり前の事だろう。

治療にやってきた法王家の人間を軟禁して、『彼（彼女）は、我が国への亡命を希望している』と声明を上げた例が、過去何度かあったらしい。

そうした過去の教訓から、ジルベール法王家は、王家の人間の他国来訪の際には、必ず相手国が邪なを行動に出た場合、洒落にならない被害を与えられるだけの戦力を常に武装状態で入国させることを、絶対条件として持ち出すようになったのである（無論、その護衛の旅費、宿泊費も相手国持ちだ）。

しかし、軍隊というものは、その数が多ければ多いほど行軍の速度が鈍るものである。千人単位の軍隊に護られながら長期行軍を行えば、助かるはずの患者も助からないケースも存在する。

そのようなケースで切り札として投入されるのが、今アウラが言った『魔法具』持ちの騎士である。

シャロワ・ジルベール双王国のもう一つの王家、シャロワ王家が作製した『魔法具』で武装した、一騎当千の騎士達。彼等を投入することで、護衛兵士の数の大幅縮小が可能になり、その結果として行軍速度は上昇する。

つまり、護衛兵士の数が少ないと言うことは、それだけ患者の容態が切羽詰まっていたという推測が成り立つというわけだ。

「いずれにせよ、うちに向かっていているということは、すでに診療は終了した帰りということだな。『時空魔法』を使うため、スケジュールを整えておくか」

「はい、よろしくお願いします」

アウラの言葉に、秘書官は小さく頭を下げる。

イザベツラ王女が、カープア王国を訪問する理由は明白だ。アウラに『瞬間移動』の魔法で双王国の首都に送ってもらったつもりなのだろう。

『瞬間移動』の魔法は、長時間の詠唱と多大な魔力を必要とする大魔法であるため、そう簡単に使用できるモノではないが、ジルベール法王家の王女に頼まれれば、アウラとしても否とは言えない。

『治癒魔法』の使い手に貸しを作るよい機会だ。日頃であれば、アウラとしてもむしろ歓迎すべき客である。

「問題は、婿殿だな」

アウラはそう言うと、顎に手をやり思索する。

昨日、『森の祝福』を受けて寝込んだ善治郎は、今まさに病床に付いている真つ最中だ。

「東の国境砦となると、イザベツラ殿下が王都入りするのは五日後か？」

「おおよそ、そのくらいでしょうな。長引いた場合、ゼンジロウ様はまだ『森の祝福』から回復していかないかも知れません」

『森の祝福』の発病期間は短くて三日、長くて七日だ。症状の重い善治郎の場合、イザベツラ王女来訪時に、まだベッドから起き上がれないでいる可能性は十分にある。

アウラは少し顔をしかめた。

「……やっかいだな。他国のものを、婿殿の部屋に入れたくはないのだが。今の内に、寝室を別に用意しておいて、最悪の場合、イザベツラ殿下来訪中は、婿殿にもそちらの部屋で過ごして頂くか」

善治郎が日頃過ごしている部屋は、善治郎が持ち込んだ電化製品で満ちている。知られたからといって即座にどうにかなるモノではないと思うのだが、出来ればあまり広めたくない情報だ。

そのためには、善治郎が別の部屋にしばらくの間だけでも移り住むのが一番簡単な解決方法だ。元々、複数の女が暮らすことを前提に立てられた後宮に、現在は善治郎しか住民はいないのだから、空き部屋はいくらでもある。

「それが無難でしょうな。どう考えても、イザベツラ殿下の見舞いをお断りする必然性はありません」

確かに『森の祝福』は死病ではないし、病気に強い身体を得るためには『治癒魔法』で快癒してもらうのは断った方が良い。しかし、『治癒魔法』の中には、『体力回復』や『精神快癒』のような、病気を直接治さず、患者を苦しみを和らげる簡易魔法も存在するのだ。

イザベツラ王女が見舞いをしたいといえば、断るといふ選択肢はない。

「となると、場合によっては熱でうなされた状態の婿殿と、イザベツラ殿下を会わせることになるのか」

発病中の善治郎は、本人が言うとおり少し刺々しく攻撃的になっている。イザベツラ王女は、見た目は少し恰幅の良い上品な中年女性ではないが、中身は三十年以上『癒し手』として働いてきた、生粋のジルベール法王族だ。

病床の人間が無礼な言動を取った所で、それを本気にしないくらいの度量は持ち合わせているが、その言動から情報を吸い取るようにしたたかさも併せ持っている。

「面倒な事にならないと良いのだが……」

呟くアウラ自身、何の問題も起こらない可能性は低いことを、半ば覚悟していた。

それから六日後。

アウラは、王宮の私室にイザベツラ王女を迎え入れ、談笑と言う名の私的な会談の場を設けていた。

イザベツラ王女一行が、カープア王宮に到着したのが昨日の夕刻のこと。公的な顔会わせは、今日の午前中に謁見の間で済ませてあるが、公的な場ではお互い自由な言葉は紡げない。

ゆえに、イザベツラ王女の第一声は、このような物になるのだった。

「ご無沙汰しております、アウラ陛下。まずは、ご結婚おめでとうございます」

革張りのソファアに膝を揃えて座った少し太めの中年女性はそう言つと、洗練された動作で小さく頭を下げる。

謁見の間では、互いにガツチリとした正装に身を固めていたアウラとイザベツラであるが、この場ではすでに装飾の軽いドレスに着替えている。

アウラは、濃紅のノースリーブロングドレス、イザベツラは白い比較的ゆつたりとした半袖のドレス姿だ。

カープア王国では、白いドレスは少女の特権で、ある程度年のいった淑女は遠慮するもののだが、双王国では白は、ジルベール法王家の象徴色である。よほどのことがないかぎり、法王家の人間は白を基調とした服を纏う。

色合いだけでなく、ドレスの形も、カープア王国の一般的なモノとは随分と違う。カープア王国ではスリットの入ったロングドレスが一般的なのだが、イザベツラのドレスはフレアスカートで、胸元の開きも極小の作りになっている。

胸の谷間が見えるくらい首回りが空いているのが一般的な、カープア王国のドレスとは対照的だ。

同じ南大陸でも、双王国がある中央部は、カープア王国がある西部ほど暑くないことが関係しているのかも知れない。

「ああ、おかげでつつがなく式を終えることが出来た。双王国からはご立派な祝いの品を頂き、恐縮のしただい」

そう答えるアウラは頭を下げず、むしろ胸を張る。年齢こそ、イザベッラ王女が十歳以上上だが、肩書きは一国のトップであるアウラが圧倒的に上だ。イザベッラ王女は、あくまで数いる王族の1人に過ぎない。

イザベッラ王女は、口元に小さく手を当てて上品に笑う。

その仕草は、王族というより、上品な商家のマダムといった雰囲気である。

「気に入って頂けたのなら、幸いですわ、陛下。本来ならば私個人からも引き出物を持参するのが礼儀なのでしょうが、この度は緊急の事態だったので用意がなく……この埋め合わせは、後日必ずさせて頂きます」

「埋め合わせはその『緊急の事態』についての内容を聞かせてもらう、というわけにはいかないのだろうか？」

アウラの少し挑発的な言葉を、イザベッラ王女は毛ほどの動揺も見せずに受け流す。

「はい。いかな陛下のご要望とあっても、『癒し手』の信用にかか

わかりますので、そのぎはご容赦願います」

柔らかな笑みと、柔らかな口調で紡がれたのは、断固とした拒絶の言葉だ。

まあ、それはそうだろう。いつ、誰が、どこで、どのような、傷病を患った。そういつた情報をペラペラ吹聴されるようでは、恐ろしくて誰も治療を頼めない。漠然とではあるが、現代社会で言うところの『医者守秘義務』に近いモラルを、ジルベール法王家の間は持ち合わせている。

最初からイザベッラが首を縦に振るはずはない事を分かっているアウラは、すぐにその話を切り上げた。

「そうか、それは残念だ。ああ、そういえば、殿下には一つ見てもらいたい品があるのだ」

それからアウラは、さも今思いついたかのような顔でそう言つと、テーブルの上のベルを鳴らす。

恐らく、ドアの外ですつと待機していたのだろう。すぐさま、ドアが開かれ、ファビオ秘書官が姿を現す。

「お呼びでしょうか」

「ああ、私とゼンジロウ殿の『指輪』と、『あれ』を持ってきてくれ」

「はっ、畏まりました」

ファビオ秘書官は、一礼するとすぐさま退室する。

「指輪？」

小首を傾げるイザベツラ王女に、アウラは意味深に微笑み返す。

「ああ。婿殿の国では、婚姻の際、男から女にペアの指輪を贈る風習があるのだそうだ。その指輪をせつかくだから、何らかの『魔道具』にしてもらいたい」

「あら、素敵。ええ、そういうことなら、私が責任持つてお預かりしますとも。私の方からシャロワ家に依頼する際、一言そえておきます」

「よろしく頼む」

そんな会話を交わしていると、入り口のドアがノックされ、銀のトレイを右手に持ったファビオ秘書官が戻ってきた。

「失礼します、お持ちいたしました」

「ご苦勞、それをおいたら下がって良い」

「はっ」

ファビオ秘書官は、アウラとイザベツラが向かい合って座るテーブルに銀のトレイをおくと、一礼をして退出していく。

トレイの上には、二つの指輪と二つの巾着袋が乗せられている。巾着袋を目にしたイザベツラ王女は、少し怪訝そうな顔をしたが、

その視線が指輪に向けられると、次の瞬間には目を大きく見開き驚きをあらわにする。

「これはっ」

「手に取ってみてくれ、どうだ？ 忌憚ない意見を聞かせてくれ」

ニヤリと笑うアウラの言葉を受けて、イザベッラは指輪の一つをその手に取り、窓から差し込む陽光にさらした。

異世界の陽光を浴びた、地球産の指輪が、キラリと黄金と金剛石の輝きを放つ。

善治郎がアウラに贈った結婚指輪。それは、幅の広いダイヤモンドの指輪である。

イエローゴールドの土台に、ブリリアントカットにカットティングされた無色透明の小粒なダイヤモンドが三つ並べて、埋め込まれている。

本当ならば、店員が進めるとおり、アウラの目や髪の色に合わせてピンクダイヤを、とも考えていた善治郎であったが、色合いの濃いピンクダイヤは驚くほど高い。ほのかに赤みを帯びている程度のものであれば、善治郎の予算でも手が出るものもあったのだが、色に妥協するくらいならば、と結局善治郎は無色透明のスタンダードなダイヤを選んだ。

「何と見事な……この石は水晶ですか？」

「いや、ダイヤだそうだ」

「ダイヤ！？ ダイヤをこの様に？」

イザベツラ王女が淑女にあるまじき、驚きの声を上げたのも無理はない。

この世界にダイヤという石は存在しているが、それを加工する技術は、まだ存在していないのである。

ましてや、光の入射角、反射角を計算して、もっとも強く美しい輝きを放つように多面体カットを施すなど、卓越した技術者でも出来ることではない。

宝飾のカッティング技術というのは、精密な機械の進歩と共に歩んできた道のりだ。

同じ事は、土台の金属部分にも言える。

「これは、一体どのようにしてこれほどに細かい揃った線を描き出したのか……」

ファッション性の高いその結婚指輪には、シンプルであるが細かなラインが、ちょうど漫画の書け網のように無数に堀られている。イザベツラ王女の母国であるシャロワ・ジルベール双王国は、宝飾に関しても大陸有数の先進国であるが、それでもこれと同じものを再現できる人間はいないだろう。

総合的な芸術性ということに関しては、この世界の宝飾技術も決して負けていないのだろうが、もっと単純な技術の問題として、これは再現が不可能だ。

世界一の書道家に、パソコンでプリントアウトするより揃った字を書け、と言っているようなものである。

イザベツラ王女の反応に、アウラは自分の予想が外れていなかったことを悟り、内心胸をなで下ろした。

（やはり、ちょっと目の利く人間に見せれば、目の色を変える代物だったか）

あの結婚式の夜、初めて身体を重ねた後、善治郎から送られたその指輪を見た時、アウラも今のイザベツラ王女と大差ない、驚きの声を上げたものだ。

あまりに精密な加工。どの角度からもギリリと眩い光を放つその三つの石。

ベッドから降りて嬉しそうに差し出す善治郎に、一度はその指輪を左手の薬指に填めて貰いながら、アウラはすぐに善治郎に理由を話し、自分も善治郎も、日頃はその指輪を填めないように説得をしたのだった。

その輝きは、あまりに強すぎる。アウラが日頃、この指輪をしていれば、目ざとい貴族達は即座に目をつけて、指輪の出所を聞き出したことだろう。

そうなれば、否応なく送り主である善治郎に注目が集まる。あの時点で、善治郎が下手に注目を集めれば、社交界デビューのタイムリミットが外圧によって繰り上がっていたかも知れない。

気にしすぎの気もしたアウラであったが、イザベツラ王女の反応を見ると、どうやらアウラの心配は当たらずとも遠からずだったようだ。

やがて、ニヤリと笑ってこちらを見ているアウラに気づいたイザ

ベッラ王女は、取り繕うようにオホホと笑うと、指輪を銀のトレイに戻す。

「あ、失礼いたしました、陛下。すっかり魅入ってしまつて」

「見事なものだろう。それを、魔道具にして貰いたいのだが」

「ええ、これほど見事な品でしたら、シャロワ家の者も気を入れて仕事に掛かってくれると思いますわ」

一般的に魔法具とする品は、武器の次に宝飾品が多い。その関係上、『付与魔法』を操るシャロワ王家の人間は、必然的に宝飾品を見る目も肥えている。

「ふむ、こういった魔法を込めるかはまだ決めていないのだが、何か良い案はあるか？」

「そうですね。どれほど見事な品でも、やはり小さな宝飾品ですから、あまり大魔法は込めない方がよろしいかと存じます。基本的なところでは『発火』『耐火』『水作製』などでしょうか」

「『快癒』とまで贅沢は言わんが、『体力回復』くらいは無理か？」

「五回も使えば、その指輪が灰になっても良いのでしたら、可能ですか？」

「む……」

その後もしばらくの間話し合うアウラであったが、中々ピンと来る魔法が思いつかない。どのみち、イザベッラはしばらくカープア

王宮に滞在するのだ。今この場で決める必要はない。

話が一段落したところで、指輪をトレイに戻したイザベツラ王女は、ふとトレイにのっている二つの巾着袋に目をやった。

「そういえば、陛下。こちらの袋には、何が入っているのでしょうか？」

イザベツラの言葉に、アウラは大きい方の巾着袋をトレイから取り上げると、楽しげな笑みを浮かべ、その口を開く。

「ああ、これも婿殿の私物なのだがな。せっかくだから、イザベツラ殿下に鑑定をお願いしたいと思い、持ってきてもらったのだ。殿下は、宝飾品に関しては一言あるのだろうか？」

「それは、仮にも双王国の王族ですから、人並み以上には詳しいつもりですが、シャロワ家程ではありませんよ」

そう言葉を返すイザベツラも、その視線は興味津々に、アウラが持つ巾着袋に向けている。

アウラの言葉から推測するに、あの巾着の中身は、宝飾品の類のようだ。しかも、この見事な指輪を作った国から来た人間の持ち込んだ代物だ。

いやが上にも期待は高まる。

イザベツラの視線を指先に感じながら、巾着袋の口を開いたアウラは、巾着の口に中指と親指を差し込み、その中身を一粒取り出す。そして、コトリと音を立てて、中指と親指で摘んだ『それ』をトレイの上に置いた。

ビー玉だ。

無色透明のガラス玉に、色ガラスを封じ込めた、一番シンプルな昔ながらのビー玉が、コロコロと銀のトレイの上を転がる。

「ッ！？」

その輝きを目の当たりにしたイザベツラ王女は、指輪を手にとったときより大きく目を見開くのだった。

第五章3【ビー玉と金貨】

指輪を見た時の驚きが、「隠す気のない驚き」だとすれば、今イザベツラ王女が浮かべているのはさしずめ「隠すことに失敗した驚き」と言つべきだろうか。

イザベツラ王女は、一瞬「しまった」という表情を浮かべた後、すぐにいつもの柔和な顔つきに戻る。

「失礼しました。それにしても、驚きました。これは、一体何なのでしょうか？」

銀のトレイの上で転がるビー玉に視線を向けたまま、イザベツラ王女はさも驚いたような口調でそう言った。その「驚き」は、取り繕った驚きで、最初にビー玉を目の当たりにした時のような、生の感情としての「驚き」ではない。

予想を超える大きな反応を見せたイザベツラに、内心訝しみながらアウラは、笑顔の奥に感情を隠し、言葉を返す。

「驚いたであろう？ これも婚殿が持ち込んだ品だ。水晶でも、もちろん金剛石でもない。ガラス、というモノらしい。水晶などと比べれば随分脆く、割れやすいのだそうだ」

脆い、という言葉で、そっとビー玉に手を伸ばし掛けていたイザベツラ王女は、ピクリとその手を止める。

アウラは少し笑うと、

「ああ、脆いとは言っても、高所から固いところに落とすと割れるという意味だ。普通に手で持って傷が付くことはないし、このように下が絨毯であれば、落としてもまず問題はない」

そう付け加える。

「そうですか。では、手に取ってみてもよろしいでしょうか？」

「うむ。よく見てくれ」

アウラの許可を得て、そっと三本の指でビー玉を摘んだイザベッラ王女は、それを先ほどの指輪と同じく日の光にかざし、ホッと恍惚の息を吐く。

「素晴らしいですね……」

「率直にきこう、イザベッラ殿下。それを融通すると言えば、貴女はそれ一つに、いくら値をつける？」

何らしかの意図があるのか、驚くほど率直に切り出すアウラに、イザベッラは視線を正面に戻すと、取り繕うように一度咳払いをした後、問い返す。

「つまり陛下は、この宝玉をお売りする心づもりがある、と？」

偉く真剣な面持ちのイザベッラに、アウラは小さく笑い返すと、

「いや、元々それは婿殿の私物だからな。勝手に全て売り払うわけには行かぬ。しかし、なにせ元々この世界に存在していない代物だ。価値を知るために、幾つか手放す許可はもらっている」

そういつて首を横に振った。

宝飾品のような、生活必需品でも、軍事的に価値のあるモノでもない品というのは、価値が定まっているようで定まっていない。特に、ガラス玉はこれまでこの世界には存在しなかった代物だ。

アウラや善治郎が、いくら主観で「これは価値があるモノだ」と思っているても、外に出して一般的な評価を得なければ、正しい価値はつけられない。

そう考えれば、一つ二つ世に出して、その価値を確立させるといふアウラの発想は、そう奇をてらったモノではない。その意見を求める相手として、イザベツラ王女を選んだのも悪くない選択だ。

しかし、そのイザベツラ王女は、真面目な表情でアウラが耳を疑うようなことを言っている。

「そうですね。仮に私がこの宝玉を買い取ることが出来るのだとすれば、私は金貨30枚をお支払いします」

金貨30枚。

予想外の金額に、絶句しかけたアウラであったが、それでもどうにか表情には出さず、短い言葉で問い返す。

「……本気で言っているのか？」

「……」

「……」

しばしの沈黙の後、イザベツラ王女は観念したように小さく肩をすくめて答える。

「……分かりました。では、金貨50枚。流石にこれ以上の値をつける者は、いないと存じます」

いつの間にか、仮定の話ではなく、今この場で商談を行っているように、イザベツラ王女はそう言って、一気に金貨20枚の上乗せを提案した。

今度こそ、アウラは驚きを完全には隠しきれなかった。

ビー玉一つに金貨30枚でも『過分』だと感じ、「本気で言っているのか？」と問いかけたのに、まさか更なる上積みを提案されたのだから、驚くのも無理はない。

まさか、アウラの「本気で言っているのか？」と言う言葉を、「そんな安値で買ったたくつもりなのか？」と言っているように誤解してしまったのだろうか？

そう思ってアウラがイザベツラ王女に探るような視線を向けると、イザベツラ王女はそのふつくらとした上品な顔に、にっこりと優しいな笑みを浮かべてこちらを見ている。

その笑みを見たアウラは確信した。

（いや、違うな。イザベツラ殿下が、あれだけ分かりやすい言外の意図を、察し間違えるとは考えがたい。ということは、この値上げはわざとか。たかが宝玉一個にそこまで法外な値をつける意味はなんだ？）

金貨50枚という金額は、それだけ常識外なのだ。

分かりやすい例を挙げれば、騎乗用の『走竜』は金貨1枚で購入できるし、戦闘用の訓練を受けた『騎士用走竜』でも金貨2、3枚も出せば、それなりのモノが手に入る。

さらに、領地を持たない中小貴族の邸宅の売買価格が、おおよそ金貨50枚から金貨100枚の間だといえ、いかに珍しい見事な代物だとはいえ、宝玉1個の値段として金貨50枚というのがいかに破格であるか、分かるだろう。

無論、宝飾品の中にはそれくらいの値がつくものも珍しくはないし、もう一桁上の品も存在するにはする。しかし、アウラの見立てではこのビー玉という代物は、そこまでの価値はないように思える。

何かがおかしい。

そう感じたアウラは、情報を得るため、もう一つの巾着袋に指を入れると、そこから数粒のビーズを取りだし、銀のトレイに乗せる。

「では、これはどうだ。こちら中々面白い代物だと思うのだが」

赤、青、緑。綺麗に透き通った色とりどりのビーズは、十分に人目を引く品であったが、イザベッラ王女の反応は、ごく一般的な範囲に留まった。

「まあ、こちらも素敵ですわね。粒も揃っている上に、真ん中に小さな穴が空いているんですね。色々面白い使い方が出来そうですね」

褒め称える言葉にも、うっとりとしたその視線にも偽りはなさそ

うだが、ビー玉を見た時のような驚愕の色は見えない。

「美しいだろう。それに面白い。そのまま、糸を通せば、首飾りに出来そうだ。こちらは、どれくらいの値が相応だと思う？」

「そうですね。見た目の良さは一目で分かりますが、大きさが大きいですし……一粒、銀貨10枚といったところでしょうか」

ふっくらとした顎に手を張り、イザベツラ王女が提示した値段は、アウラの予想とそう大きく外れたモノではなかった。

ちなみに、場所や時代による細かな差異を省けば、金貨1枚はおおよそ銀貨100枚の価値がある。王都で働く日雇労働者の賃金がおおよそ銀貨3枚から5枚だ。

ビー玉は一つに金貨50枚。銀貨に換算すれば、5千枚だ。一方、ビーズは一粒で銀貨10枚。

つまりイザベツラ王女は、ビー玉にビーズの500倍の価値を付けたというわけになる。

重量比で見れば確かにそれくらいの違いはありそうだが、アウラには、ちよつとビー玉の値付けが過剰に思えてならない。

ビーズの値が予想通りだった分、ビー玉の値の異常さがよりいっそう際立つ。

(それにしても、ここまであからさまな値付けを言うことは、隠す気はないという意味表示だろうな。少し試してみるか)

「なるほどな。いや、参考になった。礼として殿下にお一つ進呈し

よう。好きなモノを一つ選ぶがよい」

アウラはそう言って、わざとらしい仕草でビー玉の入っている巾着袋を持ち上げると、そつとその中身を銀のトレイの上にぶちまけた。

何十というビー玉が、銀のトレイの上をコロコロと転がす。

「まあっ」

口元に手を当てて、驚きの声を発するイザベツラ王女の視線の先を、しっかりと確認しつつ、アウラはにこやかに笑い、言葉をかける。

「ささ、遠慮は無用だ。手にとってよく確かめた上で、好きなモノを選ぶがよい」

銀盤の上にひしめくビー玉。中に色ガラスを封じたスタンダードなモノ、表面が曇りガラスになったモノ、綺麗なマーブル模様のモノ、さらには地球儀を模した簡単な大陸図が描かれたモノ。

それらが一つのトレイに盛られている様は、確かに『宝玉』と言っても差し支えがないくらいに、見栄えがする。

「……………」

「……………」

アウラの視線から、自分のの出方を窺っていることを察したのだろつ。イザベツラ王女は、一度肩をすくめると、トレイの上からビー玉を一つ摘み上げる。

「では、お言葉に甘えて、これを頂きます」

イザベツラ王女が手に取ったのは、模様も何も入っていない、限りなく無色透明に近いビー玉だ。

「それで、残りの宝玉ですが」

「分かっている。全ては婿殿の意向次第だが、もし婿殿が手放す意思を示すことがあれば、その時は必ず殿下に最初に声を掛けよう」

「お願いします」

アウラの言葉は、イザベツラ王女にとっても満足のいくものだったらしく、王女はフワリと笑い、丁寧に頭を下げる。

それからイザベツラ王女は、窓から差し込む日の影に目をやると、さも今思いいったったような顔で言う。

「ああ、不作法にも、すっかり話し込んでしまいました。陛下、宝玉の礼と言っては何ですが、陛下の夫君のお見舞いを許可して頂けないでしょうか。少しはお力になれると存じます」

「もちろん、大歓迎だ。ジルベール法王家の見舞いを断る者など、この大陸にいるはずがない。用意ができ次第、後宮に案内するので、それまでは隣室で休んでいてくれ」

「承知いたしました。それでは、失礼します」

最後は笑顔で会談を終えたイザベツラ王女は、洗練された動作で立ち上がると、小さく礼をし、隣室へと下がっていった。

「……というわけで、イザベツラ殿下は、丸い大きな宝玉に金貨50枚、小粒の穴の空いた宝玉に銀貨10枚の値をつけた。お前の率直な意見が聞きたい」

イザベツラ王女が隣室に下がるのと入れ替わるようにして姿を現したファビオ秘書官に、先ほどの会談の内容を打ち明けたアウラは、そう言つて秘書官の意見を求めた。

「金貨50枚ですか。いささか、高値が過ぎる気がしますな」

ピクリと眉を跳ね上げてそう言つ秘書官に、アウラは不機嫌さを隠さない声をぶつける。

「ファビオ、言葉は正確に使え。お前は、本当に金貨50枚という値が、「いささか」高値が過ぎる程度だと言つのか？」

「……失礼しました。訂正します。予想を遙かに超える高値ですな」

不快げな主の声に全く怯むことなく、ファビオ秘書官は謝罪と訂正の言葉を並べ、小さく頭を下げる。アウラとしても、このような些細な言葉使いに、何時までもこだわる気はないのだろう。

すぐに、冷静な表情を取り戻すと、ソファアの前に立つ秘書官の鉄面皮を、ソファアの上から見上げながら、会話を続ける。

「おかしいだろう。それどころか殿下は、この指輪よりも、宝玉に大きな反応を示したのだぞ」

アウラと善治郎の結婚指輪。細かな細工の施された金の台座に、金剛石というこの世界では研磨方法が確立されていない石が飾られたその宝飾品は、誰が見ても一目で分かる美しさだ。宝飾品に関して、何の知識の無い人間が見ても、普通はビー玉よりこちらに価値を見いだすだろう。

「はい。何より、あのイザベツラ殿下がそこまであからさまな態度に出たことが、不可解です」

ファビオ秘書官はそう言って、主の意見に同意を示した。

イザベツラ王女は、どちらかという人が良いことで通っている人物ではあるが、それでも四十年以上大国の王族として、宮廷社会を生き抜いてきた人物だ。

あからさまに物欲しげな言動を取れば、相手に付け込まれる。そのくらいの常識は持ち合わせているはずだ。

それなのに、あえて金貨50枚という馬鹿げた金額を提示してきた。

「イザベツラ殿下は特に新しい物好きでもなければ、浪費家でもないはずだ。ならば、イザベツラ殿下にとって、金貨50枚という金

額は、適正な価格であると言つことになる」

「もしかすると、競合相手を想定しているのかも知れません。この宝玉の存在を知れば、イザベツラ殿下と同等か、それ以上の金額を出す存在に心当たりがあるのだとすれば、この不可解な高値も納得がいきます」

「いずれにせよ、ただの宝飾品と見なしているという線はないな」

「はい、それは確實でしょう。詳細は全く想像もつきませんが、その宝玉に何らかの高い利用価値を見いだしたのだと、考えてよろしいかと」

「ふむ……」

アウラはソファアの上で腕を組み、イザベツラ王女の反応を思い出す。

アウラがトレイの上にビー玉を纏めてばらまいたとき、イザベツラ王女の視線は最初からあの無色透明なビー玉に向けられていた。それが偶然や、イザベツラ王女の意図したミスリードではないのだとすれば、宝玉の色や透明度に何らかの価値があるのかも知れない。しかし、そうだとすると、それは水晶で代用が可能な物に思える。

「駄目だな。情報が少なすぎて、当て推量にしかならん。後で、爺の意見を聞いてみるか」

「それがよろしいでしょう。私や陛下にはない知識も、エスピリデイオン様ならばあるかもしれません」

筆頭宮廷魔術師であるエスピリディオンは、カープア王国随一の魔術師であると同時に、多方面の知識を持つ賢者でもある。あの老魔術師ならば、なにかヒントとなる知識を有しているかも知れない。

「そうだな。爺に話を通しておいてくれ。今夜にでも知恵を借りたい、とな」

「承知いたしました」

ファビオ秘書官はそう答えて、丁寧に頭を下げる。

「それにしても、一つ金貨50枚か。全て同じ値が付くのだとすれば、婚殿はこれだけで金貨2500枚近い資産を有していると言うことになるな」

それだけあれば、小さめの砦が一つ建つ。

「はい。イザベツラ王女がその宝玉にどのような価値を見いだしたのか、詳しい事情を知らないまま売り払うのは危険ですが、もしこちらに実害が出ないものであれば、ゼンジロウ様のご自由にされてもよろしいかと、存じます」

「ああ、商売相手として、双王国の王家は掴まえておきたいところだからな。なにせ、支払いが全て新造金貨だ」

「はい。失礼を承知で申し上げるのならば、ゼンジロウ様が入手した金貨を国庫の大型銀貨と交換して頂きたいくらいです」

「率直すぎるぞ、それは」

中年秘書官の言葉に、アウラは思わず苦笑を漏らす。

現在、南大陸で金貨を鑄造している国は、二カ国しかない。シャロワ・ジルベル双王国は、その二カ国の一国であり、カープア王国は残念ながらそうではない。

カープア王国の領内には金山は存在せず、辛うじて幾つかの河川から砂金が取れる程度だ。とてもではないが、毎年定期的に金貨を鑄造できるほどの、金は取れない。

その代わりに、銀山に関しては南大陸でも有数の数と質を保有しているため、通常の銀貨の2.5倍の価値を持たせた、純度の高い『大型銀貨』で諸外国との取引を行っているのだが、それでもカープア王国の大型銀貨の価値は、双王国の金貨の4分の1程度である。

そのため、国内に流通している最高値の通貨が、自国産ではないという問題は、解消されないままなのだ。

ならばせめて、いざという時のために、国庫に双王国の金貨を大量に蓄えておく必要があるのだが、カープア王国は先の大戦を乗り越えたばかりだ。国庫の中身はかなり寒い。

最悪、銀貨で双王国から『金貨を買う』という案も真剣に議題に上がりつつある状況である。例えば2000枚程度の金貨でも、十分魅力的に映る。

とはいえ、ここで話し合っても、これ以上進展することはない。

「よし、ではこの話は夜、爺を呼ぶまで保留だ。これ以上、イザベツラ殿下をお待たせするわけにも行かないからな。殿下を後宮にお通しする。そっちの準備は出来ているか？」

「はい。いつでもお通し可能です」

ファビオ秘書官の返答に、アウラは「よし」と一つ頷くと、ソファから立ち上がる。

イザベツラ王女は大切な賓客で、善治郎の見舞いも、表向きは彼女の「善意からの行動」ということになっている。あまり待たせては、失礼に当たる。

「では、行くか」

立ち上がったアウラは、自らイザベツラ王女を後宮に案内するため、隣室のドアをノックするのだった。

第五章3【ビー玉と金貨】（後書き）

本作のヒロイン、女王アウラのイラストをいただきました。

tokumei様、ありがとうございました。

第五章 4 【治療術士の見舞い】

善治郎が『森の祝福』を発病してから今日で6日。

昨日から急きよ移動させられた、後宮の一室で、善治郎はベッドの上で寝汗をかいていた。

すでに熱は37度の中盤くらいまで下がっているし、喉の腫れも収まり食欲も戻ってきている。

一昨日までは、鶏肉とくせのない葉野菜の細切れスープを啜るのがやっとだったが、今朝は甘じょっぱいアンをかけたマッシュポテトのような料理も食べることが出来た。善治郎にはジャガイモの親戚に感じだが、実際には蒸かしたバナナを潰した料理らしい。宮廷料理と言うより、庶民料理のたぐいなのだが、比較的胃腸に優しく、栄養価が高いため、病人食に向いているのだという。

医者の見立てでは、一両日中には完治するだろうとのことだ。

善治郎自身、身体が格段に楽になったという実感がある。しかし、この数ヶ月で住み慣れた本来の寝室から、電化製品が一切無い別な寝室に移され、一人新品のベッドに横たわっているのは身体が休まる気がしない。

それでも、闘病で体力の衰えた体は眠りを欲する。過ごしやすくなったとはいえ、昼間は30度を超える熱気の中、ウツラウツラと船をこぎ出していた善治郎の意識を、まどろみの中から引き戻したのは、額に乗せられた柔らかい手の平の感触と、聞き覚えのない女の声だった。

「だいぶ熱も下がっているようですね。これならば、一両日中には

日常に戻れるようになるのではないのでしょうか」

「……んあ？」

うつすらと目を開いた善治郎の視界に飛び込んできたのは、自分の額に手を乗せて、柔らかな笑みを浮かべる、上品そうな中年女性の姿だった。

「……誰？」

半覚醒状態のまま、善治郎はポツリとそう言葉を漏らす。

真っ直ぐな淡い栗色の長髪。目元に優しげな皺を寄せた、焦げ茶色の瞳。そして、生来のモノではなく日焼けによって色の付いた肌。アウラ達、カープア王国人はラテン系と黒人のハーフのような外見なのに対し、この中年女性は、より西洋人に近い顔立ちと色彩を持っている。

あきらかにカープア王国の人間とは人種が違う。記憶力にはあまり自信のない善治郎だが、これだけ特徴的な人間を見かけていたら、絶対に覚えてはいるはずだ。

異国の中年婦人　イザベツラ王女は、善治郎の額にのせていた手を外すと、椅子から立ち上がり、ドレスの裾を摘んで優雅に礼をする。

「お初にお目にかかります、ゼンジロウ様。シャロワ・ジルベール双王国18代法王、ベネディクト4世が第3子、イザベツラにございます」

「こ、これは丁寧なご挨拶を、私は……」

大国の王女という国賓との遭遇に、慌ててベッドから身体を起こしかける善治郎を、イザベツラ王女は慣れた手つきでそつと制すると、

「そのままです。ゼンジロウ様のお体はまだ回復してはおりません」

そう言つて、善治郎に身体を戻すように訴える。

言われて善治郎は気がついた。

「え？ あれ？ そう言えば、凄く身体が楽な気がする」

ずっと寝ていたため、身体全体に力が入りづらいような違和感が残っているが、寝る前まで全身を蝕んでいたけだるい疲れや、霧が掛かったような鈍い頭痛は綺麗さっぱり消え失せている。

イザベツラ王女はにこやかな笑みを浮かべたまま、身体を起こしかけていた善治郎の肩に片手をそえ、ベッドへと押し戻す。

「ゼンジロウ様、起きてはなりません。身体が楽になっているのは、私が先ほど施した『体力回復』と『精神疲労除去』の効果です。『病魔快癒』を使つても良いのですが、せつかくの『森の祝福』ですからね。自力で克服しなければ祝福の効果は得られませんから、あえてそのままにしておきました」

「は、はあ……なるほど」

言われてみれば、体力は回復しているものの、身体はまだ火照つ

ている。病気から完全に回復したわけではないようだ。

（ああ、そう言えば、昨晚見舞いに来たとき、アウラが言ってたな。双王国の王女様がお見舞いに来るから、部屋を移ってくれって）

一通りの事情は、前もって聞かされていた善治郎であるが、なにせ昨日までは38度を超える熱を出していた身だ。細かな説明を覚えていないのも、無理はない。

（ええと、確か身分的にはこっちが上だけど、今回『治癒』の見舞いを受けた立場だから、下手に出ても問題はないんだっけ……？）

冷静になってみると、椅子に腰を掛けるイザベツラ王女の後ろに、アウラが立ってこちらを見守っていることに気づく。

こちらの視線に気づいたアウラは、こくりと小さく首を縦に振った。

（あれは、あまり細かい礼儀作法は気にしなくて良いつて意味かな？）

何となく、アウラの意図を察した善治郎は少し気を楽しんで、ヘッドボードに頭を寄せ、上半身を少しだけ起き上がらせた体勢で、イザベツラ王女の方に首を向ける。

「ありがとうございます、イザベツラ殿下。おかげで随分と楽になりました」

「いえ。大したこともございません。後は、安静にして滋養のある物を取れば、明日には起きられるようになっていいると思いますよ」

「はい、ンッ」

まだ微熱があるのに、寝起きのまましゃべり続けてたせいか、返事を返す善治郎の語尾が擦れ、小さく咳を漏らす。

「ゼンジロウ、ほら水だ」

すかさず、後ろに立っていたアウラが小さな銀の吸い飲みを手に取ると、寝ているゼンジロウの口元に近づけてやる。

「ああ、すまん」

この数日で、アウラの世話になることになれてしまった善治郎は、特に恥ずかしがることもなく、アウラが手に持つ吸い飲みに口を付けて、水を飲ませてもらう。

ぬるい湯冷まして喉を潤した善治郎は、全身から心地よく汗が噴き出す感触を覚える。

「ふっ……」

「もうよいのか？」

「うん、楽になった。ありがとう」

ごく自然に、仲睦まじいところを見せてつけられたイザベツラ王女は、口元を右手で覆い、小さな笑い声を上げる。

「お噂は聞いておりましたけど、お二人は本当に仲がよろしいのですね」

「あ……これは失礼」

「まあ、仲が悪いよりは良いだろう？」

部外者の視線を意識した善治郎が少し恥じらうのとは対照的に、アウラはニヤリと笑い、胸を張ってそう言うてのける。

「確かに、それはその通りですわね」

アウラの返答に、イザベッラ王女は同意を示し、コロコロと笑った。

世間では誤解されがちだが、王族貴族の世界でも、「仲の良い夫婦」というのは決して珍しいものではない。王族の結婚は、当事者の感情よりも家のつながりや、権勢のパワーバランスが考慮されるというのは紛れもない事実だが、だからこそ当事者達は互いの関係を円満にするため、努力を重ねる。

利害が致命的にぶつかり合わず、互いに歩み寄る心構えがあれば、結婚後に愛情を育んでいくことも、決して不可能ではない。

だが、だからこそ、アウラと善治郎のように、婚姻から半年もしないうちに、このような息の合った仲睦まじさを見せるケースは非常に珍しい。

（よほど相性が良かったのかしら？）

イザベッラ王女は、穏やかな笑みの奥に鋭い観察眼を隠し、アウラと善治郎の様子を見守る。

「そういえば、ゼンジロウ様はアウラ陛下とご結婚するため、世界を超えてきたのでしたね。言ってみれば世界を超える愛、ということでしょうか？」

「えっ？ あ、ああ、そうですね」

イザベツラ王女の口から出た「世界を超えて来た」という言葉に一瞬驚いた善治郎であるが、ちよつと考えてすぐに落ち着く。

カープア王家の血統魔法が『時空魔法』であることは周知の事実だし、大国カープア王国の女王にして唯一の王族となったアウラの婚姻に関しては、各国の王侯貴族が目を皿のようにして注目していたはずだ。

そう考えれば、突如降つてわいた伴侶である善治郎の素性など、ばれていない方がおかしい。

そんな風に納得してしまったからだろうか。善治郎は、つい口を滑らせる。

「150年前、異世界へ愛の逃避行を果たした子孫が、こうして婚姻の為に戻ってきたのですからね。そう考えれば、感慨深いモノがあります」

「なるほど……150年前にそのような事が……」

感心したような口調でそう相づちをうつイザベツラ王女に、水差しをテーブルに戻したアウラが、冷静な口調で口を挟む。

「あくまで噂だ。150年前、記録より抹消された直系王族がいた

のは事実だが、その者が異世界に逃亡したという記録も、ましてやゼンジロウがその直系である証拠もない」

「……ええ、そうですね。失礼しました。つい、年甲斐もなく、ロマンチックな恋物語に浮かれて軽率な発言をしてしまいました。そもそも、治りかけとはいえ、患者と長話をする事自体あまり褒められた行為ではありませんね。」

ゼンジロウ様、アウラ陛下。私はこの辺りで失礼します」

「ああ、そうだな。我が夫のため、貴重な力を使って頂き、礼を言う。ありがとう」

席を立つイザベツラ王女を、アウラ自ら先導し、仮の寝室の外へと導く。

「ありがとうございました、イザベツラ殿下。おかげで楽になりました」

善治郎は言いつけ通り、ベッドに身体を横たえたまま、立ち去る女王と王女の背中に、そう礼の言葉を投げかけたのだった。

その日の夜。

アウラは、腹心である、ファビオ秘書官と、筆頭宮廷魔術師エス
ピリディオンを、王宮奥の王家の私室に招き、秘密の会談を設けて
いた。

王宮の中では狭い部類に入る、その部屋を照らし出すのは、燭台
の上で燃える蠟燭の炎である。

赤い炎の灯りに照らし出されたアウラは、意匠を凝らした飾り椅
子の上で足を組むと、左斜め前に立つ、ファビオ秘書官に話を振る。

「それでは、報告を聞こうか」

「はっ」

主の言葉に中年の秘書官は、一歩前に踏み出すと、いつも通りの
抑揚の無い声で話し始めた。

「イザベツラ王女の『顧客』が判明しました。コブラゴ王国の前王、
ルイス2世です」

秘書官の言葉に、女王は得心がいかないといった表情で首を傾げ
る。

「コブラゴ国の前王がか？ 妙だな。現国王ならばともかく、前王
のためにイザベツラ殿下を呼ぶほど、あの国に余裕があるとは思え
ぬのだが」

コブラゴ王国は、カープア王国と国境を接する隣国であるが、国土面積も総人口もカープア王国の5分の1程度しかない。当然、財力もそれに比した貧弱なモノだ。

たまたま、立地条件に恵まれたため、先の大戦を生き延びた国であり、そのような小国が、すでに玉座を退いた老人のためにイザベツラ王女を呼ぶというのは、少々腑に落ちない。

「コブラゴ王国の規模ならば、ロベルト王子かトマーゾ王子、せいぜい奮発してマツテオ法王弟が相場ではないか？」

そう言っただけアウラは、ジルベル法王家の人名を挙げる。いずれも、イザベツラ王女と比べれば、治癒魔法の魔力は一段も二段も劣る王族だが、その分彼等ならば依頼料も安くすむ。

アウラのもっともな意見に、中年の秘書官はその鉄面皮をピクリとも動かさないまま、反論する。

「しかし、陛下が今名前を挙げられた方々は皆男性です。後宮には入ることが出来ません」

「なぜ後宮が関係する？ 患者はルイス前王なのだろう？」

首を傾げるアウラに、ファビオ秘書官は淡々とした口調のまま答える。

「はい。ですから、問題はコブラゴ王国の後宮ではありません。我がカープア王国の後宮です」

ファビオ秘書官の言葉に、意図するところを悟ったアウラは、椅

子の上でガタリと身を動かした。

「つまり、イザベツラ殿下の狙いは、最初からうちだったと言うのか？」

「はい。これはまだ調査中ですが、どうもコブラゴ王国はアウラ陛下が推測されたように、ロベルト王子の派遣を依頼したようです。そこに、双王国の側が「料金はそのままよいから、ロベルト王子ではなく、イザベツラ王女を」という話をねじ込んだ、というのが真相ではないかと」

「まさか、婿殿が『森の祝福』で寝込んでいることも、双王国は察知していたのか？」

アウラの言葉に、中年の秘書官は首を横に振る。

「いいえ、それはただの偶然でしょう。むしろ、ゼンジロウ様が病床に付いている事を知っていれば、あえてイザベツラ王女を派遣する必要はありません」

ジルベール法王家の『治癒術士』達は、医者以上に特別な存在だ。患者の診察という名目があれば、男女の垣根を越えて男でも後宮に足を踏み入れることが許される。

「なるほど、確かにな。だが、そうになると双王国は、我が婿殿を一目見るためだけに、イザベツラ殿下を安値で派遣したということになるぞ？」

「大国カープア王国に突如として現れた、女王の伴侶。その人となりを知るためならば、さほど不自然な一手ではないのでは？」

「ふむ……」

アウラは椅子に座って足を組んだまま、顎に手をやり考えた。

確かに、ファビオ秘書官の言うことももつともだ。アウラの意図を全面的にくんでくれている善治郎は、ほとんど我意を表に出すことなく陰に回ってくれているが、そんな現状を知らない諸外国の人間には、カープア王国の舵に手を添える人間が一人増えたように映ることだろう。

女王の伴侶が並外れた野心家であれば、カープア王国は再び南大陸に戦乱の嵐を巻き起こす可能性もある。

そう考えれば、確かに『善治郎の人となりを知る』のは、イザベツラ王女クラスが動くに十分な重要性を持つかも知れない。

「国内の顔見せが終わったと思えば、今度は国外か」

「以前の立食会は、ボロが出ても傷が最小限に治まるよう、諸外国の方は閉め出した場でしたから、その辺りは仕方がありますまい」

暗い天井を仰ぎ見て、溜息をつくアウラに、ファビオ秘書官は冷静な口調でそう言った。

この数ヶ月で、善治郎の「国政に極力口を出さない」という意思は、ある程度認知されているが、それはあくまでカープア王国国内の話だ。諸外国の人間にまで、正しい認識が広まるのには、まだまだ時間も努力も必要だろう。

この手の情報というのは、距離と時間が離れれば離れるほど歪み

やすいという特徴もあるので、完全に正しい認識が広まる可能性は、最初から諦めた方が良くのかも知れない。

アウラは、一、二度首を横に振ると、その話を打ち切った。

アウラは視線を左斜め前に立つファビオ秘書官から、右斜め前に立つ紫のローブを羽織った老人へと移す。

「分かった。双王国の出方については、今後も注意しておこう。次に爺、話は聞いているな？」

唐突に話を向けられた、紫のローブを羽織った老人 宮廷筆頭 魔術師エスピリディオンは、のんびりとした口調で口を開く。

「ふむ、ゼンジロウ様の私物であるあの宝玉のことじゃな？ 確かに、あれ一粒に双王国金貨50枚は破格じゃのう」

話は、イザベッラ王女の動向から、イザベッラ王女が不可解な高値を付けた、ビー玉へと移行する。

ファビオ秘書官に続き、エスピリディオンからも同意を得たアウラは、まずは一つ満足そうに頷くと話の続きを促す。

「あのイザベッラ王女が意味もなく、あれほど奇異な値を付けるとは考えがたい。爺、なにか心当たりは無いか？」

女王の問いに、王国随一の魔術師は白い上げ髭をしごき、しばし沈黙を保った後、「これはかなり眉唾な話なのじゃが」と断った上で口を開いた。

「陛下は、グプタ王国の『雷壁の杖』については、どの程度の知識をお持ちかの？」

「『雷壁の杖』というのとあの、『バランゴ峠の奇跡』だろう？」

「1本の魔道具が、敵軍5万を半年間足止めしたという」

「はい、左様です。グプタ王国と、クシャル王国・ワルタナ王国連合軍の戦い。先の大戦初期の話ですじゃ」

簡単に説明すれば、グプタ王国という国が、隣国二国の同時侵攻をくらい、滅亡の岐路に立たされたとき、一方の国境を『雷壁の杖』と呼ばれる魔道具一つで護りきり、その隙にもう一方の国を自力で撃退し、国を護りきったという逸話だ。

恐らく南大陸でもっとも有名な魔道具の一つであろう。『雷』はグプタ王家の血統魔法である。

つまり、『雷壁の杖』は、『雷』を操るグプタ王家の人間と、『付与魔法』の使い手であるシャロワ王家の人間が手を携えて作った魔道具ということになる。

グプタ王国は、シャロワ・ジルベル双王国の属国に近い友好国なので、両王家が力を合わせて一つの魔道具を造る事自体は、特別不自然ではない。

しかし、エスピリディオンは言う。

「問題は、杖の作製に費やされた時間ですじゃ。細かな話は今は省きますが、杖が作製された場所は、双王国の王都で間違いはありませぬ」

「まあ、それはそうだろうな。シャロワ王家の人間は、ジルベール法王家の人間と違い、よほどのことがない限り、王都から動かん」

軽く頷き、同意を示すアウラに、エスピリディオンは大きさに頷き返し、話を続ける。

「となると、グプタ王家の人間が双王国の王都におもむき、そこで長い時間を掛けて杖を作製し、その後の杖を持ってグプタ王国へと戻ってきたと言うことになります。しかし、そうになると、どうしても時間が足りませぬのじゃ」

エスピリディオンの話を聞いていた、横に立つファビオ秘書官も何かを思い出したように口を挟む。

「ああ、その話は私も聞いたことがあります。たしか、往復の道のりをもっとも足の速い走竜で計算しても、滞在時間は10日に満たない計算になるとか」

「正確には9日じゃな。それも、全ての道のりが順調にいったとしての理想値じゃぞい。現実的な試算では、グプタ王家の人間が双王国の王都に滞在した期間は、3日前後じゃと言われておる」

腹心二人の話を聞きながら、アウラは自分の記憶を掘り起こす。大戦初期となると、アウラにとってはまだ生まれていない時代の話だ。記憶になくてもおかしくはない。

だが、その話のおかしな所は分かる。通常、シャロワ王家の作る『魔道具』というのは、使い捨ての簡素な代物でも作製に最低一ヶ月はかかると言われている。ましてや、『雷壁の杖』ほどの大魔道具となると、年単位の時間が掛かるのが常識だ。

現に、アウラが善治郎に貸し出した、あの『結界の絨毯』を作製したときは、カープア王家の人間が双王国の王都に二年近く滞在するはめになったという記録が残っている。

簡単なモノで一ヶ月。国宝クラスなら二年。それと比べれば、『雷壁の杖』の実質三日という数値はあきらかな異常である。

信頼する爺の言葉とはいえ、流石にアウラも鵜呑みには出来ず、懐疑の念の籠もった言葉を返す。

「それは、ただ単にもっと前から密かにグプタ王家の人間が、双王国の王都に入り、秘密裏に作製を始めていただけではないのか？」

自分の意見を否定する女王の言葉に、老魔術師は気を悪くするわけではなく、大きく頷くと答えた。

「はい。グプタ王家、シャロワ王家双方とも公式発表では、そのように申しております。世間でも、その説が一番有力なのは間違いない事実ですじゃ。しかし、そうではない説も未だ根強く残りますのじゃ。」

すなわち、シャロワ王家には、いざという時、魔道具作製に費やす時間を大幅に短縮する『裏技』がある、と

「ふん、なるほど、な」

やっと本題に入ったと感じたアウラは、鼻をならすように小さく息を吐いた。

この手の『王家秘伝の裏技、隠し魔法』の噂というのは、何時の世にも絶えない。

いわく、ハルカネン王家の『探心魔法』には、人を永続的に傀儡とする術がある。いわく、南大陸北部の砂漠は、デルンブルク王家が『操緑魔法』を暴走させた結果だ。いわく、この大地はマカロフ王家の『創造魔法』によって作られた、等々。

実際、アウラの使うカープア王家の『時空魔法』にもその手の、「勘弁してくれ」と苦笑を漏らすしかない類の、噂はある。

『時空魔法』の最奥秘術には、時間逆行による『死者蘇生』が存在するという噂だ。

(そんな魔法が存在していれば、異世界で平和に暮らしている媚殿に迷惑を掛ける前に、兄上か弟達の誰かを生き返らせているわ)

馬鹿馬鹿しい話ではあるが、同時にアウラには、一概に笑い飛ばすわけには行かない事情もある。噂の中に一抹の事実が含まれているという事実を、アウラは知っているからだ。

(死者蘇生か。その『死者』というのが、虫や貝の類ならばやってやれなくはないぞ)

実際、『時空魔法』には、限定的な時間逆行の魔法が存在しているのは事実である。

もっとも、『魔力を持つ対象にはかけられない』、『戻りたい時間軸で、術者がその物体を目で見て、手で触れている必要がある』などという、厳しい制限があるため、使い道はほとんどないのだが。

この世に生きる物は、虫や小魚のようなごく一部の下等生物を除

き、皆大なり小なり魔力を有している。そのため、『時空魔法』で『死者蘇生』は事実上不可能なのである。

とはいえ、「虫しか生き返らせられない」しよぼいものでも、『時空魔法』に死者蘇生が存在しているのは事実だ。

その事実を踏まえて考えれば、各国の王家の噂にも、何らかの形で真実が紛れ込んでいる可能性はある。

アウラは、ペロリと舌で上唇を濡らし、問いかける。

「で、爺の知っている『裏技』の噂というのはどのような代物だ？」

「はい。一つは、シャロワ王家の人間が命を費やすことで、魔道具作製の時間を大幅に短縮出来るというものですじゃ。事実、『雷壁の杖』作製に前後して、シャロワ王家の王族が1人、病没しております」

エスピリディオンの最初の噂を、アウラは一刀の下で切り捨てている。

「ありえんな。確かに、グプタ王国は双王国にとっても大切な友好国で、重要な北の護りではあるが、そのために王族を一人死に追いやるなど、あの王家の気性からは考えられん」

「はい。僕もそう思いますじゃ。ですから、それはただの偶然じゃろつて。そこで、浮上するのがもう一つの噂ですじゃ。」

『付与魔法』は、一定の条件を満たした物質を用いると、極端に時間と労力を短縮できる。という噂ですじゃ」

回り回って、やっと最初の問いの答えが聞こえた気がしたアウラは、しばし沈黙を保った後、ゆっくりと低い声で問いかける。

「……で、『雷壁の杖』はどのような形状をしているのだ？」

「はい。仮にも王家の最秘奥魔道具ですので、あくまで又聞きの際に過ぎませぬが、なんでも、真つ直ぐな木作りの杖の先端に、『大きな丸い透明の水晶球』が飾られていた、と聞き及んでおります」

老魔術師の答えは、アウラが想像したとおりのものであった。

「……………」

蝋燭の明かりに照らし出されるアウラの顔に、ニヤリと大きな笑み浮かぶ。その笑い顔は、猫科の肉食獣が牙を剥く様に似ていた。

第六章 1 【希望は無謀】

「うつつ、くうー！」

開けはなつた窓から差し込む朝日の下、8日ぶりにパジャマを脱ぎ、Tシャツとズボンに着替えた善治郎は、全身の凝りをほぐすように思い切り伸びをした。

まだ少し赤みを帯びている朝日と、窓から吹き込む清涼な風が、善治郎の身体を心地よく撫でる。

「はあ、健康が最大の財産、って月並みな言葉だけど真実だなあ」

差し込む朝日の下、コキコキと首をならした善治郎は、万感の思いを込めてそう呟く。

『森の祝福』とやらを発病したこの7日間。医者から完治のお墨付きをもらったのは、昨日の事。診察を受けたのが遅かったこともあり、昨晩は7日ぶりに本格的な入浴を堪能しただけで、そのまま大事を取って就寝した。

そのため、善治郎の感覚としては、今日のこの時より復帰という感覚が強い。

「そういえば、今日の気温は……お、まだ25だ。かなり下がってきてるな。道理で涼しいわけだ」

壁に掛けてある温度計に目をやった善治郎は、赤い液の上がつている目盛りを読み、ちょっと驚いたような声を上げた。

明け方のまだ涼しい時間帯とはいえ、25とは、随分と過ごし

やすくなつたものだ。

この分ならば、今日は氷や扇風機を使わずに、一日過ごしてみても良いかも知れない。

気温が体温を上回るような日は、流石に四の五の言っていられないが、最高気温が30 の前半くらいで留まってくれるのならば、少しは我慢して身体をこの国の陽気にならすことも必要だ。

「扇風機や冷蔵庫だって、いつまで持つか分からないんだからな」

考えたくはないが、電化製品の寿命というのは人間の寿命よりも短い。スペアがない以上、将来的にはいずれ、電化製品を手放すときは来るはずだ。

それ以前に、例え電化製品がまだ動いていたとしても、先の立食会のように後宮から一步外に出れば、そこは灼熱のカープア王国だし、イザベツラ王女の見舞いの時のように部外者が来れば、家電製品を隠す必要にかられるケースも十分に考えられる。

余裕のあるうちに、この国の気候に身体を慣らしておくのは、将来的に決して無駄にはなるまい。

「あー、当たり前前だけど一気に身体が衰えた感じだな。筋トレとりフティングでもやっておくか？」

確か、大学時代に買ったサッカーボールと空気入れは持ってきたはずだけど」

善治郎は、Tシャツとズボンの上から自分の身体をペタペタとさわわり、そう独り言を呟く。

7日も寝込めば、身体は鈍るのを通り越し、衰え始めていてもおかしくはない。

このまま、元の引き籠もり生活に戻れば、色々と危険だ。この若

さで、起きたり歩いたりするだけで息が切れるような身体にはなりたくない。善治郎は、自主トレーニングの必要性を感じた。

「発電機を設置した中庭くらいなら出ても大丈夫かな？ やっぱり、ある程度は身体を動かしておく必要があるよな」

善治郎は、部屋の隅から探し出した白と黒のサッカーボールを絨毯の上でバウンドさせ、その空気の入り具合を確認しながら、そう漏らす。

今までは、「身体が鈍るなあ」と思いつつも、つい引き籠もり生活を満喫してきた善治郎であったが、こうして一度病床に付けば、体力を維持しておく事の大事さは身に染みだ。

「リフティングは、流石にここじゃちょっと危ないか」

数回、左足の甲でリフティングをした後、空中でボールを掴まえた善治郎は室内を見渡し、リフティングを中断する。

善治郎が茶の間として使用しているこの部屋は、日本の庶民の感覚から見れば「馬鹿げて広い」と言えるが、その広い室内には、中庭から引いた電源コードと、そこからタコ足状に引かれた各種電化製品のコードがあちこちに伸びている。

足を引っかけたりすることがないように出来るだけ端に寄せてはあるのだが、家電の配置位置と電源コードの長さの関係上、何力所かは部屋を横切るようにコードが伸びているところもある。

万が一にも、そのコードを足で引っかけたりしたら、目も当てられない。

「後でどっか空いてる部屋を用意してもらおうのが一番かな。どうせ、部屋は余ってるだろうし」

善治郎がそう呟いたその時だった。

「失礼します、ゼンジロウ様。ご所望のモノをお持ちしました」

コンコンと、入り口のドアをノックする音に続き、聞こえてきたその言葉に、善治郎は即座に反応する。

「はい、今開ける」

そう答えた善治郎は、脇に抱えていたサッカーボールをソファアの上に置くと、ドアへと向かう。

ドアを開けるのは本来侍女達の役割なのだが、「ご所望のモノをお持ちした」という言葉から、恐らく侍女の手が塞がっているだろうと察した善治郎は、こちらからドアを開けてやる。

すると、善治郎の予想通り、カープア王国では珍しい金髪の若い侍女が、大きな木皿を両手で持ち、姿勢良く背筋を伸ばして立っていた。

「厨房の者に頼み、ご指示通りに作らせました」

そう言う侍女が持つ木皿に盛られているのは、薄くスライスして油で揚げたバナナだ。味付けは上から振りかけた粗塩のみ。

『バナナチップス』という菓子は、現代日本にも存在するが、これはむしろポテトチップスの代用品として作ってもらったモノである。病床に付いているとき食べさせてもらった、マッシュバナナのあんかけがジャガイモに近い味わいだったため、試しにその料理用バナナをポテトチップスもどきに調理してもらったのである。

「どれどれ、一つもらつよ」

そう言つて善治郎は、侍女が差し出す皿の上からバナナチップスを一枚取り、口の中に放り込んだ。パリパリと音を立てて、また暖かいバナナチップスをかみ砕く。

「んー……」

善治郎の口の中に、塩と良質な油の素朴な味が広がる。土台となつている素材が若干異なるため、ポテトチップスそのものとは言えないが、代用品としては十分な味わいだ。

「いかがですか、ゼンジロウ様？」

「うん、美味しい。ただちょっと分厚いかな。次作るときはもうちよっと薄く切るように言つておいてもらえるかな？」

「畏まりました、そのように伝えておきます」

「うん、お願い」

ペコリと小さく頭を下げる侍女の手から木皿を受け取つた善治郎は、そのまま部屋へと戻つていた。

善治郎は、木皿をソファの前に設置してある足の短いテーブルの上に置くと、ソファに腰を下ろす。

「んー、ちょっと固いけど、十分ポテチの代わりになるな、これは。デザートバナナみたいな甘みもないし」

その味わいは、美味しいというより懐かしい。

善治郎がこの世界に転移してきて数ヶ月。日本を懐かしがるにはまだ早いとは思うのだが、昨日までベッドの上で日本の食べ物を何度も思い出したのは、紛れもない事実だ。

善治郎は自分を食にあまり拘りのない人間だと思っていたし、事実日頃はこの世界の食事に不満を感じたこともない。しかし、心身が弱ったときは全く話が違つたことを今回の一件で痛感した。

すぎた贅沢や我が儘を言つつもりはないが、後宮で自分や料理長にお願いすれば実行可能な範囲でならば、日本の料理をこちらで再現するのも悪くはない。

善治郎は社会人になってからは、スナック菓子の類はほとんど口にしなくなっていた筈なのに、今はこのポテトチップスもどきが「美味しい」と感じるのだから、味覚に基づく望郷の念というのは、無視しがたいものがある。

「幸い、この国は砂糖が普通に使われているみたいだし、お菓子関係から色々やってみるかな？ あ、でも、卵はともかく乳製品が凄く高いんだっけか。ミルクやバターを一切使わないお菓子となると……うーん。そんなレシピ、持ってきてたかな？」

熱帯雨林気候に近いカープア王国の家畜の8割は、『竜』爬虫類である。当然ながら、爬虫類は乳を出さない。卵は産むには産むが、鳥類の卵とはかなり異なつた代物である。

もつとも、地球ではアフリカ赤道付近の国やインドなど、カープア王国より暑い季節を有していながら、牛や豚を普通に飼育している国がある事からも分かるとおり、ほ乳類の飼育が根本的に不可能

という訳ではない

南大陸で、ほ乳類の家畜が一般的ではないのは、気温の問題よりも大陸の生態系の問題なのだろう。

だが、現実として、カープア王国に牛や山羊は少なく、乳製品は貴重だ。特に、遠心分離器など存在しないのだから、バターや生クリームは超がつく高級品である。

「ましてや、ハンドミキサーも、電気式のオーブンレンジもないんだからな。自前で作れるモノなんて無いに等しいか」

一人暮らしの経験があるとはいっても、所詮は若い男の一人暮らしだ。料理など、「カレー」「シチュー」「ハヤシライス」、あとはチャーハンだの野菜炒めだの、善治郎のレパートリーなどその程度である。

「あとは、果物関係かな？ 林檎に近いモノがあったらアップルパイくらいは作れそうだけど。林檎はかなり北の果物だからなあ」

ソファアに座り、バナナチップスを摘む善治郎は、暇つぶしにテレビの電源を入れてDVD観賞を初めながら、そう呟くのだった。

その日の夜、夕食と入浴を済ませたアウラと善治郎は、7日ぶりに後宮の一室で夫婦水入らずの時間を過ごしていた。

「つまり、鈍らない程度に身体を動かしたい、ということか？」

「うん、簡単に言えばそんなところかな。どうだろ、中庭か後宮の一室を俺の運動部屋にしちゃってもいい？」

一つのソファーに仲良く隣り合って座るアウラと善治郎は、互いの肩を抱けそうな至近距離で言葉を交わす。

話の内容は、善治郎が朝から一人で考えていた『健康のための身体作り』に関してだ。

本来後宮の主は善治郎なのだから、適当な一室を片付けさせてリフティングをするのも、中庭でドリブルをするのも、誰の許可もいらないのだが、こうしていちいちアウラにお伺いを立てる辺り、『後宮の主』であるという自覚の無さが表れている。

「そのサッカーとやらがどのような運動なのかは分からぬが、身体が鈍らないようにしたいというのであれば、武術を嗜む気はないのか？ 『十術』は身につけておいて損はないぞ」

アウラは、そう言ってテーブルの上の木皿から、バナナチップスを一枚口の中に入れる。

「十術？」

「うむ。カープア王国で、武人がたしなみとして身につけておくべ

き武術十種のことだ。走術、槍術、弓術、騎竜術、木登術、水術、野営術、投石術、剣術、徒手武術の十種だな。

とは言っても、全てを納めている者は騎士でもごく僅かだ。必須なのが、走術、槍術、弓術の三つで、騎兵を目指すならば、それに加えて騎竜術、残りは特技として一つ二つ身につけておけばつぶしが利く、と言ったところだな」

「へえ……」

善治郎は感心したような声を上げる。昔の日本で言うところの『武芸十八般』のようなものだろうか？ 20歳もとうに過ぎた身で、今更まともに身につくとも思えないが、興味はある。しかし、善治郎は少し考えて問い返す。

「面白そうだけど、その場合その十術ってのは、誰に習うことになるのかな？」

「ん？ それは無論、王軍の中から指導に長けたモノを選抜することになると思うが？」

バナナチップスを摘みながら答えるアウラの返答に、善治郎は「ああ、やっぱり」といった表情できっぱりと首を横に振る。

「ああ、それなら駄目だね。王軍ってことは、その人男でしょ？ てことは、教えてもらうために俺が後宮から出ることになるよね。そうなると多分、面倒ごとが頻発すると思う。それに、例え武術という限られた範囲でも『師弟』という関係を持つのは色々やばそう」

中学、高校とサッカー部だった善治郎は、部活の顧問の顔を思い出しながらそう答えた。

高々部活の顧問程度でも、街中でばったり顔を合わせれば、つい反射的に背筋が伸びるものだ。それが、生き死にを教える武術の師となれば、善治郎にもっと強い影響力を持つことだろう。

その『師弟』の関係を糸口として、善治郎に何らかのアプローチを掛けようとする人間はまず間違いなく現れる。

そんな面倒くさい人間は、魔術と教養の師である、オクタビア人で十分だ。

善治郎の返答に、バナナチップスを呑みこんだアウラは苦笑を隠さず答える。

「ゼンジロウ、そこまでいちいち配慮してくれなくても良いのだぞ？ もう少し自由に振る舞ってくれても、私はそれを許容出来る程度の度量は持ち合わせている」

妻の返答に、善治郎はポリポリと顔を掻き、

「いや、もちろんアウラに迷惑を掛けたくないって思いもあるけど、これはどっちかという俺の都合だよ。ようは武術には興味があるけど、それをやることで面倒を増やすくらいならやらなくてもいい、って程度の興味なんだ」

そつ言葉を返した。

善治郎の返答に偽りが無いことを理解したのか、アウラは「分かった」と首を縦に振る。

「そついうことならば、無理強いはせぬ。ああ、そつだ。後宮から出ずに武術をやってみたいというのであれば、暇を見て私が相手を

「してやっても良いぞ」

「アウラが？」

問い返す夫に、アウラはバナナチップスを数枚纏めて口に放り込み、咀嚼しながら頷いた。

「ああ。私が身につけてるのは、基本の3術と、後は騎竜術と剣術だけだな」

「へー、すごいな。それなら、暇があったら頼もうかな」

「うむ、任せろ」

善治郎の返答に、アウラは満足げに頷くと、木皿からバナナチップスを数枚纏めてすくい上げた。

「……………」

「……………」

しばしの間、パリパリとアウラがバナナチップスを食べる音だけが後宮の一室に響き続ける。

口の中のバナナチップスを呑みこんだアウラが、もう一度木皿に手を伸ばしたところで、流石に見咎めた善治郎が声を上げる。

「なー、嫁さん、嫁さん」

「ん？ なんだ、婿さん？」

右手でバナナチップスを掴んだ体勢で、首だけこちらに向ける妻に、善治郎は一瞬躊躇した後、振り切るようにして口を開く。

「俺の故郷の菓子を気に入ってくれたのは嬉しいけど、その辺にしておいた方がいいんじゃないか。俺、嫁さんの体型がちょっと心配」

大皿にいっぱいあったバナナチップスが、夜の短い時間ですっかりアウラに食べ尽くされている。

「む？　言われてみれば、ちょっと食べ過ぎたか」

言われてやっとバナナチップスに手を伸ばすのを止めたアウラを見て、ソファアから立ち上がった善治郎は、冷蔵庫から冷やした濡れタオルを取り出すと、アウラに差し出す。

「ほら、これで手の油を拭いて」

「おお、すまん」

「やっぱり、夕食を残したのがきいてるんじゃないの？　こんなジャンクなモノでお腹を膨らませると良いことないよ」

非常に珍しい夫のお叱りに近い言葉に、ソファアの上で手を拭いていたアウラは殊勝に首をすくめる。

「うむ、そう言われると返す言葉もないのだが、どうも今晚の魚料理は泥臭くてな」

大国であるカープア王国には、海岸線も存在するが、王宮のある

王都は完全な内陸の都市だ。そのため、宮殿料理として食卓に並ぶ魚は、ほぼ例外なく皆川魚である。

一般的に川魚は、海の魚に比べると泥臭いものが多い。

「ええ、そうか？ 特に今日の魚だけ、特別泥臭かったとは思わなかったけどな」

善治郎は、そう言って首を傾げる。日本では海の魚しか食べたことのない善治郎は、少し川魚を苦手としている。川魚になれているアウラが気になるほど泥臭いようならば、自分が先に気づくのではないか？ そう考えた善治郎であるが、味覚や嗅覚というのは、体調次第で変化するモノだ。

病気がりのせいで、自分の嗅覚が鈍っていたのだろう。善治郎は勝手にそう結論づけて、それ以上追求することはなかった。

「そもそも、私は揚げ物のような油をふんだんに使った味の濃い料理はあまり好んでいなかったはずなのだがな。今日はなぜか、手が止まらなかった」

右手に付いていたバナナチップスの油を丹念に、タオルで拭き取ったアウラがそう言い訳をするが、当然ながら善治郎は取り合わない。

「いや、木皿いっぱいあったバナナチップスをそれだけ食べておいで、実はあまり好きではない、って言われても全く説得力が無いんだけど」

苦笑を浮かべ、隣に座る夫にアウラは不満げに口をとがらせ、なおも言い訳を重ねる。

「まあ、我ながら説得力が無いとは思いますが、本当なのだ。私はどちらかと言うと、こういう味の濃い油っぽいものは好まぬ。嫌いなわけではないが、積極的に食べるものではない……はずなのだ。」

「はいはい、分かったから。残りは明日にしようね。」

ソファアに戻った善治郎は、あしらうようにそう言ってバナナチップスの入っている木皿に蓋をした。

「むづ……。」

異論はあるのだが、現状の形勢不利を理解したアウラは、それ以上抗弁に固執せず、話題の転換を図る。

「ああ、そう言えば、私とそなたの『結婚指輪』を魔道具にしてもらうため、イザベツラ殿下にお渡ししたのだ。あと、あの『ビー玉』と『ビーズ』とやらも殿下に見定めてもらってな、礼として『ビー玉』を一つ殿下に進呈したのだ。すまぬな、病床のそなたの断りもなく。」

アウラには珍しい、かなりあからさまな話題転換であったが、これ以上妻をからかう悪癖のない善治郎は、素直にその話に乗る。

「ああ、別にいいよ、それは。元々転送に失敗したときの保険ぐらいにしか思っていなかったものだし。その辺りの取り扱いに関しては、アウラに任せるって言ってたでしょ？」

「ああ、確かにな。ただ、ビー玉にはちょっと予想外の高値が付いてな。その辺りの事情も、持ち主であるそなたにはしておく必要が

あるだろう」

少し真剣な面持ちを取り戻したアウラは、ソファアの上で座り直すど、とうとうと語り始めたのだった。

「ふーん、ビー玉1個が金貨50枚か」

話を聞き終えた善治郎の態度は、今一要領を得ないものであった。

「たしか金貨1枚が、大体銀貨100枚なんだっけ？ でも、この世界の物価が分からないから、金貨50枚と言われても、ちよっとピンと来ないな」

なにぶん、善治郎は異世界人である。その上、この世界に来てからは後宮に籠もりっぱなしで、買い物も外食も経験がない。各領地の税収をパソコンの表計算ソフトに打ち込む作業を行ったので、基本的な通貨ぐらゐは把握しているが、正直なところ全く実感がわかない。

「金貨50枚あれば、下級貴族ならばギリギリ恥ずかしくないくらいの家が買えるな。宝玉1個の値段としては、これは破格だぞ」

「家1軒？ 流石にそれはすごいな」

具体例を挙げられれば、善治郎にもそのすごさが少しは伝わる。

（家1軒って、日本円に直したら1千万円近いってことか？ あ、でも、この世界では、家や土地の価値が、現代日本ほどない可能性もあるか）

とりあえずは、自分の予想を遙かに超えた値が付いた、とだけ理解しておけばよい。善治郎は、そう自分に言い聞かせ、細かな疑問は纏めてほうり投げる。

「世界が変われば、ものの価値が変わるってことはある程度予想していたけど、ちょっと凄いな」

「その言い方からすると、あのビー玉とやらは、そなたの世界ではさほど高価なモノではないのだな？」

興味津々なアウラに、善治郎は何でもないような口調で答える。

「うん、安物もいいところだよ。はっきり言えばあれは子供のおもちや。1つ10円から高くても30円程度かな。ちなみにこの世界とは物価が違うから単純比較は出来ないだろうけど、新築の家はどんなに安くても1千万円はすると思ってる欲しい」

善治郎の言葉にアウラは素早く頭の中で計算し、唸るような声を上げた。

「その価値で計算すれば、銅貨1枚でそのビー玉が2つ買えてしまう計算になるな」

実際には、労働者の労働単価で比較した場合、主食となる米や麦の価格で比較した場合、一般的な食堂の一食の金額で比較した場合など、それぞれ別な計算結果が出るため、銅貨1枚イコール20円

とは言い切れないのだが、大ざっぱな比較にはなる。

向こうでは一粒10円ちよつとのビー玉が、こちらでは金貨50枚。単純計算では、百万倍だ。

「うん、だから流石にちよつと驚いている。この世界でビー玉をしこたま作ったら、アツという間に億万長者になれるんじゃないの？ いや、だめか。こういうのは希少価値が重要なんだもん。大量生産なんかしたら、アツという間に値崩れを起こすか」

なおも善治郎は、あーでもないこーでもないと話し続けているが、途中からその言葉はアウラの耳に届いていなかった。

途中で聞こえてきた、あまりに衝撃的な言葉に、アウラは半ば思考が停止したまま、隣に座る夫の腕を掴む。

「アウラ？」

「……待て、そなた、今、何と言った？ その『ビー玉』を作る、と言ったのか？」

「あ、うん、言ったけど」

腕を掴み、爛々と光る目でこちらを見る妻の迫力に押された善治郎は、ソファアの上で仰け反りながらそう答える。

「それは、鉱物ではないのか？ 水晶や瑪瑙のように自然にあるモノを削り出すような……」

「ち、違うよ、ビー玉はガラス。砂とか石灰とかを混ぜて、人工的に作るモノだよ」

「砂に石灰……そなたは、その作り方を知ってるのか？」

ここまで言われれば、アウラが何を期待しているのか、善治郎にも分かる。

善治郎は苦笑を漏らすと、首を横に振った。

「無理無理。ガラス製造は紀元前からある技術だから、この世界でも再現は不可能ではないだろうけど、かなり専門的な知識と技術が必要だからね。俺みたいな素人が見よう見まねで再現できるモノじゃないよ」

善治郎の返答に、アウラは途端に勢いを失う。

「……そうか。流石にそこまで都合の良い話はない、か」

善治郎の右腕を両手で掴んだまま、アウラはしょぼんとソファアーの上で頂垂れた。

嫁の心底がつかりした様子に、いらぬ罪悪感を感じた善治郎は、つい反射的に慰めの言葉を口にする。

「あ、でも、確か俺が取り溜めたDVDの中で、ガラス作りに挑戦している回があつたはずだよ。どうせそれを見ても、再現は出来ないだろうけど、見るだけ見てみる？」

その言葉に対する、アウラの反応はまた劇的だった。

「見る！」

「分かった、用意する」

善治郎は、強く握っている妻の手の中から右腕を抜き取ると、ソファアの向かいに設置してあるテレビとDVDの電源を入れるするため、ソファアから立ち上がった。

数分後、善治郎とアウラは、仲良くソファアの上で肩を並べ、テレビの画面に向かっていた。

テレビに映っているのは、善治郎が取り溜めた日曜の夜にやっていたとあるテレビ番組だ。アイドルグループが、村を一から作り、農業やら物作りに挑戦するというその番組の中で、ガラス工芸に挑戦した回を選び出し、再生している。

真剣な面持ちで食い入るように画面を凝視しているアウラの隣で、善治郎はリモコンを操作し、何度も一時停止を繰り返しながら、番組のナレーターや登場人物の言葉を通訳、解説する。

なにせ、機械の言葉には『言霊』が働かない。善治郎が通訳をしてやらないと、アウラには画面の向こうから聞こえてくる説明は一切理解できない。

「ええと、ガラスをとかすするには、千三百度以上の温度が必要なんだ。だから、まずはその高温に耐えられる炉を作るために、『耐火煉瓦』を組んでガラス竈を作る」

「ほほう、なるほど。その『耐火煉瓦』とやらだけでも、十分に価値があるな。ところで、千三百度というのはどれくらいの熱なのだろうか？」

「確か、前の回で鉄を打ったとき、鑄鉄の融解温度が千二百度って言ってたから、混ざりモノが多い固い鉄が溶ける温度より、もう百度高い温度かな」

「なんと。鉄を溶かす温度以上か。鉄を液状化できる炉は、南大陸にはないぞ」

「ってことは、南大陸以外にはある？」

「うむ、製鉄に関しては北大陸が先進国だ。向こうには、鉄を溶かして鑄造する技術が存在していると聞く」

「へえ、この世界でも技術格差はあるんだな」

真剣な面持ちで画面に見入るアウラであったが、善治郎の説明を聞くにつれて、段々とその顔は険しくなっていく。

「さて、今何と言った？」

「だから、普通の粘土をこねただけじゃ『耐火煉瓦』にはならないから、割れた『耐火煉瓦』を粉に砕いたモノを混ぜて、『耐火煉瓦』を作ったんだって」

「……では、割れた『耐火煉瓦』が手に入らないときには、どうやって『耐火煉瓦』を作るのだ？」

「さあ？」

アウラの機嫌が少し悪くなったまま、DVDは先へと進む。

「さて、どういう事だ？」

「いや、だから『耐火煉瓦』を焼き上げるのにはかなりの高温が必要だから、『耐火煉瓦』を焼くための竈を特別に作ったんだって」

「その竈は、なにで、作ったのだ？」

「余所からもらってきた『耐火煉瓦』で」

「……では、『耐火煉瓦』をもらってあてがえないときは、どこで耐火煉瓦を焼きあげればよいのだ？」

「さあ？」

さらに不機嫌に嫁の横で、善治郎はちょっとビクビクしながら説明を続ける。

実際、そうやって怒られても困るのだ。これはあくまでテレビの娯楽番組を録画したものに過ぎず、本格的なガラス工芸の製造マニュアルなどではない。この映像を見ただけで、再現できるほどガラス製造という技は容易くはない、と事前に言うておいたはずなのだが、アウラには今一届いていなかったようだ。

やはり、ガラスは製造可能な物体である、という期待感が大きすぎたのだろうか。

まあ、確かにアウラの言いたいことも分かる。

『耐火煉瓦』の作り方の説明で、粉に砕いた『耐火煉瓦』を混ぜた粘土を型に詰め、『耐火煉瓦』で作られてた竈でじっくり焼き上げる、などと言われれば、善治郎でもちよつと突っ込みを入れたくはなる。

『耐火煉瓦』の作り方の、用意するモノの欄に『耐火煉瓦』と書かれているようなものだ。流石にこれは、ちよつと理不尽だろう。

「だから、最初に作られた『耐火煉瓦』は、『耐火煉瓦』を使わずに作られたのだろうか？ その作り方はやっていないか？」

「ない」

「うっうっ……」

珍しく不機嫌を全快にするアウラの背中を、善治郎はリモコンを持っていない方でポンポンと叩く。

「落ち着け、嫁さん」

「無理だ、婿さん」

「どいどい」

「ガウガウ」

いちいち善治郎の軽口に付き合ってくれる辺り、アウラも本当に真から不機嫌になっているわけではないだろう。

「で、どうする？　どのみち役に立たないのなら、この辺りで中断しておくか？」

横目で時計を確認した善治郎がそう提案するが、アウラはちょっと考えた後首を横に振った。

「……いや、せっかくだから最後まで見よう。ひょっとすると、どこかに突破口があるかもしれん」

「無いと思うけどなあ」

善治郎の呟きは極小さな声だったので、隣に座るアウラの耳にも届かなかった。

時計が指し示す時刻は、普段であればもうとっくに仲良く寝室に入っている時間帯だ。

病床についていた関係上、この7日間ずっと独り寝が続いていた善治郎としては、今夜という時間は随分と楽しみにしていたのだが、どうやらまだお楽しみタイムには間があるようだ。

「では、続けてくれ、婿さん」

「了解、嫁さん」

アウラに見えないように死角で苦笑を漏らした善治郎は、愛妻の

背中に回していた手を肩へと移動させると、グツと妻の身体を抱き寄せながら、番組の通訳と説明を続けるのだった。

第六章2【女王の懐妊、側室の拒絶】

翌日の昼下がりに。

女王アウラは、王家の掛かり付け医であるミシエル医師の前に座り、その豊かな胸元を大きくはだけさせ、神妙にしていた。

「失礼します、陛下。ここをこう押されると、何か感じますか？」

「ああ、少し張っている気がするな」

「では、こちらは？」

「いや、そこは特に何も感じない」

胸元を露わにした肉感的な美女と、その身体を触診する初老の男。一見すると、扇情的な光景だが、色艶めいたことを連想させるには、アウラはあまりに堂々としすぎているし、ミシエル医師はどこまでも業務に徹している。

やがて、アウラへの触診と問診を終えたミシエル医師は、一つ頷くと言った。

「はい、アウラ陛下。もう、前を閉じて下さっても結構です」

「ふむ。して、ミシエル医師。どうだ、何か分かったか？」

ドレスの肩紐を縛り直しながらそう問いかけるアウラに、ミシエル医師はしばしその白いモノの混ざった眉の間に皺を寄せて考え込

んだ後、質問を返す。

「陛下、最後にもう一度確認させて下さい。最初に自覚のあった体調の不良は、微熱があるようなけだるさだったのですな？」

「そうだ。あとは、椅子から立ち上がるときの、めまいのような視界の揺れだな」

「ここ数日、味覚や嗅覚の変化を感じている？」

「ああ、魚がやけに泥臭く感じたり、今まであまり好きではなかった味の濃い食べ物が無性に食べたくなったり、な」

「さらに、下腹部に若干の張りを感じる」

「うむ、そちらはミシエル医師の触診を受けるまで、自覚はなかったが」

「そして、『月の物』はすでに二ヶ月近く来ていない」

「ああ、しかし、私の『月の物』は元々乱れがちだからな。大戦のおり、戦場では半年近くこなかったこともある」

答えるアウラのミシエル医師を見つめる瞳は、ある種の期待に満ちている。

最初は体調不良を訴えて、医師を呼んだアウラであったが、こうしてミシエル医師の問診を聞けば、彼が何を言わんとしているかは大体分かる。

妊娠。

この初老の医者、アウラの体調不良の原因が、それであると考えているのだ。

考えてみれば、極当たり前の事である。アウラが善治郎と肌を重ねるようになってからはや数ヶ月。妊娠の兆候が現れても、何ら不思議ではない。

そして、カープア王家唯一の生き残りとなったアウラにとって、自らの血を引く子を産むことは、王族の義務でもあり、希望でもある。

「して、どうなのだ、ミシエル医師？」

アウラは、椅子の上から身の乗り出すようにして、老医師の言葉を待った。

ミシエル医師は、コホンと一つ咳払いをすると、結論を述べる。

「はつきりとは断言できかねますが、私の見立てでは、ご懐妊の可能性が極めて高いと思われます。ただ、ご懐妊だと致しますと、これから一番流れやすい時期に入りますので、ご注意をお願いします」

妊娠検査薬など存在しないこの世界では、腹が目立たない段階で、妊娠を特定することは難しい。ましてアウラのように、生理が不順ぎみの女の場合は特にそうだ。

断言こそしないものの、どこか確信を感じさせる老医師の言葉に、アウラは満面の笑みを浮かべる。

「ほう、そうか！　しかし、この味覚の変化が妊娠によるものだったとはな。私はてっきり妊娠中は、果物の類を食べたくなくなるものな

のだと思っていたが」

「それは、もつとも一般的な味覚の変化というだけで、実際には人それぞれです。陛下のように脂っこくて味の濃い物が食べなくなる方もいれば、ひたすら甘い物が食べなくなる方もおられます。」

もつとたちが悪い例では、酒が飲みたくなる方もおられましたし、1番手に終えない例ではその後のつわりと相まって『何も食べたくない』という方もおられました」

「その言い方からすると、やはり妊娠中は酒を控えたほうがよいのか？」

別段味覚の変化など無くても、生来酒が好きなアウラは、少し口元を歪めてそう確認した。

アウラの言葉に、ミシエル医師はピクリとその温厚そうな顔を引き締めて、口を開く。

「当然です。他にも注意事項はたくさんありますぞ。そもそも、陛下は日頃から少々酒類の量が……」

「わかったわかった。我が子のためだ、一切逆らわんよ。何でも言ってくれ」

詰め寄る老医師に、アウラは苦笑を浮かべ、降参とばかりに両手を上げるのだった。

「えー、妊娠！？ 本当に？」

その日の夜、妻の口から妊娠の話が聞かされた善治郎の反応は驚愕の一言だった。

比喻ではなく、ソファアーの上から跳び上がった善治郎は、そのまま駆け足で入り口で佇んだまま微笑むアウラに駆け寄り、少し離れた所からアウラの腹部を凝視する。

アウラは、嬉しそうな笑みを浮かべたまま、自分の腹部を右手の平でさすりながら、ゆっくりとした足取りでソファアーに向かう。

「まあ、まだ確定ではない。その可能性が高い、というだけだ。私は、『月の物』が乱れがちだからな。ミシエル医師でも断言は出来ないのだそうだ。無論、その可能性が高い以上、今後私はこの腹の中に子がいるという前提で動く。そなたにも色々と不自由を掛けることになると思うが、協力を頼むぞ」

「そ、それはもちろん。うん、俺に出来ることならね」

ソファアーに腰を下ろすアウラにそう答える善治郎であったが、大

概の男親がそうであるように、この時点ではまだ自分が父になるという実感がもてず、右往左往している。

日頃であれば当たり前のような顔をして、アウラの隣に腰を下ろす善治郎が、今夜ばかりは神妙な顔で、向かい側のソファに腰を下ろす。

昨日までは、平気でその肩を抱き、夜ベッドでは下に組み敷いていた妻の身体が、急に壊れ物のような繊細な存在に感じられる。

明かな動揺を見せる夫の様子に、アウラは小さく笑ったものの、いつものように隣に座るよう促すことはなかった。

なんだかんだ言っても、アウラ自身初めての経験である。心情など比較のしようはないが、善治郎より緊張しているのかも知れない。

「まあ、正直私自身、何をすべきなのか分かっていないからな。今のところ、あーしろ、こうしろとは言えぬのだが」

「あ、うん、そうだよな。そうか、赤ちゃんか」

覚悟はしていた。そもそも、アウラが善治郎に世界を超えた求婚をした最大の理由が「次代の血を残す」事なのだから、意識をしていない方がおかしい、だが、こうしていざその場に立ってみると、何とも言葉で言い表しがたい衝撃に襲われるものだ。

喜びと不安が、重圧となつてのしかかってくるような、圧迫感。嬉しくない訳ではないのに、この場から逃げ出したくなるような、緊張感。

膝の上でグツと手を組み合わせた善治郎は、手の指が緊張ですっかり冷たく強張っていることに気がついた。

善治郎は強張った両手の指先を暖めようと、両手の平を擦りあわ

せながら、緊張をごまかすように適当な質問を投げかける。

「でも、そうになると、今夜からは一緒に寝るのもまずいのか。夜の営みが一時停止になるのはもちろんだけど、それ以前に俺、間違っても寝相の良い方じゃないし」

善治郎とアウラが日頃一緒に寝ているベッドは、都心のワンルームマンションより広そうな馬鹿でかい代物だが、二人はその真ん中で身を寄せ合って寝ているのだ。

これまでも、朝目を醒ましてみると手や足を、アウラの身体の上のせていたケースは何度かある。腕や足の1本や2本が乗った所でそう簡単に流産の可能性が高まるとは思えないが、例えば1パーセントでも避けられる危険は避けるべきだろう。

善治郎のその物言いに、それまでずっと笑顔を浮かべていたアウラの表情がピクリと動く。

いったん笑顔を納め、少し真面目な表情で姿勢を正したアウラは、ゆっくりを口を開いた。

「そうだな。確かに、妊娠の疑いがある現状、閨を共にするのは少々危険が伴うと、ミシエル医師も言っていた」

そう言うアウラの口調は、僅かに夫の出方を探るような気配を滲ませていたが、それあまりにごく僅かなものであったため、緊張と驚きで我を忘れかけている今の善治郎が気づくことはなかった。

「そうになると、一緒に寝るわけにはいかないのか。今晚はしようがないから別々に寝るとして、明日昼間の内に、寝室にベッドを追加してもらおうか。明日からは、俺はそっこのベッドで寝るよ」

妊婦の疑いがあり、性交を行うわけに行かない状態となった妻と同じ寝室で寝るために、寝室の配置換えを提案する夫。

妻としてその返答は、とても魅力的な物ではあったが、妻である前に女王であるアウラは、その提案に、すぐ了承の意を示すわけにはいかない。

「そなたは、本当にそれで良いのか？」

「へっ？」

アウラの言っている意味が理解できなかった善治郎は、マヌケな声を発して首を傾げる。

LEDスタンドライドの白い灯りに照らし出される夫の顔を注視し、嘘偽りを可能な限り見抜こうと神経を尖らせたアウラは、今度はもつと直接的な言葉をぶつける。

「今後も私を寝室に招き入れるということは、私が妊娠中も『私以外の女』は寝室に呼ばない、ということだぞ？」

そこまで、はっきり言われれば、頭が今一働いていない今の善治郎でも理解できる。

ようは、アウラは自分が身重になっている間、善治郎が自分以外の女に手を出す可能性を示唆しているのだ。

（あ、そうか。一応俺も王族だから、本来なら、アウラ以外の嫁さんがいてもおかしくはないのか）

カープア王国の男王族で、妻が一人であった例が極少数派であることは、善治郎もこの数ヶ月学んでいる。

今までは、女王アウラとの間に『カープア王家の血の濃い正当後継者』を作るという至上命題が存在したため、夫婦水入らずでいられたが、肝心のアウラが身重で性交不能な状態となれば、モーシヨンを掛けてくる女　正確に言えば、女を差し出そうとする有力貴族　は必ず現れることだろう。

自分の置かれている立場を理解した善治郎は、露骨に眉をしかめると、今にも舌打ちをしそうな口調で言葉を返す。

「嫁さんのお腹の中に自分の子供がいる状態で、他の女の人に目が向くほど、俺、甲斐性無いんだけど。っていうか、俺、今後アウラが無事出産するまで、アウラと子供の事以外考える余裕なんてないよ、多分」

善治郎の言葉は、少し大げさではあるが、8割方真実だ。今はともかく、これから出産までの長い時間、ずっとアウラの身の心配だけをしているというのは、流石にちよつと非現実的だが、もし万が一、側室を迎え入れたとしても、側室と閨を共にする際、善治郎の脳裏にアウラの顔がよぎることは、間違いない。

これはただの予想であるが、断言できる。

聞きようによつては熱烈な愛の告白とも取れる善治郎の言葉に、アウラは頬が緩みかけるのを意思の力で制止し、真面目な表情を取り繕ったまま、ソファーの上から身を乗り出し、言葉を返す。

「しかし、現実問題として、私の妊娠が確定し、それが公然の事実となれば、その時点で有力貴族達はまず間違いなく動き出すぞ。この場合、事の正当性は断るお前よりも、押しつける貴族達にある」

「それは、まあ、そうなんだろうけど……。ねえ、アウラ。アウラは俺に言ってくれたよね？」「もう少し我が儘を言ってもいい」って。ここで俺が「そんなの嫌だ」と言っただとして、その我が儘は許容範囲に入らないのかな？」

今日まで常にアウラの立場を考慮し、歯がゆくなるほど我が儘を口にしなかった夫の初めての我が儘。その内容は『側室の拒否』という予想だにしないものだった。

アウラはその『夫の我が儘』に、身体の芯が熱くなるような喜びを感じつつも、困惑を隠せない。

「そなたがそこまで言うとはな。そんなに嫌なのか？」

善治郎は、黒い革張りのソファアの上で一度座り直すと、真っ直ぐアウラの間を見つめ返し、こくりと頷く。

「そうだね。嫌か、嬉しいかの二択で答えるのなら、嫌だ。嫌か、嬉しいか、どちらでもないの三択で答えても、やっぱり答えは嫌だね。」

まあ、俺もアウラと結婚した時点で、王族としての義務が生じることは理解しているから、拒否することでアウラやカープア王国に多大な不利益をかけるくらいなら、なんとかして受け入れようとは努力するけど……。正直、あんまり上手くやっていく自信はないな」

「ふむ。そなたがそこまで潔癖だとは思わなかったな」

そんなアウラの評価を、善治郎は苦笑を浮かべ、顔の前で手を振って否定する。

「いや、別に潔癖な訳じゃないよ。例えば、俺は以前、1年ちよつとの間だけ、恋人がいた時期があるんだけど、その頃アウラに召喚されて求婚されてたら、多分俺はコロツとアウラに乗り換えてたと思う。」

もし、向こうの世界とこっちの世界を自由に行き来する手段があれば、二股だつてやったかもしれない。だから、別に俺は潔癖な訳じゃない。さっきも言ったとおり、これはただの我が儘。

好きでもない人を第三者の意思で押しつけられて、せつかく上手くっている嫁さんとの関係をギクシャクさせるのが嫌だつてだけ」

「ギクシャクはしないだろう。確かにお前が他の女と肌を合わせれば良い感情は抱かんが、それを表に出さないくらいには、私は王族としての義務を心得ているぞ?」

「俺がギクシャクするの。夜、浮気をしておいて、昼間、嫁さんの所に「お腹の子供は順調?」なんて、悪びれないで顔出しできるほど、俺は面の皮厚くないよ」

「むづ……」

これは予想以上に強い反発だ。というより、そもそも善治郎がこの提案に反発すること自体予想だにしていなかった。

(知らぬ間に私は、異世界の一般人である婿殿が、この世界の貴族と同じ価値観を持っていると想定してしまっていたのだな)

それはある意味、善治郎に対する「甘え」とも言えるだろう。細かな説明や説得がなくても、夫がこちらの立場を理解して、こ

こちらの提案を受け入れてくれると、無意識のうちに考えていた。

（いかな。口では「もう少し我が儘を言ってくれ」と言いつつ、内心我が儘一つ言わない夫の態度を『当たり前』と捉えていたなど、甘えも良いところだ）

アウラは、反省の念を心に刻みつけるように目を瞑り、小さく細く息を吐く。

予想外の形であるが、せつかく夫が漏らした初めての我が儘だ。出来れば聞き遂げてやりたい。しかも内容は「側室の拒絶」なのだから、妻としては本来喜んで受け入れたい『我が儘』だ。

しかし、現実はどうだろうか？ 今の王室と有力貴族の力関係を冷静に見て、ここで側室をはねのけることは、果たして許容範囲内の我が儘に収まるのだろうか。

最悪なのは、その我が儘が、善治郎の我が儘ではなく、アウラの我が儘だと誤解されることだ。

そして、その可能性は十分に高い。普通、アウラと善治郎の立場を考えれば、側室を拒絶するのは、アウラの方だろう。だが、アウラが夫の意思を無視して、側室を拒絶したと周囲に誤解されれば、その悪評は致命的とまでは言えないにしても、結構な痛手になりかねない。

やがて、目を開いたアウラは、落ち着いた口調で告げる。

「分かった。可能な限りそなたの意思にそう形で決着を付ける。それは約束しよう。しかし、私は女王だ。例えば家族との約定といえど、見過ごせない大きさの不利益が国に生じると判断すれば、約定を踏

みにじることにはあり得る。そこは、覚悟しておいてくれ。……すまない」

真面目な表情で小さく頭を下げるアウラに、善治郎はこの日初めて、いつもアウラに向けている柔らかかな笑みを返した。

「分かっているよ。そこまで深刻に受け止めてくれなくても、俺も自分の置かれている立場は、頭では理解してるから。ほら、あんまり落ち込んでもお腹の子にさわるかもよ」

善治郎の言葉に頭を上げたアウラは、表情を緩め、夫の言葉を受け入れた。

「そうだな。分かった。では、そろそろ時間もおしているし、今晚はこの辺りにしておくか」

そう言っアウラは、ソファから立ち上がる。

一瞬きよとんと首を傾げる善治郎であるが、すぐにアウラの言わんとしていることに気づく。今晚からは、同じベッドに入ることはいないと決めたのだ。今から寝室に予備のベッドを入れる暇がない以上、今晚だけは善治郎とアウラは別室で寝る以外に方法がない。

一晩くらいは同じベッドで寝てもいいのではないか、と言っ言葉が喉まで出かかったところで、善治郎はその思いを無理矢理飲み込み、立ち上がる。

アウラに無事、子を産ませることこそが、善治郎に求められる唯一にして最大の義務なのだ。その邪魔だけは絶対にしてはならない。

「そっか。それじゃあ、気をつけてね。出来るだけお腹を冷やさな

いようにして」

「分かっておる。ミシェル医師からも散々言われてたわ。酒は駄目、長湯は駄目、寝相に気をつける。これだけ束縛されて、もし妊娠していなかったら、私は脱力感でしばらく立ち上がれなくなるぞ」

「あはは、それだけ大事だって事だよ、アウラとその赤ちゃんがさ」

そんな言葉を交わしながら、アウラは善治郎に送られて、出入り口のドアの前まで足を運んだ。

6つあるLEDスタンドライトは、ソファーを中心とした生活空間を内向きに取り囲むようにして配置されているため、この辺りは薄暗い。

「それではな」

その薄闇の中、アウラはドアノブに手を掛ける前に、一度夫の方へ向き直り、その両腕を夫の首へと回す。

「うん、お休み」

その抱擁を素直に受け入れた善治郎は、妻の背中と腰に手を回すと、その肉感的な褐色の身体を抱きよせ、軽く口づけをかわす。

「お休みなさい」

しばし、互いの体温を味わうように抱擁と口づけを交わした後、アウラはそう言つと名残惜しげな笑みを残し、部屋から出て行った。

夫に就寝の言葉を告げた女王が向かった先は、別な寝室ではなく、王宮のある一室であった。

「お帰りなさいませ、陛下。して、首尾はいかがだったでしょうか？」

暗い一室に佇んでいた細面の中年男は、そう言って恭しく頭を下げる。

「暗いな、もう少し火を増やせ」

アウラは、素っ気ない口調でその言葉を返すと、蔦を編んで作られた椅子にいつも通りドスンと尻を落としかけ、途中でふと気づいたように動きを止め、そっと座る。

「は、しばしお待ちを」

ファビオ秘書官が油皿の火を、燭台の蠟燭に移している間に、アウラは椅子の上で天井を仰ぎ見るように、上を向き話を始める。

「取り合えず、婿殿に懐妊の可能性と、その後発生するであろう側室問題について話しておいた。ただ、ちと婿殿が予想外の『我が

儘』を言ってな」

「ほほう？ それは珍しい。どういう事ですか？」

「なに、難しいことではない。端的にいえば、嬪殿は出来るだけ側室を受け入れたくないのだそうだ。なぜならば……」

スツと油断なく眼を細める秘書官に、アウラはぞんざいな口調で、先ほど後宮で夫と交わした会話の内容を話し始めるのだった。

「なるほど、ようは側室と肌を重ねるより、肌を重ねることの出来ない陛下と寝室を共にする方がよい、と。いやはや、陛下、愛されておりますな」

一連の説明を聞き、多分にからかいの色を載せた言葉を秘書官は、主君にぶつける。

「ああ。お陰様で、これ以上ないくらいに幸せな新婚生活を満喫しているとも。だが、だからこそ、今は反省をするべきだ。すっかり、私は「物わかりの良い嬪殿」を当たり前の存在として受け止めすぎていたようだ」

「そうですね。よもやこの様な形でゼンジロウ様が『我が儘』を仰るとは想像していませんでした。こちらとしても、あの方の聞き分けの良さに慣れ始めていたのは事実です」

アウラに言葉に、秘書官はスツと表情を消し、小さく頷き返した。

「しかし、側室を問答無用で邪魔としか見なさないほど、陛下を愛する男性がおられるとは」

「ファビオ、言いたいことははっきりと言え」

半眼で椅子の上から睨み上げる女王に、秘書官は直立不動のまま小さく肩をすくめ、答える。

「いえ。ただ、『蓼食つ虫も好き好き』と申っただけで、他意はございません」

「……それ以上、他意があつてたまるか。流石に無礼だぞ、ファビオ」

「おや？ では、陛下はご自分が、男に好かれる質だと思ひなのですか？」

わざとらしく聞いてくる秘書官に、アウラはどう猛な怒りの表情を浮かべるものの、反論は難しかった。

元々男社会中心で、男尊女卑の傾向が強いカープア王国では、どれほど美人でスタイルが良くても、アウラのような押し強い女はあまり好まれない。

形勢の不利を悟ったアウラは、コホンと一つ咳払いをすると話題を戻す。

「まあ、いずれにせよ、今回の件は良い機会だ。少し私も婿殿を過大評価しすぎていたようだからな。」

あの者は、本人が言うとおり、確かに平民の生まれだ。王侯貴族の価値観や生き方を理解できるだけの、知識と理解力を持ち合わせている上に、こちらの価値観に合わせてくれる寛容さも有しているため、つい誤解していたが、その人格をなす根底の価値観は、我々とは大きく異なっている」

「そのようですな。王族・貴族ならば、側室の存在くらい「当たり前」と受け止められなければならないのですが」

「そこまで嬪殿に求めるのは、贅沢が過ぎるというものだ。あれだけ物わかりが良くて、こちらの立場を全面的に理解してくれる嬪殿だぞ。なにもかもがこちらの理想通りに運ぶ嬪など、最初は期待もしていなかったはずだろう」

アウラの言葉に、秘書官は同意を示す。

「それは確かに。ですが、側室の拒絶というのは、現状のままではゼンジロウ様の我が儘とは取られませんが。陛下の我が儘と取られません。嫉妬のあまり女王アウラは、ゼンジロウ様に女を寄せ付けなくしている、と言われるのが関の山でしょうな」

「それは、分かっているさ」

痛いところを突かれたアウラは右手の中指と親指で両こめかみを押さえ、ホッと大きく溜息を漏らした。

カープア王国で、『夫を立てない女』という悪評は、無視できないくらいに大きなダメージとなる。そればかりは、アウラは女王として何としても避けなければならぬ。

「どうしても、その我が儘を通すのであれば、ゼンジロウ様にある程度矢面に立って頂き、積極的に泥を被って頂く必要があるでしょうな」

つまり、今後はもつと善治郎が社交界などに顔を出し、自分がどれだけ盲目的にアウラのことを愛しており、それ以外の女には目が向かないのかを、善治郎自らの口で説明させるべきだ、と言っているのだ。

「結局は婿殿に迷惑を掛けることになるのか」

溜息をつくアウラに、秘書官は鉄面皮のまま、冷たい言葉を返す。

「仕方がありますまい。すでに陛下ご懐妊の噂は、王宮中に広まっております。主立った有力貴族の大半が、面会を申し込んでいる現状で、その全ての申し出を断るのでしたら、それなりの苦労はして戴かなければ」

ファビオ秘書官の言葉に、アウラはチツと舌打ちを漏らす。

「もう、そんなに広まっているのか？」

覚悟はしていたが、耳ざといことだ。

だが、女王の妊娠というのはそれだけ皆が注視していた証でもある。正当なる血筋が保たれれば、側室を送りこむことに躊躇する必要はない。

しきりに溜息を漏らすアウラに、ファビオ秘書官は、ふと思い出

したように別な話を始める。

「ああ、面会と言えば、宮廷騎士である、ナタリオ・マルドナドがゼンジロウ様への面通りを願ひ出ております」

秘書官の言葉に、アウラは少し驚いたように声量を上げた。

「ナタリオ？ 聞かぬ名だが、どういった用件だ？ 婿殿は原則後宮から出ないぞ。よほどの用事がない限り、男に婿殿との面会は許可できない」

「なんでも、ゼンジロウ様より賜った『竜弓』の礼を直接伝え、改めてゼンジロウ様に忠誠を誓うつもりなのだとか」

「ああ、なるほどな。あの立食会の時の一件か」

事情を思い出したアウラは、それならば仕方があるまい、と納得した。

プジョル将軍が善治郎に送ろうとした『竜弓』という貢ぎ物。それを、とっさに善治郎は、「その弓を使うに相応しい、力量と忠誠を兼ね備えた騎士に貸し与える」という言葉で、その場を纏めたのだ。

プジョル将軍はその言葉通り、見込みのある騎士に『竜弓』を渡したのだろう。

それ一振りで、選りすぐった戦闘用騎竜にも匹敵する価値があるとされる『竜弓』を賜った騎士が、善治郎に礼を述べたいと申し出るのは、ごく自然な流れである。

「で、そのナタリオという騎士は問題のある人物なのか？ 嬪殿は力量と『忠誠』の厚い人物に渡せと命じたのだぞ？」

もし、『忠誠』の方向が王家ではなく、プジヨル將軍に向いているような人物であれば、到底面会させるわけにはいかない。

肩に力を入れて問う、アウラの言葉を、秘書官は素っ気なく否定する。

「いえ、その辺りはプジヨル將軍も弁えているでしょう。ナタリオ騎士のマルドナド家は、家格こそ低いものの歴史のある王家直参の家柄です。本人も極めて品行方正で、ナタリオ騎士自身には、問題はないかと。」

まあ、『竜弓』を渡されたことで、プジヨル將軍に好印象を持たようではありますが、そう簡単に絡め取られることはありませんまい」

「だが、その言い方だとなにかまだ問題がありそうだな？ ナタリオ騎士自身には問題が無くても、その周りに何か問題がある、ということがあるか？」

アウラの言葉を、秘書官は素直に首を縦に振り、肯定した。

「はい。ご明察の通りです。ナタリオ騎士には、年頃の妹がおります。名をニエト。彼女も人格的には問題のない人物です。中々美しく、聡明で、兄同様王家への忠誠も厚い娘です。ただ、問題は彼女が、『ゼンジロウ様の後宮』に務めているという点だけで」

「……………」

その返答に、さしものアウラも頭を抱えた。
苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべる主君に、秘書官は淡々と追い打ちを掛ける。

「聞けばゼンジロウ様は、後宮では非常に砕けた態度で侍女達と接しておられるとか。となれば、彼女は間違いなく、兄に貸与された『竜弓』の礼をゼンジロウ様に告げるでしょうな。あまり仲良くないすぎなければよいのですが」

相変わらずプジョル將軍の狙いは、分かりやすい。

王家に忠誠の厚い宮廷騎士と、同じく王家に忠誠の厚い後宮に務めるその妹。その騎士ナタリオを絡め取り、妹が善治郎と距離を詰めることに成功すれば、少々迂遠ではあるが、王家へのパイプが完成する。

「……ナタリオ騎士は、どの部署に配属されているのだ？」

「以前は王都守護騎兵団所属でしたが、今はプジョル將軍の直下である『弓騎兵団』に転属が決定しました。

半ば返答が予想できるアウラの問いに、秘書官が返した言葉は全く予想から外れないものだった。『竜弓』を貸与された者が、精鋭である『弓騎兵団』に所属を移される。少なくとも、表向きには何の問題もない、流れである。

無論、その裏には、ナタリオを自分の派閥に組み込もうとするプジョル將軍の露骨な意図があることは言うまでもない。

「ということとは、妹姫を婿殿の側室に入れるという野望は諦めたの

か？」

「いえ、將軍自身は陛下への面会希望を出していますし、その可能性は薄いかと。おおかた、二つの話を同時に進めるつもりなのでしよう」

「相変わらず、分かりやすい男だ……」

ここ数ヶ月、王軍と地方領主軍の再編成について、随分とアウラに配慮した言動が多かったため、ある程度落ち着いたのかと思っただが、どうやら『餓狼』の野心はまだまだ、健在だったようだ。

「まったく、頭の痛いことだ」

「心中お察しします」

溜息をつく女王に、秘書官は全く感情の籠もらない声でそう言々と、慇懃に頭を下げるのだった。

第六章3【双王国からの書状】

それから約一月後。アウラの妊娠は確定的となった。

まだ、腹が目立つような体型にはなっていないが、妊娠初期独特の症状が如実に現れたうえに、月の物も三月以上来ていないことから、ミシエル医師は確信を持って懐妊と断言したのである。

女王の懐妊。その特大の情報に、当然ながらカープア王宮は揺れ動く。

早速、懐妊祝いの目録を片手に女王へ面通りを願い出る者。そのついでにそれとなく善治郎へつける側室候補の名前をアピールする者。

さらには、有力貴族達は自分の派閥の中から、女王の嫡子の乳母を出さんと、現在妻が乳飲み子を抱えている者や、腹を大きくして出産を間近に控えている者をリストアップしているという。

女王に変わって乳を与える文字通りの『乳母』と、乳離れした後の養育を担当する『乳母』は、別人であるケースの方が多いので、この時点での決定が絶対的な意味を持つわけではないのだが、乳母や乳兄弟が次代の王に、強い影響力を持つことは間違いない。

後宮という閉鎖空間は、本来外の雑音が届きづらいものであるが、今回の一件は噂の発信地が後宮なのだから、無関係ではいられない。そのため、善治郎もこの一月はなかなか心が安まるときのない、慌ただししい日々を過ごしていた。

「ああ、やっぱりろくな情報ないな。完璧に失敗した」

開けはなつた窓から、最近少しずつ穏やかになってきた日差しが差し込む後宮の一室で、ずっとパソコンに向かっていた善治郎は、一度大きく伸びをして首をならした後、落胆の溜息を漏らした。

アウラから妊娠の可能性を伝えられてから、何度も全データを見直してきたのだから、今更新たな発見がない事はわかりきっているのだが、それでも暇があると確認せずにはいられない。それくらい、善治郎は過去の自分の不備を後悔していた。

「ああ、もう。なんであの時俺は、生まれた後のことしか考えなかったのかなあ？」

後悔先に立たず。そう頭では理解しているが、愚痴を漏らす口が止まらない。

元々子作りの義務を負ってこの世界に来た善治郎だ。子作りについてこそそれなりの準備はしてきたつもりだった。

ほ乳瓶、母乳冷凍保存のタッパー、万が一に供えて粉ミルク一箱。他にも乳幼児に着せる可愛いらしい服も、何枚かは用意してきたし、ネットで『パパの育児指南書』だの『男親に出来ること』などという題名のホームページもダウンロードしてきた。

しかし、それらの物資や情報は全て、無事赤子が生まれた後に役立つものであり、妊娠中の妻の助けとなるものは何も無い。

「無意識のうちに、育児はともかく、出産は他人事だと思っていた

んだらうな」

そう自省の言葉を吐いた善治郎は、パソコンの前でがっくりと項垂れた。

正確に言えば、妊娠・出産を『他人事』と取られていたと言うよりも、母子に危険が及ぶ行為であるという認識自体が薄かった、というのが真実だろう。

現代日本の、若い未婚男性ならば、無理なからぬことである。

現代日本でも、流産の可能性は未だに色濃く残っているが、妊娠・出産に伴う母胎の命が危険にさらされるケースは、激減している。現代の日本で、妊娠・出産に伴う母胎の死亡率は、0.005パーセント前後だという。十万人に五人だ。東京で交通事故に会う確率よりまだ低い。

だが、現代の地球でも、衛生環境や設備の整っていない発展途上国だと死亡率が未だに、5%近い数値を残している地域もある。妊婦二十人に一人の確率で死んでいるというのだ。

幸いにしてカープア王国の衛生意識や医療技術は、そこまで低いものではないようだ。が、それでも、一般市民レベルでは出産に絶えきれず命を落とす母親という存在は、そう珍しいものではないらしい。

無論、女王であるアウラの周りを固めているのは、王国最高の医療団だし、アウラ自身も極めて健康で気力体力共に充実している人間だ。滅多なことはないとミシエル医師は言ってくれたが、善治郎としては、やはり最悪の予想を連想してしまう。

「双王国のジルベル法王家の人間を呼べたら、一発解決なんだけどなあ」

現代日本の数段下の医療技術しか持たないこの世界で、例外なのがジルベル法王家の『治癒魔法』の存在である。

魔法というデタラメな力で、患者の傷を癒し、体力を付与し、精神の疲労を除去できるジルベル法王家の人間が側に付いていてくれたなら、何も怖いことはない。妊婦の安全は現代日本以上に保証される。

しかし、いかにカープア王国が、南大陸西部に覇を唱える大国であつても、妊娠期間中ずっとジルベル法王家の人間を雇っておくことは不可能に近い。

出産はまだ半年以上先の話なのだ。王族の身の安全と、血統の流出問題に目を尖らせているジルベル法王家が、そのような長期契約を結んでくれるはずがない。

ならば、せめて容態が急変した場合だけでも即座に法王家の人間を呼びたい。最も早い移動手段が走竜であるこの世界で、夢のような話であるが、その夢を実現させる例外的な手段が、このカープア王国には、本来存在する。

「瞬間移動の使い手が、アウラ以外にもいれば、問題の大半は解決するんだけどなあ」

『時空魔法』の使い手であるカープア王家の人間にとって、距離の壁というのは本来意味をならないモノである。瞬間移動の魔法を使えば、大陸中どこへ行くのも一瞬だ。

しかし、現在時空魔法の使い手は、アウラ唯一人を残すのみ。

患者であるアウラの容態を見てもらうために、治癒術士を呼ぶのだから、その時アウラが瞬間移動のような大魔法を使える状態のはずもない。

「だから、本来これは俺の役割なんだよな。俺が時空魔法を使えるようにならなきゃいけないんだ」

あくまで潜在的な話だが、善治郎には時空魔法が使えるだけの素養がある。

しかし、善治郎が魔法の勉強を初めてまだ、ほんの数ヶ月。通常、魔法を使えるようになるには、平均して三年近い修練の時間を必要とする。

もつともこの三年という数字は、個人差もあるし、環境や一日の内修練に費やす時間の大小でもかなり変動するのだと、教師役であるオクタビア夫人は言ってくれた。無論、だからといって三年が一年や一年弱まで短縮できるというものではない。

せいぜい二年と十ヶ月とか、良くて二年と半年とか、その程度の話だ。どう考えても、今からアウラの出産までに、善治郎が時空魔法を使えるようになっていく可能性はない。

「でも、だからといって、俺が魔法の習得を怠けていい理由にはならないよな。第一、アウラの出産は、これ一回とは限らないわけだし」

マウスを操作し、パソコンの電源を落とした善治郎は、気分を切り替えるように両手でピシヤリと両頬を軽く張ると、勢いを付けて椅子から立ち上がる。

「魔法の修練時間を増やしたいところだけど、アウラが妊娠している最中にオクタビアさんと会う時間を増やしたりしたら、絶対邪推されるよな。なんとか、もっと安全なおばあちゃんの先生を紹介してもらうか、最悪後宮から出て、男の先生につくかした方が良くも知れないな」

アウラの権力を守るという名目を盾に、これまで引き籠もり生活を満喫してきた善治郎だが、アウラとその子供の命を守るためならば、多少の面倒後とを引き起こしてでも、後宮の外に出る心づもりはある。

そう言えば、アウラの妊娠に関するごたごたで延び延びになっている、『竜弓』を貸し与えた騎士と対面を果たすため、ごく短時間ではあるが、後宮から出る事になっていたはずだ。

善治郎が後宮から出る事で、どのような問題が生じるのか、その辺で少し様子を見ることが出来るかもしれない。

「もしかすると、アウラが安定期に入るまでは、難しい判断力のない公的行事の出席は、俺が代理で出た方が良くないのかも知れないな」

善治郎がアウラの代理として立つことは、男社会のカープア王国では女王の権限を揺らがしかねない。それは間違いない事実だが、そうしてアウラに無理を掛けることによって、母子の命を危険に晒すようであれば、あまりに本末転倒である。

ようは、善治郎が気をつけて、行儀のよい人形のように振る舞えば良いだけの話だ。

内心、色々と決意を固めた善治郎は、講義にオクタビアがくるま

での間、今の自分に出来ること、やるべき事を頭の中で整理していた。

「……さすがに、これは少々きついな」

同じ頃、王宮では、突如わき上がった嘔吐感に業務を中断させられたアウラが、珍しく弱音に近い言葉を漏らしていた。

「つわり」と呼ばれる妊娠初期の症状である。ミシエル医師の言葉が正しければ、つわりのヒドイ時期はそろそろ過ぎ去るとのことだが、正直、その日が待ち遠しくて仕方がない。

「吐き気をかみ殺すことには、戦場で慣れたつもりでいたのだが……」

「体調不良による一過性の嘔吐感と、つわりによる連続性の嘔吐感を同一視はできない、ということですね」

「ああ、骨身に染みて痛感したよ……なんの役にも立たない情報だな」

アウラは、椅子に座ったまま、木桶の前から顔を上げると、横に立つファビオ秘書官を睨み上げ、その言葉を返した。

日頃は、普通に流せる秘書官の飾らない言葉遣いに、今はいちいち噛みつきたくて仕方がない。今ならば、病症時に人を寄せ付けたがらなかった善治郎の心境が理解できる。体調の悪化に伴って高まる攻撃性を、周囲に悟らせないようにしておくのは、かなりの負担だ。

そう言う意味では、ファビオ秘書官の存在は逆にありがたい。

多少口汚い言葉をぶつけたところで、この中年の秘書官はそれを呑みこむだけの度量と忠誠心を兼ね備えているし、日頃から齒に衣着せぬ物言いばかりだから、こちらが文句を言う気になればいくらでも言える。

無事出産を済ませた後には、何らかの形で感謝と謝罪を示すべきたろうが、今は少しその忠誠に甘えてもよいだろう。

「……ふう」

善治郎からもらったガラスのコップで口をすすぎ、その水を木桶に吐き出したアウラは、少し落ち着いた様子で、椅子に深く座り直す。

「それで、次の議題はなんだ？」

職務に意識を戻した女王に、秘書官は「もう、お体はよろしいのですか？」などと、気遣いの言葉を掛けることもなく、話を再開する。

「はい。シャロワ・ジルベル双王国からの使者が書状を持ってきた件です」

「ああ、あれか」

秘書官の言葉に、アウラは目を固く瞑り、二、三度頭を振って意識を覚醒させた。

双王国からの正式な使者。本来ならば、アウラが自ら謁見の間で拝謁を許してもおかしくない相手であるが、妊娠に伴う体調不良を煩っているアウラは、現在極対外的に顔を出す機会を減らしている。

「おそらく、イザベツラ殿下にお渡しした、指輪の魔道具化に関する話だろうが、目を落としておくか」

「はい、これに」

そう言っただけで差し出すアウラの手には、秘書官は阿吽の呼吸で懐から取り出した書状を載せる。

「ん？ この紋章はシャロワ王家の紋章か？」

封蝋の紋章が、イザベツラ王女のジルベル法王家の紋ではなく、シャロワ王家の紋章であることに少し首を傾げたアウラであったが、頼んだのはジルベル法王家のイザベツラ王女でも、実際に指輪を魔道具化するのには、シャロワ王家の人間だ。

シャロワ王家から直接書状が来てもおかしくはない。

そう納得したアウラは、机の引き出しから意匠を凝らした青銅製の短剣を取りだし、その刃で書状の封を切る。

「ふむ……」

最初は予想通りの事が記されていたのか、冷静に目を通していたアウラが、あるところに差し掛かると急激にそのまなじりを吊り上げる。

「ッ!？」

「陛下っ?」

ガタリと椅子の上で立ち上がり掛けたアウラを、珍しく驚いた様子の秘書官が素早く制止しようとする。

「大丈夫だ、大事ない」

そうファビオ秘書官に言葉を返したアウラの顔は、血の気が引いて青黒くなっている。

「はっ」

どう見ても、大丈夫ではなさそうなのだが、まずは主君の出方を窺うことにしたのか、秘書官は素直に引き下がった。

やがて、書状に目を通し終えたアウラは、大きく三度深呼吸をする。

まだ、顔色は青黒いままだが、その表情から見ると、多少は落ち着きを取り戻したようだ。

頃合をはかっていたファビオ秘書官は、恐る恐る女王に声を掛ける。

「陛下、内容をお聞かせ願えますでしょうか？」

国内の『小飛竜便』と違い、この書状は王族から王族へと渡された外交文章だ。一回の秘書官に過ぎないファビオに、それに目を落とす資格はない。

秘書官の言葉に、アウラは何らかの激情を押し殺した表情でとうとうと語り出す。

「主立った内容は、予想通りだ。イザベツラ殿下を魔法で転送した事への礼と、私が頼んだ指輪の魔道具化を了承した、という報告事項だ」

アウラの言葉を、忠実な秘書官は無言で聞き、続きを促す。

女王アウラをここまで動揺させた内容。鉄面皮が売りのファビオ秘書官も、無意識の内に握った拳の中にじわりと汗をかき始める。

「問題は、その中に、世間話のように紛れ込ませていた、『噂話』だ。噂の主人公は、シャロワ王家に生まれた一人の王女だな」

「シャロワ王家の王女ですか？ 傍系はかなりの数がいますが、直系ですと十五歳のカロリーナ殿下が最年長でしたか」

「いや、現代の話ではない。今から約百五十年前の公式記録から抹消された王女の話だ」

「百五十年前……」

アウラの言葉に、秘書官はピクリとその鉄面皮を揺らがせた。

百五十年前。存在を抹消された王族。しかも、女。

何の話なのか、『誰』に繋がる話なのか、この時点ではほぼ正確に理解したファビオ秘書官は、乾いた唇を一舐めして湿らせ、アウラの言葉を待つ。

「公式の記録から完全に抹消されているので、あくまで噂なのだそうだが、なんでも百五十年前、シャロワ王家直系の姫君が、本来結ばれるはずのない男と恋に落ちたのだそうだ。

相手の男は、ただの平民だったとも、『当時敵対していた国の王族』だったとも言われているのだとか。

そうして、決して結ばれてはいけない間に芽生えた愛は、やがて二人を愛の逃避行へと向かわせた。その後、二人は『追っ手の手の届かない新天地』へと旅だったのだそうぞぞ

最後はやけになったように、吐き捨てるような口調で、アウラはそう早口で言い終えた。

秘書官は、先ほどのアウラ同様、大きく何度か深呼吸をする。なるほど、これは確かに動揺せずにはいられない、特大の凶報だ。

それでも、当事者ではないぶん、アウラよりは随分と冷静さを残しているファビオ秘書官は、声を震わせることもなく、確認の言葉を発する。

「カープア王国に伝わっている、抹消された王子の相手が、シャロワ王家の王女だった。つまり、ゼンジロウ様はカープア王家の血を引くと同時に、シャロワ王家の血も引いておられる、そういうことですか？」

「さあな。真実は誰にも分からんよ。だが、この手紙の主は、そう

考えているようだな」

アウラは不快げに、鼻の周りに皺を寄せると、手に持つ書状を乱暴にテーブルの上に投げ捨てた。不愉快極まりない話ではあるが、事の重大さはアウラも十分に承知している。

この世界では、王族とはイコール特殊な魔法力をその血統に宿すものを指す。

そのため、地球の中世ヨーロッパのように、他国の王家に別な国の王族が嫁ぐケースは、まずあり得ない。カープア王家を例に挙げれば、二親等以内に『時空魔法』の使い手を持つ人間は、他国の人間と婚姻を結ぶことが許されない、と明確に記されている。

血統魔法の使い手である王族は、その国の財産であり、場合によっては戦力でもあるのだ。その血筋が、他国の王族に取り込まれているのだとすれば、平静ではいられないことは理解できる。

「しかし、その書状の内容は、本当に真実なのですか？ こちらの噂話に便乗して、我が国に揺さぶりを掛けることが目的のはったりという可能性は？」

慎重な物言いの秘書官に、アウラは面白くなさそうな表情で、首を横に振る。

「その可能性もないとは言わんが、それにしても使者が来るのが遅すぎる。あれから一月だぞ。恐らく、あの書状は小飛竜などは使わず、慎重に使者が自らの手で運んできたのだろう。噂で揺さぶりを掛けることが目的ならば、小飛竜を使う方が自然だ」

小飛竜での伝令は、同じ書状を複数飛ばせて、一通でも目的地に

たどり着けばよい、というものだ。その分、情報が横から漏れやすい。確かに、噂でこちらを揺さぶることが目的なのだとすれば、小飛竜を使わない理由がない。

「なるほど、ではいつそ、知らぬ存ぜぬで押し通すという選択肢は？」

秘書官の少し大胆な提案に、アウラはばつが悪そうにスッと視線を横に逸らし、答える。

「それは駄目だ。見舞いの際、婿殿がイザベツラ殿下の前ですでに白状してしまっている。自分は、百五十年前に異世界に愛の逃避行を行ったカープア王家の子孫だ、とな」

「それは、少々軽率でしたな」

「仕方がなかるう。あの時点で、その情報がこのような大事になるなど、誰が思うか。しかも、あの時婿殿はまだ、病床の身だったのだぞ」

「事情は分かりますが、軽率であったことは事実です」

とつさに善治郎を庇うアウラを、秘書官は冷たい正論で切って捨てる。そして、少し考えた後、極めて拙い現状を言葉で言い表す。

「となると、最悪なことに、『噂』の信憑性は高いと言うことになりますな。陛下、ゼンジロウ様は間違いなく、カープア王家の血を引いているのですな？」

今更ながら、確認してくる秘書官に、アウラは椅子の背もたれに

身体を預けながら、首肯した。

「ああ、それは間違いない。召喚術をそのように条件付けしたからな。しかも、婿殿の魔力は、王族としてはそう高いモノではない。間違っても、『時空魔法』と『付与魔法』を同時に操るようなマネは出来まいよ」

公式に二つの血統を引いた王族というのは、存在していないため实例はないが、理論上一人の人間が、二つの血統魔法を操ることは不可能ではない、というのが現在の定説ではある。だが、それを可能にするには、通常の王族に倍する魔法容量が必要であるとされている。

「そうになると、やはりシャロワ王家の方々が怖れているのは、ゼンジロウ様の潜在的な血の力、その子供の存在でしような」

秘書官の視線を腹部に感じたアウラは、無意識のうちに右手の平で腹をさすり、答える。

「ああ、だが私の子はまず問題あるまい。かりに婿殿がカープア王家とシャロワ王家の血を、ほぼ互角に引いていたのだとしても、私という濃いカープア王家の血を混ぜれば、まず間違いなくシャロワ王家の血は押しつぶされる」

アウラの言葉に、ファビオ秘書官は同意を示す。

「はい、それはその通りかと。ですが、ゼンジロウ様が他の側室との間に子を作れば、話は別です。その子は、『時空魔法』ではなく、『付与魔法』の血を発現させる可能性があります」

「そうだな。恐らく、シャロワ王家が怖れているのは、それだろう」

国の最高機密である、王家の血統魔法が、他国に流れる。シャロワ王家の人間が危機感に襲われるのも分かる。特にシャロワ王家の場合、血統魔法の存在は、国防にも国の財政にも密接に結びついている。魔道具の独占が崩れれば、控えめに言ってもシャロワ・ジルベール双王国の財政は、大きく傾く。

一步対応を間違えれば、双王国は『次の大戦』へと決意を固めてもおかしくはない。

「とりあえずは、婿殿に側室は入れない。そう匂わせることで、双王国をなだめるしかないな」

「それで、双王国は矛を収めるでしょうか？」

秘書官の疑念の声に、アウラは溜息を漏らし、首を横に振る。

「まず無理だろうな。公的に側室を持たずとも、人知れず女を孕ませ、他人の子として生み育て、『付与魔法』の使い手を作る。そういう疑念は捨てきれんだろうよ、向こうは」

実際、追求がなければ、アウラ自身、そう言う手を打つかも知れない。大国シャロワ・ジルベール双王国を怒らせることの危険は分かっているが、それでもついで手を伸ばしたくなるくらいに、『付与魔法』の使い手を国内に抱えるというのは、魅力的なのだ。

「まったく、このような書状が送られなければ、私は婿殿の血筋など、知るよしもなかったというのに。シャロワ王家に人間も、蛇を怖れるくらいならば、最初から藪をつつかなければよいものを」

無然と不満を漏らすアウラに、秘書官はいつの間にか、完全に冷静さを取り戻した声で答える。

「恐らく、向こうは、こちらが真実を知らないことを知らないのでしょう。より正確に言えば、知らない、という確証が持てない、と言ったところでしょうか。万が一、こちらが気づいていた場合、手をこまねいたまま手遅れになるくらいならばいっそ、といったところでしょうか」

「おおかた、そんなところか。いずれにせよ、まず婿殿と相談だな。私はこのような状態だし、事が事だ。当人に秘密にしたまま、話を丸く収められる可能性は、ないと思ったほうがよい」

一瞬何か言いたげな表情を浮かべたファビオ秘書官であったが、その言葉を口にすることはなかった。

「……承知いたしました。どれほど大事であっても、結局根は夫婦の問題ですからな。陛下にお任せします」

「ああ、任せろ」

力強く頷き返すアウラは、いつの間にか、つわりの嘔吐感も忘れていた。

幕間5【妻の要請、夫の要望】

幕間5

「……よって、シャロワ・ジルベル双王国、正確に言えばシャロワ王家は、付与魔法の血統を受け継ぐそなたを放っては置かぬであろう。何度も前言を翻して悪いが、そう言うわけで、そなたに側室を付けるわけに行かなくなつた。」

すまぬが、しばらくはそなたの周りが騒がしくなるが、協力を頼みたい」

その日の夜、夕食と入浴を済ませたアウラは、後宮の一室で善治郎と向かい合い、昼間に届いた書状の中身と、そこから推測される情報、そしてそれに対するこちらの対応に付いて、事細かく説明したのだつた。

百五十年前、カープア王国の王子と異世界へ駆け落ちを果たした女は、シャロワ王家の王女であつた可能性が高いこと。

その子孫である善治郎は、カープア王家だけでなく、シャロワ王家の血も引いていると思われること。

そのため、時空魔法の適正が表面化している善治郎自身はともかく、その子供には、付与魔法の適正が表に出る可能性があること。

よって、シャロワ王家をいたずらに刺激しないため、しばらくは善治郎に公的な側室は迎えられないこと。

(ただし、俺以上に濃いカープア王家の血を引くアウラとの間の子は、カープア王家の血にシャロワ王家の血が押しつぶされるだろうから、問題視されない、というわけか)

今一実感がわかないまま、頭の中で聞いたばかりの情報を一通り整理し終えた善治郎は、ソファアに深く腰を掛けたまま、テーブルの上から砂糖と果実の汁を混ぜた水の入ったグラスを取り、口元へと運んだ。

グラスを傾けた拍子に、コップの中の氷がクルリと回り、跳ねた水滴が善治郎の顔にかかる。

「うわっ」

ひょっとして、自分で思っている以上に動揺していたのかもしれない。

「大丈夫か、ゼンジロウ。それは目に入ると、洒落にならないくらいに痛いぞ」

「うん、大丈夫。顔にかかったただだよ」

アウラの言葉に、善治郎はばつが悪そうな顔で、ズボンのポケットから白いガーゼのハンカチを取りだし、自分の顔を拭いた。

「でも、そうなるかどうかだろうか？ 正直、俺がこの国にいる事って問題があることにならない？」

率直に尋ねる夫に、妻は口元に笑みを浮かべ、きつぱりと首を横に振る。

「いや、確かにそなたの血筋は少々問題だが、今の我が国の立場を考えれば、そなたがいないほうがよっぽど問題だ。だから、気にする必要はないぞ」

「ああ、うん、大丈夫だよ。別段、俺がどうこうしようと考えた訳じゃないから。俺もそこまで、自己犠牲が強い殊勝な人間じゃないし。ただ、もし客観的に見て、俺の存在が王国にとって不利益を生じさせるようなら、貴族達の中には色々アクションを起こす人間が出るじゃないかなって、考えてさ」

善治郎はそう答えて、自らの想像に恐怖心を刺激されたのか、ブルリと身体を震わせる。

「ふむ……」

思っていた以上に、冷静でシビアな夫の言葉に、アウラはしばし考えた後、ゆっくりと口を開いた。

「いや、おそらくその心配は無かるう。そもそもそなたがシャロワ王家の血を引いているという情報は、今のところ向こうとこちらの王家のみが知る極秘情報だし、もしその情報が表沙汰になったとしても、我が国の貴族が、短絡的にそなたを害する可能性は低いはずだ。」

今私の腹に後継者がいるとは言っても、そなたが数少ないカープア王家の血筋であるという事実は変わらないのだからな。どう考えても、そなたがいることで生じる不利益より、そなたを失うことで生じる不利益が勝る」

だから、現実的に気をつける必要があるとすれば、やはりカープア王国の貴族ではなく、シャロワ・ジルベル双王国の動向だろう。シャロワ王家にとっては、現状の善治郎は間違いなく『邪魔者』である。何とかして、秘密裏の交渉で、戦争を起こしてまで、排除するほどの邪魔者ではない、と納得させる必要がある。

無論、そう言った論理的な部分を度外視して、暴発的に善治郎排除に走る人間は、カープア王国にも双王国にも出没する可能性はあるが、その辺りまで考慮に入れては、一切身動きが取れなくなってしまう。そういう、予想が難しい危険には、対処療法的に当たるしかないだろう。

そこまで言った後、アウラは少し、眉をしかめて言葉を続ける。

「ただし、今言ったとおり、そなたがシャロワ王家の血を引いているという事実は、極秘事項なのだ。つまり、側室を断る際、その事実を表に出来ぬ。この意味が分かるか？」

アウラの問いに、少し視線を天井に向けて考えた善治郎は、自信なさげに答える。

「ええと、つまり、事実とは別に、俺が側室を断る表向きの『言い訳』が必要ってことかな？」

善治郎の答えに、アウラは首肯した。

「ああ、そうだ。だが、以前にも言ったとおり、今のそなたが側室を娶らないというのは、政治的に考えて、かなり不自然なのだ。はっきり言えば、貴族達の反論を許さない理由付けは難しい。」

だから、すまないが、対外的には側室を断る理由を、そなたの我が儘、と言う形で押し通してくれぬだろうか？」

「我が儘？ どういう事？」

首を傾げる善治郎に、流石に恥じらいが理性に勝ったのか、わずかに視線を逸らしながら、はっきりとしない言葉でアウラは答える。

「以前そなたが側室の話聞いたとき述べた感想を、そのまま吹聴してもらえばよい。その、私との二人きりの時間を邪魔されたくない、とか。私と子供のこと頭がいつぱいで、他のことを考える余裕がない、とかな」

「あ……ああ！ そう、そういうことね、はいはい」

言われた善治郎も、動揺を隠せない。顔が熱くなるのを自覚しながら、しどろもどろに言葉を返す。思えばあの時は、随分と恥ずかしいことを言ったものだ。

嘘は一つもないが、事実だからといって言葉の恥ずかしさが薄れるモノでもない。

「うむ。そなたの血筋を発表できぬ以上、貴族達を納得させうるだけの筋道だった言い訳は存在しない。ならば、ここは強引にそなたの感情論を盾に取り、押し通してしまうのが一番無理がないのだ。……すまぬな、結局そなたに泥を被ってもらう事になる。今後しばらくはそなたは、『一人の女におぼれて、政治的な判断を見誤った愚者』というレッテルが貼られることになるだろう」

ソファアの上で膝を揃え、小さく頭を下げる妻に、善治郎は無言のまま向かいのソファアから立ち上がると、アウラが座るソファアの

隣に座り直した。

「ゼンジロウ？」

アウラの隣に座った善治郎は、アウラが膝の上で組んでいた左手を取ると、横からアウラの顔をのぞき込むように言う。

「でも、それが最善なんですよ？　なら、構わないよ。どのみち、俺の場合、後宮から出る事がほとんどないわけだから、人の噂なんて早々耳に入るモノじゃないし。実害がないレベルの悪名なら、かえって変な神輿にされづらくなる分、好都合なんじゃないかな。

それに……実際、その噂、全面的に真実だしさ」

「ゼンジロウ……」

善治郎に左手を握られたまま、アウラはフワリと微笑み、右手を善治郎の顔へと延ばす。そして、

「そなた、顔が真っ赤だぞ」

と、指摘した。

羞恥心に耐えて、妻を慰めていた夫は、非常に珍しい怒りを露わにして、大声を上げる。

「う、うるさいな！　人が恥ずかしいの我慢して告白してるのに……！」

顔を真っ赤にする夫の様子に、すっかり笑顔を取り戻した女王は、右手で愛おしそうに夫の頬を撫で、笑い声混じりに謝罪の言葉を口

にする。

「すまん、すまん。つい、そなたの献身的な言葉が嬉しすぎて、茶化してしまった。ありがとう、この礼は必ずする」

善治郎は紅潮した頬に、ひんやりとした妻の指の感触を感じながら、声のトーンを落として言葉を返す。

「いいよ、礼なんて。実際、日頃世話になっているのは、全面的にこつちなんだからさ。今の生活を維持するために必要な労力と思えば、なんてことないよ」

善治郎の言葉に、今度はアウラも悪びれず素直に答える。

「そうだな。私は女王という立場上、あまり悪名を被るわけには行かぬのだ。戦場での苛烈さや、外交上での冷徹さに付随する悪名ならば、使い道もあるのだが、色恋沙汰の悪名はな」

女王の伴侶が「女王に夢中で、側室を拒んだ」と噂されても、せいぜい「政治にうとい馬鹿なヤツ」ですむが、女王が「伴侶に夢中で、伴侶に側室を入れるのを阻止した」と噂されれば、一気に「あの女王を玉座に座らせておくのは、不安がある」という声がかかる事だろう。

善治郎とアウラ、どちらかが『色ボケ』という汚名を被らなければならぬのだとしたら、善治郎が被るのは必然と言える。

しばらくの間、手を握り、頬を撫でられていた善治郎は、やがて愛妻の手をふりほどくと、再び真面目な表情を作り、話を始める。

「それで、実は俺からもお願いがあるんだ。こつちも前言を撤回して悪いんだけど、今後は俺ももう少し後宮から外に出る活動を増やしたいと思うんだけど、駄目かな？」

善治郎の言葉に、アウラの緩んでいた表情が一瞬で引きしまる。

「そなたが？ 何故だ？」

女王の鋭い問いに、善治郎は怯むことなく柔らかな口調を保ったまま、答える。

「うん、この一月、明らかにアウラに掛かっている負担、大きいよね？ だから、難しい判断がいららない、俺で代役が務まる行事は、俺が変わろうかと思っただ。もちろん、そうすることで、俺にすり寄る貴族が出たりして、危険なのは分かるけど、今のアウラを見ると、アウラの健康の危険のほうが問題だと思う」

「む……」

我が身を心配してくれる夫の誠実な言葉に、アウラはしばし沈黙した。

確かに、妊娠が確定してからこの一月、業務に支障をきたしているのは事実だ。女王の決断は最低限でも国が回るくらいには、人材も法も整備してあるつもりではあるが、名代を務めてくれる王族がいれば、随分と楽になるのもまた事実である。

「うむ、そなたの申し出は嬉しいが、そうなると周りが相当うるさいぞ？」

念を押すアウラに、善治郎は笑って頷く。

「それは、覚悟しているよ。っていつても、こっちの想像以上なのかも知れないけど」

「間違いなく、想像の遙か上だ。そなたが後宮外で活動を始めれば、うるさくなるのは、野心家の貴族達だけではない。私に忠誠を誓ってくれている腹心達も、そなたに懐疑の目を向けることになる」

後宮から積極的に打って出る、女王の伴侶。国内の野心家達にとってその存在が、奇貨であるのと同様に、アウラに忠誠を誓う腹心達にとって、その存在は脅威となる。

アウラの右腕であるファビオ秘書官などは、間違いなく善治郎の一言一行動に懐疑の視線を向けることだろう。

アウラの返答に、善治郎は少し難しい顔をして、言葉を返す。

「もちろん、アウラに迷惑を掛けることになるなら自重するけど…」

…

「ふむ……」

アウラは、しばし考えた。確かに当初は、「政治に一切口出しをしない婿」を求めていたが、「こちらの権限を揺らがさないように考慮した上で、影から助力してくれる婿」ならば、それに越したことはない。

今日までの付き合いで、善治郎にこちらを出し抜いて権力を握るような邪な意思がないことは確信しているが、海千山千の貴族達を相手に、言質を取られずに乗りきるだけの話術や交渉術があるか問われると、疑問が残る。

(だが、確かに私がこの様では、今後の国政に多大な影響を及ぼすことは確かだ。妊婦というのが、ここまで行動を制限されるものだとはな)

当初の予定では、しばらくは『年子』の子供を産み続ける腹づもりであったアウラだが、現状を鑑みるに、その選択肢は非現実的と言っしかない。

妊娠から出産までの時間は、ぞくに『十月十日』という。一年は十二ヶ月、閏月のある年でも十三ヶ月だ。毎年子供を産んでいれば、一年の六分の五を身重で過ごすことになる。

政務に支障を来すのは間違いない。

(やはり、『国母』と『女王』を同時にこなすのは、負担が大きいか)

少なくとも、これまでのように、元帥も宰相も置かずに親政を行うのは、非現実と言わざるを得まい。しかし、元帥と宰相を設ければ、アウラの負担が減るのと比例して、権限・権力も目減りする。

今度は今まで以上に、有力貴族達とのパワーバランスに苦慮する事になるだろう。

(そう考えると、能力的には頼りなくても、人格的には信頼の置ける高位の味方がいる意味はあるか)

アウラは、善治郎に視線を向ける。

「……………」

善治郎は、アウラの視線を正面から受け止めたまま、黙ってアウラの決断を待つ。

至近距離で見つめ合う、沈黙の時間。やがて、表情を緩めたアウラは告げるのだった。

「分かった。確かに、このままでは私の負担が大きすぎるからな。そなたに助けてもらえるのなら、ありがたい。ただし……」

「うん、分かっている。かえって迷惑を掛けていると『アウラが判断した場合、『俺の意思』でまた後宮にひっこむよ」

アウラに最後まで言わず、善治郎は笑顔でそう請けおった。

例え女王といえども、夫の自由意思を妻が阻害するようでは、悪評が立ってしまう。その辺に関するこの国の価値観は一通り教えられている善治郎である。

「ああ、すまないが、頼む。そういえば、そなたは騎士ナタリオ・マルドナドの忠誠を受けるために、後宮外に出る予定になっていたな。その際に、私の腹心であるファビオを付けよう」

予想通り、全面的にこちらの立場を配慮してくれた返答を返す夫に、女王は柔らかな笑みと共に言葉を返す。

ファビオ秘書官ならば、善治郎に的確なアドバイスをしてくれるだろう。そして、考えたくはないが、万が一、善治郎が野心に目覚めたとしても、いち早く察知して『的確に対処』をするに違いない。

「では、私はそろそろ寝室に下がるよ。少々早いけど、眠りが途切れる分、時間を長めに取っておかねばならぬのでな」

アウラはそう言つと、ゆっくりソファから腰を浮かせる。

毎日ではないが、最近のアウラは、気持ちが悪くなって夜中に目を醒ますことがあるのだ。そうでなくても、ミシェル医師からは、

出来るだけ睡眠は多く取った方が良いと言いつかっている。

そもそも、善治郎が持ち込んだLEDスタンドライトのせいで、すっかり夜も活動する癖が付いてしまったが、それ以前の生活習慣ならば、今頃はとっくに寝ている時間だ。

アウラの言葉に、棚の上に置いてあるデジタル式の電波時計に目をやった善治郎は、アウラの後を追うようにソファから立ち上がると、そっと妻の手を取った。

「うん、それじゃ寝るとするか」

「別にそなたまで、私の早寝に付き合うこともないのだぞ」

素直に夫に手を引かれながら、アウラはそう断る。

「いや、どのみち茶の間には侍女の人達が待機することになるからね。ここにいても、落ち着かないよ」

アウラの言葉に、善治郎はそう答えて首を横に振った。

現在身重で、つわりの症状も出ているアウラの異変に対応するため、後宮では侍女達が夜番を決め、対応することになっている。アウラが寝室に下がった後は、寝室に繋がる唯一の部屋である、ここリビングルームに侍女達が控えるのだ。

日頃は侍女達をプライベート空間に招き入れる事を嫌っている善治郎であるが、愛妻の安全の為を思えば、そんな小さな我が儘は言っていない。

おかげで最近、隣室に侍女達が控えていても、あまり気にならなくなってきた善治郎である。

「そうか、では一緒にお休みなさい、だな」

アウラはそう言うと、善治郎の腕に自分の腕を絡める。

「うん、お休み」

現在寢室のベッドは二つ。部屋は同じでも、別の床に入る妻と夫は、名残を惜しむようにしっかりと腕を組んだまま、ゆっくり寢室のドアを潜るのだった。

第七章1【外での活動、そのために】

「騎士ナタリオ。貴様を我が直衛騎士に任命する。貴様の武勇と忠誠に期待する」

数日後の昼下がり。王宮の奥まった一室で、善治郎は目の前に跪く若い騎士の前に立ち、精一杯威厳を取り繕った声で言葉を掛けていた。

ナタリオ・マルドナド。

それが、善治郎の前に膝を付く騎士の名前である。

年の頃は二十代の中盤、善治郎とほぼ同世代だろうか。焦げ茶色の髪と瞳、褐色の肌という典型的なカープア王国人の色彩を持つその男は、神妙な面持ちで、神妙に膝を付いて畏まっている。

引き締まったその顔つきは、実直で生真面目そうな印象を受けるが、直系王族の前で忠誠儀式を行う際に、表情を弛緩させる剛の者はそうそういない。第一印象でその性格を推し量るのは、危険だろう。

善治郎は、預かったナタリオの剣を、スラリと革鞘から引き抜いた。

よく手入れのされている鍛鉄製の刃が、窓から差し込む陽光を反射し、ギラリと光る。

刃渡りは50〜60センチほどだろうか？ 柄の長さから見ても片手剣のようだが、そのずっしりとした重さは、簡単に片手で振り回せるようには思えない。

善治郎はその抜き身の剣の腹で、膝を付くナタリオの両肩を一回ずつ叩き、ゆっくりと鞘に締まった。

そして、善治郎が差し出す鞘に入った剣を、ナタリオは床に片膝を付いたまま、両手でうやうやしく受け取り、答える。

「はっ、主命に背かず、道義に反せず、困難を怖れず、陛下の手足となり一命を賭すことをここに誓います」

こうして、騎士ナタリオの忠誠の儀式は、滞りなく終わりを迎えたのだった。

騎士ナタリオが去った王宮の一室で、善治郎は周囲に聞こえないように小さく安堵の溜息を漏らす。

どうか、これといった失態を犯さずに事を終えることが出来たようだ。

「ご苦労様です、ゼンジロウ様」

後ろに控えていた細面の中年男　ファビオ秘書官の言葉に、ついサラリーマン時代の常識で「上役に向かってご苦労様はないだろう」と言いそうになるが、すんでの所で善治郎はその感情を呑みこむ。

（危ない危ない。『言霊』のおかげで違和感なく言葉が通じるからつい忘れがちだけど、ここは異世界なんだよな）

労を勞うのは、上役が下に向かってすることであり、その逆は失礼に当たる。というのは、あくまで日本社会の常識だ。

善治郎は頭の中でオクタビアの授業で習った王族としての正しい受け答えを思い出しながら、口を開く。

「いや、大したことはない。あれで良かったのだな？」

後ろに向き直り、そう問い返す善治郎に、ファビオ秘書官は小さく頷き答える。

「はい。以後、ナタリオ卿は弓騎兵団の一員であると同時に、ゼンジロウ様の直臣としての役職を担うこととなります。王族直臣の俸禄は、年間で大型銀貨二十枚ですから、マルドナド家にとっては大きな助けとなることでしょう。」

実際にはアウラ陛下の懐から出ていますが、形の上ではゼンジロウ様がナタリオ卿にお支払いしていることになっておりますので、記憶にとめておいて下さい」

「ほう、特別手当が出るのか？」

少し驚いたような声を上げる善治郎に、ファビオ秘書官は表情筋をピクリとも動かさないまま、首肯する。

「はい。騎士の忠誠は金銭で買うものですから」

「そういうものか？」

「無論、金銭だけで完結するわけではありません。忠誠を高めるの

は主君の言葉ですし、持続させるのは主君の行動です。しかし、根底を支えるのはあくまで金銭です。金銭という土台なしに、忠誠は成り立ちません」

きつぱりと言いきるファビオ秘書官の言葉は、ひどく即物的なものであったが、その分善治郎にも分かりやすかった。

夢のない話ではあるが、領地を持たない騎士達は、王国から支給される俸給だけで生活しているのだ。武勇と忠誠は文字通りの売り物であり、可能な限り高値を付けてもらおう必要がある。

納得したように頷く善治郎の様子を、仮面じみた鉄面皮で見つめていたファビオ秘書官は、ふと思い出したような口調で問いかける。

「ああ、そう言えば、ゼンジロウ様は領地や爵位をお持ちになる予定はないのですか？」

「領地や爵位？ どういうことだ？」

怪訝そうな表情で首を傾げる女王の婿に、女王の秘書官は丁寧な口調で説明する。

「はい。我がカープア王国には、王都とその周辺以外にも、飛び地の王家直轄領が存在します。それらの領地の領主は現在アウラ陛下が兼任し、現地には代官が置かれていますが、王族であるゼンジロウ様にもそれらの継承権はございます。無論、その継承権はゼンジロウ様一代のものではありませんが」

王や王族が、王位や王位継承権とは別に、独自の領地や爵位を併せ持っているというのは、珍しい話ではない。むしろ、独自の領地を持ち合わせていない王の方が少数派だろう。一国の王が他国の伯

爵位を所有しているような、ややこしい例もある。

「これまでのように、後宮に引きこもっておられるのでしたら不要でしょうが、今後外での活動を増やすのでしたら、肩書きや自由に出来る資金は必要でしょう。まして、ナタリオ卿のような直臣を増やすつもりがあるのならば、独自の財源は必要不可欠です」

淡々と説明するファビオ秘書官の言葉に嘘偽りはないが、『女王の腹心』の言葉としては明らかにおかしい。

女王の夫である善治郎が形だけでも領地や爵位を得て、独自の財源を手に入れば、それだけ善治郎の制御がアウラの手から離れる。そもそも、現在アウラの元に一本化されている飛び地の収益を、一部とはいえ善治郎に分け与えるということは、単純にアウラが自由に出来る金が減るということでもある。

王配が独自の地位と財源を持ち、その財源で独自の戦力を整える。どう考えても、女王の側近が言い出す提案ではない。

(こちらの出方を窺っている？ いや、そうだとしてもあからさますぎるな。どっちかという釘を刺しているんだろうな。ちょっと遠回しな言い方で)

善治郎がアウラの味方であるのならば、この申し出に「否」と答えるしかない。

言質を取ろうとしている秘書官の態度は、正直少々不愉快なものであったが、ここは意地を張ってひねくれた答えを返す場面ではないことぐらい、理解できる善治郎は素直に否定の言葉を返す。

「無用だ。財政と権限の一本化は、組織の健全化における必要不可欠な要素だ」

「しかし、ゼンジロウ様はアウラ陛下をお助けするために、後宮から出る覚悟を決められたのでは？ 失礼ですが、いかに陛下の伴侶であり、直系王族と認められているゼンジロウ様といえども、無位無冠のままでは、出来ることは限られるのではないのでしょうか？」

平坦な声と、表情のない顔。そこから紡がれる挑発的な言葉に、内心苛立ちを覚えつつ、善治郎は感情を殺した声で答える。

「だとしても、それは私と陛下の間で話し合うべき懸案だな。陛下の頭越しに、貴様が私に提言する筋合いのものではない」

棘と苛立ちの隠せない善治郎の返答は、ファビオ秘書官にとって満足のいくものだったのだろう。

「……はっ、ご無礼申し上げました」

殊勝な言葉と共に、慇懃に頭を下げた中年の秘書官は、ニヤリと口元を笑みの形に歪めていた。

その数時間後。窓から差し込む日差しが僅かに夕焼け色を帯び始めた頃、執務室で軽めの業務をこなしていたアウラの元に、ファビオ秘書官が訪れた。

「陛下、只今戻りました」

小さく頭を下げるファビオ秘書官に、アウラは執務机に向かって座ったまま、ちらりと視線だけをそちらに向けて、小さく頷き返す。

「ご苦労、ファビオ。アレハンドロ、お前もご苦労だったな。下がって良いぞ」

アウラの後ろに控えていた、年若い生真面目そうな青年 第二秘書のアレハンドロ・ニエトは、主君の言葉を受けて手に持つ竜皮紙の束を、ファビオ秘書官に手渡す。

「ファビオ様、こちらが本日の記録です」

「分かった。後は私が引き継ぐ」

「はい、よろしく願います」

竜皮紙の束を、中年の第一秘書に手渡した年若い第二秘書は、生真面目そうに一礼をすると退出していった。

ボタンと若い第二秘書がドアを閉める音を背中で聞きながら、ファビオ秘書官は机に向かってペンを走らせている女王に話しかける。

「いかがでしたかな、陛下。アレハンドロの仕事ぶりは」

ファビオ秘書官の問いに、アウラはボールペンを走らせる手を止

め、視線を手元の紙面から前に立つ秘書官の細面の顔へと向け、簡潔に答える。

「悪くはないな。貴様と違って、言動にかわいげがある。だが、仕事ぶりはまだ『打てば響く』とまではいかん。私の体調が良いときであれば、しばらく横に置いて鍛えてやっても良いのだが、今は代役がせいぜいだな」

手厳しい評価を下す女王に、ファビオ秘書官は小さく肩をすくめて答えた。

「了解です。ご満足戴けますよう、今後も指導に力を入れるとしましょつ」

若い秘書官達の指導も、第一秘書であるファビオの責務である。付き合いの長いアウラは、ファビオが鉄面皮の下で後進教育に情熱を燃やしているのを敏感に感じ取り、少し若い秘書官達に同情した。

とはいえ、若い秘書官が物足りないのは事実である。

「そうしてくれ。ところで、そちらはどうだった？」

急な話題転換に慌てることなく、中年の秘書官は「打てば響く」ように間を置かず言葉を返す。

「はい。ナタリオ卿の忠誠の儀は滞りなく終了しました。ゼンジロウ様はすでに後宮にお戻りです」

取り合えず問題なしという秘書官の報告に、アウラはホッと安堵の溜息を漏らす。

「そうか。それは何よりだ。それで、聞かせてもらおうか？ お前の目には、婿殿はどのような人物に映った？」

善治郎がこの世界にやってきてからすでに半年近くがたっている。今更といえば今更な問いであるが、ずっと男子禁制の後宮に引きこもっていた善治郎と、ファビオ秘書官が本格的に会話を交わす機会が、今まで無かったのも事実だ。

善治郎が無理のない範囲で後宮外の活動を増やすと決意した以上、この鉄面皮の腹心が婿殿にどのような印象を抱いたかは、把握しておく必要がある。

女王の問いに、中年の秘書官はすでに答えを用意していたのか、考えることなく答えを返した。

「はい、表情や言動を取り繕うことには、元からある程度慣れておられるようです。あれならば、公的な場をお任せしても、致命的な失敗は犯さないかと。」

また、王家の保有する領地や爵位を譲り受けるように唆してみましたが、一蹴されました」

悪びれずそう言っただけのける秘書官の言葉に、アウラは渋面を浮かべ、手で顔を覆った。

「またお前はそうやって挑発的な言葉を……。しかし、領地と爵位か。今後の婿殿の活動を考えれば、検討の余地はあるな」

顔を覆っていた手を顎にやり、真剣な表情で考え込む女王に、秘

書官は口元を小さく笑みの形に歪め、冷やかすように言う。

「それは、陛下とゼンジロウ様との間で十分話し合って下さい。な
んでも、そういうことは『陛下の頭越し』に、秘書官に過ぎない私
ごときが口を挟む問題ではないそうですから」

ファビオ秘書官の物言いから、善治郎がそう言ったのだと悟った
アウラは、小さく笑い返す。

「それは、慎重な媚殿らしい言葉だな。おかげでこちらは動きやす
い。箔を付ける意味でも、爵位だけでも早めに用意した方がよいか
もしれんな」

善治郎としては、特別慎重に行動しているつもりはない。ただ、
私的には自分とアウラは同格でも、公的には明確な上下関係がある
と自覚しているだけだ。

正確な情報の共有と、命令系統の一本化が成されていない組織が、
どれほど迷走するかは三年ちよつとの社会人経験で、身に沁みてい
る。

「陛下の夫という立場ならば、『ワレンティア公爵』の爵位を継承
しても、問題はありませんが」

挑発的な秘書官の言葉に、アウラは笑みを浮かべたまま威嚇する
ように、低い声で言葉を返す。

「こちらを試すような言動は、控える。心配せんでも、そこまで媚
殿に実権を与える気はないわ。少なくとも、私が玉座に座っている
間は、『ワレンティア』公爵位と『ポトシ』伯爵位は、私が兼任す
る。他人に譲る気はない」

「賢明な判断です」

女王の叱責を受けた秘書官は、恐縮するそぶりも見せず、小さく肩をすくめてその女王の判断を評価した。

『ワレンティア』は王国でもっとも栄えている港街であり、『ポトシ』は王国随一の銀山を保有する地である。

王家には、俗に『五本柱』と呼ばれる収入源が存在する。すなわち、『陸上貿易』『海上貿易』『塩の専売』『銀山経営』に、『各領主からの徴税』を加えた五つのことだ。

その五本柱の内の二つ、『海上貿易』と『塩の専売』の中心地である第二都市ワレンティアが、王国においてどれほど重要な意味を持つかは、今更言うまでもないだろう。

いかにアウラが善治郎を信頼していても、ワレンティア公爵の位を譲り渡すことはあり得ない。カープア王国の歴史においても、ワレンティア公爵位を兼任していなかった王の方が少数派なのだ。

「しかし、身重の陛下では、しばらく現地に『跳ぶ』ことができません。代官任せも、それはそれで危険です」

秘書官の指摘に、アウラは苦い顔で首を縦に振る。

「ああ、分かっている。婿殿が、『瞬間移動』を使えるようになれば、爵位継承はともかく、監督官くらいはやってもらいたいところだな」

本来、不正や反乱の温床となりやすい飛び地の管理を、カープア

王国が問題なく行つてこれた理由に、カープア王家の人間が使える魔法、『瞬間移動』の存在がある。

いつ、抜き打ちで視察にやってくるか分からない人間の下で、不正や反乱を企むのは、かなりの度胸と才覚が必要だ。

だが、現在のカープア王国で『瞬間移動』の使い手は、女王であるアウラ一人きり。そういった意味でも、善治郎の魔法習得と、直系の血をひく子の量産は望まれる。

「そうですね。そのくらいの働きは、期待したいところです。もっともゼンジロウ様に求められる最大の働きが、陛下との間に子をなすことであることは変わりませんが」

「まあな。幸い子は順調だぞ。つわりも今日は一度も来ていない。ミシエル医師が言うには、一番つわりのきつい時期はすでに過ぎたのだそうだ」

今日一番嬉しそうな表情を浮かべるアウラに、ファビオ秘書官は、

「それはようございました。そう言えば、本日は双王国の使者と、直接顔を合わせたのでしたな。いかがでしたか、向こうの出方は？」

そう話題を転換して、アウラに問いかける。

「そうだな。取り合えず、感觸としては、私と婿殿の子を制限する気はなさそうだ。ただやはり、婿殿が私以外の人間と子をなすようなことがあれば、介入してくる気配だな。あれは」

アウラは、椅子の背もたれにギシリと体重を預け、一度凝りをほぐすように頭を回した後、そう答えた。

その辺りは、こちらとしても当初から予想していたラインである。納得しつつ、ファビオ秘書官はさらに問う。

「しかし、そうなりますと陛下とゼンジロウ様の御子には、間違いなく今後『シャロワ王家』の血が残ります。ゼンジロウ様が側室を作らないだけで、双王国が矛を収めますかな？」

アウラは、小さく肩をすくめ、素直に首を横に振った。

「無理だろうな。実際、使者殿は婿殿に、シャロワ王家の傍系の姫を嫁がせることを匂わせてきたよ。その間に産まれた子は、向こうが引き取ると言う前提で、な」

そうすれば、カープア王家にシャロワ王家の血が混じると同様に、シャロワ王家にもカープア王家の血が混じった王族が誕生することになる。これでおあいこだ、と向こうは言いたいのだろう。

無論、それは向こうの言い分であって、こちらにはこちらの言い分がある。

善治郎が潜在的にシャロワ王家の血をひいているというのが確定情報ではない以上、下手に向こうの言い分を丸呑みすれば、『時空魔法』の血統をただ盗まれるだけの結果になりかねない。

そもそも、こちらとしては向こうの血筋を意図して盗んだわけではないのだから、必要以上に譲る必要はないはずだ。

「果たして、どの辺りが落としどころになるますかな」

「分からん。現時点では、何とも言いづらいな。正直、しばらくの間は平行線のやり取りが続くだろう。掛かっているものが、『血統魔法』だからな。互いに譲れないものが多すぎる。不幸中の幸いは、

「あちらも開戦は最悪最後の手段と認識してくれていることくらいか」

カープア王国とシャロワ・ジルベル双王国。どちらも、南大陸に覇を唱える指折りの大国だ。下手な火遊びは火傷ですまないのは、お互い理解している。しかし、掛かっているものはメンツのような実利のないモノではない。国の根幹を成す力、『血統魔法』だ。簡単に落とすどころが見つかるとは思えない。

「場合によっては、陛下とゼンジロウ様の世代では、決着が付かないかも知れませぬな」

「……出来れば、それは避けたいがな。この手の問題は、時間がたてば立つほど、お互い自分の主張に正当性を見いだし、譲れなくなっていくものだ。私の子の世代が、次の大戦のきっかけを作ることには、避けたい」

とは言っても、アウラも王である。王の責務として、自国に不利となる密約を結ぶことは出来ない。そんなことをすれば、アウラの権力基盤に揺らぎが生じ、今度は内乱の危機である。

「この件は長期戦を覚悟するしかないな。私も出産までは自由にならない身体だし、早急に結論を出すのは危険だ。万が一にも秘密が漏れると、厄介だぞ。プジョルなどがこの話を聞けば、何を言い出すか、想像はつくであろう?」

アウラの言いたいことを理解したファビオ秘書官は、小さく溜息をもらし、同意を示す。

「……間違いなく、嬉々としてゼンジロウ様に側室を押しつけてくるでしょうな。積極的に『付与魔法』の血統を盗む為に」

野心家のプジョル将軍が、他国の血統魔法を取り込める機会を逃す筈がない。さらに厄介なのは、プジョル将軍がそう提言すれば、同調する貴族は多数派になると予想されることだ。それだけ、『付与魔法』の血筋は魅力的なのである。

双王国に配慮する慎重派は、脇に追いやられる可能性が高い。

「慎重に、あくまでも慎重に、な」

自分に言い聞かせるようにそう呟いたアウラは、無意識のうちに右手で我が子が宿る腹部をなでさすっていたのだった。

第七章2【秘密の交渉、わずかな進展】

数ヶ月後。女王アウラは、王宮の一室でシャロワ・ジルベール双王国の使者と、会談の場を設けていた。今は一年で一番涼しい時期だ。真昼でも二十五度を超えない柔らかな日差しが、開け放った窓から差し込み、心地よく室内を照らす。

つわりが収まり、代わりに腹部の大きさが目立つようになってきたアウラは、日頃はあまり着ないゆつたりとした作りの赤いドレスに身を包み、ソファーに身体を預けたまま、対面の席で畏まる双王国の使者に悠然と声をかける。

「見ての通り身重の身でな。砕けた格好で失礼する」

「いえ、とんでもございません。陛下にお目通りかない、恐悦至極に存じます」

女王の言葉に、双王国の使者は型どおりの言葉を返し、礼儀に乗っ取り頭を下げた。

紫と白を基調とした正装に身を固めた中年の男だ。爵位も領地も持たない平貴族だが、今回の大任を任されているのだから、その人格や能力にはそれなりの信頼を置かれているのだろう。

事実、大国の王であるアウラと差し向かいで顔を合わせても、男は今のところ泰然とした落ち着いた着きを保っている。

アウラがこの男と会談の場を設けるのは、これが五回目である。男がカープア王宮入りしたのが二ヶ月前ということを見ると、五回目の対面というのは、議題の重さに比べていささか暢気な感があるが、機密保持を最優先としているため、それも致し方ない。

一国の女王であるアウラが、いかに大国シャロワ・ジルベール双王国の使者とはいえ、一介の騎士に過ぎない人間と頻繁に一对一の面会を果たしているのは、周りに「何かよほどの事態が起きた」とふれ回るようなものである。

互いの主張はぶつかり合っている両国首脳だが、内密に事を運びたいという思惑だけは一致している。

「理解しているとは思いますが、貴様との会談に、長い時間を割くわけにはいかぬ。手短かに始めるぞ。双王国は、私と婿殿の婚姻の際、祝福の言葉を贈られた。その言を翻す意思はないのだな？」

アウラは最初に断ったとおり、単刀直入に威圧的な言葉を、威圧的な態度でぶつける。

「はっ、無論、我が国は陛下のご成婚を心からお祝い申し上げます。決して嘘偽りはございません」

双王国の使者は、畏まって頭を下げつつも、怯むことなく答えた。

アウラと善治郎の結婚を祝う言葉を取り下げろる意思はない。それはつまり、アウラと善治郎の間の子については、干渉する意思がないという双王国からの意思表示である。

この言葉を引き出せただけで、アウラとしては最低限の目的を果たしたと言える。少なくともこれで、カープア王国の正当な血統には、横やりを入れられる心配が無くなったわけだ。当たり前と言えば当たり前の話だが、はつきりと言質の取れたアウラは、内心安堵の溜息を漏らした。

だが、安心する間もなく、使者は丁寧な言葉でアウラに切り込ん

でくる。

「ゼンジロウ様はカープア王家の一員として、認められた身です。その身の振り方に他国の人間が口出しをするいわれはない。それは理解しております。しかし、我が国の置かれた立場も、理解して戴きたいのです」

「……確かに、な。言いたいことは分からなくてもない」

一転、アウラは難しい表情で頷いた。

すでに善治郎がカープア王国の王配として、大陸中の国から認められている今日、本来ならば双王国には、善治郎の血筋に干渉する正当性はどこにもない。

しかし、血統魔法の流出という問題の大きさは、場合によっては表向きの正当性を蹴飛ばしかねないだけの代物であることも事実だ。しかも、シャロワ・ジルベール双王国は、南大陸中央に覇を唱える指折りの大国。

万が一の暴発を考えれば、アウラとしても強気一辺倒で押すわけにはいかない。

業腹ではあるが、どこかで一步譲る必要があるだろう。

アウラは、組んだ両手を腹の上にそっとのせ、意図的にトーンを下げた声で提案する。

「婿殿は、そちらの立場を理解し、私以外の女とは子を成さないと
言っている。私の子には干渉しないと言うのであれば、それで十分
なのではないか？」

現在血統魔法の継承者が二人しかないカープア王国にとって、血の拡散を意図的に制限するというのは、十分すぎる譲歩だ。アウラとしては、これ以上譲るつもりはない。

だが、双王国の使者には、また異なる価値観がある。

「それは、非常にありがたいお言葉です。ですが、王族の方の婚姻はままならぬもの。やむにやまれぬ事情が生じて、ゼンジロウ様が側室を迎える場合、そしてその御子が『付与魔法』に目覚めた場合はいかが致しますか？」

気後れすることなく、男は突っ込んだ意見を述べる男に、アウラは余裕の笑みを崩さないまま、内心舌打ちをする。

実際、男の言うとおりである。王族が側室を娶らない、などという約束を未来永劫護りきれぬ保証はどこにもない。破ったときの罰則を決めていない密約など、あつてないようなものだ。

当然、アウラもそんなものを後生大事に護り続けるつもりはない。無論、いたずらに双王国を刺激するような愚行を働く気はないが、いざという時は、適当な謝罪の言葉だけで約束破りをするくらいの事は考えていた。

それを、ここまで単刀直入に釘を刺されるとは正直思っていなかった。

少なくとも、胆力は十分にある男のようだ。

とはいえ、アウラも相手の言い分を正面から受け止めてやるほど、容易い女ではない。

「それは、仮定に仮定を重ねた話だな。現状でそこまで答えねばな

らぬ理由が見つからないのだが？」

切り捨てるアウラに、男は落ち着いた声色のまま食い下がる。

「しかし、現実になってもおかしくはない仮定ではないでしょうか。後日、もめ事の種となり得る可能性は、事前に排除しておいた方が良く、愚考します」

「なるほど、一理ある。ならば問うが、私と婿殿の間の子には干渉しないという約定を、シャロワ王家の方が破られた場合はどうする？ 婿殿の素性が分家王族に漏れ、その情報を知った分家王族の方が先走った行動に出た場合だ。仮定に仮定を重ねた話ではあるが、現実になってもおかしくはあるまい？」

「む……」

アウラの切り返しに、男はこの日始めて口ごもった。単純な意趣返しだが、非常に効果的である。国のトップであるアウラと違い、本国の代弁者に過ぎない使者は、アドリブをきかせてよい幅が決まっている。

その際にアウラは畳みかける。

「まあ、貴様の言うことももつともだ。一考の余地はあるだろう。今私が提案した言葉と同程度には、な」

回りくどい言い方だが、ようは「こちらの提案と、そちらの提案を平行進行させるべきだ」と言っているのだ。平行進行というと平等な提案に聞こえるが、事実異なる。

アウラは自己の判断で全てを決定できる女王なのに対し、男は制

限された権限しか持たない一介の外交官に過ぎない。

「……了解しました。早急に本国に問いあせましょう」

結局男は、この場ではそう答えるしかなかった。

夕暮れ時、双王国の使者との会談を終えたアウラが後宮へ戻ると、そこにはまだ愛する夫の姿はなかった。

「そう言えば、婿殿は今日私の代わりに式典に顔を出しているのだっただか」

思い出したアウラはそう呟くと、部屋のすみの籠の中からオレンジ色のバスタオルを取り出し、ソファアに腰を下ろす。

そして、ドレスの紐をほどいた腹部に、そのバスタオルをソツと掛けた。

「ふっ……」

妊娠中と言うことで、極力身体を締め付けないドレスを選んでいるアウラであるが、女王という立場上、外に出るときはそれなりの服装が求められる。

こうして、腰の紐を緩めるとホッとする。バスタオルは、最近目立ち始めた腹部を冷やさないための用心だ。

だらしなくソファアの背もたれに体重を預けたアウラは、ふと喉の渴きを覚えて、声を上げる。

「誰かつ」

「はい、陛下」

女王の言葉を受けて、隣室に控えていた侍女が即座に姿を現す。

アウラは、ソファアに身を預けたまま、視線だけを畏まる若い侍女に向けて、命令する。

「喉が渴いた。飲み物を出してくれ。ああ、あと何か軽く摘む物を頼む」

「畏まりました」

女王の指示に、若い侍女は小さく頭を下げると、テキパキとした仕草で、部屋のすみの冷蔵庫を開け、砂糖と果汁で味を付けた水をグラスに注ぎ、ソファアの前のテーブルへのせた。

「摘む物は、もう少々お待ち下さい。なにかご希望はございますか？」

侍女の言葉に、アウラは少しだけ考えて、答える。

「ん……そうだな。何か、甘い物が良いな。ああ、果物の類はやめてくれ。別に急ぐ必要はない」

「はい、承知いたしました。少々お待ちください」

侍女は一礼をすると、部屋から出て行った。

残されたアウラは、テーブルからガラスのグラスを取り、その中に口に付ける。

良く冷やされた甘酸っぱい飲み物が爽やかに喉を潤し、アウラはもう一度安堵の溜息を漏らす。

「ふむ。最近は嬪殿も侍女に慣れてきてくれたようだからな。こちらとしては過ぎしやすくなった」

以前は、プライベート空間に他人が入り込むことを嫌っている嬪に遠慮して、後宮では些細な用事では侍女を呼ばないように気をつけていたアウラであったが、妊娠してからは逆に善治郎の方がアウラに配慮して、近くに常時侍女が控えることを許している。

母子の安全の為、善治郎が妥協したのだが、最近は善治郎も隣室に侍女が控えている日常に慣れてきているようだ。それが当たり前前として過ごしてきたアウラとしては、喜ばしいことだ。

無論、善治郎が「やっぱり慣れない。侍女は外に出してくれ」と言えば、受け入れるつもりだが、身重の間は夫の好意に甘えてもよいだろう。

グラスをテーブルに戻したその時、アウラは背中でガチャリと後ろのドアが開く音を聞いた。

一瞬、ツマミを頼んだ侍女がもう持ってきたのかと思ったが、侍女であれば入室の前に必ずノックをするはずだ。この部屋のドアを、ノックも名乗りもなしに開く人間は、一人しかいない。

ソファアーに腰を掛けたまま、アウラが振り返ると、そこには思った通りの顔があった。

「ただいま、アウラ。どう、具合は？」

アウラの代理として、行事に出席していた善治郎は、カープア王国の男王族の正装に当たる、飾りボタンの多い白い上着と、太めのズボンをきつちりと着こなした姿で、部屋の入り口に立っている。

帰っていた夫　善治郎の顔を見たアウラは、自然と口元をほころばせ、明るい声で答える。

「ああ、問題ない。最近はつわりも治まったし、業務中を中断するようなこともなかった。お陰様で、順調そのものだよ」

「それはよかった、何よりだね」

笑顔でそう答えた善治郎は、後ろ手にドアを閉めると、足早に絨毯の上を進み、部屋の隅にある洋服かけへと向かう。

そして、脱いだ上着をハンガーに掛けて身軽になった善治郎は、途中冷蔵庫の中から果実水の入った銀の器と自分のグラスを取り出すと、アウラの隣にドスンと腰を下ろした。

「ふっ」

気温はそう高くないはずなのだが、慣れない正装と公式行事で疲れたのか、全身にじっとりと汗をかいている善治郎は、肌着の襟に人差し指を引っかけて、パタパタと風を送りこんでいる。

善治郎がアウラの代役として、公式行事に出席するようになってから二ヶ月以上たつが、まだまだ慣れたとは言えないようだ。

ストレスから解放されたように、弛緩させた身体をソファーに放り出す夫を見つめ、アウラは口を開く。

「そちらはどうであった？ 式典に出席したのであるう？ なにか、気になることはなかったか？」

それは、善治郎が後宮外で動くようになってから、毎日確認している問いかけである。我ながら少々心配性が過ぎるとは思うのだが、確認を怠って手遅れになるよりはよい。幸い、夫もその考えに賛成してくれていて、邪剣にあしらうようなことはない。いつも笑顔で「いや、特に何もなかったよ」と答えてくれる。

しかし、今日の善治郎は急に顔をしかめると、真剣な面持ちでいつもとは異なる答えを返すのだった。

「うん、それなんだけど。ちょっと気になることがあってね」

「む………？」

なにか問題があったのか。夫の様子に緊張を高めたアウラは、ソファーの上で座り直し、真剣な面持ちで言葉を待つ。

善治郎は、隣に座る妻と視線をあわせ、ゆっくりとした口調で話

し始める。

「実は、今日の式典で俺の名前が呼ばれたとき、『王家を代表して』と言われたんだ。『アウラ陛下の代理として』じゃなく、ね」

無論、すぐに訂正しておいた、と善治郎は付け加えた。

「それは……確かに、少々問題だな」

善治郎の言葉に、アウラも善治郎と同じ渋い顔を浮かべた。

善治郎が、式典や夜会にアウラの代理として出席するようになって数ヶ月。自分は身重のアウラ陛下の代役に過ぎない、というスタンスを崩していない善治郎であるが、男の王族が公的の場に一人で出席するようになれば、例え女王といえども女であるアウラより、男である善治郎を重要視する人間が現れるのは、この国の文化から見て必然と言える。

無論、妊娠中の現在でも、公的行事に顔を出す数はアウラの方が遙かに多い。善治郎が代理を務めるのは、あまり重要ではない行事や、アドリブをきかせた対応が不要とされる、一部の式典だけだ。

それでも、女王の代わりを男の王族が務めるとなると、「権力の移譲」という言葉が囁かれる。

やはり、妊娠に伴い業務が滞るところを目の当たりにすると、女の王という存在に、不安と不満が噴出するのだろう。

アウラと善治郎は見つめ合い、ほぼ同時に口を開く。

「もし、それがわざとだとすれば、問題だな」

「もし、あれがわざとじゃないとしたら、問題だよね」

ちよつと聞きにはよく似た、全く正反対の言葉を同時に発した夫婦は、しばしの沈黙の後、揃って首を傾げる。

「……は？」

「……え？」

沈黙を破り先に口を開いたのは、善治郎だった。

「ええと……なんでわざとだとしたら問題なのかな？ 説明しても
らえる？」

「うむ。それはそうだろう。わざと間違えたということは、明確に
私とそなたとの離間工作を行う意思があるということだ。その動き
が問題にならないはずがない。そなたはなぜ、わざとではないほう
が問題だと思つたのだ？」

明朗な言葉で自らの感想を告げたアウラは、その後につけて善治
郎の意図を問いただした。

一方問われた善治郎も、アウラほどハキハキとした言葉遣いでは
なかったが、それでもしっかりと自分の考えを言葉にする。

「うん。わざとじゃないとすれば、王宮の人間が無意識のうちに、
俺を『アウラの代理』じゃなくて、『一人の王族』とみなし始めて
るってことだよ。そうだとすると、この国の価値観からして、俺
がアウラの操り人形をやっていることに、不満を感じる人間がでく

るんじゃないかって、思ってたさ」

例え女王とその伴侶といえども、男社会のカープア王国で、女が主で男が従の関係というのは好まれない。これまでは、アウラが築いてきた実績と、善治郎の異世界出身といううさんくささのせいで見逃されていただけだ。

下手をすれば、王宮に『女王派』と『王配派』という対立構造が生まれかねない。

さらに厄介なのは、アウラを下げて善治郎を上げようとする人間の言に、現実問題として一理も二理もあると言っ点である。

この世界では、王族イコール血統魔法の使い手である。王族の数は、そのまま国の力となる。

しかし、現在カープア王国の王族は、アウラと善治郎の二人だけ。二人の間により多くの子が望まれるのは必然であり、そうなる母体であるアウラは長期の間、妊娠・出産を繰り返すことになる。

ならば表向きの政務は善治郎が担当し、アウラは健やかな子を産むことに専念するほうが効率が良い。なるほど、筋は通っている。善治郎の政務能力が、アウラのそれと同レベルのものがあればの話だが。

いずれにせよアウラにも善治郎の言いたいことは理解できた。

アウラはソファアの背もたれに身重の身体を預けると大きく溜息をつく。

「なるほどな。つまり、故意に間違える一部の人間の暗躍より、無意識に間違える全体の意識の変化のほうが問題が大きいというわけか」

「うん。俺はそう思うな。まあ、どっちにせよ、俺が表に出る以上、遅いか早いかだけの問題だったとは思うけど」

善治郎はそう答えて、だらしなくソファアの背もたれに身体を預けたまま、小さく肩をすくめる。

「確かにな。ならば、対抗手段は私とそなたが離間工作や風評に負けないよう、情報交換を密にすることが」

「うん。それと、俺があまり権限や財源を自由に出来る立場にならないことかな。これはアウラの側から提案すると、『夫の権利を阻害している』って悪評が立つから、俺の方から『面倒』ことはごめん』というスタンスを全面に押し出すべきだね」

側室問題でも泥を被った善治郎は、ここでもまた自分が泥を被ると極平然とした口調で言い切った。

「うむ……確かにそれが一番無難だが」

思わず渋い顔をするアウラであるが、善治郎の言葉通りにすることが、王家にとって最善であることが理解できるため、反論は難しい。

しかし、それでは、現時点でも側室を断るため『女王の色におぼれた男』という悪評を被っている夫に、『仕事嫌いの怠け者』という悪名までなすりつけることになる。

あわせれば、「女色におぼれる仕事をしない怠け者」である。まあ、アウラに一目惚れをして、サラリーマン生活から抜け出すために異世界に逃げてきたという善治郎の行動を考えれば、意外と『正当な評価』なのかも知れない。

中々素直にうんと言えない妻の背中を押すように、善治郎は言葉を付け加える。

「ここに戻る途中、ファビオ秘書官にも相談したけど、あの人も「それが無難でしょう」っていったよ」

当事者が言い出し、腹心もそれを認めているのであれば、アウラの立場から否とは言い出せない。アウラ自身、罪悪感のような感情を無視すれば、その有効性は理解している分尚更だ。

溜息を漏らしつつ、結局、アウラは首を縦に振る。

「分かった。そなたの好意に甘えるでしょう。しかし、その様子だと、ファビオとは上手くやっているようだな。安心したぞ。あいつは有能ではあるが、間違っても人当たりの良い人間では無いから、少し心配していた」

すり替わった話題に、善治郎はスツと視線を逸らし、あっちを向いたままぼそりと答える。

「うん、まあ、『上手く』はやってるよ。『仲良く』はやってないけど……」

渋い表情を隠せていない夫の様子に、アウラは思わず口元をほころばせる。

「それは、何よりだ。そなたがあのお男と「仲良く」やれるような性格では、私がたまらぬわ。職場でも、家庭でも、あの手のお男が待ち構えていたら、私の気が休まる空間がないではないか」

最初は冗談めかした口調で言い始めたアウラであったが、最後は

吐き捨てるような口調になる。どうやら、自分で思っている以上に、腹心の齒に衣着せぬ物言いには、言いたいことが溜まっていたらしい。

妻の物言いから、どうやらフアビオという男に、夫婦で同じ感情を抱いていることを悟った善治郎は表情を緩めて、妻の方へ向き直る。

「確かに。あれは一人で良いね」

「うむ。だが、一人は必要だ。正直、たまに引っぱたきたくなるが、王族の耳に不快な言葉を怖れずに届ける人間は貴重だ。そなたも出来るだけ上手く付き合ってやってくれ」

「分かってる。『出来るだけ』上手く付き合おうよ」

頷く善治郎の顔には、隠しようのない苦笑の色が滲んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3406u/>

理想のヒモ生活

2011年11月16日17時28分発行